



TITLE:

鎌倉前期彫刻史における京都

AUTHOR(S):

根立, 研介

CITATION:

根立, 研介. 鎌倉前期彫刻史における京都. 2004

ISSUE DATE:

2004-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85127>

RIGHT:

平成一三〇一五年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書
課題番号 一三六一〇〇六九

鎌倉前期彫刻史における京都

平成一六年三月

研究代表者 根立 研介

(京都大学大学院文学研究科助教授)

平成一三～一五年度科学研究費補助金

基盤研究(C)(2) 研究成果報告書

研究課題 鎌倉前期彫刻史における京都

課題番号 一三六一〇〇六九

研究組織

研究代表者 根立 研介 (京都大学大学院文学研究科助教授)
研究協力者 緒方 知美 (日本学術振興会特別研究員)
研究協力者 皿井 舞 (京都大学文学部非常勤講師)

交付決定額

	(直接経費)	(間接経費)	(合計)
平成一三年度	一,五〇〇千円	〇千円	一,五〇〇千円
平成一四年度	九〇〇千円	〇千円	九〇〇千円
平成一五年度	五〇〇千円	〇千円	五〇〇千円
総計	二,九〇〇千円	〇千円	二,九〇〇千円

研究発表

(一) 学会誌等

根立 研介

「国中連公麻呂考」

『正倉院文書研究』八 吉川弘文館、平成一四一年一月

根立 研介

「運慶の二つの肩書をめぐって」(『京都美学美術史学』二、

京都美学美術史学研究会、平成一五年三月)

根立 研介

「東大寺盧舎那大仏の荘嚴をめぐって」(『日本上代における仏像の荘嚴』(平成一二～一四年度科学研究費補助金 基盤研究

(B)(2) 研究成果報告書 研究代表者鷲塚泰光)、奈良国立博

物館、平成一五年三月)

根立 研介

「開山の本像は誰のために造られたか」(『美術フォーラム21』八、

醍醐書房、平成一五年六月)

根立 研介

「The State of Research on the History of Ancient and Medieval Sculpture and Related Issues」(「ACTA ASIATICA」

83 平成一五年九月)

根立 研介

「安祥寺五智如来像の造像と仏師工房」(『安祥寺の研究Ⅰ—京

都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院—』京都大学文学研

究科二一世紀COEプログラム『グローバル化時代の多元的人

文学の拠点形成』成果報告書、第一四研究会「王権とモニユメ

ント」、平成一六年三月)

根立 研介

「一〇世紀から一三世紀にかけての日本彫刻史における中国美

術の受容について―鐘山石窟三号窟の老比丘形像を手掛かりと

して―』(『中国陝西省北宋時代石窟造像の調査研究―子長県鐘

山石窟を中心として―』(『平成一三―一五年度科学研究費補助

金(基礎研究(B)(2))研究成果報告書』、研究代表者 岡田健)、

平成一六年三月)

陝西石窟仏教芸術研究会

(中華人民共和国陝西省西安市西北大学)

平成一五年二月

(二) 口頭発表

根立 研介

「中学歴史教科書において日本美術史がどのように語られてきたか」

美術史学会東支部特別例会シンポジウム(学習院大学)

平成一三年一二月

根立 研介

「彫刻修理と日本彫刻史研究」

第五六回美術史学会全国大会(関西学院大学)

平成一五年五月

根立 研介

「仏師賢円再考―院政期僧綱仏師の造像をめぐる―」

美術史学会西支部例会(同志社大学)

平成一五年九月

根立 研介

「一〇世紀から一三世紀にかけての日本彫刻史における中国美術の受容について―鐘山石窟第三号窟の老比丘像を手掛かりにして―」

(三) 出版物等

根立 研介

『カラー版 日本仏像史』(共著)(美術出版社、平成一三年五月)

根立 研介

『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代篇 造像銘記篇 第一巻』(共編著)(中央公論美術出版、平成一五年四月)

根立 研介

『彫刻の保存と修理 日本の美術 四五二』(至文堂、平成一五年一二月)

根立 研介

『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代篇 造像銘記篇 第二巻』(共編著)(中央公論美術出版、平成一六年二月)

根立 研介

『鳥取県の仏像調査報告書』(共著)(鳥取県立博物館 平成一六年三月)

目次

- (一)「鎌倉前期彫刻史における京都」——研究の概要——
附 調査資料

根立研介 1

- (二)「後白河・後鳥羽院政期における古仏の使用をめぐって」

根立研介 25

- (三)「愛知県稲沢市無量光院阿弥陀三尊像考」

皿井舞 37

- (四)関係年表

凡 例 67

- (i) 後白河院政期

(編) 皿井舞 69

- (ii) 後鳥羽院政期

(編) 緒方知美 88

- (iii) 参考資料

(編) 皿井・緒方 107

鎌倉前期彫刻史における京都

—研究の概要—

根 立 研 介

一

四年ほど前、「僧綱仏師の出現」¹⁾という一文を執筆した。この論文の主旨は、平安中期に出現した僧綱仏師の問題を通して、撰関期から院政期にかけての仏師の社会的な地位や彼等をめぐる社会環境といったことを考察することであった。ところで、この論文の「結び」で、日本彫刻史における古代と中世の時代区分の問題に少し言及した。すなわち、従来の彫刻史研究では、古代と中世の区切りは、一二世紀末の鎌倉幕府の成立を以て行うのが通常の考え方であるが、中世の成立をもう少し前の時期に置く見方もあり得るのではないかという示唆を行ったのである。

このことをもう少し詳しく言えば、大規模な私工房を構える専門化した仏師が出現し、僧綱位等の授与を通して新たな仏師の社会的な位置づけがなされる一〇世紀末頃から仏師の社会的な身分や性格が大きく変化し、こうした仏師の形態は鎌倉時代に入っても継承されたとみ

られること、また作風といった問題に関しても京都を中心に活躍した院派や円派の仏師達の推定される作風、あるいは快慶が創出した安阿弥様彫刻と定朝様彫刻の関係といったことを考慮すれば、鎌倉幕府の成立を以て時代を区切ることが果たして良いのだろうかという疑問を呈したのである。安阿弥様彫刻などについて言えば、近年山本勉氏が、この様式が定朝様の伝統に深く根ざしたものであることを指摘されているが、氏はさらに運慶・快慶らが樹立した鎌倉彫刻様式も、広義の和様の伝統のなかでの新たな展開ではあることを示唆されている点も注目される。²⁾

ただし、従来の時代区分論が長い間支持されてきたのには、当然理由がある。まず第一に挙げられるのは、平安末期から俄に脚光を浴びる康慶、運慶に代表される慶派仏師の作風と、平安後期のいわゆる和様彫刻との作風の乖離であろう。そして、些か単純化しすぎる規定となるが、従来の彫刻史研究では、撰関期に和様彫刻が大成され、その大成者の名を取った定朝様の彫刻様式が平安末期を通じて支配的であったものの、平安末期頃に奈良地方から萌芽した新たな様式が慶派仏師の台頭と共に新しい時代様式となり、鎌倉時代は慶派仏師が仏師界の中心になっていったというような筋立てで語られてきた。さらに言えば、慶派仏師の遺品は、興福寺や東大寺などに卓越した造形性をみせるものが数多く残るが、その一方京都を中心に活躍していた前代以来の伝統を有する院派や円派といったいわゆる京都仏師の遺品は、鎌倉時代に入るとしばらくはその存在を確認することさえかなり困難になってくる。そして、こうした事情もあってか、鎌倉時代の彫刻史、

あるいはより正確に言えば鎌倉前期の彫刻史は慶派の彫刻史として語られてきた観もあり、さらに彼等の代表的な遺品が奈良に偏在していることもあって、その語りを素直に受け取れば、造仏の中心がまるで奈良にあったかのようにさえ思えてくるのである。

しかしながら、慶派が鎌倉時代の仏師の流派として一大勢力となっていたのは疑いないものの、鎌倉時代に入っても京都仏師の造仏活動は続けられていたことも文献史料から判明する。また、鎌倉彫刻における前代彫刻の作風の継承の問題は、主に京都仏師の作品に前代の様式が受け継がれていたことは従来から指摘されており、また慶派の作風形成に関する前代彫刻の影響といった視点からの再検討が必要なのことも山本氏の指摘の通りであろう。

ただ、そこで問題となるのが、鎌倉前期の京都の動向なのである。鎌倉幕府が成立すると武家の世になるといった単純な史観で物事を考えることは無いにしても、重要遺品の残存が見出しがたいこともあって、この時代の京都の重要性を彫刻史研究は等閑視してきた嫌いがある。しかしながら、鎌倉幕府成立後、院政は後白河法皇から後鳥羽上皇の時代へと続き、少なくとも承久三年（一二二一）の承久の乱まで院を頂点とする権門が畿内中心に大きな力を保持し、またその後も京都の権門が政治的、文化的な力を一定保持していたことは明らかであることを考えると、鎌倉前期において京都での造仏が彫刻史の上で重要な意味を有していたことはやはり疑いのない事実であろう。

したがって、鎌倉彫刻史の再考を試みるならば、一つの大きな課題となるのが、慶派が台頭してくる鎌倉前期という時期の京都において、

院派や円派など、慶派以外の他の仏師たちの遺品やその活動の様相をもう少し鮮明なものにすることが必要となってくるのである。あるいは、造仏の場としての京都に明らかに前代と異なる状況が生じていた可能性も考えられる訳で、その状況を明らかにすることが、鎌倉前期彫刻史の再評価には必要な気もする。

そして、本研究の目指すところは、まさしくこうした課題を解明するためのものであることは、言うまでも無かる。ただし、この試みは、遺品と文献史料の制約から、かなり困難なことであるのは容易に予想される。したがって、今後の研究を進める上で必要とみられる史料の情報と、検討すべき課題を呈示することを本研究の第一義の目的とした。

なお、本研究で、「鎌倉前期」とする時代は、鎌倉幕府の成立（これについては諸説あるが、ここでは一応文治元年（一一八五）とする）から承久三年（一二二一）の承久の乱による後鳥羽院政の終焉に至る頃の時期を指す呼称として用いることにする。

二

さて、前述した本研究の目的を達成するために以下の試みを行うことにした。一つは、当時の京都における造仏活動から生まれた遺品に関わる情報の収集という基礎作業である。ただし、京都という場と関わりのあるこの時代の遺品は、京都という朝廷の存在する地域のみならずきわめて広範囲に存在し、また院派、円派、慶派といった主要な

仏師集団に属していない仏師達も数多く活動を行っていると思われる。したがって、この時期の遺品に関する情報収集については従来から行ってきたものの、遺品が膨大な数に上るために、在銘資料や、京都において重要な位置を占めていたと思われる院派、円派仏師に関する遺品を中心に実査を含む資料収集を改めて進めていった。なお、彫刻作品の実査については、鎌倉前期の慶派遺品についても幾つか調査を行っている。これに関しては、慶派の作品といっても作風にかなりの幅があり、このことが京都仏師の作風との関わりが見いだせるのではないかという想定の下に遺品の実査等を行ったからである。

さて、もう一つ試みは、文献史料の収集整理である。院派や円派仏師の遺品の発掘があまり期待できず、遺品から当時の京都の造仏状況の把握が困難であれば当然、文献史料をできるだけ収集し、これを整理し分析して当時の状況を把握していく必要がある。これについては、本研究の協力者である緒方知美氏と皿井舞氏の努力によって関連資料収集が一定程度進んだと思われる、これを「年表」と「関連資料」として本報告書で呈示した。ただ、文献史料の収集整理に関しては、実はもう一つの目的がある。それは、この頃の京都が、未だ政治や文化の上で大きな力を保持しながらも、造仏の場ということを見ると、後述するように白河、鳥羽院政期の時代とはその様相がかなり変容しているように思われる。実は、このことは鎌倉前期の京都という造仏の場を彫刻史研究で些か等閑視してきた問題と深く繋がっているように思われ、その糸口を文献史料の検討から探る試みを行ってみたかったのである。

前述した目論見をもって始めた本研究の実施内容の概要と、多少の成果、さらには今後の検討課題といったことを、以下に記すことにする。

まず、作品調査に関しては、鎌倉前期乃至はその前後の時期に制作されたと思われる彫刻遺品について相当数の実査を行った〔調査資料〕調査リスト参照。これは、本研究と平行して、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』や京都大学大学院文学研究科の「二世紀COEプログラム 『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』」といったプロジェクトの実施、あるいは鳥取県立博物館や京都他の寺院からの調査依頼といったことが重なって進捗したことによる。さて、これら調査遺品について、長岡京市・寂照院増長天像のように建保五年（一二一七）院能作を示す院派の基準作とみられる遺品もあるが、むしろ注目すべきは銘文等で明確に院派や円派仏師の作と確定できるものではないものの、作風等によりこれら流派の仏師の手になると近年推定されているものの中にもあった。その一つが、伊東史朗氏によって近年一二世紀末の院派仏師の作という見解が提唱されている⁴京都府・久美浜町・本願寺阿弥陀如来立像〔調査資料〕作品番号1である。この像の制作年代や造像背景については、後白河法皇の追善のために像が制作され、またそれを法然が四十八度供養したことを記す、本寺所蔵の「正安元年（一二九九）一〇月日本願寺僧等注進状案」一通（『鎌倉遺文』第二〇二八〇一号）から知ることができる。もっとも、この文書は欠損部も多く、また少し解釈しにくい箇所もあり、検

討を要する部分もある。しかしながら、これにある程度信を置けば、後白河院が亡くなる建久三年（一一九二）三月が本像制作時期の目安となり、この推定制作年代はその作風や造像技法とも齟齬を生じない。ところで、伊東史朗氏は、本像と文治四年（一一八八）に院尊によって制作された可能性が高いとみられる長講堂阿弥陀三尊像（調査資料⁵ 作品番号2）との作風の類似性を指摘し、本願寺像が院派仏師の手になる可能性を指摘されている。確かに、顔立ちなどは両者とも頬を少し張った丸顔であり、近似性が認められる。ただし、長講堂阿弥陀三尊像との作風の類似性の問題について言えば、岩田茂樹氏によって紹介された建仁三年（一一〇三）銘の滋賀・西勝寺阿弥陀如来立像⁶により親近性が認められよう。この阿弥陀如来像については、本研究を着手する以前に詳細に調査する機会を得ているが、面貌表現は顔の輪郭だけではなく、見開きのやや大きな明快なまなざしなども類似性があるように思われた。このように、造像銘記等によって仏師名が確実に把握できるわけではないが、当代を代表する院派仏師である院尊の手になるとみられる長講堂阿弥陀三尊像を基準にすれば、本願寺像や西勝寺像をこの流派の仏師の手になるとする見解にはさほど違和感が生じてこないように思われ、鎌倉初頭の院派仏師の作風展開は先学の研究によって大凡推測できるようになってきたと言えよう。そして、鎌倉初期の院派仏師の作風には明らかに定朝様の継承が認められ、面貌や着衣表現にみられる写実性の導入といったような問題については考慮すべき点はあるが、納入品から天福元年（一一三三）に院範や院雲等によって制作された京都・宝積寺十一面観音立像にも受け継がれて

いくという見通しも立てることができよう。

一方、京都を代表するもう一つの仏師の流派、円派については、遺品の確認作業は進んでいない。遺品からすると、安元二、三年（一一七六、七七）に明円が造った京都・大覚寺五大明王像以後、鎌倉初期に至る時期において、この流派の仏師の手になったとみられるものは、建保元年（一一三三）に良円が造像したことが銘文から判明する京都・平等寺釈迦如来像のみのようであるが、この釈迦如来像はいわゆる清涼寺式釈迦如来という特殊な類いであるだけに、作風の検討も行にくい。さらに言えば、後鳥羽院政期終了後も、この状況はあまり好転しないようで、光背の銘に貞応元年（一一二二）経円が造像したことが記されている滋賀・仏心寺観音立像や嘉禄二年（一二二六）銘の滋賀・金剛輪寺阿弥陀如来坐像などがこの流派の遺品として挙げられる程度である。なお、元仁元年（一二二四）に供養された西園寺北山堂本尊像に該当するとみられる京都・西園寺阿弥陀如来坐像（調査資料⁷ 作品番号3）のその作者を隆円とする見解が提唱されているものの、作風の問題に技法や文献史料の問題を考えると湛慶作の可能性が高いように思われ、この流派の作品は、ある程度確実な推定作を含め見出しがたい状態が続いている。作風の問題に関しては、金剛輪寺阿弥陀如来坐像などをみると、地髪部の両端が多少は張り出し、髪際中央部が下に向かって弧を描くといった造形上の新要素もみられるが、面貌を始めとしてやはり前代の彫刻様式を継承しているところが所々に認められる。金剛輪寺像の作者の経円について地方的な仏師と見なす見解もあるように、⁸ 彼が果たして円派の中樞を占めていた仏師かど

うかなり疑問であるものの、一応鎌倉前期の円派の作風を窺う手掛かりにはなるかもしれない。

以上は、基本的には従来の彫刻史研究の成果を追認する作業とも言える。ただ、気になるのはむしろ、鎌倉前期の院派、円派の確証のある作例がきわめて乏しい現状である。これは、彼等が慶派仏師に比して、当代においてはなお彫像に彼等の名を記すことが少なかったといったことも、彼等を支持する注文層を考えると関わっているようにも思えるが、清水寺奥院千手観音坐像（「調査資料」作品番号4）、白雲神社妙音天坐像といった注目すべき遺品が最近も相次いで確認されている慶派遺品の発掘状況に比べると、京都仏師の作例の確認例はあまりに少ないように思われる。

そこで、少しこうした現状を生み出している要因を改めて考える必要があるように思われる。この問題に関しては、前述した銘記の有無といった側面もあるが、平安末期頃に造られた定朝様の様式を踏襲したものの中には制作の実年代が鎌倉時代に入るものもかなりあり、その中に京都仏師の遺品が埋没しているといったことも考慮すべきかと思われる。あるいは、作風からすれば、鎌倉時代に入る遺品らしいが、慶派作例のように前代主流をなした彫刻様式と明らかに異なる工房様式が見出しがたいために、さほど高い評価を与えなかったものが多い数に上るように思われる。本研究で調査した中にもこの種の遺品がかなり含まれていると思われるが、その中で注目されるものが、鳥取・長楽寺の諸像である。この寺には平安時代末頃の作と一般に言われている仏像が三件、すなわち薬師三尊像（「調査資料」作品番号5）、

毘沙門天立像（「調査資料」作品番号6）、不動明王立像（「調査資料」作品番号7）が伝えられている。このうち、不動明王像はかなり量感のある像で、制作年代はさほど隔たらないまでも、他の二件の像との一具性に多少疑問が残るが、薬師三尊像は、いわゆる平安末期の形骸化した定朝様の仏像として評価を下すこともできる。しかしながら、薬師像の丸顔の面貌には目尻が少し上がった多少きつい眼差しを有する両目が刻まれている。両脇侍像の腰の捻りが意外に強いのも気になる点である。さらに言えば、毘沙門天像は、平安末期の作例にしばしば認められる小作りの目鼻立ちを刻む面貌を有しているが、かなり造りの造形が認められる。そして、注目されるのは、兜を別材から造り、低平で小さな髻を載せる頭部に着脱する技法が採用されている。こうした技法は、運慶作の伝承のある浄瑠璃寺伝来と伝えられている十二神将像のうちの亥神像（財団法人静嘉堂蔵）の例が初期の採用例とみられている。さて、この十二神将像については制作の時期や作者については多少異なった見解があるものの、一三世紀前半に遡る慶派仏師の作と見なすのが一般的であろう。¹⁰したがって、長楽寺毘沙門天像は、こうした技法のきわめて初期の使用例に該当すると見ても間違いないであろう。ところで、寺に残る元禄一七年（一七〇四）銘の銘札等によれば、この寺は文治年中（一一八五―九〇）、長谷部信蓮という人物によって再建されたことが記され、さらに寺の創建や薬師像以下の諸尊の勧請を平宗盛（一一四七―八五）との関わりで触れたり、あるいは寺の創建を養和年間（一一八一―八二）と伝える伝承も存在している。先に触れた造形上や、あるいは技法上の特徴からすれば、薬師

三尊像や、毘沙門天像を養和から文治年間頃、すなわち平安から鎌倉への移行期の作とみなす可能性はあるように思われ、これを前提とすればこれらの諸像の制作に携わる仏師としては当然京都仏師が想定されるであろう。これに関連して述べれば、先に記した天像部の兜を着脱式とする技法は、従来は静嘉堂像や三十三間堂二十八部衆像など慶派遺品に関連して触れられることが多かったが、むしろ十二世紀頃から広まっていたことが伊東史朗氏などによって指摘されている¹¹、菩薩像の天衣など、ほとけの身体とそれを覆うものを本体と別の材で造る技法の延長上にあると捉えることができる。そして、この種の技法は、長講堂阿弥陀三尊の両脇侍像など平安末期から鎌倉初頭頃の京都仏師の遺品にもしばしば採用されていることも、先の長楽寺諸像の作者比定の問題と齟齬は生じないであろう。

ただし、こうした鎌倉初頭頃の遺品から京都仏師の作例を確認する作業を行うためには、ある程度の裏付けとなる史資料が必要になる訳で、実際確認できる遺品となるとやはりかなり数が限られてくる。しかしながら、長楽寺阿弥陀三尊像のように、従来はともすれば定朝様式の形式化した平安末期の作例として位置づけられた遺品、言い換えれば「藤末鎌初」という時代概念で語られてきた遺品のうち、ある程度の数が鎌倉時代の作である可能性を考慮に入れて、鎌倉初頭頃の彫刻史を少し考える必要があるように思われる。さらに、長楽寺諸像が正しくそうであったように、この種の作例は京都のみならずほぼ全国的に展開していることも想定される。このことは、京都の仏師たちの地方進出といった問題とも絡んでくるが、京都の仏師たちに仏像を注

文し、受容する階層が鎌倉時代に入っても各地になおも存在していたことも示唆している。慶派仏師と鎌倉政権や関東武将との関わりは従来から語られてきているが、同様にいわゆる定朝様の作風をなおも継承していたとみられる京都仏師の支持基盤である院を中心とする権門勢力は少なくとも後鳥羽院政期の終焉まで健在である。そして、これら権門に繋がる顕密寺院、さらには地方の領主層といった存在も、鎌倉政権との軋轢といったものも次第に生じてくるのであろうが、西日本を中心に未だ大きな変革の波に攫われることはなかったのではなからうか。つまり、造仏に関わる受容層、あるいは造仏に関わる受容の問題を考えると、なお検討すべき所があるものの、京都のみならずかなりの地域で、平安後期における定朝様仏の受容の枠組みと同様なものが、鎌倉時代に入ってもある程度変化せずに残存していたとみることも可能であろう。

さて、遺品との関わりで今後の検討課題となる点をもう一つ挙げる。とすれば、従来行ってきた彫刻史研究では、仏師の流派を少し固定的に考えてきたのではないかという点である。これに関しては、現状ではあまりに検討すべき事柄が多いので、一つの見通しとして触れざるを得ないが、平安最末期から著しい台頭をみせる慶派仏師の造像活動を考えると、慶派工房に所属する仏師が他の流派の仏師を吸収していた可能性はあるように思える。ことに、慶派の祖、康慶や快慶、さらに運慶にしても、彼等の活動の場としての京都は重要な位置を占めていた¹²。彼等の京都での活動を通して他の流派の仏師を工房に吸収していくことを想定することはあり得るのではなからうか。当時の

仏師の実態についてはまだまだ不明な点が多いが、一定の流派に生涯所属するような形態を有する仏師のみ存在していた訳ではないように思われる。そして、造仏活動の活発化によって他の流派の出自を持つ仏師を吸収していくことは、慶派の作風展開に何らかの影響を与えていくのではないかということも想定されてくる。このことは、きわめて初期の作例から一種の端正さを作風に保持していた快慶の出自や作風形成の問題、さらには快慶や京都仏師との作風の接近といったことも考慮しなければならない湛慶の作風形成の問題にも絡んでくるように思われる。

ただし、鎌倉初期の慶派の作風は運慶に代表されるように明らかに京都仏師たちの作風と異なっており、また快慶の造り上げた安阿弥様も定朝様の伝統に深く根ざしているが、その単なる継承ではなく、再構築がなされた一種明快な形式美が打ち出されており、彼の作風もまた京都仏師のそれとはかなりの隔たりが認められる。したがって、新たに手掛かりを求めようとすれば、むしろ慶派工房、あるいはその周辺に所在しながらも、前代からの彫刻様式の影響を受けているような仏師の遺品に注目する必要があるかもしれない。本報告書に収めた本研究協力者皿井舞氏の論考は、正しくこうした視点に立って、建仁二年（一一〇二）銘の愛知・無量光院阿弥陀三尊像の制作者、「僧寛慶」を論じたもので、慶派仏師の再評価の道を開こうとする試みが行われている。

四

文献情報の収集については、当時の京都が院政という政治形態の中心地であったため、単に幕府の成立をもつて時期を定めるわけにも行かず、また前代との関わりを考慮する必要もあるので、後白河、後鳥羽院政期（一一五八―一二二一）を情報収集の対象とした。要は鎌倉彫刻様式が生み出される萌芽期と、その成立期に当たる鎌倉前期の京都の造仏関連の情報収集に努めたのである。この作業については、先にも触れたように本研究の協力者である緒方知美氏と皿井舞氏に協力を仰ぎ、その成果を「年表」と「関連資料」として本報告書で呈示した。

以下、その成果に基づき、幾つか鎌倉前期の京都の造仏状況について若干の問題点について言及してみたい。まず、遺品調査からはなかなか姿が確認できなかった京都仏師の活動がある程度判明する。殊に院派仏師については、ある程度活発な活動を行っていたことは文献史料から推測できる。ただし、この当代における院派の活動については、すでに清水眞澄氏や山本勉氏の指摘がある¹³のでここでは特に触れなくてもよからう。むしろ問題は、この時期の京都の造仏において円派の活動がきわめて低調であることであろう。すなわち、平安時代末期から鎌倉時代の劈頭に至る時期の仏師界の重鎮である明円が正治元年（一一九九）頃没すると、しばらくは文献史料からもその活動さえ追うことが困難になり、元久元年（一二〇四）一二月に千体地藏の造進の功によって法眼に叙せられた定円の名や、元久二年の観円、建暦元年（一二二一）の寛円といった名が比叡山関係の修造関係で名前が見い出

せる程度である。そして、その後、建保元年（一二一三）の法勝寺九重塔造仏、あるいは同三年の後鳥羽院の逆修法要の本尊仏の作成といった後鳥羽院政期の京都の重要な造仏で、宣円や実円の名がようやく登場するのが実状のようである。それにしても、不思議なのは、鎌倉中期の代表的な造仏である法勝寺阿弥陀堂九体仏造仏の大仏師の一人であり、して、またこの時期のもう一つの重要な造仏である蓮華王院千体千手像の造仏では二二体と最も多くの造像に携わったかにみられる隆円といった仏師が後鳥羽院政期の終焉とともに登場してくるのにも拘わらず、鎌倉前期に限ると円派の活動がきわめて沈滞しているようにみえる点である。その意味では、京都の鎌倉前期は円派の空白期といった観がある。

ただし、この観点からすると、実は院派についても、前代の活動に比べると文献史料から窺われる業績はかなり見劣りがするように思われる。要は、京都仏師の動向は、本拠地での活動が沈滞化していたとも見なせるのである。このことに関しては、慶派が京都に「進出」し、京都仏師の造仏の場を奪っていったという側面も多少関係するようにも思えるが、他にも大きな理由があるように思える。一つは、鎌倉初頭に発生した奈良及び京都の再興造営事業の影響である。東大寺と興福寺の再興造営は、勧進といった新たに登場した造営事業形態によったところもあるが、かなりの部分が朝廷と摂関家による再興である。また、京都でも東寺など大寺院の再興もこの時期平行して行われ、朝廷が再興に関与している。多少本筋から話が離れるが、こうした再興事業に伴う造仏は慶派仏師との関わりで語られることが多いものの、

明円や院尊ら京都の仏師たちが南都の再興造仏に大きく携わっていたことは文献史料からよく知られている。また、東寺の再興造営の造仏事業も、建久年間（一一九〇～九九）に関しては運慶一門が関わるが、その後の元久元年（一二〇四）や建永元年（一二〇六）の修造事業では院派仏師が起用されている。しかしながら、これもまたある意味では大変不思議なことながら、こうした再興事業に関わる遺品で実際に明瞭に確認できるのは、南都二大寺に残る慶派仏師の遺品のみと言っても過言ではなく、このことは実作品を見て語ることを何よりも重要視してきた彫刻史研究において、この時期の京都仏師について語ることを差し控える要因にもなってきた。

さて、話を元に戻すと、鎌倉初頭の大規模再興造営事業、ことに南都の二大寺の再興事業の発生、さらには鎌倉の武家政権誕生に伴う影響なども加わり、京都の経済的な基盤が弱体化し、それが京都における造仏事業を沈滞化させていた可能性があるようにも思えるのである。後鳥羽院政期の造仏事業で、院が関与する大規模な造営事業は承元元年（一二〇七）に供養された最勝四天王院のみのように思われる点も、こうした考え方を支持してくれそうである。¹⁴

さらに言えば、白川院政期から後白河院政期前半頃までは明確に史料から窺うことができた功德を数量で計るような、膨大な数の量の仏像を一挙に造ることもみられなくなり、供養や法会に用いるために制作する仏像の数も減少傾向にあることも巻末年表からも窺うことができるであろう。因みに、森由紀恵氏によれば、¹⁵御祈に伴う大規模造仏は白川院政期ではしばしば認められるが、後白河院政期に入ると、ほ

とんど行われてこなくなるようである。また、後白河院政期後半にもなお認められた千体千手堂の新たな建立も、鎌倉時代に入ると行われなくなっている。したがって、京都での造仏の場の減少が京都仏師の活動を史料から見えにくくした可能性があり、それとともにこうした状況が京都仏師の活動を京都から周辺部へ展開させるといった現象も生み出したようにも思えるのである。

ただ、京都の造仏の場の現象の問題は、どうも経済的な側面だけではないように思われる。それは、造仏といった作善行為に対して権門貴族達の考え方が院政期の前半からかなり変化してきたことにも要因があるかと思われる。こうした動向を知る上で重要なものが、法会等において古仏が使用される例が後白河院政期頃からかなり増大してくる点である。この問題は、ほとけの靈驗性といった問題とも関わると思われる、経済的な側面からでは推し量れない貴族達の造仏に関する考え方の変化が背後にあるかと思われるので、本報告書で別に小論を用意した。

いずれにしても、鎌倉前期の京都における造仏の場は縮小したかに見える。ただ、これは京都だけに限られるのかという疑問も発生させる。巻末年表を見ればわかるが、仏師の名が判明しない造仏を含めると、規模こそ縮小したようであるが、それでもやはりかなりの数の造仏が京都で行われているのも事実である。また、京都市内の寺院の調査に携われれば、現在も数多くの鎌倉前期の遺品に出会うし、前章で触れたように京都仏師が造像に関わったこの時期の遺品も各地に所在している。要は、大規模な御祈関連の造仏や、千体千手像といった功德

を数で計るような特殊な造仏といったものは、権門と密着して半ば独占化していた京都仏師に特化した造仏であり、こうした造仏が後鳥羽院政期にはほとんど行われなくなったことが、こうした京都仏師の活動の動向把握を曖昧にした一番の原因と思われるのである。したがって、鎌倉前期の京都は、造仏の場として重要な機能をなおも保持していたのは間違いなく、この時期の京都の造仏活動を単に沈滞化といった言葉を用いて語ることは少し短絡化しすぎるかもしれない。

ただ、ここまで述べると、逆に鎌倉前期、ことに鎌倉再興造営事業が進められた鎌倉前期の南都の造仏の場、さらにはそこから生み出され、現在も我々の前に呈示される慶派仏師達の造形こそ、きわめて異様で、また例外的なものであったようにも思えてくるのである。

注

(1) 根立研介「僧綱仏師の出現」(『研究紀要』二二、京都大学文学部美学美術史学研究室、二〇〇〇年)

(2) 山本勉「彫刻の和様 鳳凰堂の仏像を中心に」(『国宝 平等院展』、二〇〇〇年、朝日新聞社)

(3) 鎌倉時代の彫刻史の通史的な語りでは、その前・中期が慶派仏師の作品と活動を中心に大きな頁をわり割いて語られるが、後期は極論すればほとんど語られず済まされてきたと言えなくもない。

(4) 伊東史朗「久美浜本願寺阿弥陀如来立像―三尺阿弥陀像への視点―」(『学叢』一六、一九九四年、『平安時代彫刻史の研究』(二〇〇〇年、名古屋大学出版会) 所収。)

(5) 伊東史朗「院政期仏像彫刻史序説」(『院政期の仏像』、一九九二年、岩波書店)、麻木脩平「長講堂阿弥陀三尊考―両脇侍菩薩像の片足踏み下げ形式を中心として―」(『佛教藝術』二二二、一九九四年)

(6) 岩田茂樹「滋賀・西勝寺の阿弥陀如来立像について―建仁三年銘像内納入品をとまう新出作例―」(『佛教藝術』二〇四、一九九二年)

(7) 松島健「西園寺本尊考(上・下)」(『國華』一〇八三、四、一九八五年)
(8) 根立研介「湛慶と鎌倉彫刻様式の完成」(『週刊朝日百科 日本のお宝 六九 京都／妙法院 青蓮院』、朝日新聞社、一九九八年)、松岡久美子

「湛慶世代の作風展開について―京都正法寺(八角堂) 阿弥陀如来坐像、京都西園寺阿弥陀如来坐像を中心に―」

(9) 松島健「西園寺本尊考(下)」(『國華』一〇八四、一九八五年)

(10) 松島健「浄瑠璃寺旧蔵・十二神将像円成寺・四天王立像」(『佛教藝術』九六、一九七四年)、鷲塚泰光「十二神将像(亥神) 静嘉堂」(『國華』一〇〇〇、一九七七年)、金子啓明「伝浄瑠璃寺旧蔵の十二神将像について―その図像と造形表現を中心にして―」(『MUSEUM』三五九、一九八一年)

(11) 伊東史朗「妙法院普賢菩薩騎象像について」(『佛教藝術』一九四、一九九一年)、同「阿弥陀如来坐像 大阪・法道寺蔵」(『学叢』一三、一九九一年)(いずれも、『平安時代彫刻史の研究』〔注5参照〕に所収)。

(12) 慶派成立期の造仏の場としての京都の問題については、拙稿「運慶の二つの肩書をめぐって」(『京都美学美術史学』二、二〇〇三年)で論じている。

(13) 清水眞澄「鎌倉時代の院派仏師について」(『國華』一〇〇〇、一九七七年、「鎌倉時代の院派仏師」として『中世彫刻史の研究』(一九八八年、

有隣堂)に所収)、山本勉「鎌倉時代彫刻史と院派―前・中期を中心に―」(『佛教藝術』二二八、一九九六年)

(14) 因みに、これもかなり不思議なことながら、本報告書の巻末史料に掲載したように最勝四天王院の造仏に関しては、この寺院の造営に関わる史料がかなりの量に上りながらも、造仏に関する史料がほとんど皆無と云って良いほど残されていない。承元元年(一二〇七) 銘の東大寺散手面には、最勝四天王院と法眼院賢の名が記され、この寺院の法要に演じられた舞楽面を院派仏師が造っているところを見ると、関連造仏にも院派仏師が参加していた可能性が考えられる。

(15) 森由紀恵「平安末期における造仏と仏師」(『寧楽史苑』四一、一九九六年)

附 調査資料

(一) 調査リスト (順不同)

- 作品番号 1 京都府久美浜町 本願寺 阿弥陀如来立像 (図1)
- 2 京都市下京区 長講堂 阿弥陀如来及両脇侍坐像 三軀
(図2)
- 3 京都市上京区 西園寺 阿弥陀如来坐像 (図3)
- 4 京都市東山区 清水寺 奥院本尊 千手観音坐像 (図4、調査報告1)
- 5 鳥取県日野町 長楽寺 薬師如来及両脇侍坐像 三軀
(図5、調査報告2)
- 6 同 毘沙門天立像 (図6、調査報告3)
- 7 同 不動明王立像 (図7)
- 8 鳥取県関金町 地藏院 地藏菩薩半跏像
- 9 鳥取県倉吉市 大日寺 阿弥陀如来坐像 (嘉禄二年〔一二二六〕銘)
- 10 新潟県小出町 円福寺 阿弥陀如来坐像 (建保二年〔一二二四〕銘)
- 11 新潟県六日町 観音堂 聖観音立像 (承久二年〔一二二〇〕銘)
- 12 広島県世羅町 永寿寺 阿弥陀如来坐像 (承元四年〔一二二〇〕銘)
- 13 京都市東山区 六波羅蜜寺 空也上人立像 (僧康勝銘)

- 14 京都市下京区 平等寺 釈迦如来立像 (建保元年〔一二二一〕)

(三) 良円銘

- 15 京都府長岡京市 寂照院 四天王像 四軀 (増長天像…建保五年院能銘)

- 16 同 光林寺 阿弥陀如来立像 (貞応三年〔一二二四〕頃に収めた納入品がある)

- 17 京都府舞鶴市 満願寺 十一面観音坐像 (建保六年寿賢銘)

- 18 同 同 不動明王立像

- 19 同 同 毘沙門天立像

- 20 京都市下京区 光菴院 阿弥陀如来立像 (建保七年の年紀のある納入品がある)

関連調査作品 1 兵庫県香住町 大乘寺 薬師如来坐像

- 2 同 同 四天王立像 (多聞門天像…永長二年〔一一九七〕)

仏師大法師位智圓銘)

※これらのうち、4、6については、本報告書で調査データを掲載する。また、5、9については、『鳥取県の仏像調査報告書』(鳥取県立博物館、二〇〇四年三月発行)で概要を紹介し、12、13については『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇二』(中央公論美術出版、二〇〇四年二月発行)で調査データの公開を行っている。関連調査作品1、2については、『京都美学美術史学』一(京都美学美術史学研究会、二〇〇二年三月発行)で、調査報告を行っている。さらに、10、11、15、20については、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌

倉時代 造像銘記篇三』で調査データの公開を予定している。

(2) 調査報告(概要のみ)

①(清水寺奥院本尊) 木造千手観音坐像 一軀

京都市東山区清水一丁目 清水寺

(像高) 六三・九 cm

(形状)

本体 垂髻。天冠台(上より花形・紐一・紐二条)をつける。髻上に仏面一個、髻の側面に菩薩面十四個を二段に、天冠台上の地髪部に化仏一個、菩薩面九個を一段に置く。髪は、毛筋彫り、束目を表す。本面の両脇に脇面各一個(左方、牙上出相。右方、慈悲相。)を表す。頭上菩薩面及び両脇面は、各単髻、元結紐一条、天冠台紐二条とし、各頭上に化仏を表したか(痕跡あり)、髪は毛筋彫、天冠台下はさらに束目を表す。両耳朶、不環。本面は、額に天眼、白毫(水晶製)を表し、髻髪一条が耳を亘り、耳朶環状とする。三道彫出。垂髻(銅製)を表す。脇面は、額に天眼を表し、髻髪一条が耳を亘り、耳朶環状、三道彫出。合掌手及び宝鉢手(阿弥陀定印を結ぶ)のほかに、脇手左右一九臂をそれぞれ三列(前列六、中列六、後列七)に配し、腕は合わせて四二臂とする。条帛、天衣、裙、腰布を着し、右足を外にして結跏趺坐する。

光背 二重円光。周縁部に三十三応現身を付す。

台座 蓮華九重座。

(品質構造)

本体 木造(針葉樹材、檜か)、割矧造り、玉眼嵌入、金泥・切金文様。頭軀根幹部は一材から彫出し、両耳後を通る体側線で前後に割矧ぎ、内割を施し、天眼を含め眼には玉眼を嵌入する。三道のかなり下方で割首を行う。脇面は別材製。面相部を割矧ぎとし、天眼を含め眼には玉眼を嵌入する。後頭部を本面両側に矧ぎ付ける。合掌手および脇手の前・中列を体側に矧ぎ付け、脇手の後列を背面に垂れる天衣に矧ぎ付ける。宝鉢手は前膊を合掌手臂部に矧ぎ付け、合掌手と前・中列の脇手は臂・手首で、宝鉢手と後列の脇手は手首で各矧ぐ。両腰奥に各一材を矧ぐ。両足部、横一材製。裙先、別材製。像内は頭部を除いて墨塗りとする。表面は、頭髮群青、髻の元結朱、天冠台漆箔、肉身金泥とする。着衣は、かなり赤みの強い(特に背面)丹地金泥地に切金文様を施す。切金の文様は、条帛(表・裏)——斜格子。天衣(表)——二重立涌文(但し背面は、四ツ目菱入の二重立涌)、同(裏)——網目、裙(表 上から)——六ツ目菱入三重亀甲繫・斜格子文・雷文繫地蓮華丸文散・斜格子文・七ツ目菱入三重亀甲繫・斜格子文・七宝繫、同(裏)——籠目、腰布、麻葉繫。垂髻、装身具、持物の一部は銅製。

(修補損傷等)

本鉢 頂上仏面、脇手の指先の一部、裳先、像内腰部に組入れられた機木など 後補。矧目の一部、補修。

光背 後補。但し、三十三応現身については、文化庁の調査では、一七体を当初とする。

台座 後補。

②木造薬師如来及両脇侍像 三軀

鳥取県日野郡日野町 長楽寺

(像高)

薬師如来像 一三一・九 cm
左脇侍像 一七一・九 cm
右脇侍像 一七〇・五 cm

(形状)

本体

薬師如来像 肉髻と地髪部に粒状の螺髪を刻み、肉髻珠、白毫相を表し、耳朶環状、三道彫出。衲衣を偏袒右肩に纏い、裙を着ける。両手屈臂、右手は右胸前で掌を前に向けて五指を伸ばし、左手は左大腿部上に置いて掌を上に向けて薬壺を載せ、左足を外にして結跏趺坐する。

左脇侍像 垂髻を結び上げ、天冠台(列弁〔但し、現状削り取られている〕・紐二条)を付け、白毫相、三道を表し、耳朶を環状とする。条帛、折返付きの裙、腰布を纏い、両肩から天衣を懸ける。顔を僅かに左に向け、右手は脇腹辺で肘を曲げて掌を前に向け前膊を前方に差出し、左手は肘を軽く曲げて掌を下に向け体側に垂下し、両手の第一、三指を捻じて日輪を先端に付けた蓮茎を持ち、腰を右に少し捻って、左足を少し前に出して立っている。

右脇侍像 体と手足の構えを左右逆にし、月輪を付した蓮茎を持つ他は、左脇侍像に大略準じる。

(品質構造)

各像とも、現状、外観からの観察では、構造の詳細の把握は困難で

あるので、昭和七年及び平成一三、一四年度の美術院国宝修理所の「修理解説書」を参考にして、構造の概要を記す。

本体 各檜材、寄木造、布貼サビ漆下地漆箔

薬師如来像 頭軀を通し、耳後の線で前後二材矧ぎとし、さらに背面に背板一材を矧ぎ付けるか(以上、各内刳り)。左肩を含む軀側部は肩から地付きまで一材製とし、左前膊部を覆う袖口を別材矧ぎ付ける。左手首先、袖口に差込。右腕は肩から臂まで前後二材とし、前膊と手首先は別材矧ぎ付ける。両足部は横一材製とし、両腰奥に各一材の三角材を矧ぎ付ける。

左脇侍像 頭体、別材製とし、頭部は垂髪を含み、耳後の線で前後二材矧ぎとする。体幹部は前面一材製とし、背面に正中二材を矧ぎ付けるか(以上、各内刳り)。左腕は、肩から一材を矧ぎ付け、上膊の右半分を彫出し、さらに外側に一材と矧ぎ足し、手首矧ぎとする。右腕は、肩から上膊及び天衣の一部を一材で彫出し、さらに肘、手首で矧ぐ。

右脇侍像 頭体別材製とし、頭部は垂髪も含み耳後の線で前後二材矧ぎとする。体幹部は、前面部は左右三材製としているようで、背面部は左右正中二材矧ぎ付けとし、腰部にさらに一材と矧ぎ付ける(以上、各内刳り)。左腕は、肩から一材を矧ぎ付け、上膊及び前膊の右半分を彫出し、さらに外側に一材を矧ぎ足し、肘と手首で矧ぐ。右腕は、肩から上膊及び前膊の一部と天衣を造る一材を矧ぎ付け、その外側に一材を矧ぎ足し、さらに手首で矧ぐ。

(補修損傷)

本体

薬師如来像 肉髻珠、白毫珠、裙先 後補。両手は各第一指を除くと、概ね補修を受けているようである。また、後頭部などには、虫蝕による損傷が認められる。

両脇侍像 白毫、両足先、天衣遊離部（本体と共木の部分も各所で補修を受ける）、持物が後補のものに代わっている他、左脇侍像の両手先や左耳朶、裙裾など、右脇侍像の右手先なども後補のものに代わるか、補修を受けている。

光背・台座 各後補

（※脇侍像の「左」「右」の名称は、現状の配置状況に従った。）

③木造毘沙門天立像

鳥取県日野郡日野町 長楽寺

（像高） （兜なし） 一二九・五cm （兜あり） 一三六・九cm

（形状）

本体 兜を被り、瞋目、閉口し、大袖衣、鰭袖衣、袴を纏い、甲を身につけ、左脇腹辺で屈臂した前膊を胸前辺りに挙げて宝塔（亡失）をかかげ、右手を体側に沿って垂下する。顔を左に振って、腰を左に少し捻って、右足を外に踏み出して邪鬼上に立っている。兜は、本体とは別に造った着脱式のもので、兜の下には低平な髻が確認できる。

（品質構造）

現状、外観からの観察では、構造の詳細の把握は困難であるので、昭和七年及び平成一三、一四年度の美術院国宝修理所の「修理解説書」を参考にして、構造の概要を記す。

本体 各檜材、寄木造、サビ漆下地黒漆塗白地彩色

頭体別材製で、頭部は耳後の線で前後に矧ぎ合わせた二材から大略を彫出しており、別材製の兜は大略左右二材製（宝珠・庇・兜本体右半部・後補）とする。体幹部は、前面材一材製、背面左右二材製とするか（以下、内刳り）。両腕部は肩、手首矧ぎとし、左手はさらに肘で

邪鬼、檜材、一木造、彩色

頭部の大略を一材か彫出し、内刳なし。

（保存状態）

本体 右手指等、欠失。兜の一部（既述）、帶喰面部上半、左手指の大半、右大袖先端部、左右鯨袖端の一部、両腰から垂下する天衣、以上

後補

邪鬼 彩色、後補

光背・框座 後補

(图一 京都·本願寺 阿弥陀如来立像)



图1-2



图1-1



图1-4



图1-3

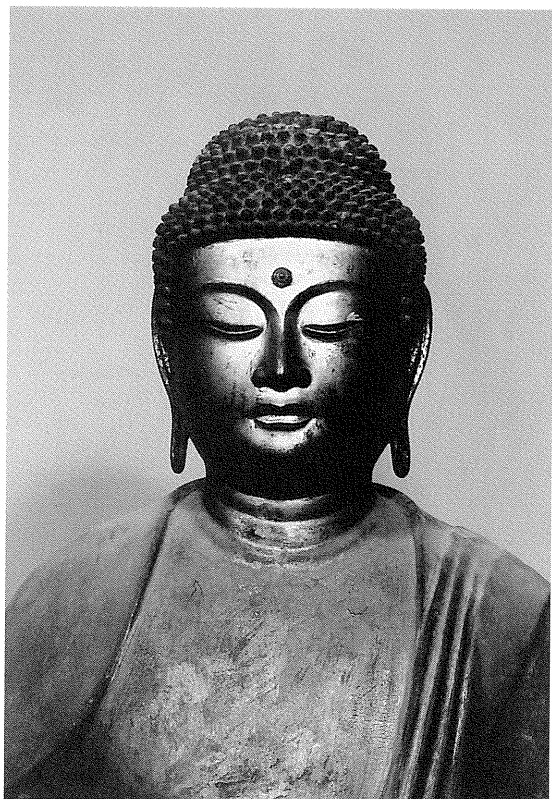


图 1-6



图 1-5



图 1-8



图 1-7

(图二 京都 長講堂阿弥陀如来及両脇侍坐像)



图 2-1-2

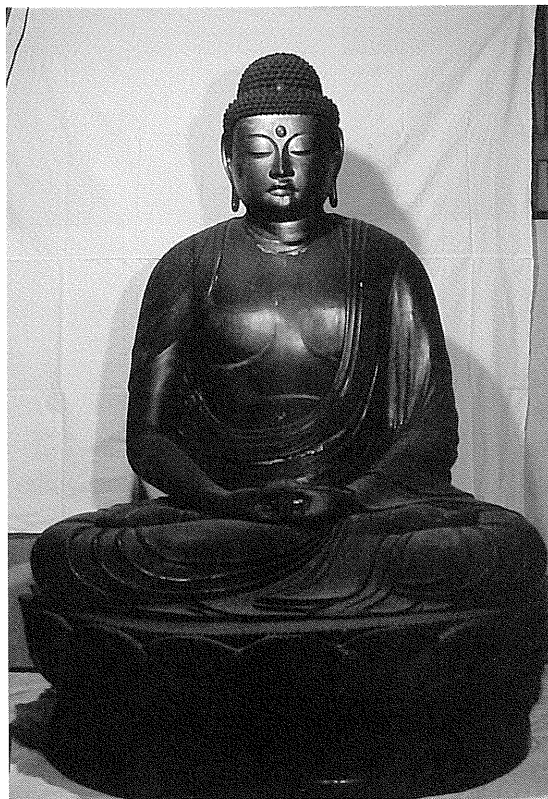


图 2-1-1 (阿弥陀如来像)



图 2-2-2

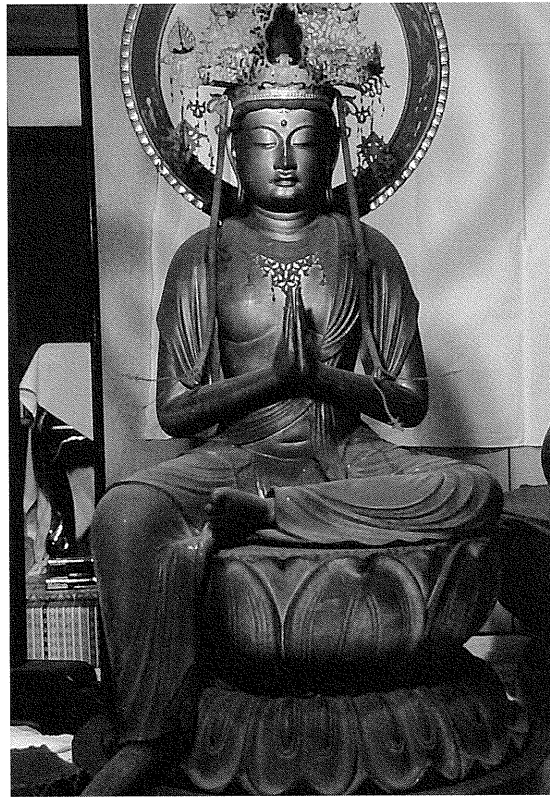


图 2-2-1 (右脇侍像)



図 3-1

(図 3 京都 西園寺阿弥陀如来坐像)



図 2-3-1 (左脇侍像)



図 4-1

(図 4 清水寺 奥院 千手観音坐像)

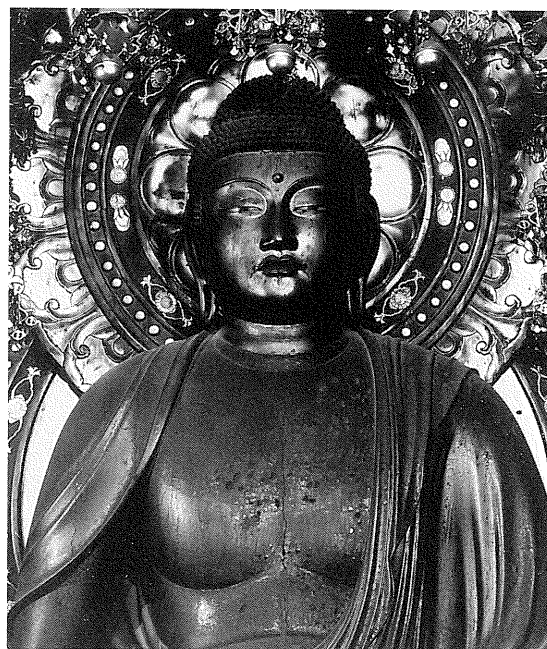


図 3-2

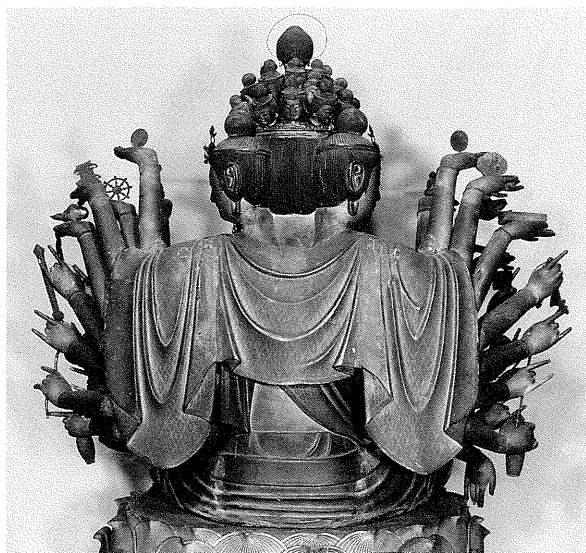


图 4-3



图 4-2



图 4-5



图 4-4



图 4-7 (左肩付近)

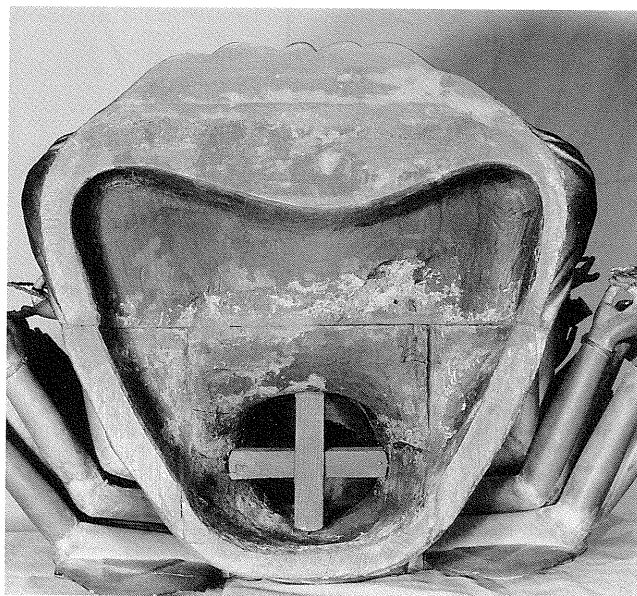


图 4-6



图 4-9 (右脛)



图 4-8 (天衣背面左肩垂下部)

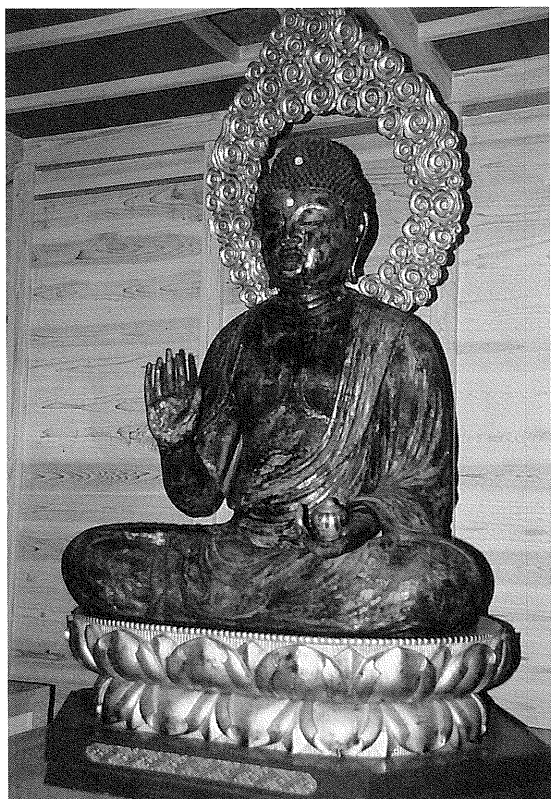


図5-1-2

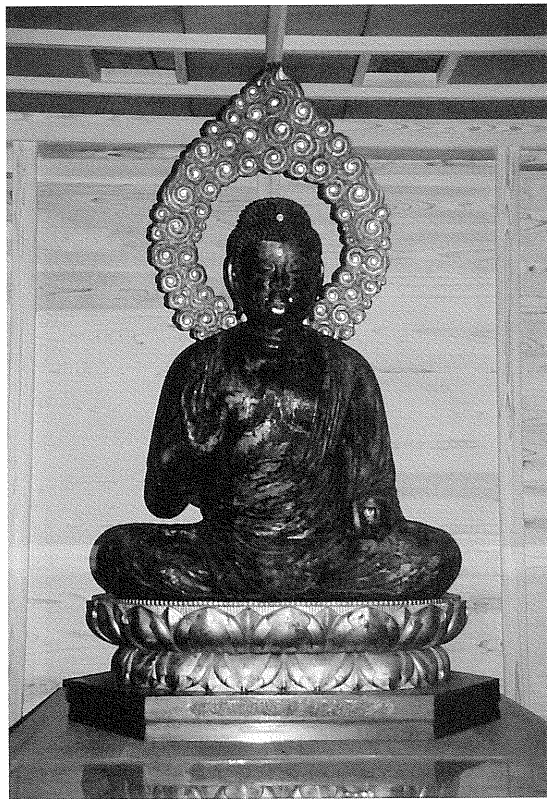


図5-1-1 (薬師如来像)



図5-1-4



図5-1-3



图 5-2-2



图 5-2-1 (左脇侍像)



图 5-3-1 (右脇侍像)



图 5-2-3



图 6-1

(图 6 长樂寺 毘沙門天立像)



图 5-3-2



图 6-3



图 6-2



図6-5



図6-4



図7-2



図7-1

(図7 長樂寺 不動明王立像)

後白河・後鳥羽院政期の

古仏の使用をめぐる

根立研介

一、はじめに

院政期といった時期においては、院や天皇、あるいは摂関家といった権門を中心に、膨大な数の仏像が制作されている。それを端的に示すのが、『中右記』大治四年（一二二九）七月一五日条に年来善根として挙げられた白河法皇の関わった造仏の数、「生丈六五体、丈六百二十七体、半丈六六体、等身三千五百体、三尺以下二千九百三十余体」であらうし、この時期、時を経ずして建立された九体阿弥陀堂、千体千手堂といった大規模な堂宇建立に伴う群像の造仏であらう。また、白河・鳥羽院期に代表される天皇や院の病、あるいはその中宮達の出産に関わる御祈において、かなりの規模の造仏がきわめて迅速に行われていたことも注目される。すなわち、森由紀恵氏が指摘しているように、元永二年（一一一九）から大治四年の鳥羽天皇中宮璋子（待賢門院）の出産に纏わる御祈を頂点とするこの種の造仏はかなりの数の群像、それも丈六仏を交えるような、大規模な造仏が、造仏始めの儀式

と言える、御衣木加持から開眼までを、一日で造る異様な早さをもって行われ、さらに造仏の場合も御祈の対象となる人物が所在する御所の一角で行われているのである。諸記録が伝えるような状況下で造られたとみられる遺品は木彫像では残念ながら確認できないが、字義通り造仏始めの儀式から開眼までの間に行うべき造仏作業工程を本当に一日で全て実施していた仏像は、部材の接合方法や仕上げが我々が見てきている通常の院政期の仏像とかなり異なっているようにも思える。しかしながら、こうした御祈が膨大な数の仏像をきわめて短期間の間に造り出すといった現象を発生させていたのは、間違いないようである。

ところで、本報告書の『鎌倉前期彫刻史における京都』——研究の概要——で触れているように、こうした状況は後白河院政期頃から少しずつ変化してくるようで、次の後鳥羽院政期に入ると、京都を中心とする権門の造仏活動は一見かなり縮小してきているようにみえる。後鳥羽院政期については、これを院政期に含める見解（筆者もこの立場に立つ）があるように、政治的にも文化的にも院がなおも大きな力を保持していた時期であるが、院権力の基礎となる畿内における造仏活動に陰りがみえるのである。これは、東大寺、興福寺といった南都二大寺院を中心とした鎌倉初頭の大規模な寺院再興事業の発生、東国の武家政権誕生といったことに伴う、京都の経済的基盤の弱体化が影響しているところもあるが、単に経済的な側面では推し量れない要因が存在しているように思われる。おそらく、造仏といった行為、あるいは仏像観といったことに対して、権門貴族や、それに連なる僧侶、さらには仏師といった人々の意識が白河・鳥羽といった院政期の前半か

らかなり変化してきたことにも要因があるのではなからうか。例えば、先に挙げた白河、鳥羽院政期の御祈に関わる造仏は、生死に関わるような病による危篤や難産に際して、造仏といった行為自体が御祈として有効と思われ、願主たちが造仏のあらゆる過程に直接関与しようとする意識が存在していたということが、森氏によって指摘されている。しかしながら、こうした造仏に対する意識は鳥羽院政期も後半頃から変化していったようで、御祈の造仏の規模や迅速さとも次第に衰退していったとみられるのである。そして、後鳥羽院政期になると、出産に際して行われた御祈の仏事の本尊でさえ、後述するように古仏が用いられることが一般的にみられるようになってくるのである。

本稿では、こうした平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての権門貴族達の造仏に対する意識、あるいは仏像観といったものの変化を知る手掛かりとして、後白河院政期頃から顕在化してくる仏事等における古仏の再使用の問題に少し焦点を当てて論じてみたい。さらに言えば、こうした時代意識の変化は、古仏評価や靈驗仏の模刻、あるいは再興造仏の問題といった事柄とも絡み、鎌倉時代の造仏動向に大きな影響を与えた可能性があり、この辺りのことについても少し見通しを述べてみたい。

なお、ここでいう古仏の使用とは、単に古仏を修理して新たに開眼供養するといったことではなく、仏事等の本尊や新たに建立した堂宇の本尊に取って古仏を求める事例を指していることを最初にお断りしておきたい。

二、後白河院政期の「古仏」の使用

古仏の再使用の問題は、後白河院政期に突如発生するような問題ではなく、すでに鳥羽院政期に幾つかの事例を確認できる。そこで、後白河・後鳥羽院政期の仏事等における古仏使用の問題を検討する前に、山門関連の仏事や修法の様子を数多く伝える『門葉記』などを手掛かりに先例を少しみておきたい。

『門葉記』をみると、彫像か画像の別はあるものの、古仏を本尊に用いたことを示す記事がかなり認められ、熾盛光法、七仏薬師法、尊勝院陀羅尼供養などでは鎌倉時代以前に遡る事例が認められる。そのうち殊に注目されるのは、七仏薬師法である。この修法は、天皇、院の病や、中宮の出産に際してしばしば行われているが、鳥羽院政期、保延七年（一一四一）に早くも古仏使用の例が認められる（『門葉記』卷一一「七仏薬師法一」）。同年五月二九日に鳥羽南殿で行われた鳥羽院にかかわるこの修法は、古仏古経を用いて御祈がなされたことが記されている。ところで、三尺皆金色の古仏については、「女御殿御産御祈之時仏也」とされる。おそらくこれは、保延五年五月一三日の美福門院（鳥羽天皇皇后）の出産に際して用いられた仏像であったことを示唆しているようで、この時の御産では後に近衛天皇となる待望の皇子が生まれている。そして、こうした背景を有していたためか、この本尊仏については、「此仏也先度薬師法本尊也。件靈驗殊勝也。」と記されている。要は、新たに修法を行うに際して古仏が用いられたのは、以前に行われた修法で効力を発揮した靈驗仏であったが故のようなもの

である。

さて、『門葉記』によれば、鳥羽院政期の七仏薬師法に関して、他に康治元年（一一四二）五月一二日と、同二年四月一〇日の修法で本尊に古仏が用いられたことが知られる。これらは、いずれも延暦寺根本中堂北礼堂で行われた鳥羽院に関わる修法で、前者は鳥羽院の受戒に際して行われたものとみられ、本尊は過去に鳥羽院が比叡山に登った際に修された御祈に用いられた古仏で、その後仏眼院に安置されていたものであったという。一方、後者の皆金色の古仏の由緒は記されていないが、おそらく前年の修法で用いられた像と同様に鳥羽院との縁のある仏像とみて良いようである。さらに言えば、過去に行われた御祈で何らかの効力をもたらしたものであったが故に、再度の使用がなされたのでは無からうか。

こうしてみると、鳥羽院政期の権門に関わる御祈の修法における古仏使用は、古仏の持つ御祈対象者との因縁と、さらには靈驗性といったことに使用の理由が存在していたようである。このことは、次の後白河院政期の七仏薬師法の修法例でも確認できる。すなわち、長寛二年（一一六四）七月一日に延暦寺根本中堂で行われた公家御祈（天変御祈）では、鳥羽院が保延年間叡山に登った際に行われた修法の等身皆金色の古仏が用いられているのである（『門葉記』巻一一「七仏薬師法一」）。

なお、後白河院政期の御祈の修法に古仏が用いられた例としては、他に『山槐記』に記された例も知られる。これは治承二年（一一七八）の中宮徳子の安德帝出産に関わるもので、『山槐記』同年九月一〇日条

にはこの御祈では「本尊皆古仏」が用いられ、さらに「召権少僧都良弘本尊云々」と注記がなされている。要は、この御祈には靈驗灼かな古仏が召されたいのである。ただし、こうした出産御祈の古仏使用がある程度一般化するのには、後述するように後鳥羽院政期に入ってからのものである。

ところで、後白河院政期の古仏使用は、こうした御祈の修法の本尊としての利用に留まらないようである。その一例が、仁安三年（一一六八）五月二一日に知足院において新たに開眼供養された丈六阿弥陀像の事例である（巻末「参考資料」1）。この古仏の再供養については、知足院に関する論考で杉山信三氏が少し論じられているが参考になるが、『兵範記』の記主、平信範に関わるものである。すなわち、『兵範記』の一連の記事（仁安二年六月一九日、同三年五月一四日、同二年、同四年二月三日条）によれば、信範の父知信が建立した八条堂に二八年間置かれていた丈六阿弥陀仏像を、信範が家司として仕えていた藤原忠実（九条兼実祖父）が経営していた知足院内で領地を得たのを機に一堂（能舜院東丈六堂）を建て、父縁の古仏に修理を施し安置供養していることがわかる。『兵範記』の記事に従いもう少し詳しく経過を追っていくと、仁安二年六月一九日に件の仏像を八条堂から知足院に移し、翌年五月一〇日から金箔の押し直しを中心としたとみられる修理が開始され、同五月二一日には仏像の開眼が行われている。像を新たな堂宇に安置して供養が行われたのは、翌四年二月三日のことである。

この古仏の再供養は、ある意味では従来からある単なる古仏の再使

用に近いところもあるが、対象となる仏像が発願者縁の仏像であることが先に見てきた七仏薬師法の古仏使用例と相通じるものがあり、こうした仏像を信範が新たに建立する一堂の本尊として迎えたことは少し考えてみる必要がある。これは、仏像を修理することで近親者との繋がりを仏縁によってさらに強固なものにするといったことを意図した行為かもしれない。ただ、信範の意図は、さらに近親者の作善の意味を再評価し、自らの作善をより高次なものに高めるといった行為のようにも思われる。というのは、信範が古仏の再使用に際して大変興味深い処置を仏像に施しているからである。すなわち、阿弥陀仏の開眼供養の後に、眉間の白毫の内に銀の壺を奉籠するといった処置がなされているのである。この眉間への銀壺奉籠の問題は、仏像に靈驗性を与える処置と理解すべき事柄かと思われる。何故ならば、眉間への銀壺奉籠の問題は、銀製の白毫を有する清涼寺釈迦如来像という靈驗仏のことを直ちに想起させるからである。周知のように、この釈迦如来像は尙然が北宋・雍熙二年（九八五）に優填王像を模刻させたものとされ、永延元年（九八七）に京都の地にもたらされたものである。この釈迦仏像は、一一世紀末ころから模刻が始められるが、一二世紀後半に後白河院をはじめとして貴賤を問わず、改めて注目され始められてきたことが『玉葉』嘉応二年（一一七〇）閏四月廿三日条の記事などからわかる。⁵さらに言えば、眉間に銀仏が奉籠されていた、興福寺金堂釈迦仏や正暦二年（九九一）に康尚によって大安寺釈迦像を模刻した祇陀林寺（河原院）釈迦如来像のことが平安末期の事相書『図像抄』に記され、また治承四年（一一八〇）一二月の平家焼き討ちに

よって焼亡した興福寺金堂仏の眉間に奉籠されていた銀仏については藤氏長者九条兼実が並々ならぬ関心を抱いていたこと（巻末「参考資料」16参照）などにも注意を払う必要があるかもしれない。要はこの時期、仏像の白毫と銀といった問題が、靈驗仏との関わりで貴族達に理解されていたのである。そして、清涼寺釈迦如来像を始めとする靈驗仏に対する当時の信仰の高揚に合わせ、信範も古仏の眉間への銀壺奉籠といった処置を行ったのでは無からうか。

なお、この眉間に銀製の壺を納めた件に関しては、もう一つ問題がある。すなわち、これが壺という容器である点である。何を納めたものであろうか。この種の容器となれば、すぐに結びつけたくなるのが舍利である。舍利もまた仏像の靈性を増すものとしてみなされ、⁶さらに平安末期頃においては仏舍利を納入して像を「生身に擬した」とする記述がしばしばみられることが指摘されている。⁷すなわち、信範は父縁の仏像に、靈驗性を増す処置を二重に行ったようである。

こうしてみると、信範の古仏使用は、新たに建立した阿弥陀堂に安置される本尊を古仏の修復で済ませることにより経費節約といった効果を意図して行ったというよりも、近親者の作善の再評価した上で、古仏に新たな靈驗性を付加して新たな仏像に仕立てる行為として理解すべきかと思われるのである。

さて、後白河院政期の古仏使用でもう一つ注目されるのが、九条兼実に関わる古仏使用の例で、殊に注目されるのが、九条兼実の安元二年（一一七六）九月一三日の阿弥陀三尊像及び不動明王像の供養に関わる問題である（巻末「参考資料」5）。これを少し詳しくみると、兼

実は、この日「臨終正念、極樂往生」などを願ひ、讃歎供養を営む。ところで、供養をなした阿弥陀三尊像と不動明王像などはいずれも古仏で、これらは修理が施されて用いられたことが彼の日記『玉葉』の同日条から判明する。ところで、不動明王像については、験仏、すなわち靈験仏で、覚助作であること、そして阿弥陀三尊像は、覚助の師で父でもあるとみられる定朝の作であり、故殿（兼実の父、忠通）が秘蔵していたものであったことも記事に認められる。なお、法要に使用した仏像の修理はどうも九月一三日には終了していなかったようで、その後同年一〇月二日まで仏師院慶が行った仏像の修理の記事が『玉葉』に散見する。この一連の記事の中で特に注目されるのは九月二七日条で、後白河院より、「故法性寺禪閣」（藤原忠通）が収集し、その子である皇嘉門院（藤原聖子、崇徳天皇中宮、兼実異母姉。兼実は皇嘉門院の猶子にも当たると兼実に伝領されていた定朝仏を進ずべしとの命があり、兼実は修理中であるので終了したらこれに従う旨を使者に回答していることなどが記されている。因みに、仏像の修理が終了した一〇月二日に、兼実は院慶を仏像確認のために女院（皇嘉門院）の御堂に派遣している。この女院堂は、『玉葉』承安五年（安元元年、一一七五）四月二九日条に供養がなされたことが記される御堂（九条堂）のことと思われるが、同日条には等身阿弥陀如来一軀と二尺普賢不動像が供養の際に安置され、「件仏古仏也」と記されている。一〇月二日条の院慶の女院堂訪問は、安置仏の作者の鑑定にあったようで、彼の回答は「円勢造歟、非上品云々、不動者、院覚作也、於普賢者似定朝造、尤神妙云々」とある。すなわち、本尊に当たる阿弥陀如来像

が円勢作、不動明王像が院覚作、そして普賢は定朝作と鑑定したようであるので、そうするとこの九条堂供養に際して安置された仏像もいずれも古仏が用いられたことになるう。

この『玉葉』の一連の記事に触れられた定朝仏を中心とする古仏評価について、「この時期の宮廷貴顕にとって、仏像はあたかも骨董品のごとく賞翫の対象にすらなり、さらに定朝を頂点とする仏像作家観も示されている。」という興味深い見解が武笠朗氏から提唱されている。⁸⁾確かに定朝作の西院邦恒朝臣堂阿弥陀仏を「天下以是為佛本様」とする仏師評価は鳥羽院政期には確立しており、またこの頃から仏像の作者鑑定を僧綱仏師達がしばしば行っているのも事実であり、こうしたことが撰関家による定朝仏の収集といった事態を招いた原因かもしれない。しかしながら、撰関期から院政前半期かけて活躍した著名な僧綱仏師の手になる仏像に修理の手を加えて改めて仏事に用いたり、あるいは新たな堂宇の本尊として安置する理由は、そのような骨董的な仏像評価といった問題のみによる訳ではないように思われる。というのも、先の平信範の場合と同様に、兼実にしても皇嘉門院にしても古仏を再使用した大きな理由としては、父忠通縁の仏像であるといった側面がかなりあるからである。さらに言えば、不動明王像が「験仏」と記されているように、やはりそこには古仏の靈験性が問題にされていたのではなからうか。

兼実という人物は、藤氏長者として興福寺再興造仏にも関わり、ことに南円堂本尊不空絹索観音像の再興造仏に関して並々ならぬ関心を示していたことはよく知られており、仏像制作についても高い見識を

有していた人物かとみられる。その一方、後に源空（法然）との交流が深まっていくように従来の顕密仏教の枠組みを超えて新たな信仰を探究しようとした新時代の権門貴族といった側面も見逃せず、こうした彼の信仰心が従来の権門貴族とは少し異なった仏像観を育んでいた可能性もある。例えば、彼の夢告による造仏の例が興味深い。この造仏は、彩色や漆箔などの表面の加飾を拒否し、膠さえも用いない栢木一尺三寸十一面観音像を制作したものであるが、家中の男女に勧進し、諸種子真言や結縁者交名を像内に奉籠するといったこと（『玉葉』寿永元年〔一一八二〕六月一、四、一六日条、卷末史料一〇参照）も甚だ注目される。そこにみられる仏像制作の考え方には、いわばきわめて内的な信仰によって造仏を行おうとする意識が認められよう。こうした仏像制作に関わる意識は、ある意味、院政期の権門によって盛んに造られていた美麗な仏像、あるいは大規模寺院の造仏に対する意識とは明らかに異なっている。しかしながら、権門貴族の中には兼実のように、私の造仏に関しては新たな意識をもって臨む人物が出現し始めてきているのである。

兼実の古仏使用も、こうした新たな造仏意識や仏像観と密接に関わっているように思われる。すなわち、兼実の経済力からすれば新造の仏像を用意することは容易なことなのに、敢えて古仏を使用したのは、古仏に備わっている靈驗性の尊重、さらに言えば近親者縁の仏像に修理を行い再供養することで靈驗性を呼び起すといった意図が存在しているように思われるのである。院政期に登場してくる古仏使用とは、新造仏には期待できない一種の靈性が込められており、それを求めよ

うとする権門貴族達の新しい仏像観が窺えるのでは無からうか。

三、後鳥羽院政期の「古仏」の使用

前章でみた権門貴族達の新たな仏像観を窺わせる事例は、当然のことながら後鳥羽院政期にも受け継がれている。それを示す端的な事例が、『三長記』建永元年（一二〇六）八月二五日条に記されている藤原基房（中山入道関白殿、藤原忠通子）持仏堂の仏事の安置仏の問題である。さて、問題の安置仏は、釈迦・薬師・阿弥陀の三仏からなるが、それぞれ注記がなされている。すなわち、釈迦には「被奉模栖霞寺像、眉間被人舍利云々」、薬師には「各皆金色等身、新造」、阿弥陀には「古仏被加新髻等」とある。

釈迦に関する注記は、この像が前章でも触れた靈驗仏として名高い清凉寺釈迦如来像を模刻したものであることを示しているとみられる。ところで、興味深いのは、この像の眉間、おそらく白毫の位置に舍利を込めている点である。清凉寺の白毫と仏像への舍利奉籠の問題はすでに前章でみてきたが、基房持仏堂釈迦仏の場合も、靈驗仏たる清凉寺釈迦如来像の模刻像の眉間に仏像に生身性を付加する舍利が納入されており、二重の靈驗性を持つ像として仏事に用いられたのであろう。このように釈迦仏がどうも靈驗性を保持する仏像であったとすると、阿弥陀仏が古仏であった訳も、先に触れた兼実の古仏使用と同様な文脈で読みとることができ、古仏の持つ靈驗性が期待されているのではなからうか。さらに言えば、薬師仏についても、注記に皆金色像と記

されている点が気になる。「皆金色」については、前章でみてきた七仏薬師法に用いられた古仏にも一部用いられている語句であるが、平安末鎌倉初期においては皆金色といった仏像の表面仕上げがほとけの生身性との関わりで特別な意味合いを有する場合があることが近年指摘されているからである。⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾 㿿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗

を造る沙汰がなされたのである。このことは、当初用いることが想定された七仏薬師が建久時に祈祷の効力を有したので、改めて後鳥羽院中宮の御産の御祈に用いることが計画されたことを示唆している。ところで、この正治二年の御祈に際して用いられた七仏薬師像は、六条宮誕生という靈験を示し、建永二年（一二〇七）二月二〇日の賀陽院で修せられた七仏薬師法の本尊に用いられている。七仏薬師法における古仏の使用はその後も続き、建暦二年（一二二二）、建保四年（一二一六）の修法でも古仏を本尊に用いている。さらに、同五年七月二三日の鳥羽院「御瘡病御祈」の七仏薬師法に用いられた御仏は六条宮御産の時の古仏であるが、この時の修法で用いられた経、幡、燈等は皆古物であつたと記されている。ところで、同年五年三月四日の東一条院（順徳、中宮）御産時の御祈の七仏薬師法では院実と院定という二人の院派法印仏師によつて新たに制作された三尺皆金色の七仏薬師像が本尊として用いられ、無事姫宮（明義門院）が誕生している。そして、この時用いられた仏像は、小修理を加えられ、翌六年一〇月一日の東一条院の御産の御祈の七仏薬師法の本尊として使用され、後の仲恭天皇が誕生している。東一条院の御産御祈の七仏薬師法は貞永元年（一二三二）にも行われ、この時も古仏を本尊として用いているが、建保五年の御祈に際して用いられた像が本尊に用いられた可能性もある。

御産御祈の修法に用いられる仏像は、先にも触れたように白河院政期、待賢門院の例では、新仏、それも出産当日一日で造るような仏像を多量に造ることが第一義とされていた。こうした御産祈祷時に大規模な造仏を行うことは次第に行われなくなっていくが、他の目的の修

法では古仏を本尊として用いることが増大してきて、御産の祈祷では本尊に新仏を用いることが少なくとも一二世紀半ば頃までは一般的であつたようである。しかしながら、前述したように一二世紀も後半に入るとこうした御産に関わる御祈の本尊でさえ古仏が用いられるようになり、鎌倉時代に入るとこれがかなり一般化してくるようになる。皇子や姫宮が無事誕生という靈験を示した仏像は、古仏として再使用され、さらには御産祈祷の目的とは異なる祈祷でも靈験仏として利用されるようになったのである。¹³⁾

四、結びにかえて

前章までで検討を加えてきたように、鳥羽院政期頃に登場し、後白河、後鳥羽院政期に次第に顕在化してくる古仏使用の背景には、仏像の靈験性といった面がかなり重要な意味をもっていたとみられる。そして、この仏像の靈験性といった問題は、権門貴族の仏像観の中で次第に大きな意味を持つようになってきたのである。こうした意識の変化は、清涼寺釈迦如来像信仰の高揚や、金泥皆金色の仏像莊嚴の出現と隆盛といった、院政期に顕在化し、さらに鎌倉時代へと受け継がれる仏像に生身性や真身性を結び付けようとする時代意識とも関連しているように思われる。院政期頃から清涼寺釈迦如来像の模刻が盛んになり、長谷寺十一面観音像や大安寺釈迦如来像といった、靈験性有りとされる仏像の模刻が一二世紀前半に行われているのも、こうした動向と無関係ではなからう。京都の造仏を主導していた貴族達は、院政

期頃から様々な観点から仏像に靈驗性を求め始めたようで、鎌倉前期に入るとこの傾向は一層顕在化してきたのである。彼等の仏事等に古仏が使用されてきたのも、経済的な側面が全く無かったとは言いい切れないものの、こうした彼等の新たな仏像観の一つの現れかと思われる。

しかしながら、こうした古仏を権門貴族達が盛んに仏事に用いたことは、京都の仏師の制作の場を多少減少させる（逆に言えば修理の機会を増加させるが）要因になったと思われる。ただ、問題はその点にあるより、こうした風潮が顕在化すると、京都の仏師達の仏像制作の創造性を発揮する場が減少するといったことに繋がりがかねない点であろう。と言うのも、後白河・後鳥羽院政期の古仏使用は、平安初期に遡るようなものではなく、権門貴族の近親者縁の古仏、すなわち和様がより強固な規範性を有していた時期に制作された彫刻を用いるのが一般的であったとみられ、こうした現象は、やはり和様の規範性の継承の問題と結び付いてくるからである。

ところで、鎌倉前期における和様の規範性の継承に関しては、平安後期の天皇や院が創建した御願寺の再興造仏も問題になってくるようにも思える。殊に重要なのが、国王の氏寺とも呼ばれた白河天皇御願寺、法勝寺の再興造仏であろう。

承暦元年（一〇七七）に創建されたこの大寺院は、度重なる火災に遭いながらも鎌倉時代においては再興造営が繰り返されている。後鳥羽院政期においても、南大門仁王像（建暦二年（一二一二）御衣木加持）が院賢によって再興されたようで、さらに翌三年には九重塔の再興供養がなされ、五仏及び四天王像からなる安置仏が院議、院範、宣

円そして運慶、湛慶らによって再興されている。さらに、時代は下がるが建長五年（一二五三）には九体阿弥陀堂仏が隆円や院承らによって再興されている。こうした平安後期に創建された御願寺の再興造仏における拠るべき規範は、後白河院政期、長寛二年（一一六四）に創建された蓮華王院本堂（三十三間堂）諸尊像の一三世紀半ばの再興造仏遺品が我々に呈示してくれるように、仏師たちも、そのパトロンたる権門貴族も未だ慣れ親しんでいるいわゆる和様であり、多少の変化は認められるものの、仏師たちはそれに拘束されながら造像に当たらざるを得ないのである。こうしてみると、鎌倉前期の京都の権門貴族達たちの古仏使用の問題や、あるいは平安後期創建の御願寺の再興造仏の問題は、その注文の主要な受け手である京都仏師たちの作風形成に実はかなり大きな影響を与えていた可能性があるだろう。

ところで、鎌倉前期の再興造仏と言えば、その規模からしても重要なのが南都の興福寺と東大寺という二大寺院のそれであろう。この再興造仏は、京都の仏師達がかなり重要な役割を果たしているにも拘わらず、遺品が慶派仏師のものに集中していることもあって、まるで慶派仏師の独壇場であったように語られてきた嫌いがある。ところで、当然この再興造仏においても造形上の拠るべき規範が存在していたかと思われるが、何故慶派仏師は鎌倉新様式といったものを造形に打ち出すことができたのであろうか。この問題は、南都再興造仏で京都仏師が生み出したものを確認しない限り解答困難なところもあるが、敢えて見通しを立てれば、南都再興造仏においては、少なくとも慶派仏師は、京都の御願寺の再興造仏の際に提示されるような規範と異なる

ものを規範として意識していたことに関わってくるのではなからうか。すなわち、南都の再興造仏⁽¹⁶⁾で扱べきは摂関期に大成された和様の彫刻様式ではなく、奈良時代、あるいは平安初期の仏像様式であり、またその背後にある「唐風」⁽¹⁷⁾の美術であろう。慶派仏師は、それらを再解釈して新しい時代様式に造り上げていったのではなからうか。規範とすべき様式が、かなり時を隔てた時代のものであったことも仏師達の造形上の解釈に幅を許したとも考えられる。あるいは、平安末期から南都周辺で芽生えた新たな様式の胎動も、こうした規範の問題と関わるかもしれない。

さらに言えば、運慶後継者、湛慶の作風展開には、やはり類似の問題が絡んでくるように思われる。彼は、先に触れたように後鳥羽院政期の後半頃から、法勝寺九重塔再興造仏など京都での造仏に携わる機会が増大してくる。これは、伝統的な京都の規範に基づく造仏に湛慶が取り込まれていったことを意味しよう。我々が湛慶の作風を端正さといった言葉で語ってきた大きな要因は、実は三十三間堂本尊千手観音坐像という遺品からの印象がかなり大きいように思われる。もしこの像に認められる彫刻様式が彼の主宰する慶派工房様式であるならば、湛慶が最晩年にたどりついた様式とは和様彫刻様式の新たな展開と捉えることも可能なように思える。

注

(1) 白河法皇は、自らの追善の仏事のためにもかなりの数の仏像を造らせている。すなわち、『中右記』大治四年(一一二九)七月二〇日条には、法

皇追善の仏事に用いられた毎日七日供養等身阿弥陀仏や、毎日供養三尺阿弥陀仏は、經典などと共に生前に調えられたもので、鳥羽御倉に置くように、法皇から沙汰がなされていたことが記されている。したがって、本文中に引用した造仏総数には、この種のものも含まれているように思える。

(2) 森田紀恵「平安末期における造仏と仏師」『寧楽史苑』四一、一九九六年
(3) 院政期における仏事のために短期間で制作された画像遺品の例として、西大寺本馬頭観音図を挙げる見解が中野玄三氏によって近年提唱されている(『西大寺本馬頭観音像考—白描図像彩色図の成立—』、『國華』一二六六、二〇〇一年)。

(4) 杉山信三「院家建築の研究」(吉川弘文館、一九八一年) 第二部第九章四八〇、四八一頁

(5) 清涼寺釈迦如来像の後白河院政期の再評価の問題については、奥健夫「如来の髪型における平安末〜鎌倉初期の一動向 —波状髪の使用をめぐる—」(『仏教芸術』二五六号、二〇〇一年)、皿井舞「模刻の意味と機能—大安寺釈迦如来像を中心に—」(『研究紀要』二二、京都大学文学部美学美術史学研究室、二〇〇一年)に詳しい。

(6) 仏像への舍利納入の意味については、奥健夫「清涼寺・寂光院の地藏菩薩像と『五境の良葉』—像内納入品論のために—」(『佛教藝術』一二三四、一九九七年)に詳しい。

(7) 奥健夫前掲注(5)論文

(8) 武笠朗「平安後期宮廷貴顕の美意識と仏像観」(『日本美術全集 第六巻 平等院と定朝 平安の建築・彫刻Ⅱ』、講談社、一九九四年)

(9) 『長秋記』長承三年(一一三四)六月一日条

(10) 平安末期頃の「皆金色」の意味合いについては、皿井舞「日本彫刻史における金泥塗り技法の受容について」(『佛教藝術』二七三、二〇〇四年三月)に詳しい。

(11) 『大日本史料』第四篇補遺(別冊一)に掲載されている「旧仏重供養事」を参照にした。

(12) 『大日本史料』第四篇一〇巻の承元二年五月六日条に掲載されている『門葉記』法花巻数、および同第四篇一五巻の承久三年正月二二日条に掲載されている「七佛薬師御修法記」を参照した。

(13) この問題は、仏像だけに關わるのではない。別尊法を修する御祈に際しては、仏像のみならず、御経や、法具まで古物を次第に用いるようになるのも、靈驗性の問題と絡んでいると思われる。

(14) 古仏使用は、次第に京都の権門貴族の世界だけの現象で無くなってくる。北条政子が貞応二年(一二二二)に建立した持仏堂には、子息で三代將軍実朝の持仏堂本尊の雲慶作の釈迦如来像である。この仏像については、靈驗仏としての性格を有していたかは明らかにできないが、近親者の縁の仏像であることは間違いない。

(15) 長谷寺十一面觀音像の模刻については、建保六年(一二二八)に寿賢によつて造られた京都府舞鶴市満願寺十一面觀音坐像の銘文中にその旨が記されている。大安寺釈迦像の模刻については、『玉藻』嘉禎四年(一二二三八)三月二二日条に記された、四代將軍頼經(九条道家子息)主催した京都六波羅での仁王八講法会の本尊像がこれに該当する。これは新造率爾(急遽)に抛り、かつて道家が一切経供養に際して湛慶に造らせた

等身の大安寺釈迦模刻像が修理を施されてこの修法の本尊に当てられている(参考 皿井舞「模刻の意味と機能—大安寺釈迦如来像を中心に—」〔注(5) 参照〕)。なお、『百鍊抄』一四「四条院」条に、前関白(道家)家において天福二年(文暦元年、一二三四)三月二日に修せられた唐本一切経供養に際して、等身釈迦如来像一体が供養されており、湛慶が制作した等身の大安寺釈迦模刻像はこの時開眼された可能性が高い。

(16) 運慶、湛慶等の慶派仏師は、建久年間(一一九〇〜九九)に京都で東寺ほかの再興造仏を行っている。ここでの規範は、他の京都の再興造仏と異なり、抛るべき規範は平安初期の彫刻様式となつたはずである。

(17) 平安末期から鎌倉初期にかけての時期にかかわる「唐風」の問題については、浅井和春「康慶と運慶—いわゆる“宋風”と天平(平安初期)復古について—」(『研究発表と座談会 院政期の仏師と仏像』、仏教美術研究上野記念財団助成研究会、一九九一年)が参考となる。

愛知県稲沢市無量光院阿弥陀三尊像考

皿井 舞

はじめに

愛知県稲沢市中之庄町に所在する真言宗豊山派の古刹、無量光院の本尊阿弥陀三尊像（以下、本像とする）〔図1〕は、鎌倉時代初期の基準作として著名である。¹近年、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記篇』²第一巻（以下、『基礎資料集成』とする）に収録され、詳細な写真・データが公表されるとともに、平成十五年度には、奈良国立博物館で開催された春期特別展『女性と仏教』に出陳され、衆目を集めたことは記憶に新しい。平安時代後期に盛行した定朝様を踏襲する鎌倉時代初期の作例として、以前より注目してきたが、展覧会での実見を機会に、考えの一端を述べてみようと思った次第である。

中尊および勢至菩薩像の脚部裏側に記された銘文によれば、建仁二年（一二〇二）に、願主を沙弥行西、檀越を藤原清広、藤原安綱らとして、僧寛慶によって造立されたといい、制作年代ばかりではなく、その制作者が判明し、さらには制作上の思想背景が窺い知れる点で、

本像は極めて注目し値するものである。また、既に指摘されているとおり、本像は、同じく稲沢市奥田町の真言宗豊山派安楽寺の阿弥陀三尊像〔図2〕と形式および様式ともに共通点が多いが、いずれにも平安後期の定朝様が規範的に継承されているという評価がなされている。一方で、本像の制作者として銘文に現れる「僧寛慶」が、寿永二年（一二八三）に仏師運慶が発願・写経した、いわゆる『運慶願経』に結縁した慶派の一員と目される寛慶³とその名が一致することから、慶派との関わりも推測されている。本像は、安楽寺像に比較すれば、体躯のボリュームが表出され始めている点に、慶派を中心に形成されている鎌倉新様式への傾斜が認められるのは事実であり、定朝様からの逸脱が窺える。実際、本像の作風に新要素が認められる点に力点を置き、藤末鎌初にかけて慶派を中心に形成された新様式が、当地に伝播した可能性を指摘する評価もなされている。⁴本像の造立された翌年の建仁三年は、周知の通り東大寺の最終的な供養が行われた年であり、造仏に関しては、同年の東大寺南大門仁王像造立を最後に、以後慶派を中心とした南都での大規模な造像は減少する時期に当たる。南都の復興造営は、建仁初年頃に最終段階を迎えており、この頃には既に慶派の様式は確立していたと見なしてよい。つまり、本像の作者寛慶が、慶派に属していた寛慶であるとするならば、本像の様式はあまりにも保守的⁵と見なさざるを得ないのも事実である。

本像の彫刻史上の位置づけについては、それが課題とされていないながらも、以上のような両極の見方が併存しているというのが現状である。無量光院の位置する稲沢市中之庄町は、後述するとおり、平頼盛がそ

の領家職を勤め支配権を握り、蓮華王院を本家職に仰いだ莊園・海東莊のうち中莊の莊域に合致し、中央との結びつきは強かったと考えられる。本像の作域を鑑みても、一地方の造像という枠組みの中に押し込めてしまうことはできず、むしろ鎌倉時代初頭の京都における造像動向を色濃く反映している可能性は極めて高いものと見なされよう。鎌倉時代初頭の京都における造像という本研究の課題テーマを考える一つの手がかりとして、無量光院阿弥陀三尊像を取り上げたのは、かかる理由によるものである。

本稿では、主に、中尊と右脇侍像の像内に記された梵字を手がかりに造像の思想的背景を明らかにし、本像が平頼盛あるいはその子息らの持っていたと考えられる信仰の枠組みの中で捉えられる可能性を指摘する。それを踏まえ、慶派の寛慶との関係が推測される、本像の作者「僧寛慶」をはじめ、銘文に現れる人物等について考察を加える。またさらには、本像を、作例の乏しい貴族発願になる鎌倉時代初頭の京都の造像様式の問題を考察するよすがとしたい。

第一章 無量光院阿弥陀三尊像の基礎的理解

(一) 無量光院の地誌的理解

無量光院は稲沢市の南西部にある中之庄町に位置しており、一方本像と近似する阿弥陀三尊像のある奥田安楽寺は、無量光院から北東の方向に約一キロメートル弱のところに所在する。本像は、現在、運慶作という伝承のある不動明王像、毘沙門天像とともに、寺門入って左

手の収蔵庫に安置されている。

既に『稲沢市史』や『基礎資料集成』にも触れられている通り、無量光院の歴史については、江戸時代の地誌『尾張国愛知郡御行記』や随筆『塩尻』が参考にされる他は、残念ながら近世を遡る文献史料は知られていない。江戸時代、寛政四年（一七九二）から文政五年（一八二二）にかけて、樋口好古によって記された地誌『尾張国愛知郡御行記』によると、「中野庄村」の項目に無量光院について、次のように記されている。

満願寺、府志（張州府志―筆者注）曰、在中庄村、号中庄山無量院（無量光院―筆者注）、真言宗、属長野村万徳寺、境内三反五畝、堂安阿弥陀大像、寺伝云、七寺長福寺、奥田安楽寺、及当寺三像、一本所刻也。（中略）寺伝ニ当山ハ人皇四十五代聖武帝天平七乙亥年行基当国ニ来リ、七カ所ニ伽藍ヲ造立シ、自ラ阿弥陀仏正観音大勢至ノ尊像ヲ彫刻シ、七堂伽藍ヲ建立シ本尊ニ安置ス、其時ノ七坊ハ処々ニ散乱ストイヘトモ、当国其七寺于今アリ、何レモ本尊ハ三尊ノ弥陀ヲ安置シ、各行基ノ作ナリ、然ルニ人皇六十一代朱雀帝天慶四年辛丑年、平将門カ乱未治其残党ノ為ニ寺坊半焼亡ス、其中興開山実盛律師ノ由来ハ亡失スレトモ、又人皇八十三代土御門ノ御諱為仁建仁二壬戌年、願主沙弥ノ行西大檀主藤原朝臣清広公安繩公両君再建シ給ヒ、都合四千石ヲ賜リテ寺産トシ、其ミキリ寺院ハ学頭無量光院別当普賢院、外ニ塔頭八区満月院日輪坊宝蔵坊密蔵坊安楽坊等覺坊成就坊増長坊、別院ニ浄安寺蓮華寺

都合一山十二ヶ寺アリシカ（後略）⁶

とあり、もちろん行基開山という伝説をそのまま信じるわけにはいかないものの、寺伝によると、無量光院は行基の開基になり隆盛を極めるが、平将門の乱の余波によって焼亡した後、実盛律師という僧侶によって中興、その後建仁二年に、沙弥行西、大檀越藤原清広、安綱が一山十二ヶ寺の大刹に再建した（左脇侍像の光背背面には宝永三年（一七〇六）の年記を持つ墨書銘が確認されており、この頃には、中尊・右脇侍像内に施された墨書銘が知られていた可能性は高いと思われる）。その十二ヶ寺の学頭が無量光院であり、興味深いことには、本像は、同郡七ツ寺村の長福寺（現名古屋市七寺の前身）の阿弥陀三尊像、同郡奥田村安楽寺の阿弥陀三尊像と同木の材を用いて造立されたという伝承が伝わっている。⁷その後、永禄初年の兵乱（一五五八年頃）、天正年中の大地震を経て悉く破壊され、無量光院と安楽坊（元禄十四年に満蔵院と改号。現在、無量光院の道を隔てた向かい側に所在する）を残すのみとなったという。

（二）無量光院阿弥陀三尊像の基礎的データ

まず、本像について、『基礎資料集成』をもとに、形状・構造等の基礎的事項を確認しておきたい。

中尊は、像高一四〇・二センチメートル、おおよそ半丈六の大きさで、奥田安楽寺阿弥陀如来像よりも小さい。右手は胸前に挙げ、左手は膝上で掌を仰ぎ、いずれも第一・二指を捻じて来迎印を結んで結跏

趺坐する姿で表される。着衣は、胸を左上方から右下方へと斜めにおおう內衣をつけ、偏袒右肩に衲衣をまとう。両脇侍〔図3-1・2〕は、それぞれ垂髻を結び、正面背面左右の四面に花飾りをつけた平安後期に通例の天冠台をつける。左脇侍では、左手を胸前に挙げ、掌を前にして第一・二指を念じ、右手は膝上で掌を仰ぐ姿で、右脇侍では左右を逆にする。折り返し付きの裙をはき（前方に垂れる舌状の折り返し部分が、内側に組む左足の踵にわずかにかかったあと、右足の脚部の下に入り込む）〔図4〕、膝上辺までをおおう幅広の腰布をつけ、右足を外にして結跏趺坐する。

三像ともにヒノキ材で寄木造り、漆箔仕上げとする。構造については、基本的に、中尊、両脇侍ともに、頭体の幹部は前後二材から彫出した上、割首をほどこし、両脚部材、腰脇材などを適宜矧ぎ付けるもので、この時代に一般的な造り方と言える。

なお、光背の二重円相部〔図5-1〕については、三尊ともに当初のものとしてよいと思われる。中尊分は、頭光〔図5-2〕では、八弁二重の八葉蓮華を透かし彫りにし、圈帯部とは紐二条ではさんだ連珠文帯で区画する。頭光の最外縁は、紐二条で挟んだ連珠文帯の外側に列弁帯をほどこす。身光部分は、中央を楕円に近い円形にくり抜き、内外の二重に圈帯をあらわす他は、頭光に準じる。光脚部分〔図5-3〕は、五弁二重蓮華で、花卉の間に葉をあらわす。また、花卉には、それぞれ花文を浮き彫りにする華やかな意匠をみせている。両脇侍分〔図6-1・2〕も、ほぼ中尊に準じるものである。昭和五十五・六年度の修理の際に、後補の彩色や漆箔がおとされたようで、現在は素地を

呈す。頭身光の圈帶部分は、現在素文とするが、当初は別材貼り付けで、何らかの意匠がどこされていたものと考えられる。⁽⁸⁾

これまでも指摘されているとおり、本像は奥田安樂寺像と比較した場合、三尊ともに全体的に、量感の表出が強くなっていることがわかる。特に、中尊「図7」を中心に見てゆくと、上半身の比較的上部にあらわされた胸の肉付けは豊かで、さらに腹部の量感が著しく強調されている。面相部「図8」に目を向ければ、頬の前方へ張り出すような肉どりが認められ、また面部前方から側面にかけてのまわりこみが急角度であるために、立体感の表出が強い。奥田安樂寺像「図9-1・2」が背をまるめて頭部をやや前に突き出す、定朝様に特有の姿勢を見せるのに対して、本像では、先ほども触れたように、胸部が比較的上部にあらわされることも相俟って、上半身はのびやかである。胸腹部を覆う內衣及び衲衣や脚部には、比較的浅い整った衣文を、煩瑣といってもよいほどにあらわす。

本像が、全体としてボリューム感を表出する傾向にあることは上記の通りである。一方、同時期の慶派の作品と比較した場合には、面相部などでは柔軟な抑揚に乏しく、衣文の彫りは浅くやわらかみに欠ける点が指摘できよう。このように、本像はまさしく、様式的側面において、平安後期的要素と鎌倉的要素を併せ持つことが知られ、過渡期的な性格を持つ像として理解できるのである。

本像の形式上の特徴的な点については、制作者の問題を考察する際に、第五章であらためて取り上げることとし、先に墨書銘について確認しておきたい。

(三) 中尊・右脇侍の像内墨書銘について

次に、本像の造像に関わる墨書について見てゆくことにする。まず、

中尊「図10-1」については、(一) 両脚部、(二) 胸腹部、(三) 背面および両腰脇部、(四) 体部背面材右矧面に、右脇侍「図10-2」については、(五) 両脚部、(六) 頸部正面・胸腹部、(七) 頸部背面・背部・両腰脇部に墨書が認められる。

中尊(一) および右脇侍(五) の両脚部に記された墨書は、いずれも体部側を上にして記される。

(一)



願主沙弥行西

比丘尼妙阿弥陀仏

二千石藤原清広

芳縁源氏

所生愛子

建仁二年(壬戌) 九月廿日執筆覚範

仏師僧寛慶



(五)



大願主沙弥行西

比丘尼妙阿弥陀仏

二千石藤原安綱

女大施主藤原氏

仏師僧寛慶

建仁二年九月廿六日

執筆寛範

可

これらの銘文により、本像が沙弥行西を願主とし、藤原清広や安綱、比丘尼妙阿弥陀仏、藤原某、源某を施主に、僧寛慶によって建仁二年九月頃制作されたことが明らかである。次に、種子について見ていくと、中尊の(二)頭体幹部の前半材については、胸上部に Kam=カ 、腹部下部に tan=ラ 、さらにこの tan の両脇に、キリーク・

サ・サクの阿弥陀三尊を表す種子を三角形に配置する。(三)については、まず頭体幹部の後半材に、正面と同様、中央部分に ミ を配し、さらにこの ミ の両脇に三角形に並べた阿弥陀三尊の種子を配する。その下部には、二行にわたって「願主入道行西」とある他、背面左よりには、 ミ 以下四種子が書かれるが、不明。さらに、左肩以下を形成する外側材の腰部分と右腰脇の三角材にそれぞれ、上向きの ミ 〈 vam=バ 〉と体幹部材の方を上にした横向きの ミ が記される。(四)体幹部後半材の右側面には「執筆寛範也」とあり、このことから、本像を組み上げる前に銘文が記されたであろうことが窺われる。

次に右脇侍分を確認していくと、(六)の頭体幹部の前半材については、体部から割矧いだ頭部の頸中央に khama=キャ 、胸腹部には、中尊と同様に上から順に ミ 、 ミ を配し、 ミ の左右両脇にはそれぞれ小さく勢至の種子が記される。(七)の頭体幹部の後半材は、(六)と

ほぼ同様で、やはり体部から割矧いだ頭部の頸中央に ミ が、そして体部の上辺と腰辺りにそれぞれ順に ミ 、 ミ が記され、また、左右の両腰を形成する材には、それぞれ ミ を一つずつ、いずれも体部材の方を上にして記される。

既に『基礎資料集成』の三宅氏による解説にも指摘されているとおり、これらの種子は五大種子、すなわち胎藏理法身の大日如来の真言であると思なしてよいものであり、これは、本像造像の制作背景を考える上で極めて注目すべきものである。次章では、これを一つの手がかりとして、本像造像の思想的背景を考えて行きたい。

第二章 無量光院阿弥陀三尊像の思想的背景

— 五大種子を手がかりとして —

(一) 真言の像内奉籠について






前章第三節で確認したとおり、中尊では ミ が欠けているものの、中尊、右脇侍ともに、頸部正・背面、胸腹部、背部、両腰脇部、両脚部にかけて順に、 ミ ・ ミ ・ ミ ・ ミ ・ ミ の五大種子を配置していたことがわかる。

さて、仏像の像内に真言を奉籠することは、平安時代初期に行われ始めたと考えられる。南北朝時代に東寺勧学院を開いた学僧杲宝によって記された『東宝記』によると、承和六年(八三九)に供養された東寺講堂に安置される五仏、五菩薩、五大明王のそれぞれに、銅筒に入れられた梵字真言を記した紙片や舍利及び白檀龍腦といった名香が

納入されていたことが、建久八年（一一九七）の運慶らによる修理の際に発見されたという。⁹ 平安時代初頭に、新しく空海によってもたらされた密教では、法身如来の説法の言葉を意味する真言には、一字一文に無量の教えと道理が内包されているものと考えられており、それまで仏像に仏性を籠めるのに用いられていた舍利と同様の意味で、像内に真言、すなわち法身舍利が納められるようになったのである。それに次ぐ遺品は、天慶九年（九四六）の年記のある京都・岩船寺阿弥陀如来坐像である。これは、像内の各所にわたって五大種子をはじめとして、法真真言、阿弥陀如来大呪などの多数の真言が記されていたことが、明治四十三年の修理の際に判明したものである。¹⁰ 平安後期には、像そのものへの墨書というかたちではないものの、例えば、天喜元年（一〇五三）定朝による京都・平等院鳳凰堂阿弥陀如来像の像内には、華麗に彩られた蓮台上に白色の円板を置き、そこに阿弥陀の小呪と大呪を四重の同心円状に墨書するという納入品の例も知られる。¹¹

このような、いわゆる「月輪種子」については、田邊三郎助氏によって詳しく論じられており、¹² ここで繰り返すまでもないが、寛弘九年（一〇一二）の京都・広隆寺千手観音坐像の胸部にあらわされるのを早い例として、以後、遺品¹³の上でも史料上でも散見され始める。こうした「月輪種子」の像内納入例は、現在のところ中国や朝鮮半島の遺品が見つかっておらず、日本独自のものである可能性が高いと言う。¹⁴

また、平安後期には、月輪種子ばかりではなく、像内に真言を記す遺品も数多く散見されるようになる。例えば、法隆寺東院伝法堂安置の阿弥陀如来像及び釈迦如来像は、前者では像内背部五行にわたって、

阿弥陀如来小呪、胎藏界大日如来報身真言、同法身真言、同応身真言、金剛界蓮華部五相成身観および中央上部には金剛界阿弥陀如来の種子が表示され、後者では、像内腹部部に胎藏界大日如来の報身真言と像内背部に蓮台にのった金剛界阿弥陀の種子を表している。¹⁵ その他、尾張国の国分寺の北に隣接した土地に所在する、愛知・稲沢市船橋町安楽寺には、来迎印を結ぶ平安時代後期作の阿弥陀如来坐像が安置されており、¹⁶ その像内胸腹部に、上から順に「・・・・」の五大種子を、背面には、これまでも指摘されているとおり十二真言王と呼ばれる十二の種子を円形に配置していることが知られる。この十二布字は、『阿婆縛抄』巻第一「胎灌記」¹⁷にあるように、胎藏灌頂の儀式の際に、五輪観について行われる作法であることがわかり、大日如来の観想に関わる作法であることが理解されよう。またさらには、平安時代末期頃より、例えば神奈川・浄楽寺阿弥陀如来及び両脇侍像のように、大日如来の報身、法身、応身をあらわす三身真言のみならず、宝篋印陀羅尼があわせて記される例が増加するようになることは、周知の通りである。

一方、文献史料を概観すると、藤原忠実が建立した安楽寿院不動明王堂には、仏師康助が造立した半丈六の不動明王像他の像が安置されたことが知られるが、その不動明王像には不動十九布字、金剛界大日種子・真言、胎藏大日種子・真言、四大明王種子・真言などをはじめとして、二十五種類もの真言が卷子に金字書写され像内に奉納されたという。¹⁸ また、鎌倉初期頃に仁和寺僧禅覚が編纂したと考えられている『三僧記類聚』によると、弘法大師の木像御影の中には、三身真言

などの各種真言が奉籠される例があったことがわかる。¹⁹その他、鳥羽の新御堂に安置された丈六釈迦三尊、九体阿弥陀像には、それぞれ胸部に月輪種子が籠められ、満の字が書かれたという。²⁰また、仏師院慶が造立したという西林寺の丈六阿弥陀如来像には、阿字が籠められたことが知られる。²¹

以上、簡単に見てきたように、現存遺品、文献史料からも豊富な例が知られるが、像内に真言（陀羅尼）や種子を墨書したり、納入したりする目的としては、前者の場合、例えば、先述した藤末鎌初以後に増加する宝篋印陀羅尼の奉納については、それが一切如来の法身舍利の功德を集約したもので、舍利そのもの、ひいては仏そのものと見なされた陀羅尼であるからであり、これを像内に奉籠することにより、仏像を仏そのものとして現出させるという意図があったと考えられる。

また、これまでも指摘されているとおり、宝篋印陀羅尼にならんで尊勝陀羅尼などの奉籠例も数多いが、これは尊勝陀羅尼が一切の悪道を打ち破る力を持つ陀羅尼と見なされていたからだと考えられる。あるいは、阿弥陀大呪は、阿弥陀法の根本儀軌である「無量寿如来観行儀軌」に、無量寿如来の根本印を結び、静かに一遍誦すのみで諸悪諸業障を消滅し、一万遍を誦せば、菩提心が顕現して、命終時には如来諸菩薩が来迎して、極楽の上品上生に往生させるという功德が述べられており、その他仏眼真言なども同様に、それぞれの陀羅尼の持つ呪力に期待をこめて納入したものと考えられるのである。²²

一方、種子に関して言えば、金剛界の尊像の場合には真言の末尾の文字を、胎藏界の場合にはその最初の文字を、あるいは梵号尊命の頭

字を種子として諸尊に宛われていることから理解されるように、これは真言と同義であり、やはり無量の法が内包され、あらゆる功德がそこから生み出されるものと考えられていた。したがって、現存遺品や文献史料にも散見される像内への月輪種子の奉籠は、仏舎利の奉籠と同義であり、やはり仏像に仏性を籠めるための営みであったと考えられる。

以上のように、像内に真言を記したり、納入したりすることは、平安時代初頭から尊格を問わず見られた。その中で、像内に胎藏大日如来の法身真言を記す遺品は比較的多く、たとえば、先述の愛知・船橋安楽寺阿弥陀如来坐像や嘉応二年（一一七〇）の愛知・林光寺薬師如来坐像などが挙げられる。後者では、像内背面中央に、薬師如来種子とその下に胎藏大日法身真言を墨書し、左右の行にそれぞれ結縁交名と年記を記すものである。この胎藏大日法身真言の墨書については、丸尾彰三郎氏によれば、「造塔、造像供養式の用」であろうと推測されている。²⁴確かに、仏像の開眼の供養塔には、地水火風空の五大をあらわした五輪塔が使われるといい、²⁵これらの例でも、その可能性は高いと考えられる。

ただし、本像のように、胎藏大日如来の法身真言を像内部の各所に散りばめるように配置していく記銘法は、現在のところ他には見あらず、まずこの点に注目してみたい。

（二）五大種子と五輪観

本像に記された五大種子（地・水・火・風・空の五大を表す）、つま

り胎藏法身真言の特殊な配置法は、直ちに五輪観との関わりを想起させるものである。五輪観（五字嚴身観、あるいは五大成身観ともいう）とは、『大日経 卷第七 持誦法則品』に説かれる布字観とも呼ばれる観相法で、胎藏大日如來の五大種子を膝に²⁵、臍に²⁶、胸に²⁷、面に²⁸、頂に²⁹を布字して、自らを地水火風空の五大³⁰の五輪法界塔婆とし、五智を具足する大日如來を觀じて一体となる観相法のことをいう。

本像の場合、中尊では空を表す種子³¹が欠けているが、胸部および背面上部に³²、腹部および背面下部に³³、両腰部に³⁴、両膝部に³⁵、右脇侍では、頸部に³⁶が墨書される他、中尊にならった配置法となっていることは先に確認した。『大日経』に説かれる五輪観とは、面に置かれるべき³⁷と頂きに置かれるべき³⁸の配字が、本像ではそれぞれ異なっている点をどのように解釈するかという問題が残されるものの、本像の五大種子の配置が、この五輪観に準じるものである点は確認できると思われる。すれば、密教の教主である大日如來を觀相する五輪観が、觀音、勢至をしたがえ、來迎印を結ぶ阿彌陀三尊という、淨土から來迎する様を體現した、すぐれて淨土教的本像に表されたのは、どのように解釈すればよいのであろうか。

ここで思い起こされるのは、十二世紀前半に活躍した真言僧、覺鑊の思想である。周知の通り、彼は当時隆盛する淨土教信仰と真言密教との融合を図ろうとし、真言密教の核的教義である、宇宙の諸仏諸菩薩はすべて大日如來から派生したものであるという思想を背景として、大日如來と阿彌陀如來は同体であるとみなした。彼の晩年の代表

的著書である『五輪九字明秘密釈』によると、「顕教には、釈尊の外に彌陀あり、密藏には大日即彌陀、極樂の教主なり、まさに知るべし、十方の淨土はこれ皆一仏の化土、一切の如來は悉くこれ大日なり、毘盧、彌陀は同体の異名、極樂と密藏は名は異なれど、一處なり」とあり、大日如來を觀相して一体となれば、それは、とりもなおさず阿彌陀如來と一体となったということを示しているのであり、現世に淨土が現出したものとみなした³⁹。ちなみに、覺鑊はこの五字嚴身観によって初位の三昧を得たと言われるが、觀相行の易行化を図り、⁴⁰を觀じる阿字観や月輪観などの觀相行の実践を勧めているという⁴¹。

この覺鑊の思想は、一定の影響力を持ったと考えられ、例えば十二世紀末には、覺鑊の弟子である兼海のあとに、覺鑊が創始した高野山伝法院の学頭を勤めたと考えられる仏嚴が、後白河法皇の命にしたがって覺鑊の著作を抄出した書物『十念極樂易往集』を記していることが知られる⁴²。また、東大寺の大勸進職を勤めた俊乗房重源が、覺鑊の思想を継承していたことはこれまでも指摘されており⁴³、重源の関わった別所経堂や造像などには、覺鑊の思想が色濃く反映されていると考えられている。例えば、重源によって、安元二年（一一七六）に、高野山延寿院に施入された鐘には、阿彌陀三尊の種子と阿彌陀如來小真言や光明真言、釈迦三尊の種子などが陽鑄され、鐘の内面には、⁴⁴をのぞいた、⁴⁵の五大種子があらわされている。阿彌陀の小呪、すなわち九字真言と五輪観をなすための胎藏大日如來の法身真言が一箇所に同時に表されている点を鑑みれば、大日如來と阿彌陀とを一体視する覺鑊の思想が、この鐘の製作背景として垣間見

えてくるのである。

このように、覺鑊による「大日即阿弥陀」の思想は、十二世紀後半から末頃にかけて、真言僧を中心に一定の広まりを見せていたことは事実であろう。また、先述した覺鑊の弟子筋に当たる仏嚴が、九条兼実のもとに頻繁に出入りしていることが知られるが、このことから覺鑊の思想を享受する高位の貴族があったことが知られ、貴族層を中心に広く信仰を獲得していた様子が窺えよう。

以上の検討から、本像中尊および右脇侍像内に表された五大種子が、大日如来を観相するための観相法である五輪観を意図して配置され、それが大日如来と阿弥陀如来とを同体と見なす覺鑊の思想を背景に記された可能性は極めて高いのではないだろうか。ただし、本像は、来迎印を結んでおり、彼岸から来迎する浄土教的阿弥陀如来を表している点で、覺鑊の意図した阿弥陀如来とは異なるのではないかと思われる向きもあるかも知れないが、この疑問については、以後、論を進めていく中で、次第に明らかにされてゆくだろう。

「はじめに」に指摘しておいたように、無量光院の所在が、平頼盛が領家職を有していた尾張国海東荘のうち、中荘の荘域に合致していることから、本像の造像にも中央との関わりを想定する必要がある。次章では、この海東荘を概観しながら、それを取りまく人々の人的紐帯について考察する中で、本章で示した可能性が高いことを検証してゆきたい。

第三章 尾張国海東三ヶ荘と平頼盛

愛知県稲沢市の南西部、現在の奥田町、中之庄町、七ツ寺町付近一体を荘域としていた海東荘は、上・中・下の三ヶ荘よりなり、本家を後白河院発願の蓮華王院に持ち、領家は平頼盛（一一三一―八六）で、平家没官領として没収された家領を、源頼朝が平頼盛に返付した荘園のうちの一つである。この荘園については、國學院大学所蔵の『久我家文書』の中に、「池大納言家領相傳文書案」と名付けられた一連の文書群が残されており、これによって平安時代末から室町時代にかけての領家職の伝領過程等を含めた、海東荘の変遷が明らかにされている。³⁰海東荘の史料上の初見は、『久我家文書』二八―三「源頼朝下文案」で、

下 尾張國海東三箇庄

可早如元為池大納言家御沙汰

右件庄、如元為彼家御沙汰、可令執行庄務之

状如件、敢不可遺失、以下、

壽永三年四月廿二日

前右兵衛佐源朝臣 在御判

と海東三ヶ荘を池大納言、すなわち平頼盛に返付する旨を記した壽永三年（一一八四）四月二十二日付けの下文が下されていることが知られる。頼盛死後は、三ヶ荘のうち、上・中両荘は、頼盛の嫡子光盛（母は八条院女房大納言女）、光盛の四女三条局、右大将久我通忠室、

前内大臣久我通基と順に相伝され、鎌倉時代後期には久我家領となった。下荘は、光盛死後、その五女冷泉局に伝領されたが、それ以後は不明である。³¹ 残念ながら、海東三ヶ荘の立荘の経緯やその年次等については明かではないものの、頼盛が尾張守在任中の平治元年（一一五九）十二月から長寛元年（一一六三）正月まで、もしくはその後まもなくのことと見なされている。³²

さて、平頼盛（母は藤原宗兼の女（池禅尼）、平忠盛の後妻）は、平忠盛の五男で平清盛の異母弟にあたる人物である。頼盛は、鳥羽天皇の第三皇女である八条院暲子（一一三七―一二一一）や後白河院と近しく、また、母である池禅尼（藤原宗子）が平治の乱の際に敗れた源頼朝の助命を嘆願したことから、頼朝とも縁があり、寿永二年（一一八三）の平家の都落ちには加わらず、頼朝の守護を得た。寿永三年に平家の所領が没官された際には、頼朝の特別な配慮によって頼盛の家領三十四箇所が返付されたが、その返付された所領の一つが、この海東荘であった。このように、海東荘は十二世紀半ば頃以降、平頼盛一族によって代々受け継がれていたことがわかり、久我家文書によれば、頼盛の周忌供養の料をこの荘から得ることを定めているなど、一族とのつながりが深かったことが窺われる。

ここで注目したいのは、頼盛の子の一人の静遍（一一六六―一二二四）である。彼は平氏の都落ちの際、仁和寺にいた八条院のもとに身を隠し、仁和寺の僧侶となった。その後、醍醐寺三宝院の勝賢、高野山の明遍に師事し、笠置の貞慶のもとで道心を決したという。後、法然に私淑したことが知られるが、静遍は真言宗の僧侶としての側面が

強く、三宝院流の学僧、また、伝授の師として位が高かったと考えられている。³³ 例えば、香川県三豊郡三野町の弥谷寺に伝わる醍醐寺三宝院流の聖教の一つ、「静遍僧都伝授目録」一帖によれば「醍醐山上下并鎮守習事」が、三宝院流の祖である勝覚を筆頭に、聖賢、源運、雅西、静遍と相承されたこと、また「三宝院道場習事」が、やはり勝覚、聖賢、源運、叡信、静遍と相承されたことがわかり、醍醐寺やその子院である三宝院に関わる重要な事項が、いずれも静遍に伝えられていることが知られるのである。

また、静遍が止住した京都・禅林寺には、鎌倉時代前期に描かれたと考えられる〈山越阿弥陀図〉が残されているが、これは、静遍が持っていた思想を背景に描かれた来迎図であると考えられており、非常に興味深いものである。それは、大海を背景にして、山の端に転法輪印を結ぶ阿弥陀如来が上半身をあらわし、山の斜面を這うように観音勢至が向かい合いながら降りてくる。画面の左右下方には四天王像が、中央には二童子が、それぞれ阿弥陀を中心に左右対称に向かい合うように配され、画面左上には金泥で描かれた月輪の中に、**通**字が描かれている。

中野玄三氏は、この禅林寺本の画面左上に**通**字が表されていることから、**阿**字を観じて唱えることが即身成仏、西方往生の最善の易行である**阿**字観を説いた覚鑊の思想の関わりが窺えるとされ、シンメトリを旨とした画面構成に、真言密教的な曼荼羅風の古様さを見て取られている。³⁴

たしかに、静遍は、覚鑊の法脈を汲む僧侶であると推測され、なお

かつ、法然私淑後に著されたとされる静遍の『統選釈文義要鈔』でもなお、覚鑊風の浄土観が示されている。すなわち、浄土と穢土との区別が無いとする穢土即浄土の密厳浄土観を唱え、阿弥陀の来迎についても、心眼が開けたか否かという自らの悟りの問題に集約させる説を持っていた。このように、静遍は覚鑊の「密厳浄土」の思想を踏襲しており、基本的には真言密教の立場をとっていることが知られるのである。

一方、〈山越阿弥陀図〉では、画面の中央、山際に上半身が立ち現れる阿弥陀如来像の転法輪印を結ぶ両手には、五色の糸の残決が認められており、この画像が臨終行儀の際に用いられた本尊であったことがわかる。実際、十一世紀前半には高野山においても、天台浄土教の影響があると指摘されており、本図もそうした天台浄土教の臨終行儀作法が反映されていると考えられる⁽³⁵⁾。

覚鑊の思想を色濃く受け継いだ静遍の関与したと考えられるこの禅林寺本に、浄土から来迎する阿弥陀如来が描かれたことを考慮すれば、像内に五大種子をあらわし、覚鑊の「大日即阿弥陀」思想を背景に造立されたと推測される無量光院阿弥陀三尊像が、浄土教的な来迎印を結んでいたとしても、覚鑊の思想との齟齬は来さないと見なして良いのではないだろうか。

前章で確認した本像の思想的背景には、「大日即阿弥陀」とする覚鑊の密教思想が色濃く反映されている可能性を指摘したが、無量光院の所在する海東中荘の領家職が平頼盛であること、その頼盛の子息である覚鑊の思想を受け継いだ静遍の存在を鑑みれば、その蓋然性はなお

一層高いものと考えられよう。

次章では、本像の銘文に記された人物名、特に願主としてあらわれる「沙弥行西」を中心に、本像を取り巻く人物に焦点を当てながら、本像と平頼盛一族との関わりを明確にしてゆきたい。

第四章 銘文の検討

—中尊・右脇侍の脚部裏銘文を中心に—

第二章で確認したとおり、中尊と右脇侍の脚部裏にあらわされた銘文から、本像は沙弥行西を願主とし、藤原清広や安綱、比丘尼妙阿弥陀仏、藤原某、源某を施主に、僧寛慶によつて建仁二年九月頃制作されたことがわかる。以下では、人物比定を試みられた三宅氏の解説を参照しながら、さらに検討を進めて行きたい。

まず、俗人名としてあらわされる藤原清広、藤原安綱については、その肩書きがいずれも、国司の唐名である「二千石」とされていることから、両者が国司であると推測されるが、三宅氏も指摘されているとおり、尾張国司に該当する人物は見当たらず、在庁官人である可能性が高いと考えられる。また、藤原清広とともに記される芳縁源氏および所生愛子や、藤原安綱とともに記される女大施主藤原氏は、それぞれ清広、安綱と血縁的つながりのある人物であろうと推測される。というのも、平安時代後期の造像銘を概観すると、仏像の造像は血縁的つながり、あるいは地縁的つながりを持つ人物が中心となっておこなわれるケースが多いからである。

さて、問題となってくるのは、「大願主沙弥行西」や「比丘尼妙阿弥陀仏」、「覚範」あるいは、「寛慶」といった僧名を持つ人物である。房号と名とがともに判明する場合は別として、名前のみでは同一人物かどうかの判断はつきにくい。まして、阿弥号に至っては、同一の漢字を用いる人物は数多く、別の判断材料がない場合には、人物比定は非常に難しいことが多い。実際、妙阿弥陀仏については、三宅氏によれば、兵庫・浄土寺裸形阿弥陀如来像や同じく浄土寺阿弥陀如来像、奈良・東大寺南大門仁王像うち阿形像、奈良・興善寺阿弥陀如来像、兵庫・慈眼寺阿弥陀如来像（伝釈迦像）に散見されるという。ここで挙げられた妙阿弥陀仏は、確かに同一人物である可能性が高いが、この他にも、建久年間半ば頃に造立されたと考えられる京都・遣迎院阿弥陀如来像の像内に納入されていた膨大な数の結縁交名には、比丘尼と考えられる「尼妙阿弥陀仏」が四名、「妙阿弥陀仏」が二十一名見られる⁽³⁷⁾。また、建暦二年（一二二二）に造立された滋賀・玉桂寺阿弥陀如来像の像内に納められた「越中国百万遍勤修人名」と題された結縁交名には、比丘「妙阿弥陀仏」が二名、比丘尼「妙阿弥陀仏」が四名記されていることが指摘されている⁽³⁸⁾。

阿弥陀仏号については、東大寺大勧進職を務めた俊乗房重源による作善を集成した『南無阿弥陀仏作善集』の記述によれば、重源によって寿永二年（一一八三）頃に始められたと考えられているが、建久、正治、建仁頃を境として以後は急増するという⁽³⁹⁾。阿弥陀仏号の所有が建久以降から激増するという状況を、遣迎院阿弥陀如来像の結縁交名が如実に反映しているかどうかは定かではなく、むしろ同一人物が繰

り返し結縁・署名している可能性も考えられるが、いずれにせよ、阿弥号保持者の人物比定は容易ではなく、本像の「比丘尼妙阿弥陀仏」についても、残念ながら人物比定は困難であると思われる。

さて、願主沙弥行西は、本像造像の中心的役割を果たしたと考えられる人物の一人であろう。本像造像時と同時代に、同一名を持つ人物は幾人かが知られる。三宅氏によれば、藤原基重（前中務丞）が建保二年（一二二四）に出家し、行西と名乗ったことが知られる他、京都・二尊院法然上人七箇条制法連署人である行西、奈良・興善寺阿弥陀如来像の結縁者である行西、真言宗金剛王院流雅西の弟子である行西が挙げられると言う。その他にも、遣迎院阿弥陀如来像の結縁交名には、行西、あるいは僧行西が五ヶ所にわたって見られる他⁽⁴⁰⁾、文治五年（一一八九）四月十四日に、故藤原経房のために阿弥陀三尊絵像を供養した行西⁽⁴¹⁾、『吾妻鏡』（『新訂増補 国史大系』）貞応二年（一二二三）四月十九日条に、勝長寿院の奥御堂の棟上げを奉行した人物として隠岐入道行西が知られる。少なくとも、藤原基重については、出家が建保二年であることから、建仁二年（一二〇二）本像造像時、既に僧侶であった本像の願主である行西とは別人と見なして良いであろう。

さて、元久元年（一二〇四）に定められた法然上人七箇条制法、いわゆる「七箇条起請文」は、念仏の停止を求めた天台宗に対し、法然が門弟と称する念仏者に対して立てた七箇条の禁止項目とその略説であるが、その起請文に署名した行西は、法然門下と見なして良いものと思われる。一方、像内より法然の高弟の證空の消息が発見され、法然門下が結縁したことが知られる奈良・興善寺像の結縁交名にあらわ

れる行西は、やはり法然に関わりのある人物と考えられ、「七箇条起請文」に署名した行西とは同一人物である可能性が高い。この法然門下の念仏者である行西と、密教的阿弥陀信仰を背景に造立された本像の願主である行西とでは、後者が本像の造像直後、突然念仏門に転向したとするならともかく、現時点では、両者が同一人物であるとは考えにくいと思われる。

そこで、注目したいのは、醍醐寺金剛王院流雅西の弟子としてあらわれる小田原在住の勤教房行西である。⁽⁴²⁾ 師にあたる雅西は、後白河院の後援を受けて僧都の位にのぼり、醍醐寺金剛王院流を建立した源運の法流を伝える人物である。『野澤血脈拾』によれば、「雅西、よく阿字観を成して、光明を放つ。仍つて住房を照阿院と名づく」とあり、⁽⁴³⁾ 雅西は、阿字観、月輪観といった観想行の実践を推奨した覚鑊の思想の系譜に位置づけられ得る人物であることが理解される。また、『続伝燈広録続巻第七』に収録された雅西伝によれば、平清盛が雅西を崇敬して照阿院を開創し、その第一祖に雅西を据えたとあることから、⁽⁴⁴⁾ 平家の中心的人物の中に覚鑊の思想を信仰する人物のあったことが窺える点は興味深く、当時における覚鑊の密教的阿弥陀信仰の広まりを知る上でも注意すべきであろう。

さらには、前章で指摘しておいたように、平頼盛の子静遍は、「醍醐山上下并鎮守習事」や「三宝院道場習事」といった醍醐寺の重要事項を受け継いでいる醍醐寺三宝院流の学僧として極めて高い地位を占めていたことが知られる。特に、前者の金剛王院流の僧侶を中心に相承されてきた「醍醐山上下并鎮守習事」は、雅西から直接静遍に伝授さ

れており、静遍の思想の系譜や平頼盛一族と醍醐寺金剛王院流との関わりを確認する上でも、重要であると考えられる。つまり、無量光院像の銘文に現れる行西が、雅西弟子の行西であるとしてよいならば、行西と静遍とは師を同じくする同宿の間柄となり、極めて近い関係にあった可能性が指摘できるのである。ちなみに、やはり覚鑊の影響を強く受けたと考えられる重源の密教の師にあたる人物が、金剛王院流の源運や覚鏡であることから、⁽⁴⁵⁾ 醍醐寺金剛王院流は、覚鑊の思想を色濃く引き継いでいたと考えられよう。

以上より、本像に記された銘文に窺われる密教的阿弥陀信仰は、それが金剛王院流の系譜をひく雅西の弟子である行西が持っていたとしても何ら矛盾はないものであることがわかる。同じ法脈に連なる静遍が海東莊の領家職であった平頼盛一族であることも考慮すれば、本像の願主沙弥行西が、雅西の弟子である行西とする蓋然性は極めて高いのではないだろうか。

なお、醍醐寺三宝院に伝来する聖教の一つである『蘇悉地経』の奥書には、「嘉禄二年（一二二六）丙戌三月六日 於尾張國中嶋郡奥田安楽寺書写畢」とあり、⁽⁴⁶⁾ ここから、無量光院の所在する中之庄にもほど近い奥田安楽寺と醍醐寺との間に何らかの関係があったことが知られる。この奥田安楽寺の阿弥陀三尊像は、寺伝によれば無量光院像と同木で造られたとされ、実際にも本像とは非常に作域が近いものであることも先に触れた。本像の造像からはやや時期が遅れるが、鎌倉時代初頭に、同地域と醍醐寺との関わりが窺い知れることから、醍醐寺を拠点にした金剛王院流の法脈に連なる僧侶が、同地域の造像に関与

したと考えても、無理はないだろう。

以上、願主行西を中心とした検討から、醍醐寺に関わりのある僧の関与を認めることによって本像と京都との結びつきを、より明確に呈示し得たと思われる。

次章では、残された銘文の人物、本像の作者である「僧寛慶」について検討を進めることとする。

第五章 「僧寛慶」をめぐる

「はじめに」においても触れたように、本像の作者「寛慶」が、慶派の寛慶と捉えるか否かによって、慶派様式に対する理解や、地方における鎌倉新様式の受容のあり方、あるいは慶派の構成員のあり方に関する問題など、多くの問題点の生起とも関わってくる。「僧寛慶」を慶派の「寛慶」とする確たる根拠は、現在時点では見だされていないものの、幾つかの傍証資料によって、この「寛慶」を慶派の寛慶として積極的に捉えてみたい。

まず、本像の形式上で特徴的な部分を抽出し、彫刻史上での位置づけを明確にしていきたい。最初に、本像中尊の服制に注目してみると、衲衣の下に內衣を着し、胸腹部の大半を覆う服制をとっている点は、先述の奥田安楽寺の阿弥陀如来像と極めて近似している。同様の服制は、正治元年（一一九九）頃の作と考えられる京都・峰定寺釈迦如来立像、建久六年頃（一一九五）の造立と考えられる快慶作兵庫・浄土寺阿弥陀如来立像、承元二年（一二〇八）造立の運慶の手になる奈

良・興福寺北円堂弥勒仏坐像、高知・雪隠寺薬師如来坐像などが挙げられる。このような服制は、十二世紀末頃から散見され始め、もちろん後世には、比較的広まりを見せるが、ごく初期には、慶派による作品を中心に見られ始める点に注意したい。ただし、左腕上膊から前膊を覆う衲衣の衣端が、内側に組んだ左足の踵からふくらはぎ辺、さらに右足のふくらはぎ辺に舌状にかかるという形勢は、平安時代後期以後、地域を問わず、ままた見られるもので、本像の服制やそのまとい方には新旧の混在が認められる。一方、両脇侍像〔図11-1・2〕に目を向ければ、その服制、形式ともに愛知・七寺観音・勢至菩薩像や奥田安楽寺両脇侍像〔図12-1・2・3・4・5〕とも非常に近似することは、これまでも指摘されているとおりである。さらに細部に注目して見ると、特に、天冠台下地髪部の束目の形、特に耳上に小さな束目を作る点などがいずれにも近似し、また裾の衣端を外側に組んだ右足の足首下に挟み込む形式や、前方に垂れる裾の折り返しが、内側に組んだ左足の上をわたってから、右足下にたくし込まれる様子をあらわしている点などは特記すべきであろう。現在、名古屋市の中心部に所在する七寺は、周知の通り、その前身は長福寺といい、仁安二年（一一六七）に尾張権守大中臣朝臣安長が再興したとされる。これまでも、その再興時に造立されたと考えられる阿弥陀三尊像および二天像については、三尊の脇侍が玉眼を嵌入するなど、当時では革新的な技法を用いていることなどから、奈良仏師の作であろうということが指摘されている⁽⁴⁷⁾。

次に、中尊の光背二重円相部に着目してみると、これは、建久三年（一一九二）の快慶の手になる醍醐寺・三宝院弥勒菩薩像のそれ〔図13〕

と形式的に極めて似通うものであることが指摘できる。⁽⁴⁸⁾ いずれも、頭光中心に表された八葉蓮華の蓮肉部分を厚浮き彫りとし、二重にめぐらされた合計十六枚の蓮弁が幅広で、径が短く小ぶりの点に共通性が認められる。また、両者ともに身光の中央部分を円形に透すが、正円形にはならず、その上部が頭光のために遮られて、やや扁平になっ
てしまっている点などに、形式上の共通性が認められる。

もちろん、同時代の光背遺品が極めて限られている中では、両者の類似性は、同一流派の作であることを示すよりもむしろ、同時代性を示唆するものとして捉える方が妥当かも知れない。ただし、少なくとも、この類似性から本像を作った工人が、京都との関わりを持つ人物である可能性が高いと考えられるのではないだろうか。

以上のように、繰り返しにはなるが、本像は基本的には定朝様を踏襲しながらも、様式や服制の上で新要素が認められ、さらには、微証ながらも、形式上から慶派との関わりが看取される点には注意されよう。

・尾張国分寺周辺という場

愛知県稲沢市は、尾張国の国衙が所在したところで、元来中央との結びつきが強かった地域である。先にも触れたように、稲沢の地にあった七寺の諸像が奈良仏師の作と考えられることなど、畿内周辺の仏師の参入も認められた。承久の乱（一二二二年）以後、中之庄周辺地域では、地頭職として頼朝の親族に当たる熱田大神宮家の家系を引くものが就任しており、同地域への慶派の浸透は、源頼朝との関係で捉えることができる可能性もある。⁽⁴⁹⁾ やや地域的には隔たりがあるが、

正治年間（一一九九―一二〇〇）には、運慶や湛慶が、源頼朝にゆかりが深く、熱田大神宮家に関わりのある愛知県岡崎市瀧山寺の造仏を行っていることは、周知の通りである。

本像に関していかに仏師選定が行われたかについては、現在のところ、はっきりとはしない。しかしながら、平頼盛と頼朝との関係が密接なものであることはこれまでも指摘してきたが、同荘域への慶派仏師の参入は、そうした両者の関係性による可能性も高いのではないだろうか。例えば、頼盛一族と関係が深く、平家の都落ち後に頼盛の子息をかくまったことが知られる八条院暲子が願主となり、建久八年（一二九七）行勝上人が建立した金剛峰寺不動堂の一連の造像は、運慶が行ったことが確認できるもので、間接的ながらも平頼盛一族と慶派との接点は認められる。さらには、この事業には頼朝も結縁を行っており、この造仏での仏師選定は、むしろ頼朝の差配によるものではないかとの指摘もなされている。あるいは、仏師の選定を願主である行西との関わりの中で捉えることができるならば、行西の本拠地とも言える醍醐寺では、鎌倉時代初頭において、散発的ながら慶派の活動が見られるのは事実である。⁽⁵⁰⁾ いずれにせよ、形式上の微証や無量光院の所在する場を考慮した場合、「僧寛慶」を慶派の寛慶と捉えても大過ないように思われるのである。

第六章 鎌倉初頭における京都の造像

さて、「はじめに」でも指摘しておいたように、本像の製作者を慶派

の寛慶とするならば、本像に見られる作風、適度なポリウム感の表出は見せながらも、衣文等は線状的で形式的に整えられているなどの点は極めて保守的と見なさざるを得ない。というのも、本像の製作年、建仁二年（一二〇二）は東大寺の復興造営も最終局面を迎え、この頃には、慶派の様式は、既に完成していたと見られるからである。

もちろん、慶派内でも各仏師の作風に振幅は見られるが、本像においては前代の様式への傾斜は著しく、これは寛慶個人の作風というよりもむしろ、施主側の意向との関わりを考慮すべきもののように思われる。特にこの海東荘という荘園の場合、第三章で触れたように、その領家が異例な形で引き続き平頼盛一族、つまり平家であったことが、当地の造仏にも影響を与えたのではないだろうか。

保立道久氏は『今昔物語集』所収の説話「芋粥」を手掛かりとして、贈与関係という社会的視点から、領地支配について分析された。⁵¹それによれば、都市と地方間の行き来する荘園の役人を媒介として、在地が中央貴族の主従制をそのまま取り込んだ人的関係を構築していることを指摘されているが、在地支配には、都市、すなわち都と在地との往還が必要不可欠のことであつたとされている。そのような、都と在地人的関係を軸に、あるいは、モノそのものを媒介として、都の貴族の「趣味」が在地へと伝達されることは、十分にあり得たことと思われる。都在住の貴族による地方支配が確立したことが、平安後期における「定朝様」の広範囲への伝播という事象にも大きく影響を与えたのではないだろうか。

平家一族の造像では、平安末期ではあるが、例えば、治承二年（一

一七八）の高倉天皇の中宮、平清盛の娘、徳子の出産にあたっては、仏師院尚、院慶、明円など、京都で活躍した院派、円派の主流仏師が御産御祈のための造像を行っていることが知られ、後白河院が、やはり院派、円派を重用したのと同様に、平家一族もまた彼らを重用し、「定朝様」を規範とする中央貴族の趣味の中に取り込まれていたものと考えられる。

ただし、注意されるのは、先述した徳子の御産御祈の造像の中で、平頼盛が、仏師行命という出自不明の仏師に等身十一面観音像を造立させていることである。こうした仏師の選定には、平家内での頼盛の微妙な立場が反映されているのかも知れないが、徳子の御産御祈という平家一族と共有した場での造像であることを考慮すれば、やはり頼盛の造像も、趣味的、つまり様式的に、平家主流のそれを大きく逸脱するものではなかったであろう。そうすれば、慶派の仏師の手になると考えられる本像の、過渡期的な様相を見せる様式的特色についても、それが中央貴族の趣味に規定されたものとして、理解することができないのではないだろうか。

ところで、本像の製作と同時期頃、都の貴族、三善為清という人物を願主として造立された像に、建仁三年（一二〇三）の滋賀・西勝寺阿弥陀如来立像がある。⁵²裾裾の衣の折りたたみ方、衣文構成などをはじめ、「定朝様」に則った像であることが理解されるもので、鎌倉初頭の都との貴族の造像においては、なお「定朝様」の規範が根強かったことを推測させるものである。

おわりに

愛知・無量光院阿弥陀三尊像の作品理解を中心に、そこから鎌倉時代京都の造像の様相を探ってみた。実際のところ、平安時代末期から鎌倉時代初頭の変革期にあたる時代の、京都においていかなる造像活動がなされていたかについては、特に慶派以外の仏師集団の遺品が少なく、全体像をつかみがたいのが実状である。

その中で、本像は、新様式を主導した慶派の一仏師が造立したという可能性があるにもかかわらず、定朝様を色濃く残していた点が注目された。上述のような、本像の製作背景を鑑みれば、本像の様式的理解は、地方作である云々の問題ではなく、むしろ積極的に当時の都での造像のありようを示唆してくれるもののように思われる。つまり、当時、都においては、貴族層を中心として、なお「定朝様」の規範が根強く残っており、彼らを施主とする場合には、前代の様式に基づいた造像が一般的に行われていたのではないかと推測されるのである。

また、寛慶は、慶派的要素を抱えた保守的な仏師であると考えられたわけであるが、逆に言えば、当時、慶派工房内には、出自のさまざまな仏師を抱えていたと見なせよう。このことは、たとえば、慶派内の快慶の出自を考える上でも、きわめて興味深い事実を投げかけているのではないだろうか。

注釈

(1) 「昭和五十五〜六年度修復文化財関係銘文集成」(京都国立博物館「学叢」

第五号、一九八三年)。

(2) 三宅久雄氏解説。『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』第一巻(中央公論美術出版、二〇〇二年)。

(3) この他に、鎌倉時代と思われる興福寺春日版版本のうち「法華經普門品」に「三千三百三十三卷之楷模、依願主聞阿弥陀仏之誂書之、願一品書寫之功、彌為三會值遇之縁、于時承元三年(一二〇九)〔巳巳〕大呂廿日矣、沙門瞻空、彫師寛慶」の刊記があり、寛慶という名前の人物が彫師であったことが知られる。この他にも、この興福寺春日版版本には彫手宗慶や慶千などといった名が見受けられ、埼玉・保寧寺阿弥陀三尊像や法華寺木造仏頭などの銘文に見られる宗慶や興福寺十大弟子八部衆造を修理した慶千と名前が一致する点が指摘されている。副島弘道「研究資料 保寧寺阿弥陀三尊像と仏師宗慶(上)・(下)」(『國華』第一一〇二号、一一〇三号、一九八七年四月、五月)。

(4) 『新修稲沢市史 研究編二 美術工芸』(便利堂、一九七九年) 所載の倉田文作氏による解説。

(5) 『名古屋叢書 続編』第六卷、『尾張愛知郡御行記』(3) 二六四頁〜二七五頁(名古屋市教育局教育委員会、一九六七年) 参照。当該箇所底本に使用されたのは、愛知図書館本十一巻中の中島郡の部十四および鶴舞中央図書館本、中島郡の部十三。

(6) 『尾張愛知郡御行記』同二六七頁、満願寺には、「古キ仏像モ(本堂ノ不動毘沙門ハ運慶ノ作)多ク侍ル」とあり、同寺に安置されていた仏像の作者に運慶の名前が伝承されていることは、この地域の造像を考える上でも興味深い。

(7) 『尾張愛知郡御行記』二六九頁の安楽寺に関する記事は以下の通り。

安楽寺、府志曰、在奥田村、号奥田山、真言宗、属長野万徳寺、堂安阿弥陀大像及観音勢至夾侍（中略）此寺ハ人皇四十六代孝謙天皇天平勝宝元己丑年、行基ノ開基ナリ、其後人皇九十代伏見院永仁年中僧中興再建ス。古ハ塔頭五坊アリ、大乘坊金蔵坊円蔵坊大善坊一乗坊ト云、天正ノ比悉ク廃寺トナル、此寺ハ昔阿弥陀堂ノ東ニアリシガ、先住秀栄今ノ所ヘ移スト也、其年ハ不伝ト云（後略）

(8) 『新修 稻沢市史』の図版によると、修理前は、頭身光の外圍帯部分に、別材製半肉浮き彫り状の奏樂菩薩像を貼り付けていたようである。写真で見る限りでは、江戸時代頃の作と考えられる光背周縁部に配された奏樂菩薩像と同じと思われる。

(9) 『東宝記』尊像所納物事（藤田経世編『校刊美術史料』寺院編中巻〔中央公論美術出版、一九七五年〕）。

(10) 丸尾彰三郎「天慶九年九月二日梵字奉書—岩船寺阿弥陀如来像銘記文—」（『國華』第八八二号、一九六五年九月）、『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇』第一巻（中央公論美術出版、一九六六年）。

(11) 高田修「鳳凰堂本尊胎内納置の梵字阿弥陀大小呪月輪考」（『美術研究』第百八十三号、一九五五年九月）。

(12) 田邊三郎助『重要文化財・別巻 像内納入品』I・II（毎日新聞社、一九七八年）、『田邊三郎助彫刻史論集—日本彫刻とその周辺—』第三章「仏像彫刻の周辺」、「一 像内納入品」（中央公論美術出版、二〇〇一年）に再録。

(13) 田邊氏前掲注(12)論文でも挙げられているように、嘉応二年（一一七〇）

の滋賀・福寿寺千手観音立像は、像内胸部に千手観音種子、および腹部以下に千手千眼観音大悲心陀羅尼、背面には結縁交名を墨書するものである。さらには、鏡面に千手観音種子を墨書した松枝双鳥鏡を胸辺に懸垂していたと考えられるという（納入品の詳細については、滋賀県立琵琶湖文化館平成十一年度特別展『仏像—胎内の世界—』図録を参照した）。また、長寛二年（一一六四）の蓮華王院本堂の千体千手観音像には、千手観音種子を墨書した蓮華台、枝付きの木製月輪が込められているなどの例がある。

(14) 田邊氏前掲注(12)論文。

(15) 『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇』第五巻（中央公論美術出版、一九七〇年）。釈迦如来像は、井上正氏の解説でも触れられているとおり、墨書銘から判断すれば元来は阿弥陀として造立された可能性が高いものと考えられる。

(16) 『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇』第五巻（中央公論美術出版、一九七〇年）。もと、尾張国分寺の子院であったという。

(17) 『大正新脩大藏經』図像卷八 七五三頁。

(18) 『増補史料大成 兵範記』久寿二年（一一五五）二月二十七日条。

(19) 『三僧記類聚』（仁和寺本第三冊）「奉籠大師御影真言等」（古代学協会編『仁和寺研究』第二輯、吉川弘文館、二〇〇一年三月）。

『三身真言 五智、三帰、金剛界大日、台界大日、仏眼、光明、尊勝タラニ 愛染明王三呪 不動 旧救火界 或比丘尼奉造木像御影、其中可奉籠真言等、申請御室仍件真言等梵本紺紙金字云々

(20) 『増補史料大成 兵範記』 仁平四年（一一五四）八月八日条。

(21) 『増補史料大成 兵範記』 仁安二年（一一六七）六月十二日条。

(22) 倉田文作『日本の美術 像内納入品』第八十六号（至文堂、一九七三年）。

(23) 『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇』第四卷（中央公論美術出版、一九七二年）。

(24) 注(10)前掲書。

(25) 密教辞典編纂会編『密教大辞典』（法蔵館、一九八三年）、「五輪塔婆」の項による。

(26) 松崎恵美『平安密教の研究』第五章「興教大師覚鑊の撰述について」（吉川弘文館、二〇〇二年）、頼富本宏「覚鑊の思想教義と尊格信仰」（西川新次・根来寺文化研究所監修『根来寺の歴史と美術』東京美術、一九九七年）、山崎泰廣「興教大師による阿字観の展開」（興教大師研究会論集編纂委員会編『興教大師覚鑊研究』春秋社、一九九二年）等を参照した。

(27) 松崎氏前掲註(26)論文。

(28) 『玉葉』（国書刊行会編）安元二年（一一六八）十月三十日条、治承元年（一一八二）十月二日条。

(29) 石田尚豊「重源の阿弥陀号」（同『日本美術史論集——その構造的把握——』中央公論美術出版、一九八八年）、原田正俊「重源・鑊阿と勧進の思想」（伊東唯真編『日本仏教の形成と展開』法蔵館、二〇〇二年）等でも、石田尚豊氏の見解が継承されている。

(30) 文書の翻刻については、國學院大學久我家文書編纂委員会編『久我家文書』第一卷（統群書類従完成会、一九八二年）を参照した。なお、原文書については國學院大學の図書館ホームページにて、デジタルアーカイ

ブとして閲覧可能である。（<http://kotodama.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/koga/mag/pages/page001.html>）。当荘に関する基礎的な論考としては、『愛知県史』第一巻第三期第五章「荘園の推移」（一九三五年）。杉山博「久我家領尾張國海東荘について」（地方史研究協議会編『東海地史の展開』、一九六二年）、小川信「鎌倉時代および建武政権下の尾張國海東三ヶ荘について」（『日本歴史の構造と展開』山川出版社、一九八三年）がある。

(31) 『久我家文書』二八—四「圓性（平光盛）處分状案」

處分事

一、嫡女 安嘉門院（邦子内親王）宣旨局分

安嘉門院御領三箇所（尾張國真清田、播磨國石作庄、美濃國三村庄）

河内國大和田庄 最勝光院法花堂領

伊勢國木造庄 六條院領

美濃國弓削田庄（後高倉院御時、依申立加納、可子孫相傳之由、成

真如院下文畢、彼院領）

一、次女 尼正縁房分

伊賀國六箇山（大神宮領相傳信濃國諏訪社、四十餘年知行之地也）

一、三女 尼戒阿房分

大和國長原庄（代々相傳仔細之地也）

一、四女 三条局

播磨國這田庄（得長寿院領）

尾張國海東上・中両庄 蓮花王院領

一、五女 冷泉局

尾張國海東下庄〈蓮華王院領〉

肥後國球麻人吉庄〈同領〉

安藝國安麻庄〈安嘉門院御領〉

一、六女 安嘉門院右衛門督局

大和國野邊庄〈安嘉門院御領〉

美濃國弓削田庄〈加納半分真如院領〉

一、七女 安嘉門院内侍局

大和庄内田地七丁

美濃國弓削田庄〈加納半分真如院領〉

(32) 小川氏前掲註(30)論文。

(33) 菊池勇次郎「醍醐寺聖教のなかの浄土教」(醍醐寺文化財研究所『研究紀要』第五号、一九八三年)。

(34) 中野玄三「山越阿弥陀図の仏教思想史的考察」(同『悔過の芸術』第四章、法蔵館、一九八三年)。

(35) 覚鑑と同時代の真言僧兼意の著した「作法集」に、源信が主導しておこなった横川的首楞嚴院二十五三昧式に見られる作法と共通する作法が認められているという。中野氏前掲註(34)論文参照。

(36) 注(2)解説参照。

(37) 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』第一巻、解説編の整理に則って該当箇所を挙げておく。「妙阿弥陀仏」については、(10)、(14)、(21)、(34)に四名、(45)、(47)、(49)、(412)、(413)、(63)、(65)、(68)、(710)、(711)、(713)、(717)、(719)、「妙阿ミタ仏」が(41)に一名で計二十一名。「尼妙阿弥陀仏」

は(10)、(45)、(710)、(714)の計四名。

(38) 伊藤惟真『聖仏教史の研究上』第四章(法蔵館、一九九五年)。

(39) 水上一久「阿弥陀仏号についての一考察」上・下(『國學院雜誌』五七ノ四、五七ノ八、一九五六年)。

(40) 註(37)に準じると、(13)、(44)、(46)、(612)、(719)の計五名。

(41) 『愚昧記抄』(藤田経世編『校刊美術史料続篇』第二巻、校刊美術史料続篇刊行会、一九八五年)。

(42) 『血脈類集記』第六(『真言宗全書』三九)一三五頁。

(43) 大谷大学所蔵寛延四年(一七五二)の写本によった。原文は、「能成阿字觀放光明、仍住房名照阿院、平大将(平清盛―筆者注)護持僧」とある。

(44) 「続伝燈広録」巻第七(『続真言宗全書』第三十三、一九八四年)。
醍醐山上照阿院の開祖雅西の伝

雅西、字は知定。源公(源運―筆者注)の伝法を得て、其の密旨を承く。餘業をて、大觀を修し、総持に住す。遂に悉地を得て、身に光明を發す。平相国大将清盛、崇重して師の礼を設く。一院を開きて祖と作す。扁るに、光明を以てして、照阿院と額す。今に断ぜず。建仁元年正月四日、逝す。付法十四人。(原漢文)

(45) 『醍醐寺新要録』七〇五頁、「法流血脈事」。

(46) 『大日本史料』第五編之三。なお、やや時代は下がるが、万徳寺に所蔵される聖教の一つである『秘抄』は、弘長三年(一二六三)頃を中心に醍醐寺三宝院で書写されたことがわかるもので、醍醐寺と同寺との密接な関わりを推測させる。

(47) 伊東史朗「勢至菩薩坐像 七寺」(京都国立博物館編『院政期の仏像―定

朝から運慶へ」〔岩波書店、一九九二年〕、藤岡穰「七寺勢至菩薩坐像」〔『日本美術全集 平等院と定朝』第六卷〔講談社、一九九四年〕〕。

(48) 副島弘道「弥勒菩薩像 三寶院護摩堂所在」〔『醍醐寺大観』一、岩波書店、二〇〇二年〕。『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』第一巻の同氏解説によれば、周縁部に配された化仏が一部後補とされる以外は、二重円相部、周縁部ともに、像造像当初のものとしてよいという。

(49) 同長野の万徳寺多宝塔には十三世紀前半頃の制作と思われる慶派風の大日如来像が安置されており。また、やや時代が下がるが、同大塚南の性海寺に安置される十三世紀後半頃の造立と見られる四天王像は、作者系統がやはり慶派である可能性が指摘されている。(西林孝浩・山岸公基「性海寺の仏像 ―特に本堂須弥壇安置の四天王像を中心として―」〔『愛知県史研究』第三号、一九九九年、三月〕)。

(50) 建久三年(一一九二)に、後白河院の追善供養のために、快慶が醍醐寺三寶院弥勒菩薩坐像を造立したことは周知の通りである。また、貞応二年(一二二三)十二月十四日、快慶、湛慶が、閻魔堂の諸像を供養したことが知られる(『醍醐寺新要録』)。

(51) 保立道久「説話「芋粥」と荘園制支配 ―贈与と客人歓待」〔『物語の中世―神話・説話・民話の歴史学』東京大学出版会、一九九八年〕。

(52) 『増補史料大成 山槐記』治承二年(一一七八)十月十日条、十月十四日条、十月十六日条、十月二十一日条、十月二十七日条、十一月十二日条。

(53) 『後白河北面歴名』という後白河院の北面の武士の構成員を列挙した記録には、「僧」の項目に、「院尊、明円、院実、朝円」の四人の仏師の名が挙げられており、後白河院の近臣的役割を担わされていたと考えられる。

『後白河院北面歴名』の書誌学的事項については、小松茂美「右兵衛尉平朝臣重康はいた―(後白河院北面歴名)」〔『水荃』第六号、一九八九年三月〕。また、『後白河院北面歴名』の四名の仏師の中に慶派が見られない点について、山本勉氏は、院をとりまく支配体系の中に包摂されていない慶派が新興の鎌倉政権と結びつくことに繋がったと指摘されておられる(山本勉「鎌倉時代彫刻史と院派仏師―前・中期を中心に―」〔『佛教藝術』第三二八号、一九九六年九月〕)。

(54) 岩田茂樹「滋賀・西勝寺の阿弥陀如来像について」〔『佛教藝術』第二〇四号、一九九二年九月〕。



1-1



1-2



1-3

図1 阿弥陀三尊像及両脇侍像 愛知・無量光院



图2 阿弥陀三尊像及両脇侍像 愛知・奥田安楽寺



图3-2 左脇侍像 部分 愛知・無量光院



图3-1 右脇侍像 部分 愛知・無量光院



図4 右脇侍像脚部 部分 愛知・無量光院

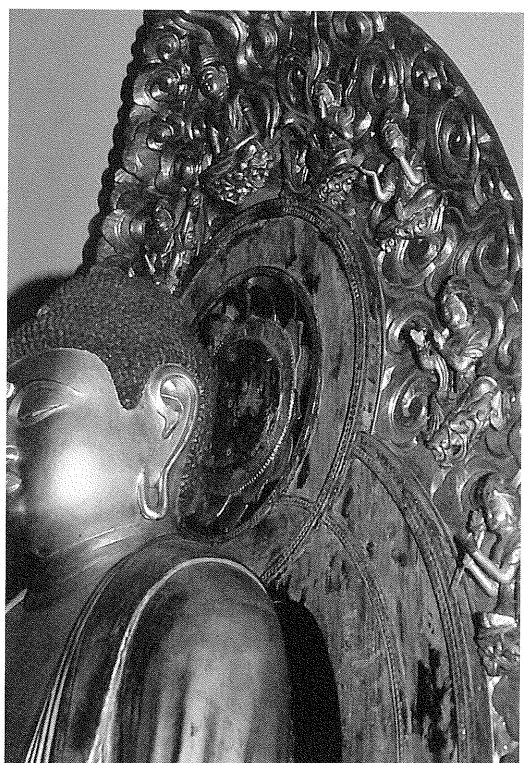


図5-2 同頭光 部分



図5-1 阿弥陀如来像光背 愛知・無量光院



图 5-3 同光脚 部分



图 6-1 左脇侍像光背・頭光 愛知・無量光院



图 6-2 同光脚 部分

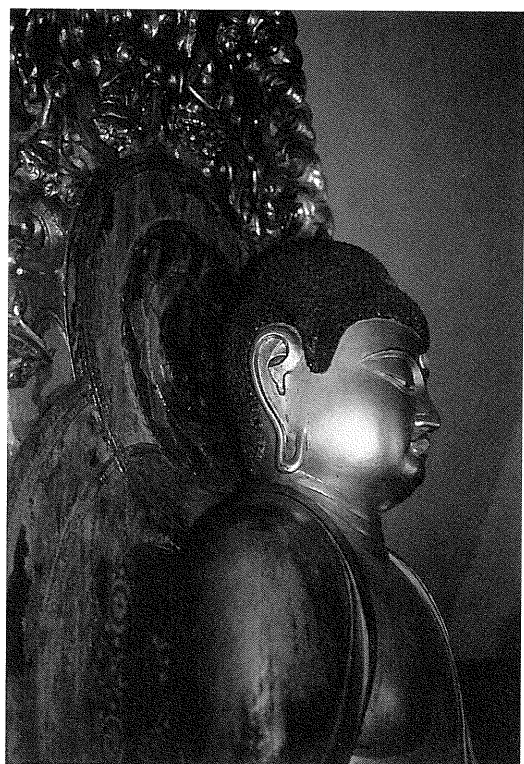


图8 阿弥陀如来像 部分 愛知・無量光院

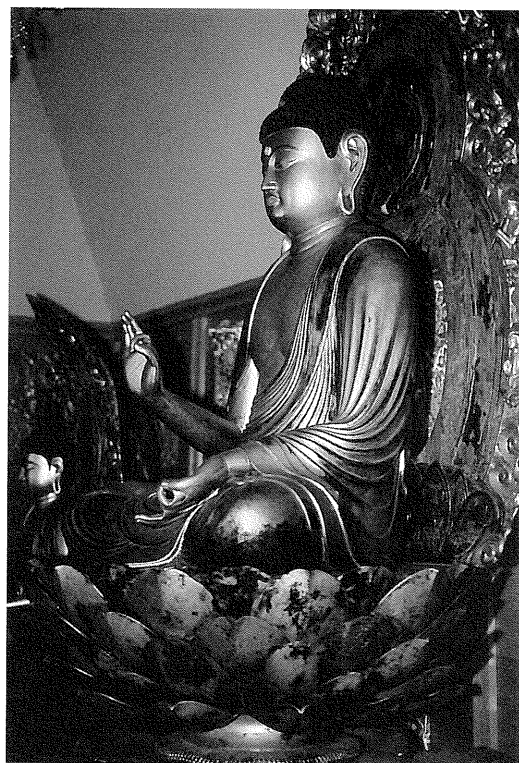


图7 阿弥陀如来像 愛知・無量光院

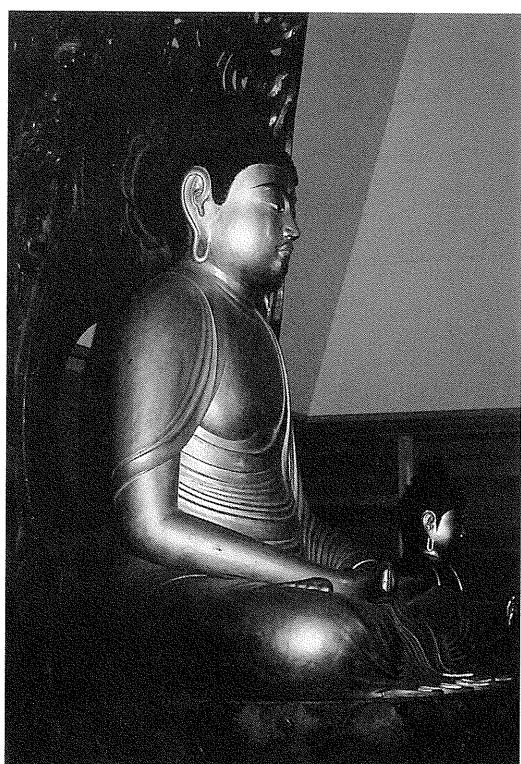


图9-2 阿弥陀如来像 愛知・奥田安楽寺

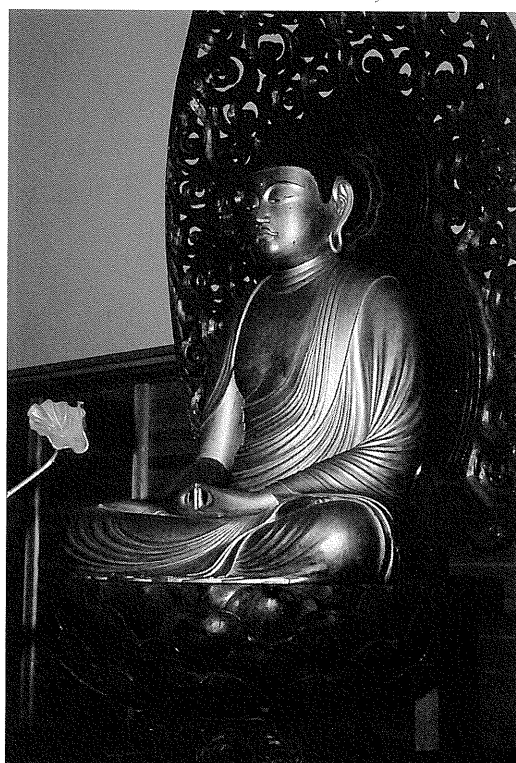


图9-1 阿弥陀如来像 愛知・奥田安楽寺



図 10 - 1 阿弥陀如来像・像内墨書銘 愛知・無量光院



図 10 - 2 勢至菩薩像・像内墨書銘 愛知・無量光院



図 11 - 2 同頭部側面

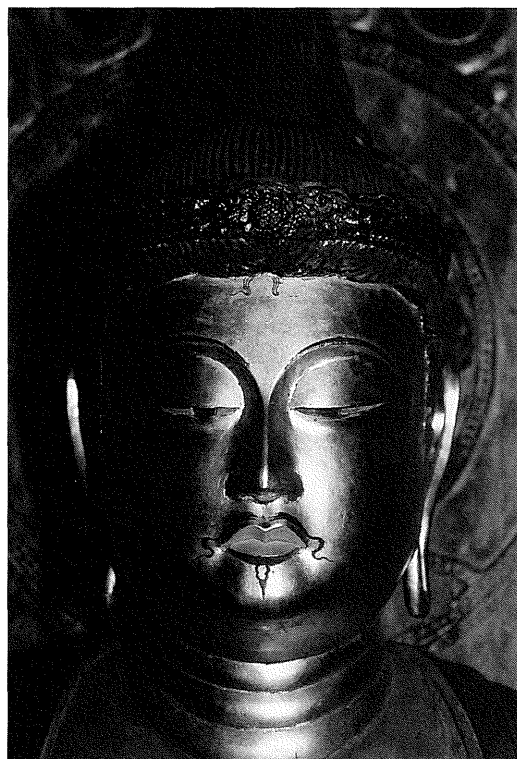


図 11 - 1 右脇侍像 愛知・無量光院

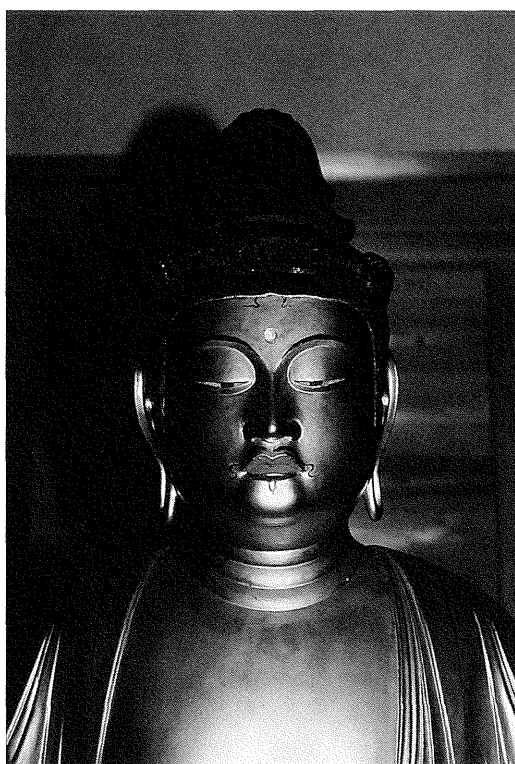


図 12 - 2 同頭部正面

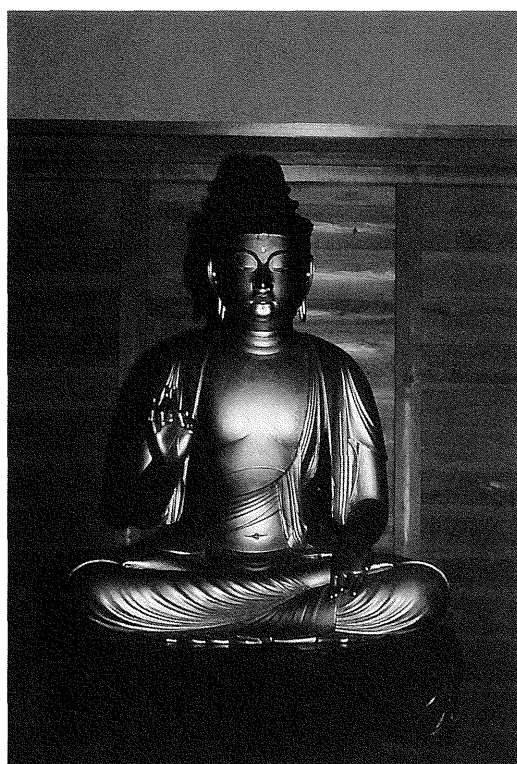


図 12 - 1 右脇侍像 愛知・奥田安楽寺

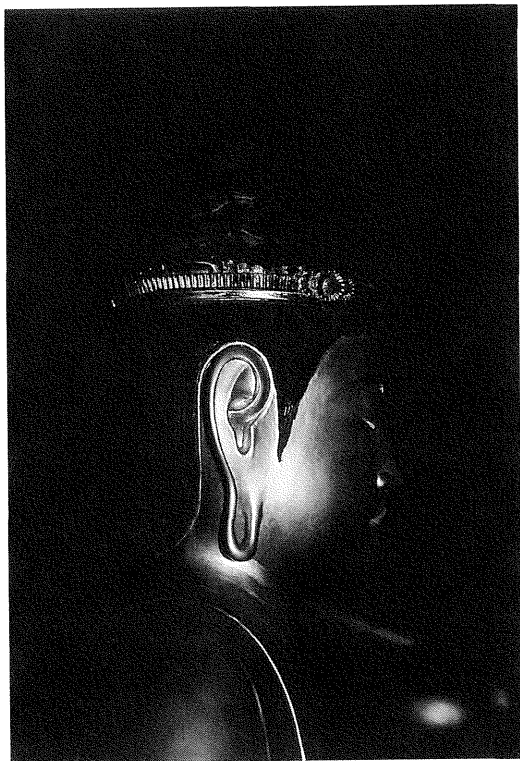


图 12-3 同頭部側面

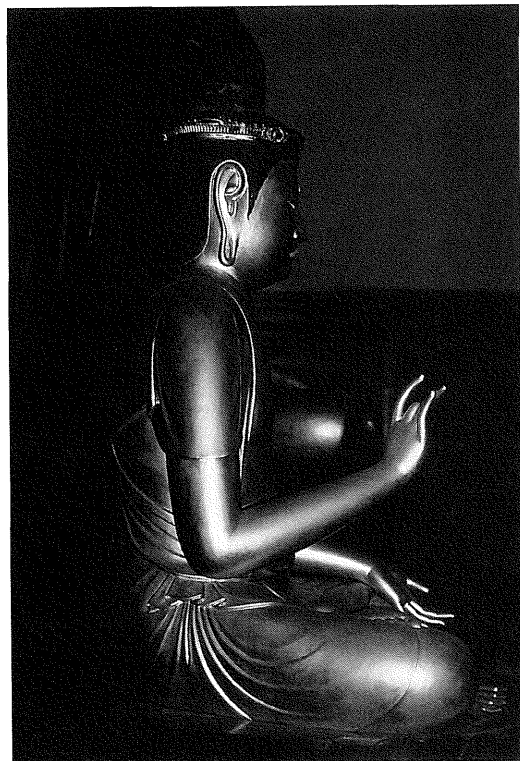


图 12-2 同側面



图 13 弥勒菩薩像光背 京都・醍醐寺三宝院

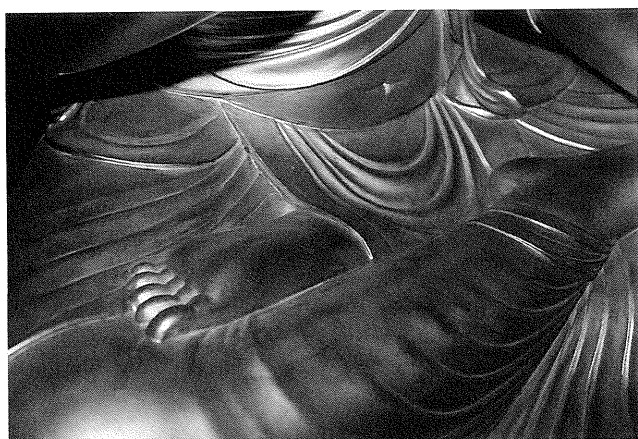


图 12-4 同脚部 部分

関係年表

〔凡例〕

・事項及び作品の選択は、本研究のテーマにしたがい、原則として、京都を中心に畿内及びその周辺地域に関するものに限定した。

ただし、それ以外の地域であっても、京都及び畿内との関連性が窺われる事項及び作品であれば取り入れた。

・事項については、煩瑣をいとわず、資料から窺い知れる情報をできるだけ盛り込み、原資料の用語を尊重して表記した。

・参考資料の抜粋は、造仏・写経等の宗教儀式について、作品にまつわる詳細や制作の一連の流れが判明する事項を中心として行った。年表では、煩雑さを避けるために、関連事績の列举はせず、その中で代表的な事項のみを取り入れた。また、未公開の資料については、原則として原本にあたり、誤りなきを期した。

・年号については、改元に当たる年は、改元後の元号を採用した。

・年表の事項欄の●は、原則として、現存する作品を示す。

・年表の典拠欄にあげた関連資料は、年表の事項に関わるものである。

・年表の典拠欄の◆番号は、参考資料の通し番号に相当する。

・参考資料中、文頭に*のつく事項のみ、年表に取り入れた。

・参考資料中、〈 〉は割注を、() は筆者注を表す。

・漢字表記は原則として常用漢字に統一した。

・後白河院政期から後鳥羽院政が始まるまでの期間(一一五八―一一九八年一月)を皿井舞が、後鳥羽院政期(一一九八年二月―一二三二年末)を緒方知美が分担した。

・参考資料の典拠は次のとおり。

『吾妻鏡』(新訂増補国史大系三二・三三)

『一代要記』(改訂史籍集覧一)

『猪隈関白記』(大日本古記録)

『覚禅抄(勸修寺本)』(勸修寺善本影印集成)

『華頂要略』(大日本仏教全書二二八―二三〇)

『吉記』(増補史料大成)

『玉葉』(名著刊行会)

『興福寺略年代記』(続群書類従二九下)

『山槐記』(増補史料大成二六―二八)

『三僧記類聚』(仁和寺本影印『仁和寺研究一―三』所収・東京大学史料編纂所写本)

『仁和寺御日次記』(続群書類従二九下)

『八幡宇佐宮御託宣集』(重松明久校註訓訳、現代思潮社、一九八六年一月)

『兵範記』(増補史料大成一八―二二)

『百鍊抄』(新訂増補国史大成一一)

『法隆寺別当次第』(鵬叢刊二)

『明月記』(名著刊行会)

- ・年表および参考資料については、皿井・緒方が編集し、根立の確認を経た。
- ・年表については、京都大学大学院修士課程の澤村斉美氏の協力を得た。

(i) 後白河院政期 (1158 年から 1198 年 1 月まで。便宜上、後白河院歿後の時期も含めた。)

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1158	保元 3	3 月 11 日	●菩薩面 (二面) 残欠 [奈良・東大寺]	刻銘
1158	保元 3	3 月 11 日	●菩薩面残欠 [奈良・手向山神社] (東大寺旧蔵か)	刻銘
1158	保元 3	4 月 11 日	仁和寺新堂大聖院供養。	本要記
1158	保元 3	7 月 25 日	仏師頼源、葉衣法本尊 (等身像) 一鋪を図す。(大般若経転読・本尊三尺釈迦十六善神像・最勝講本尊三尺三尊像・吉祥天・毘沙門天像も頼源によるか)	兵範記
1158	保元 3	8 月 2 日	高倉殿の鎮祭にて、大將軍形像を懸ける。	兵範記
1158	保元 3	8 月 11 日	藤原忠雅、先妣のために、仏師法橋康朝をして、大日如来像を造立せしむ。(同年 9 月 29 日、金剛峰寺遍照院に移す。「疏荒」との評あり。)	山槐記
1158	保元 3	9 月 7 日	藤原忠雅、宝楼閣曼荼羅を図す。	山槐記
1158	保元 3	10 月 23 日	信西室 (紀伊三位)、法住寺清浄光院堂を供養。丈六阿弥陀如来像を安置す。「風流華美珍重極まり無し」との評あり。	兵範記
1158	保元 3	10 月 23 日	●銅製経筒・甕 [和歌山・王子神社、王子神社経塚出土]	納入経奥書
1159	平治 1	2 月 22 日	後白河院、白河北殿千体阿弥陀堂を平清盛に再建させ、供養す。柱絵仏師工に賞あり。(同 2 月 13 日供養の習礼あり)	山槐記
1159	平治 1	5 月 23 日	峰定寺に仏舍利・唐羅漢を安置。	縁起
1159	平治 1	閏 5 月 25 日	●線刻十一面観音像鏡 [個人蔵]	鏡背内区線刻
1159	平治 1	6 月 3 日	●蘇悉地儀軌契印図を図写す。[滋賀・石山寺]	奥書
1159	平治 1	7 月	●美福門院、鳥羽院の菩提を弔うために、六角経蔵を建立し、金泥一切経を供養す。[和歌山・金剛峰寺]	高野春秋卷六
1159	平治 1	11 月 11 日	行慶、熊野三所権現の祠を園城寺に建立。	園城寺伝記
1159	平治 1	11 月 15 日	信西、玄宗皇帝絵六卷を造り、蓮華王院に施入。	玉葉 (関連資料; 治承 3 年 9/4, 9/6, 建久 2 年 12/5)
1159	平治 1	11 月 23 日	藤原伊行、大嘗会悠紀主基屏風の色紙形を清書す。	帝王編年記
1160	永暦 1	2 月 29 日	●東大寺持国天 (旧永久寺) 像内の木箱を作る。[奈良・東大寺]	木箱墨書銘
1160	永暦 1	3 月 11 日	●舞楽面 (胡徳楽、胡徳楽勸杯) を施入。[奈良・手向山神社]	銘
1160	永暦 1	9 月 7 日	藤原忠雅室の仏事にて、美麗なる馬頭観音像一幅を図絵す。(存命時に六観音を造立し、六聖人に毎日御祈をさせる。馬頭観音像のみが焼失したため、同じ仏師に図絵させる。)	山槐記
1160	永暦 1	9 月 20 日	●鐘 [奈良・金峯山寺]	銘
1160	永暦 1	10 月 4 日	●両界曼荼羅図像 (叡山本) を図写す。[京都・醍醐寺] (*鎌倉時代写本という見解あり。)	上巻奥書
1160	永暦 1	10 月 16 日	後白河院、法住寺殿の鎮守として、熊野三所権現 (今熊野)、日吉御体 (新日吉) を東山に移す。	百鍊抄
1160	永暦 1		藤原実行、八条殿を寺 (生蓮花院) とする。	帝王編年記
1161	応保 1	2 月 27 日	●舞楽面 (抜頭・阿夜岐理) 成る。[大阪・住吉大社]	銘
1161	応保 1	3 月 8 日	●当麻寺本堂建立。[奈良]	同棟木銘
1161	応保 1	4 月 7 日	行慶、園城寺別院 平等院を供養し、後白河の御祈願所に寄進す。	百鍊抄
1161	応保 1	6 月 1 日	紫金台寺供養。仏後障子に、九品往生図を描く。	仁和寺諸院家記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1161	応保 1	7 月 19 日	法印院朝、仁和寺内供の請により、一尺六寸皆金色薬師如来像を造立。	山槐記
1162	応保 2	3 月 7 日	●この頃、大和國中川寺毘沙門天立像造立か。像内納入の毘沙門天摺仏。[東京国立博物館]	毘沙門天摺仏裏書
1162	応保 2	6 月 8 日	石清水八幡外殿に、銀阿弥陀如来像を安置。	宮寺縁事抄
1163	長寛 1	2 月 29 日	●法隆寺東院鐘楼建立。[奈良]	法隆寺別当次第
1163	長寛 1	3 月 3 日	●鐘 [奈良・玉置神社]	銘
1163	長寛 1	3 月 18 日	●舞楽面（貴徳番子）成る。[大阪・住吉大社]	銘
1163	長寛 1	5 月 11 日	●法勝寺にて、金剛童子図像を図写す。[個人蔵（東寺・観智院旧蔵）]	端書
1163	長寛 1	6 月 23 日	●心西、一字宝塔法華経卷第三・第五及び観普賢經を書写す。[個人蔵]	卷首紙背供養記
1163	長寛 1	6 月 28 日	●仏師僧良元、仁王像を造立。[京都・峰定寺]	銘
1163	長寛 1	9 月 4 日	●観祐、高僧図卷を図写す。[京都・仁和寺、東京・大東急記念文庫]	奥書
1163	長寛 1	12 月 26 日	延勝寺九体阿弥陀堂（近衛殿の寝殿を転用）供養。	百鍊抄
1164	長寛 2	3 月 11 日	●九曜星図像を図写す。[京都・東寺]	奥書
1164	長寛 2	5 月 28 日	●安底羅大将図像を模写す。[アメリカ・メトロポリタン美術館]	幅下端裏書・紙背貼付別紙
1164	長寛 2	7 月 20 日	八条院御堂供養。	百鍊抄
1164	長寛 2	12 月 17 日	●蓮華王院本堂（三十三間堂）に千手観音像千体（うち、百二十四体現存）を安置し供養。[京都・妙法院]	醍醐雜事記・百鍊抄
1164	長寛 2	12 月 17 日	仏師康朝、法眼に補任せらる。	壬生家文書
1164	長寛 2		●平家一門、法華経等を書写し、厳島神社に奉納す（平家納経・金銀荘雲龍文銅製経箱）。[広島・厳島神社]	厳王品・法師功德品奥書
1164	長寛 2		●尊智聖人、大治 4 年 4 月 7 日に鑄造した鐘を破損により鑄直す。[兵庫・徳照寺]	銘
1165	永万 1	2 月 11 日	故入道関白（藤原忠通）周忌仏事のため、法性寺堂供養。	百鍊抄
1165	永万 1	4 月 28 日	仏師院慶、明門とともに、三尺愛染明王十体造立支度を注進。	兵範記裏文書
1165	永万 1	5 月 18 日	覚法法親王、公家料に百体不動絵像を供養。	御室相承記
1165	永万 1	5 月 20 日	●実任本をもって般若十六善神図像を図写す。[京都国立博物館]	奥書
1165	永万 1	6 月 13 日	広隆寺供養。	広隆寺来由記・百鍊抄
1165	永万 1	7 月 16 日	●大悲胎藏三昧耶曼荼羅図像を図写す。[滋賀・石山寺]	奥書
1166	仁安 1	2 月 26 日	行願寺再建供養。	百鍊抄
1166	仁安 1	6 月中旬	●勸修寺慈尊院本をもって、火羅図を図写す。[京都・東寺]	貼付紙
1166	仁安 1	7 月 26 日	二条院、香隆寺堂を供養	百鍊抄・愚昧記
1166	仁安 1	9 月 1 日	故藤原基実周忌仏事のため、等身虚空藏菩薩・御経を供養。	兵範記
1166	仁安 1	9 月 2 日	故藤原基実周忌仏事のため、宣旨殿の仏事にて等身阿弥陀三尊・法華経十部等を供養。六条殿、三尺虚空藏菩薩像一体・色紙法華経一部・素紙同経十部・色紙金光明経四卷等を供養。内府、等身阿弥陀像一体・金泥寿量品一卷・素紙法華経等を供養。皇嘉門院、等身阿弥陀像一体・法華経十部等を供養。	兵範記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1166	仁安 1	9 月 3 日	季家入道、故藤原基実周忌仏事のため、半丈六阿弥陀像一軀、法華經十部等を供養。次いで、結縁經供養にて、平信範の手になる二幅釈迦三尊一鋪等を供養。	兵範記
1166	仁安 1	9 月 5 日	故藤原基実周忌仏事のためか、阿弥陀像一鋪・經一部供養。	兵範記
1166	仁安 1	9 月 6 日	上総前司清高朝臣、故藤原基実周忌仏事のため、等身阿弥陀像一軀・法華經十部等を供養。次いで、右京大夫、等身阿弥陀一軀・法華經十一部等を供養。次いで、基実室以下女房ら三十二人、普賢菩薩像一鋪・法華經二十八品等を供養。	兵範記
1166	仁安 1	9 月 7 日	仏師法橋明円、故藤原基実の周忌仏事のため、阿弥陀三尊像（中尊等身、脇侍は各三尺五寸観音・不動）を造立。	兵範記
1166	仁安 1	9 月 8 日	故藤原基実周忌の仏事のため、等身弥勒菩薩像一軀等を供養。左衛門佐信基、等身阿弥陀三尊（脇侍観音・不動）・法華經十部等を供養。	兵範記
1166	仁安 1	9 月 9 日	故藤原基実周忌仏事のため、等身阿弥陀五仏（中尊阿弥陀・地藏・龍樹・観音・勢至）を造立。	兵範記
1166	仁安 1	9 月 15 日	絵仏師頼源、基実周忌仏事のため、両界曼荼羅を描く。	兵範記
1166	仁安 1	9 月 21 日	平信範、西林寺にて、女房のため、仏師佐々木野良円法師をして、三尺阿弥陀仏を造立せしむ。	兵範記
1166	仁安 1	9 月 24 日	故藤原基実周忌仏事のため、法印智順（一幅半御仏六鋪）、頼源（一尺阿弥陀仏五十軀）、仏画を描く。珍順、法華經八部を書写す。	兵範記
1167	仁安 2	2 月 19 日	藤原邦綱、故藤原基実周忌仏事のため、法性寺新御堂において、千鉢釈迦絵像・千部法華經を供養。	山槐記
1167	仁安 2	2 月 23 日	●平清盛筆平家納経般若心経 [広島・厳島神社]	奥書
1167	仁安 2	5 月 22 日	法印智順、最勝講本尊釈迦三尊像（脇侍は吉祥天・毘沙門天）を描く。	兵範記
1167	仁安 2	6 月 12 日	西林寺新御堂に、丈六阿弥陀仏像を安置。大仏師法橋院慶、小仏師十余人、堂内に蓮華座・仏を安置する。院慶、自ら白毫を簞入し、像内に阿字等を籠める。（同年 6 月 16 日供養）	兵範記
1167	仁安 2	6 月 16 日	後白河院、法住寺内に不動堂供養。如法不動明王、同二童子を造立。	玉葉・兵範記・愚昧記
1167	仁安 2	7 月 2 日	法性寺新御堂供養。周丈六阿弥陀如来像供養。	兵範記
1167	仁安 2	7 月 26 日	仏師法橋院慶、故藤原基実周忌仏事のため、等身阿弥陀仏像一軀を造立。	兵範記
1168	仁安 3	2 月 15 日	六波羅南庭にて、泥絵十萬基供養。御所にて、三尺木造五大尊像供養。	兵範記
1168	仁安 3	5 月 21 日	知足院にて、丈六阿弥陀仏開眼供養。（古仏を修復。）	兵範記◆ 1
1168	仁安 3	6 月 4 日	平信範、知足院堂を鎮壇。周丈六仏（近日修理、押薄、開眼）を安置。	兵範記
1168	仁安 3	7 月 4 日	絵仏師頼源、大嘗会調度の蛸絵様を、宗茂、同獅子形絵様と副調度の絵様を描く。	兵範記
1168	仁安 3	7 月 26 日	故藤原基実周忌仏事のため、法性寺新御堂にて三尺金色阿弥陀像一軀・法華經十部供養。	兵範記
1168	仁安 3	8 月 12 日	●大法御房（実任）本をもって、薬師十二神将図像を転写す。[京都・仁和寺]	奥書
1168	仁安 3	9 月 29 日	宗茂、蒔絵物の絵様を描く。	兵範記
1168	仁安 3	11 月 22 日	宗茂、大嘗会四尺屏風を墨書す。	兵範記・大嘗会悠紀主基詠歌
1168	仁安 3	12 月 21 日	伊勢神宮正殿焼失するも、御正体は救出される。	兵範記
1169	嘉応 1	2 月 3 日	知足院能舜、東丈六堂供養。後壁に極楽世界を描く。	兵範記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1169	嘉応 1	2 月 5 日	延暦寺横川中堂焼亡。本尊は救出される。	百鍊抄
1169	嘉応 1	4 月 8 日	仏師範助、多武峰先徳堂に増賀像を造立。	多武峰略記
1169	嘉応 1	4 月 11 日	因幡堂供養。(故忠隆卿の東山堂を転用)	百鍊抄
1169	嘉応 1	10 月 12 日	延暦寺横川中堂再建。	山門堂舎記
1169	嘉応 1	12 月 1 日	安芸守平能盛、白川中法勝寺巽に堂塔を建立供養。	兵範記
1169	嘉応 1	12 月 9 日	右宰相中将乳母尼上、祇園に一堂を建立す。	兵範記
1169	嘉応 1	12 月	●神護寺領備中国足守庄絵図 [京都・神護寺]	袂背押紙
1170	嘉応 2	2月~承安2年6月	●平清盛・頼盛合筆法華経・観普賢経 [広島・厳島神社]	奥書
1170	嘉応 2	4 月 6 日	平信範、山蔭中納言建立の総持寺本堂を礼拜。(白檀三尺余観音像、梵天帝釈四天王像を見る)	兵範記
1170	嘉応 2	閏4月23日	来月晦日に嵯峨釈迦堂にて、二世の資料のため法華経を供養。法皇(後白河)、執柄、三公、九卿、男女、貴賤、併せて勧進する。	玉葉
1170	嘉応 2	11 月 26 日	皇嘉門院、九条堂(安置仏は院慶による)を供養する。	玉葉◆2
1170	嘉応 2		●仏師僧長順、千手観音立像造立 [滋賀・福寿寺]	像内墨書銘
1171	承安 1	4 月 7 日	●仏師仏忍、阿弥陀如来像を造立。[奈良・湯川区]	像内墨書銘
1171	承安 1	4 月 26 日	●一乗寺三重塔建立。[兵庫]	露盤銘
1171	承安 1	6 月 13 日	●平清盛・頼盛合筆法華経・観普賢経 [個人蔵]	奥書
1171	承安 1	10 月 8 日	上西門院(総子)、法金剛院内に丈六阿弥陀堂を供養。仏後壁に、極楽世界・九品往生曼荼羅などを描く。	百鍊抄・玉葉
1171	承安 1	11 月 30 日	藤原基房、多武峰三重塔(仏師明陽、大日如来像造立)を供養。	多武峰略記
1171	承安 1		後白河法皇、静賢法印、絵師明実の後三年絵四巻を描かしむ。	吉記(承安4年3/17, 康富記文安1年閏6/23)
1172	承安 2	3 月 22 日	広隆寺内に塔供養。	百鍊抄
1172	承安 2	3 月 28 日	延暦寺総持院供養。	華頂要略
1172	承安 2	3 月 29 日	清水寺供養。	百鍊抄
1172	承安 2	6 月 18 日	●心覚、『別尊雜記(仁和寺本)』を撰す。	奥書(第十四卷請雨経裏書)
1172	承安 2	7 月 28 日	●正伝寺薬師如来像造立。[滋賀]	墨書銘
1172	承安 2	8 月 6 日	後白河院、御塔・木像・法華曼荼羅を供養。	玉葉
1172	承安 2	9 月 11 日	蓮華王院の御仏の脇侍、光明を放つ。	百鍊抄
1172	承安 2	10 月 5 日	後白河院、平清盛の摂津輪田浜での千壇阿弥陀堂供養に臨幸。	百鍊抄
1172	承安 2	11 月 28 日	●醍醐寺僧長宗、四種護摩壇三十七尊賢劫三昧耶形を図写す。[京都・醍醐寺]	奥書
1173	承安 3	3 月 10 日	西光法師、浄妙寺新堂(木幡堂)を供養。	玉葉
1173	承安 3	3 月 17 日	珍皇寺三重塔供養。	百鍊抄

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1173	承安 3	4 月 20 日	●仏師明円房、薬師如来像を造立供養。[奈良・玉峰寺]	墨書銘
1173	承安 3	6 月 1 日	●教智本をもって、五部心観を図写す。[和歌山・西南院]	奥書
1173	承安 3	6 月 11 日	光能朝臣、後白河法皇御祈のため、焰魔天像を供養。	吉記
1173	承安 3	6 月 12 日	六波羅二位（平清盛）、八条に持仏堂を建て、三尺阿弥陀三尊像を造立。	吉記・玉葉
1173	承安 3	6 月 25 日	多武峰、大織冠御影堂・定恵和尚の塔、焼亡。影像是救出。（前日の6月24日、興福寺僧徒、多武峰の堂宇・塔・僧坊を焼く）	百鍊抄・吉記
1173	承安 3	7 月 3 日	九条兼実、御産御祈のため、放光菩薩画像を供養。	玉葉
1173	承安 3	10 月 21 日	建春門院新御堂（最勝光院）供養。常磐源二光長、平野行啓・日吉行幸・高野行幸を、藤原隆信、各人の面貌を描く。	玉葉（関連資料；玉葉同年9/9, 12/7, 吉記同年7/12, 愚昧記承安2年2/3）
1173	承安 3	11 月 11 日	金剛峰寺多宝塔供養。	表白集
1173	承安 3	12 月 24 日	建春門院、最勝光院内に御持仏堂を供養。	玉葉
1173	承安 3		●仏師沙門、尊勝寺本を模して舞楽面（還城楽）を、仏師行明、舞楽面（抜頭）を制作。[広島・厳島神社]	銘
1173	承安 3		●玄証、先徳図像を描く。[東京国立博物館]	模本奥書
1174	承安 4	1 月 28 日	多武峰の御影像、聖霊院に遷座。	百鍊抄
1174	承安 4	2 月 23 日	八条院常磐御堂（仁和寺 蓮華心院）供養。仏師明円、法眼に叙せらる。	玉葉・吉記
1174	承安 4	3 月～4 月	絵師淡路君深ら、法隆寺絵殿の太子絵伝を修理。	法隆寺別当次第
1174	承安 4	3 月 3 日	関白殿下（藤原基房）、松殿にて、等身釈迦三尊像・自筆紺紙金字法華経を供養。	吉記
1174	承安 4	4 月 24 日	藤原基房、妻の安産御祈のため、万基塔供養。	玉葉
1174	承安 4	7 月 24 日	小槻隆職、保元相撲図を持参。	玉葉
1174	承安 4	8 月 23 日	絵仏師為遠法師・経師法橋円厳、女院の御逆修の支度を始める。	吉記
1174	承安 4	8 月 24 日	藤原実定、室の周忌仏事のため、八条猪熊殿中に一間四面堂を建立。	吉記
1174	承安 4	9 月 22 日	藤原経房、四天王寺にて、故藤原隆能筆の鳥羽院御影像を見る。	吉記
1174	承安 4	10 月 29 日	野田堂供養。	興福寺別当次第
1174	承安 4	11 月 24 日	宿曜師珍賀法橋、清水寺の傍に一堂（北斗降臨堂）を建立。	玉葉（関連資料；同年10/25）
1175	安元 1	3 月 9 日	入道相国室二品（平時子）、光明心院供養。仏師院成、法橋に叙せらる。	玉葉
1175	安元 1	4 月 11 日	●京都加茂町・普賢寺薬師如来像	墨書銘
1175	安元 1	4 月 29 日	皇嘉門院、九条堂を供養。等身阿弥陀如来・普賢・不動（古仏）を安置。女院において装飾を加える。木絵両仏師、禄を賜る。	玉葉
1175	安元 1	5 月 27 日	建春門院、最勝光院小御堂にて、百日御懺法結願。普賢絵像供養。	玉葉

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1175	安元 1	6 月 16 日	蓮華王院内に境内鎮守の八幡宮以下二十一社を鎮座。本地御正体の絵像を図す。	百鍊抄
1175	安元 1	6 月 24 日	五辻斎院（頌子内親王）、高野山上に蓮華乗院を建立。	高野春秋卷七（関連資料：同年治承 1 年 3/23, 5/10, 11/9）
1175	安元 1	7 月	仁和寺大聖院にて、丈六孔雀明王像を図絵す。	三僧記類聚◆ 3
1175	安元 1	9 月 18 日	藤原俊成の功により、興福寺東金堂修造終える。	山槐記
1175	安元 1	10 月 23 日	法勝寺内薬師堂供養。	玉葉
1176	安元 2	2 月 6 日	●重源、高野山西院谷延寿院に鐘一口を施入。[和歌山・泉福寺]	銘
1176	安元 2	4 月 2 日	後白河院、法住寺内に千一体千手観音堂（九間三面堂）を建立し、千手観音像・二十八部衆を造立。	吉記・百鍊抄
1176	安元 2	4 月 5 日	藤原経房、臨終御祈のために、仏師明円をして、三尺迎接阿弥陀仏一軀を造始せしむ。	吉記
1176	安元 2	6 月 18 日	公家、八幡・賀茂社にて金泥大般若経供養。日吉社にて、金泥一切経・卒塔婆供養。比叡山上にて、一堂を建立し、丈六薬師如来像を安置す。	吉記
1176	安元 2	7 月 10 日	蓮華王院東の法華三昧堂に、建春門院を葬る（待賢門院に準ず）。	玉葉◆ 4
1176	安元 2	8 月 13 日	普成仏院（今天王寺）内に、多宝塔供養。	百鍊抄
1176	安元 2	9 月 7 日	九条兼実、一尺五寸の不動尊を供養。	玉葉
1176	安元 2	9 月 13 日	九条兼実、仏師定朝および覚助作の阿弥陀三尊・不動明王（験仏）を供養。仏師院慶、修理す。	玉葉◆ 5
1176	安元 2	10 月 11 日	藤原基房、阿弥陀仏を供養。	玉葉
1176	安元 2	10 月 19 日	●仏師運慶、大日如来坐像を奉渡。（造始は、前年 11 月）[奈良・円成寺]	台座蓮肉天板裏墨書銘
1176	安元 2	11 月 1 日	天台座主明雲、比叡山五仏院・実相院・法華堂等を供養。	百鍊抄
1176	安元 2	11 月 16 日	●仏師明円、七条殿弘御所にて、五大明王像を造始。[京都・大覚寺]	金剛夜叉像・軍荼利明王像、框座天板裏墨書銘
1176	安元 2	12 月 2 日	多武峰法華三昧堂供養。	多武峰略記
1177	治承 1	2 月～	仏師康俊・定西、多武峰講堂造仏。	多武峰略記
1177	治承 1	3 月 1 日	九条兼実、白檀愛染明王像を造立。	玉葉
1177	治承 1	4 月 8 日	後白河院、四天王寺念仏堂を模して、七条殿内小御堂を供養。	玉葉・百鍊抄・愚昧記
1177	治承 1	5 月 2 日	宮中真言院の本尊両界曼荼羅、木造不動尊像焼失。	愚昧記
1177	治承 1	7 月 5 日	仏師院慶、朝廷の御仏事（法華八講）のため、一際手半の白檀釈迦三尊像を造立。	玉葉
1177	治承 1	8 月	●康慶ら、地藏菩薩像を造始。[静岡・瑞林寺]	像内墨書銘
1177	治承 1	9 月 10 日	仏師法眼頼源、丈六聖観音絵像を供養。	玉葉
1177	治承 1	10 月 1 日	頼輔入道、丈六阿弥陀仏・五部大乘経等を供養。	玉葉
1177	治承 1	10 月 7 日	藤原重家、持仏堂を供養。	玉葉
1177	治承 1	11 月 5 日	仏師院実の造立する阿弥陀如来像の造料として、一条富小路領を宛てる。	宝鏡寺文書

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1177	治承 1	12 月 17 日	蓮華王院五重塔供養。仏師康慶・絵仏師頼全（頼源譲）、法橋となる。 （承安四年〈1174〉7 月 18 日上棟。百鍊抄）	山槐記・玉葉・百鍊抄・愚 昧記・覚禅鈔・三僧記類聚 ◆6（関連資料；吉記承安 4 年 2/17, 7/18）
1178	治承 2	1 月 14 日	絵仏師頼源、中将良通の御幸供奉の絵様を描く。	玉葉
1178	治承 2	2 月 10 日 ～6 月 6 日	仏師定西、多武峰講堂勢至像を造立。	多武峰略記
1178	治承 2	2 月 15 日	若狭局（建春門院の乳母）、嵯峨堂を供養。	百鍊抄
1178	治承 2	3 月 29 日	●東寺僧任宝、高野御山相応院草庵にて、五智如来図像を図写す。（紙背仮名消息）[京都国立博物館]	奥書
1178	治承 2	4 月 24 日	●平親宗筆金剛寿命陀羅尼経 [広島・厳島神社]	奥書
1178	治承 2	6 月 7 日	後白河院、天下安穩の御祈のため、一日中に一搦手半の不動・四天王像を造立。	吉記
1178	治承 2	6 月 19 日	観音寺中に、小堂供養。	山槐記
1178	治承 2	6 月 25 日	●普賢延命図像 [京都・東寺]	裏書
1178	治承 2	6 月 27 日	中宮（徳子）、六角堂にて如意輪観音像を供養。	山槐記
1178	治承 2	6 月 28 日	絵仏師頼源、中宮（徳子）御産御祈のため、訶梨帝母・十五童子像を描く。	山槐記
1178	治承 2	7 月 6 日	故建春門院のため、法華経提婆品を供養。中務少輔隆成、釈迦三尊像一鋪を描く。	玉葉
1178	治承 2	8 月 2 日	仏師法印院尊、中宮御所にて、御産御祈本尊のための三尺七仏薬師像の御衣木加持を行う（修法は同年 10 月 25 日に修される）。	山槐記同年 10/25・門葉記 卷十一
1178	治承 2	10 月 7 日	源頼政、菩薩院の辺に一堂を供養。	百鍊抄
1178	治承 2	10 月 10 日	中宮（徳子）御産御祈のため、寝殿南面にて、泥塔一万五千基を供養。次いで、大宮権大夫経盛卿、等 身不動明王像を造立。次いで、法眼倫円、閻魔天供を行う。	山槐記
1178	治承 2	10 月 14 日	仏師法橋院尚、中宮御産御祈のため、等身不動尊を一日供養。（辰刻に造始、申刻に造畢）寝殿南庇階間 に仮仏殿を設け安置。清盛、伊都岐島別宮（六波羅御所異角）にて、神楽を行わしむ。七箇霊所にて、 陰陽師七人に泰山府君御祭を行わしむ（御鏡一面を遣わす）。	山槐記
1178	治承 2	10 月 15 日	中宮御産御祈のため、中宮昼御座にて、百座仁王講（本尊は新造の五大力像）を行う。	山槐記
1178	治承 2	10 月 16 日	法眼実印ら、中宮御産御祈のため、五壇法を修す（本尊は清盛の許より渡し奉る唐本）。平時忠、宮御所 にて、中宮御産御祈のため、仏師法眼院慶をして五大尊像（不動像等身・四明王像三尺）を造立せしむ。	山槐記
1178	治承 2	10 月 21 日	女房ら、中宮御産御祈のため、小仏師をして等身愛染明王を一日造立せしむ。	山槐記
1178	治承 2	10 月 25 日	中宮御産御祈のため、六波羅池殿において、七仏薬師法が修せらる。	門葉記卷第十一
1178	治承 2	10 月 27 日	平重盛、中宮御産御祈のため、仏師法眼明円・小仏師五人をして、等身彩色六観音を造立せしむ。また、 平時忠、先日（16 日）より造立していた五大尊像（不動等身、その他三尺）を供養。院、仏師明円をし て、等身不動・大威徳 各一軀を造立せしむ。	山槐記◆7

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1178	治承2	11月12日	平頼盛、中宮御産御祈のため、仏師行命をして等身十一面観音像（伊津岐島御正体）を造立せしむ。次いで、仏師明円、等身不動明像・等身六字明王像・等身薬師・不動明王像を造立。	山槐記
1178	治承2	11月15日	●浄瑠璃寺三重塔建立。一条大宮より移築す。[京都]	浄瑠璃寺流記事
1178	治承2	12月2日	実厳阿闍梨、安祥寺辺に大勝金剛院を建立。	玉葉
1178	治承2	12月	●この頃、持国天像（旧永久寺）を造立か。[奈良・東大寺]	像内納入の木札墨書
1178	治承2		●州浜梅樹双雀鏡 [和歌山・那智大社]	銘
1179	治承3	1月18日	●玄証、般若十六善神図像を図写す。[東京国立博物館]	奥書
1179	治承3	2月28日	廃屋を因幡堂に施入す。（治承元年4月28日焼亡）	山槐記
1179	治承3	3月12日~4月13日	●円教寺四天王像を彩色修補。[兵庫]	多聞天像夜叉底面墨書銘
1179	治承3	4月15日	延暦寺西塔相輪堂供養。	華頂要略
1179	治承3	4月	僧観海、祇園三十所権現正体菩薩像三体造立のため、勧進す。	三十五文集
1179	治承3	4月	仏師法橋院慶、錦小路大宮にて死去。	山槐記同年12/16
1179	治承3	5月25日	公家、法勝寺にて千僧御読経、丈六十一面観音を図絵す。	玉葉
1179	治承3	6月3日	平宗盛、法性寺の側に小堂を供養し、丈六阿弥陀像を安置す。	山槐記
1179	治承3	6月	●薬師如来像造立。[兵庫・袴狭薬師堂]	銘
1179	治承3	8月30日	九条兼実、院下賜の末葉露大将絵巻一と自筆の詞書をもって参上。	玉葉
1179	治承3	9月4日	九条兼実、玄宗皇帝絵を預かる。	玉葉
1179	治承3	9月18日	公卿の沙汰にて、興福寺唐本一切経供養。	玉葉
1179	治承3	10月15日	●この頃、銅製経筒製作。（鞍馬寺経塚出土）[京都・鞍馬寺]	銘
1179	治承3	10月29日	仏師法眼明円宅（三条南、京極東）に強盗が入り、妻と小仏師一人が殺害さる。	山槐記
1179	治承3	10月	摂津箕面寺常行堂供養。	願文集
1179	治承3	11月15日	藤原基房、年中行事絵に押紙す。	玉葉
1179	治承3		仏師院尚、京都・広隆寺埋木地藏菩薩像を修理す。	埋木地藏菩薩縁起
1180	治承4	3月19日	高倉上皇、厳島社行幸。寺江御所の障子などに唐絵・やまと絵を描く。	厳島御幸記
1180	治承4	3月29日	九条兼実、熊野社に奉納する御正体鏡を、使いの智詮のもとへ渡す。	玉葉
1180	治承4	4月	画工清舜、多武峰常行三昧堂の柱絵を描く。	多武峰略記
1180	治承4	8月1日	仏師法眼明円、藤原良通室の病氣平癒のため、不動明王像を造立す。	玉葉
1180	治承4	8月24日	上醍醐・持宝王院供養。	表白集
1180	治承4	10月16日	沙門某、先師追善のため、阿弥陀如来・観世音・地藏二菩薩像一鋪を図絵し、法華経五部を摺写して供養。	讀仏乗鈔
1180	治承4	12月3日	中山忠親、白檀千手観音像を供養。	山槐記
1180	治承4	12月24日	仏師法印院尊、新院（高倉）六波羅にて、白檀三尺薬師如来像・十二神将像を造立。	山槐記
1180	治承4	12月28日	平氏による南都焼き討ち。東大寺、興福寺等が焼亡す。	山槐記・玉葉・百鍊抄

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1181	養和 1	2月6日	神社、仏事、諸家、諸国に不動明王像を図し、尊勝陀羅尼を書写させる。	百鍊抄
1181	養和 1	2月12日	九条兼実、故皇嘉門院のため結縁経を供養。本尊は三尺普賢菩薩像一鋪。	玉葉
1181	養和 1	閏2月4日	平清盛歿	玉葉
1181	養和 1	閏2月14日	高倉院旧臣女房ら、銀普賢菩薩像を鑄造し、一品経を書写す。	玉葉
1181	養和 1	3月12日	九条兼実、摂政使の権右中弁光雅と対し、造興福寺について定める。	玉葉（関連資料；同年3/20, 3/21, 6/12, 7/1, 8/11）
1181	養和 1	6月20日	興福寺諸堂（金堂・講堂・食堂・鐘楼・経蔵・南円堂等）手斧始め。	養和元年記
1181	養和 1	6月26日	造東大寺行事官除目。	玉葉・東大寺統要録
1181	養和 1	6月27日	興福寺造仏について、明円・院尊・成朝らが相論。	吉記
1181	養和 1	7月8日	仏師明円・院尊・成朝・康慶、興福寺諸堂の造仏に着手。（大仏師四人、金堂大仏師法眼明円〈定朝小仏師紀伊講師〉、講堂大仏師法印院尊〈山階寺造仏賞で法眼大仏師に叙される〉、食堂大仏師成朝〈無官〉、南円堂大仏師法橋康慶〈康朝の小仏師 肥後講師〉）	養和元年記
1181	養和 1	7月28日	造東大寺大仏事始。	一代要記・興福寺略年代記
1181	養和 1	8月	重源、東大寺再建のため、東大寺大勧進となる。	玉葉・東大寺統要録
1181	養和 1	10月6日	大仏の螺髪を鑄造始む。（同年6月26日、鑄造日時を勘問す）	玉葉
1181	養和 1	10月	仏師院尊、興福寺講堂の淨妙・文殊菩薩像を供養。	維摩会并東寺灌頂記
1181	養和 1	11月19日	後白河院、蓮華王院にて、八万四千基塔供養。	吉記
1181	養和 1	12月22日	奈良法印、木造等身釈迦如来像を供養。	玉葉
1181	養和 1	12月25日	九条兼実、皇嘉門院の御墓所にて、故院の念持仏であった随意曼荼羅一鋪を供養。	玉葉
1181	養和 1		●覚禪、寛舜に醍醐寺三宝院本（伝定智筆）をもって、仁王経法本尊像を図写せしむ。（仁王経五方諸尊図像、東・中央・西・北方幅）[京都・東寺]（*ただし、中世の転写本か。）	旧端裏書
1182	寿永 1	1月12日	高倉院旧臣女房ら、結縁経を供養。九条兼実室、般若心経を書写し、普賢菩薩十羅刹女を図す。	玉葉
1182	寿永 1	4月16日	九条兼実、如法経を書写供養し、最勝金剛院山に埋める。	玉葉◆8
1182	寿永 1	6月16日	九条兼実、栢木一尺三寸十一面観音像を供養。	玉葉◆9
1182	寿永 1	7月24日	重源、東大寺大仏の鑄造始む。	玉葉
1182	寿永 1	11月18日	九条兼実、故皇嘉門院周忌のため、明円をして半丈六仏を造立せしむ。墓所に小堂を供養し安置す。	玉葉◆10
1182	寿永 1	11月	これまでに、賀茂社・神主重保の堂の障子に歌よみのかたを描く	月詣和歌集
1182	寿永 1	12月4日	後白河院の女房（丹後局）、浄土寺に堂を供養。	百鍊抄
1182	寿永 1	12月10日	入道大納言藤原隆季、雲居寺堂金山院を供養。	百鍊抄
1183	寿永 2	2月9日	入道太政大臣（藤原師長）、寝殿を転用して、東山に妙音堂を供養。	百鍊抄
1183	寿永 2	2月11日	東大寺大仏の右手を鑄造。	東大寺統要録
1183	寿永 2	4月19日	鑄師草部是助ら十四名、宋国鑄師陳和卿らとともに東大寺大仏の首を鑄造開始。（5月18日鑄造終了、6月1日研磨）	東大寺統要録

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1183	寿永2	5月～	●運慶らの発願により執筆僧珍賀ら、法華経（運慶願経）を書写す。[京都・真正極楽寺、個人蔵]	奥書
1183	寿永2	5月19日	東大寺大仏の面を鑄造。	玉葉
1183	寿永2	5月19日	●九条兼実、仏舎利奉納願文を書写す。[東京・前田育徳会]	年紀
1183	寿永2	6月7日	天下安堵の御祈のため、一日の内に、一際手半の不動と四天王像を造立する。	吉記
1183	寿永2	9月24日	●醍醐寺三宝院本（珍海筆）をもって、仁王経法本尊像を転写す。（仁王経五方諸尊図像、南方幅。 *ただし、中世の転写本か。）[京都・東寺]	旧端裏書
1183	寿永2	10月5日	法師恵快、先師追善のため、弥勒菩薩・無著・世親・四天王像各一鋪を図絵し、法華五部経を摺写して供養。	讃仏乗鈔
1183	寿永2	11月10日	蓮華王院北斗堂供養。	玉葉
1183	寿永2		●覚禅、仁王経法図像を図写す。[静岡・MOA美術館]	奥書
1184	元暦1	1月5日	東大寺造寺長官・藤原行隆、大仏左手の鑄造の終了を九条兼実伝える。	玉葉
1184	元暦1	1月22日	宅間為久、鎌倉に下向、聖観音像などを描き（4月8日）、帰洛（8月19日）。	吾妻鏡
1184	元暦1	1月24日	九条兼実、九条良通の体調不良のため、一尺三寸の不空羂索観音像を造立。	玉葉
1184	元暦1	2月	●仏師定慶、元興寺本を模して、舞楽面（散手）を造立。[奈良・春日大社]	銘
1184	元暦1	3月5日	●仁王経五方曼荼羅図像を図写す。[アメリカ・ボストン美術館]	奥書
1184	元暦1	3月8日	九条兼実、薬師護摩を修す。最澄渡唐時に図絵し、仁海弟子が相承したという靈験仏を本尊とする。	玉葉
1184	元暦1	5月17日	奈良僧正のもとより、春日御社一鋪を九条兼実へ渡し奉る。	玉葉◆11
1184	元暦1	6月23日	東大寺大仏の仏身鑄造終了。	玉葉
1184	元暦1	8月22日	大嘗会屏風の制作者を定める。絵所は墨画藤原有宗、中原光永、藤原行安、作絵中原吉久、その他、木工、漆工、鑄物師、平文師など。	山槐記
1184	元暦1	8月24日	後白河院、空海筆金銀泥絵両界曼荼羅を神護寺に安置す。	神護寺略記
1184	元暦1	8月28日	東大寺大仏開眼のことを定める。	玉葉
1184	元暦1	9月20日	五辻斎院（頌子内親王）、臨終御祈の本尊に、金泥三尺阿弥陀如来立像を造立。	山槐記
1184	元暦1	12月2日	尊忠僧都、九条兼実のもとに日吉社御正体一鋪を持ち来る。兼実、書銘を記す。	玉葉
1185	文治1	2月	●仏師印勝、舞楽面（新鳥蘇）を造立。[奈良・春日大社]	銘
1185	文治1	2月29日	蔵人宮内権少輔親経、九条兼実のもとに来て、東大寺大仏後の山の処置について伝える。	玉葉（関連資料；同年3/19）
1185	文治1	3月7日	源頼朝、重源に東大寺修造料として、米一万石・沙金一千両・上絹一千疋を送る。	吾妻鏡
1185	文治1	3月8日	源信造立の三尺地藏菩薩を迎え、納入品を奉籠す。	玉葉
1185	文治1	3月30日	九条兼実、藤原行隆と東大寺造寺料の材木のことについて話す。	玉葉
1185	文治1	5月12日	源信の本尊であった三尺地藏菩薩像を供養。建春門院の扇をはじめ、像内に種々の物を納入。	吉記
1185	文治1	5月20日	仏師院尚、尊重護寺安置の諸像を修理す。	尊重護法寺縁起
1185	文治1	6月28日	興福寺東金堂、寺家の沙汰により、造営終了。造仏については力及ばず。	玉葉
1185	文治1	8月14日	地震により、法勝寺九重塔などが崩落す。	山槐記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1185	文治 1	8 月 23 日	後白河院、年来勸進の五輪塔一万基供養。	山槐記（関連資料；玉葉同年 6/24、覚禅鈔造塔法下）
1185	文治 1	8 月 23 日	九条兼実、舍利・宝篋印陀羅尼經・如法經等を書写し、東大寺大仏像内に納入せんがため、東大寺に送る。	玉葉
1185	文治 1	8 月 28 日	東大寺の大仏開眼供養。仏面のみ鍍金。	玉葉（関連資料；同年 7/20、8/29、8/30）
1185	文治 1	9 月 26 日	仏師印勝、唐招提寺金堂千手観音像を修理。	銘
1185	文治 1	10 月 24 日	源頼朝、鎌倉勝長寿院供養。（阿弥陀仏、成朝作。仏後壁浄土瑞相・二十五菩薩像、宅間為久筆）	吾妻鏡
1185	文治 1	11 月 16 日	九条兼実、白川辺の廃寺から仏像を盗み出し、薪用にうち砕く輩がいることを伝え聞く。	玉葉
1185	文治 1		絵師藤原光範、多武峰十三重塔四方四仏を描く。	多武峰略記
1186	文治 2	2 月 18 日	故藤原忠実のため、阿弥陀・不空罽索観音・普賢菩薩三尊一鋪を供養（不空罽索観音、普賢菩薩は忠実存命時の帰依仏のため、図絵す。ただし、普賢菩薩は、愛染明王と同体のため、帰敬のあった愛染明王の代わりとする）。	玉葉
1186	文治 2	3 月 2 日	仏師成朝、南都大仏師として興福寺造仏を命ぜられんことを請う。	吾妻鏡
1186	文治 2	3 月 10 日	九条兼実、摂政・氏長者となり、藤原基通の始める興福寺講堂造営を功了。	維摩会講師研学堅義次第
1186	文治 2	3 月 23 日	周防国を東大寺造営料に充つ。	
1186	文治 2	春	●仏師元興寺二郎房ら、法隆寺中門仁王を彩色す。〔奈良・法隆寺〕	法隆寺別当次第
1186	文治 2	5 月 3 日	●運慶、願成就院阿弥陀如来像、不動明王、二童子像、毘沙門天像を造始。（文治五年 6 月 6 日、伊豆願成就院の諸像を供養。吾妻鏡）〔静岡・願成就院〕	納入品
1186	文治 2	7 月 15 日	運慶作、正暦寺正願院本尊の弥勒菩薩像を供養。	内山永久寺置文
1186	文治 2	7 月 27 日	法成寺修造を始める。	玉葉（関連資料；同年閏 7/4）
1186	文治 2	閏 7 月 27 日	藤原行隆、九条兼実に同年閏 7 月 8 日、15 日、16 日に東大寺大仏の光を放つことを伝える。	玉葉
1186	文治 2	10 月 10 日	仏師院尊作、興福寺講堂仏を供養。	玉葉（関連資料；同年 10/5、10/6、10/7、10/9）
1186	文治 2	11 月下旬	●阿弥陀如来坐像（11 月 8 日に造始）〔和歌山・高畑区文化財顕彰保存会〕	像内墨書銘
1186	文治 2		●阿弥陀如来像〔和歌山・竜福寺〕	銘
1187	文治 3	3 月 9 日	興福寺僧徒、山田寺薬師三尊を興福寺東金堂に移す。	玉葉
1187	文治 3	7 月 3 日	●金剛仏師覚禅、綾小路壇所にて『覚禅鈔（仏眼仏母）』を撰す。	題跋
1187	文治 3	7 月 13 日	興福寺南大門上棟。	春日神社文書
1187	文治 3	8 月 21 日	九条兼実、摂政着任以後始めて平等院渡御。経蔵を開き、宝物を見る。	玉葉◆ 12
1187	文治 3	10 月 15 日	●地藏菩薩像を供養。〔滋賀・櫟野寺〕	像内墨書銘
1187	文治 3	10 月 29 日	藤原秀衡、平等院を模して無量光院を建立し、自らの狩獵の体を図す。	吾妻鏡文治 5 年 9/17
1187	文治 3		仏師院尚、神護寺金堂十二神将・四天王像を造立。	神護寺最略記
1188	文治 4	1 月 25 日	沙門某、阿弥陀迎接曼荼羅一鋪を図し、法華經・無量義・観普賢・阿弥陀・般若心經を摺写す。	讃仏乗鈔
1188	文治 4	1 月 29 日	興福寺、金堂・南円堂上棟。	百鍊抄

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1188	文治 4	2 月 22 日	●銅製経筒（籠神社経塚出土）[京都・籠神社]	銘
1188	文治 4	4 月 7 日	仏師院尚、嵯峨堂本尊乗雲の阿弥陀三尊像を造立。	玉葉
1188	文治 4	4 月 8 日	九条兼実室、亡息良通の正日にあたり、以前自ら図絵した普賢絵像一鋪・良通清書を料紙とした一卷経を供養。	玉葉
1188	文治 4	5 月	東大寺八幡造営なる。	玉葉
1188	文治 4	5 月	大和尚追善のため、十一面観音菩薩・梵天帝釈天像一楨を図絵し、般若心経を自書して供養。	讃仏乗鈔
1188	文治 4	8 月 14 日～	後白河法皇、白河押小路殿において、如法経供養を始む。	門葉記卷第八十二
1188	文治 4	10 月 29 日	●醍醐寺僧宗実、八条辺において、上野阿闍梨（醍醐寺長実）本をもって、八大明王図像を書写す（原本は、保安元年〈1120〉の書写本）。[京都・醍醐寺]	奥書
1188	文治 4	11 月	●醍醐寺僧宗実、上野阿闍梨（醍醐寺長実）本をもって、三十七尊賢劫十六尊外金剛部二十天三昧耶形図像を書写す。[京都・醍醐寺]	奥書
1188	文治 4	12 月 21 日	六条殿長講堂を供養。仏師院尊、御仏を奉居す。（文治 4 年 4 月 13 日延焼、玉葉・吉記）	山丞記
1189	文治 5	3 月 20 日	●この頃運慶、和田義盛のために、阿弥陀三尊像・不動明王像・毘沙門天像を造立か。[神奈川・浄楽寺]	納入品
1189	文治 5	3 月 24 日	三条実房、故大炊御門（藤原経宗）のために、極楽曼荼羅一鋪、色紙梵網経などを供養。実房女、三尺不動明王・法華経六部を供養。	愚昧記
1189	文治 5	3 月 26 日	清季、故経宗のために、三尺地藏、法華経六部を供養。	愚昧記
1189	文治 5	3 月 28 日	女房西御方、故経宗のために、大日如来像一鋪・経三部を供養。	愚昧記
1189	文治 5	4 月 1 日	平業房、故経宗のために、地藏菩薩一鋪・経一部を供養。菅原在茂、三尺地藏菩薩像一駄・経三部などを供養。	愚昧記
1189	文治 5	4 月 7 日	安倍業俊、故経宗のために、二尺五寸地藏・経三部を供養。	愚昧記
1189	文治 5	4 月 10 日	宰相局、故経宗のために、一尺六寸金色阿弥陀・法華経二部を供養。	愚昧記
1189	文治 5	4 月 11 日	阿寂、故経宗のために、阿弥陀三尊一鋪・経一部を供養。法眼経源、不動一鋪・経三部を、侍従師経、等身地藏・経六部を供養。	愚昧記
1189	文治 5	4 月 12 日	信蓮、故経宗のために、普賢十羅刹女一鋪半を供養。	愚昧記
1189	文治 5	4 月 13 日	公継、故経宗のために、皆金色三尺阿弥陀如来・経三部を供養。	愚昧記
1189	文治 5	4 月 14 日	行西、故経宗のために、阿弥陀三尊一鋪・経一部を供養。	愚昧記
1189	文治 5	4 月 15 日	藤原頼実、故経宗のために、一尺五寸阿弥陀（雲座、厨子扉に観音・不動を描く）、阿弥陀経十卷・宝篋印陀羅尼経一卷を供養。孟光、捧物に法華経八卷（扇紙を表紙、塗骨二本を軸とする）を出し、諸人感嘆す。	愚昧記
1189	文治 5	4 月 16 日	孟光、故経宗のために、仏師法橋院円作、三尺金色釈迦三尊像（脇侍、一尺五寸）・法華経七部を供養。	愚昧記
1189	文治 5	6 月 24 日	●一行一筆般若心経・阿弥陀経を書写す。[大阪・一心寺]	奥書
1189	文治 5	8 月 21 日	●玄証、梵天火羅九曜図像を図写す。[京都・高山寺]	奥書
1189	文治 5	9 月 15 日	●この頃、快慶、弥勒菩薩立像を造立。[アメリカ・ボストン美術館]	納入経奥書

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1189	文治 5	9 月 28 日	多武峰宝積院堂に、柱・仏後壁板に仏菩薩像を描く（智永墨画、清舜彩色）。	多武峰略記
1189	文治 5	9 月 28 日	●康慶作、不空羼索観音像・四天王像・法相六祖像を開眼供養（文治 4 年 6 月 18 日京都最勝金剛院にて造始）。[奈良・興福寺南円堂]	玉葉（関連資料；文治 3 年 12/25, 文治 4 年 1/29, 3/19, 5/27, 6/18, 文治 5 年 8/22, 8/23, 8/25, 9/22, 9/25, 9/27）
1189	文治 5	9 月 28 日	●九条兼実筆、仏舎利奉納願文。	文中年記
1189	文治 5	12 月 9 日	源頼朝、義経・泰衡の冥福のため、平泉二階堂を模した永福寺の建立を始める。	吾妻鏡
1189	文治 5		●この頃、興福寺西金堂再興造営。（西金堂仏の遺品として、釈迦如来像仏頭・仏手・光背飛天・同化仏該当するか）[奈良・興福寺]	玉葉
1190	建久 1	3 月 26 日	南都の工人、平等院阿弥陀堂等を修理。	玉葉
1190	建久 1	4 月 26 日	法勝寺阿弥陀堂の仏像開眼。	御室相承記
1190	建久 1	5 月 8 日	道法、南殿にて楊柳観音像を供養。	御室相承記
1190	建久 1	7 月 27 日	東大寺大仏殿の母屋柱、立柱。	東大寺造立供養記
1190	建久 1	10 月 1 日	後白河院、日吉社行幸。釈迦如来・文殊・普賢菩薩絵像を供養。	転法輪抄
1190	建久 1	10 月 19 日	東大寺上棟。後鳥羽院行幸。	玉葉
1191	建久 2	5 月 12 日	仏師院尊、源氏調伏の造仏（近江毘沙門堂の五丈毘沙門天像、6 月 25 日供養）で源頼朝の不評を買う。	吾妻鏡
1191	建久 2	8 月	後白河院、清凉寺釈迦如来像の模刻像・十大弟子像を造立。	転法輪抄
1191	建久 2	9 月 8 日	仏師康慶、興福寺南大門仁王造立を、仏師院実と争う。	玉葉
1191	建久 2	9 月 27 日	大炊御門殿にて、中宮（宣秋門院）御祈の普賢延命法を修す。法橋頼成、前唐院本本尊曼荼羅・四天王画像（形像は白蓮花經の説による）、薬師十二神将画像、春日本地仏曼荼羅を図絵す。	玉葉・東宝記・門葉記卷第二十一
1191	建久 2	9 月	嵯峨念仏房、往生院において一尺六寸釈迦如来像を造立。像内に、五百の大願を納入す。	願文集
1191	建久 2	12 月 16 日	後白河院、法住寺殿を修造し、移御。（12 月 5 日仏師法橋、安鎮法の三昧様曼陀羅図本を賜り図す。十六幡八方天の図像について論あり。同 8 日より修法）	玉葉・阿婆縛抄
1191	建久 2	12 月 28 日	長講堂供養。	玉葉
1191	建久 2	12 月 28 日	東寺灌頂院供養。●宅間法橋勝賀、両界曼荼羅・十二天屏風（守覚法親王、種子を書す）を描く。[京都・東寺]	東宝記・東寺長者補任
1191	建久 2	閏 12 月 9 日	源頼朝、畿内・西国の地頭に東大寺の柱材 48 本の運送を命じる。	吾妻鏡
1191	建久 2		法然を請じ、宋本観經曼荼羅・浄土五祖像を大仏殿に懸け、講説するという。	法然上人伝記
1192	建久 3	1 月 8 日	興福寺食堂に、吉祥天像を安置。	玉葉
1192	建久 3	3 月 13 日	後白河法皇、歿。臨終に際し、御仏を渡し奉る。	明月記
1192	建久 3	4 月 1 日	●白描絵料紙金光明經卷第三（目無經）[京都国立博物館]	奥書
1192	建久 3	4 月 12 日～7 月まで	後白河院崩御に伴う仏事。	

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1192	建久 3	4 月 12 日	法性寺執行法印章玄、突立障子阿弥陀三尊像・金光明最勝王經一部を供養。大膳大夫業忠、三尺阿弥陀如来像・色紙經十二部・金光明經を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 13 日	少将忠行、三尺阿弥陀像・法華經六部・金光明經を供養。中将親能、三尺阿弥陀三尊像・經六部を供養。右衛門督隆房、三尺迎接阿弥陀像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 18 日	藤原兼雅、半丈六阿弥陀如来像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 19 日	馬助元忠、三尺阿弥陀如来像供養。別当、絵像阿弥陀曼荼羅・真言供養供養。為保入道、三尺阿弥陀如来像供養。	心記
1192	建久 3	4 月 20 日	少将教成、三尺虚空蔵菩薩像供養。光遠入道、三尺阿弥陀三尊像供養。清成、三尺救世観音を供養。殷富門院、等身釈迦三尊像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 21 日	範綱入道、三尺阿弥陀三尊を供養。近衛殿、三尺阿弥陀三尊を供養。宣陽門院、三尺阿弥陀三尊を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 22 日	広隆寺宮法印、三尺阿弥陀三尊供養。右京大夫藤原季能、厨子入り一際手半普賢菩薩像を供養。前大貳範能、等身阿弥陀を供養。仲遠・成季、三尺阿弥陀如来像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 23 日	藤原定能、等身阿弥陀如来像を供養。天王寺宮（定恵法親王）、等身阿弥陀如来像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 24 日	中納言藤原親宗、等身地藏菩薩像を供養。能蓮、三尺阿弥陀如来像を供養。刑部少輔仲国、三尺阿弥陀三尊像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 25 日	双林寺宮、後白河法皇の妹阿夜御前、法華曼荼羅。右大將藤原頼実、等身阿弥陀三尊。法眼最舜、三尺阿弥陀如来像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 26 日	宰相中将藤原成経、三尺地藏菩薩像を供養。公朝入道、三尺大日如来像を供養。聖護院宮（聖恵法親王）、三尺阿弥陀三尊像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 27 日	法橋宗円、絵像普賢十羅刹女像を供養。定康入道、三尺阿弥陀如来像を供養。左衛門督源通親、等身千手観音菩薩像を供養。梶井宮、等身阿弥陀如来像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 28 日	民部卿藤原経房、等身阿弥陀如来像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 29 日	修理大夫定輔、三尺普賢菩薩像を供養。仁和寺宮（守覚法親王）、等身弥勒菩薩像を供養。前斎院、等身普賢菩薩像を供養。前斎宮、等身阿弥陀如来像を供養。	心記
1192	建久 3	4 月 30 日	按察平朝方、等身阿弥陀如来像を供養。八条院、等身釈迦三尊像を供養。	心記
1192	建久 3	5 月 1 日	前大將、等身阿弥陀三尊像を供養。	心記
1192	建久 3	5 月 2 日	梶井宮、等身釈迦三尊像を供養。	心記
1192	建久 3	6 月 13 日	最舜、極楽曼荼羅を供養。	心記
1192	建久 3	6 月 24 日	後白河院二品（丹後局）、三尺大日如来像を造立し、像内に仏舍利、故院の齒を納める。藤原兼雅、等身地藏菩薩像を供養。	心記
1192	建久 3	7 月 13 日	殷富門院、絵像釈迦三尊像を供養。	心記
1192	建久 3	7 月	●金光寺の鐘を新鑄。[大阪・長法寺]	銘
1192	建久 3	9 月 13 日	四天王寺念仏三昧院供養。	心記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1192	建久3	10月1日	●この頃、薬師如来像供養。[兵庫・達身寺]	像内墨書銘
1192	建久3	10月2日	鳥羽勝光明院内新堂の事始。	玉葉
1192	建久3	10月29日	修理小進季長、鎌倉永福寺扉ならびに仏後壁に画図を描き終わる。藤原秀衡建立の円隆寺を模す。	吾妻鏡
1192	建久3	11月2日	●快慶作弥勒菩薩坐像を供養。(同年8月5日に造始)[京都・醍醐寺]	朱書銘
1192	建久3	11月21日	後白河院の宿願であった一切経供養。	心記
1192	建久3	11月21日	●僧示覚、八幡宮福楽寺へ鰐口を施入。[奈良・長谷寺]	陽鑄銘
1192	建久3	11月25日	源頼朝、鎌倉永福寺を建立し供養。導師を京都より招請。	吾妻鏡◆13
1192	建久3	12月29日	幕府、東大寺修造のため、周防国に材木を催促す。	吾妻鏡
1193	建久4	1月8日	仏師院尊、朝廷の七仏薬師法の本尊、等身像を一両日で造立。薬師経三十九巻を摺写し、金泥薬師経二巻を経箱に納む。	玉葉(関連資料;同年1/4)・門葉記卷第十二
1193	建久4	1月29日	●禅覚、大宝院御本をもって、胎藏旧図像を模写・校勘を終える。[個人蔵]	奥書
1193	建久4	2月16日	東大寺別当僧正・左大弁定長、九条兼実(に)東大寺柱引・戒壇院のことを申す。	玉葉(関連資料;同年2/26)
1193	建久4	3月9日	蓮華王院内御堂供養(阿弥陀三尊;院尊、不動三尊;幸経〈康慶〉)	皇代歴記裏書
1193	建久4	4月4日	清水寺供養。	山科家文書
1193	建久4	4月14日	幕府の請により、備前国を東大寺に付して造寺の資用に供せしむ。	
1193	建久4	5月4日	九条兼実御祈により、春日社にて政所御正躰を顕御奉りて八講を修して供養す。	中臣祐明記
1193	建久4	5月5日	藤原定長、東大寺勅封倉、絹索堂を検知。「雨露に破れとどめず。」	玉葉
1193	建久4	5月8日	源頼朝に宣旨を下し、諸国をして東大寺平均の役を勤めしむ。	広橋家記録
1193	建久4	5月22日	沙門昌俊、亡妻の五七日に釈迦如来像一軀を卒塔婆上に図す。	讃仏乗抄
1193	建久4	5月	●高野新別所より僧形坐像を奉渡(建久3年3月)し、彩色を加える。[兵庫・一乗寺]	像内墨書銘
1193	建久4	8月	●静遍、白描絵料紙理趣経(目無経)を筆写す。(後白河法皇・某禅尼半作の絵巻を料紙とす。正賢、梵字を書く)[東京・大東急記念文庫]	奥書
1193	建久4	10月19日	春日社御躰を遷殿に遷す。	玉葉
1193	建久4	10月26日	九条兼実、東大寺に参じ、立柱二本に結縁す。上人建立の堂舎、絹索堂を見まわる。	玉葉
1193	建久4	11月27日	鎌倉永福寺薬師堂供養。京都より導師を招請。(11月8日、薬師如来像を安置供養す。)	吾妻鏡◆14
1193	建久4	12月7日	六角堂焼亡。観音霊像、救出する。	百鍊抄
1193	建久4		●十卷抄を書写す。[京都・醍醐寺]	卷四奥書(校点奥書)
1194	建久5	1月30日 ～2月5日	●禅覚、大宝院御本をもって、この日より五部心観を図写し始む。[個人蔵]	奥書
1194	建久5	3月12日	法印院尊・法眼院実・法橋覚朝・院円・院範・院俊・院康、東大寺大仏光背を造始。	東大寺統要録
1194	建久5	3月22日	源頼朝、東大寺大仏御光料として京都の仏師院尊へ砂金を進ず。(同年5月10日に残りを進ず)	吾妻鏡
1194	建久5	4月24日	興福寺供養の日時などを勘申。	愚昧記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1194	建久 5	5 月 2 日	これ以前、笠置住僧某、阿弥陀三尊像・地藏菩薩像一鋪を図絵、法華經四十四部書写、卒塔婆若干基を造立。	笠置寺住僧作善願文
1194	建久 5	6 月 6 日	●良慶、東寺仮屋において、五菩薩五忿怒図像を図写し終える。[個人蔵]	奥書
1194	建久 5	6 月 13 日	六角堂上棟。貴賤結縁す。	百鍊抄
1194	建久 5	6 月 28 日	幕府、御家人に課して東大寺の仏像・戒壇院を造らせる。小笠原長清、東山清水坂にて持国天像を造立。その地の側に余材を以て仏宇を創り、釈迦文殊普賢を安置。また、二小殿を置き、観音・地藏を安置。	補庵東遊続集
1194	建久 5	6 月 29 日	●この頃、快慶、阿弥陀如来像を造立。[京都・遣迎院]	納入品
1194	建久 5	7 月 8 日	八条院、銀製五輪塔を供養。	転法輪抄
1194	建久 5	7 月 8 日	九条兼実、年来造顕する春日五所本地の法を修す。	玉葉
1194	建久 5	7 月 13 日	藤原定能、兼実のもとへ、興福寺供養雜事注文を持ち来る。	玉葉
1194	建久 5	7 月 14 日	鎌倉永福寺内に、一伽藍を建立。	吾妻鏡
1194	建久 5	7 月 23 日	閑院殿にて、熾盛光法を修す。頼成法橋の新図した曼荼羅を開眼す。	阿婆婆抄
1194	建久 5	7 月 23 日	九条兼実、中宮御祈のため、平等院宝蔵大師御本尊を写して六尺白檀愛染明王を造始。	玉葉
1194	建久 5	7 月 27 日	法橋覚朝、一尺八方天像八軀の造像支度を注文。	門葉記第百三十二
1194	建久 5	7 月	法橋覚朝、比叡山無動寺大乘院の一尺観音・勢至ほかの料物支度を、飾仏師橋吉弘、同御師支度を注文。	門葉記卷第百三十二◆ 15
1194	建久 5	8 月 16 日	九条兼実、故皇嘉門院の御所を移し、比叡山無動寺大乘院（三間四面堂）を建立す。仏後障子二間の内、東には、薬師如来・日光月光菩薩・十二神将・不動明王・大威徳明王像等・慈覚大師及び相応和尚等真影を図す。西は、釈迦如来・十大弟子・普賢菩薩・文殊師利菩薩・多聞天・持国天像、伝教大師及び慈恵大師等の真影を図す。東方障子には、九品来迎図を図す。皆金色一尺六寸阿弥陀如来、一尺観音・勢至・弥勒・地藏菩薩像各一軀・八方天を安置す。阿弥陀・弥勒・地藏は、皇嘉門院の四十九日に供養し、遺髪を納入。金字妙法蓮花經、無量義・観普賢・阿弥陀・転女成仏・般若心經等を供養。	門葉記卷第百三十二・玉葉◆ 15
1194	建久 5	閏 8 月 24 日	九条兼実、興福寺作事を歴覧。興福寺南円堂の壇を築造せらる。	百鍊抄
1194	建久 5	9 月 2 日	源頼朝、東大寺供養御布施用途を京都に進ず。	吾妻鏡
1194	建久 5	9 月 22 日	興福寺供養。成朝・院俊（院尊の譲）・宣円（明円の譲）、法橋となる。康慶の賞は追って沙汰する	玉葉・愚昧記・建久興福寺供養次第◆ 16
1194	建久 5	10 月 12 日	●播磨浄土寺浄土堂の鉦鼓を造る。[兵庫・浄土寺]	銘
1194	建久 5	10 月 15 日	●播磨浄土寺浄土堂上棟。[兵庫・浄土寺]	神戸大学本浄土寺縁起
1194	建久 5	10 月 21 日	興福寺南円堂壇を寺家の沙汰とする。	中臣祐明記
1194	建久 5	11 月下旬	●禅覚、禅実をして胎藏図像を模写せしむ。[奈良国立博物館]	奥書
1194	建久 5	12 月 20 日	●石山寺多宝塔・多宝塔四天柱。快慶作大日如来像もこの頃造立か。[滋賀]	須弥壇上框裏面銘
1194	建久 5	12 月 26 日	東大寺中門二天像を造始。（東方天仏師快慶・絵仏師有尊、西方天仏師定覚・絵仏師定順・寺家絵仏師勢順、小仏師に雲慶の名あり）	東大寺統要録

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1194	建久 5	12 月 26 日	鎌倉永福寺内に新造薬師堂供養。京都より導師を招請。(同年 11 月 7 日に新薬師堂の扉を立つ)	吾妻鏡◆ 17
1195	建久 6	1 月 17 日	東大寺中門上棟。	玉葉
1195	建久 6	2 月 14 日	將軍家、東大寺供養結縁のために上洛。3 月 10 日に東南院に着御。11 日に、東大寺に馬千疋・八木一万石・黄金千両・上絹千疋を施入。	吾妻鏡
1195	建久 6	3 月 12 日	東大寺大仏殿供養。	東大寺続要録・愚昧記
1195	建久 6	3 月 12 日	●これ以前、経師法橋良厳ら、紺紙金字華嚴経を調進。[奈良・東大寺]	東大寺続要録・奥書
1195	建久 6	3 月 15 日	九条兼実、中宮着帯により、仏師明円をして、慈円房にて御仏(三尺七仏薬師・三尺延命不動)を造始。	玉葉
1195	建久 6	3 月 22 日	重源を大和尚、運慶を法眼に、院影・定覚・康弁(快慶の讓)を法橋に叙す。大仏光背造始。	東大寺続要録・東大寺縁起 絵詞
1195	建久 6	3 月 24 日	九条兼実、一隣手半の白檀仏眼・愛染明王・不空羼索観音像等を造始。	玉葉
1195	建久 6	4 月	●この頃、播磨浄土堂阿弥陀三尊像を造像中。(建久 8 年 8 月 23 日、浄土寺阿弥陀三尊像供養〈神戸大学本浄土寺縁起〉)[兵庫・浄土寺浄土堂]	中尊像内墨書銘
1195	建久 6	6 月 6 日	仁和寺相応院禅覚、院経蔵の八幡御影を請う。	三僧記類聚仁和寺本第二冊◆ 18
1195	建久 6	6 月 14 日	康慶、画師善範作多武峰平等院後壁板絵六地藏の願主となる。	多武峰略記
1195	建久 6	7 月 8 日	●阿弥陀如来像(伝釈迦如来像)を造始。[兵庫・慈眼寺]	像内墨書銘
1195	建久 6	7 月 16 日	中宮御産御祈のため、愛染明王御修法を修す。霊宝は勝光明院宝蔵より渡す。	百鍊抄・愚昧記
1195	建久 6	7 月 20 日	中宮御産御祈のため、宮にて泥塔供養あり。塔は法成寺へ移送。	三長記
1195	建久 6	7 月 25 日	中宮御産御祈のため、不動・普賢・延命・三尺如意輪(三位局造立)、七仏薬師など供養。のち般若心境供養。	三長記
1195	建久 6	8 月 1 日	法成寺金堂にて、愛染明王法を修す。中尊に丈六愛染明王像(新造)を安置、左右に図絵像二十九鋪(一幅像)を懸ける。	三長記
1195	建久 6	8 月 12 日	中宮御産御祈のため、中門廊にて御仏五躰の御衣木加持を行い、仏師に彫刻させる。翌日法成寺にて造立供養。	三長記◆ 19
1195	建久 6	8 月 17 日	●醍醐寺三宝院経蔵所蔵の円心真筆不動明王二童子図像を図写す。[京都・醍醐寺]	旧裏書(画面上端貼付)
1195	建久 6	10 月 29 日	九条兼実、春日社に詣で、金銀幣・御太刀・御弓矢・御鉾を進む。	春日社旧記
1195	建久 6	11 月 7 日	重源、醍醐寺に宋本一切経を施入。	南無阿弥陀仏作善集
1195	建久 6	11 月 19 日	貞慶、笠置寺般若台供養。大般若経一部・六角経台一基(扉面に法涌菩薩・常啼菩薩等十二軀を図す。中央に釈迦如来・弥勒・文殊像、仏舍利十六粒を安置す。)・六角堂一字・僧坊一字。	讃仏乗抄
1195	建久 6	11 月 19 日	源頼朝、相模国大庭御厨俣野郷内大日堂に田畠を施入。本尊は伊勢大神宮心柱より造立し開眼供養す。	吾妻鏡
1195	建久 6	12 月 8 日	石清水検校清成、等身薬師如来像を護国寺に安置。光中に日光・月光・十二神種子を奉鑄。(保延 6 年、宝殿焼失時に取り集めた銅を用う。)	末社等建立記・堂舎建立 次第(石清水八幡宮記録)
1195	建久 6		●この頃、良秀様不動明王図像を図写す。[京都・醍醐寺]	旧裏書(画面上端貼付)
1195	建久 6		●伝薬師如来像を修理し、開眼供養す。[兵庫・薬仙寺]	脚部裏墨書銘
1196	建久 7	2 月 23 日	嵯峨釈迦堂、修復ののち供養。	百鍊抄

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1196	建久 7	2 月	●実順、胎藏界外金剛部図像を図写す。[京都国立博物館]	奥書
1196	建久 7	4 月 7 日	●康慶、伎楽面（治道か）[奈良・東大寺]、伎楽面（力士）[京都・神童寺]、伎楽面〔個人蔵〕を制作。	朱書銘
1196	建久 7	5 月 11 日	禁中にて、大北斗法を修す。七鋪の新仏を開眼供養す。	大北斗法御修法記
1196	建久 7	5 月 15 日	石清水八幡宮寺にて、金銅仏を供養。	明月記
1196	建久 7	6 月 13 日	後鳥羽天皇、九條御堂にて、俊乗房重源が渡した東大寺四天王像（四丈）の本様（四尺）を礼し奉る。	明月記
1196	建久 7	6月23日~29日	大法師乗印、釈迦・阿弥陀・地藏・観音などを図絵し、般若理趣経などを書写す。	十八日観音供事紙背
1196	建久 7	6 月 24 日	●嘉応元年（1169）に興然が模した図像をもって、普賢延命菩薩図像を図写す。[京都・醍醐寺]	旧裏書（画面左上貼付）
1196	建久 7	7 月 5 日	●定慶作維摩居士像を供養。（3 月 22 日造始、5 月 15 日功了。彩色、法橋幸円）[奈良・興福寺東金堂]	像内朱書銘
1196	建久 7	8 月 15 日	●重源、笠置寺般若台の鐘を新鑄。[京都・笠置寺]	銘
1196	建久 7	8 月 27 日	快慶・定覚、東大寺大仏殿脇侍如意輪観音像を、康慶・運慶、虚空蔵菩薩像を造立。（〔東大寺統要録〕は建久 6 年、〔東大寺造立供養記〕は建久 8 年のこととする。）	鈔本東大寺要録
1196	建久 7	9 月 28 日	道法法親王、殷富門院のために、安殿にて薬師法を修す。本尊は円楽寺・厳浄院に御教書を遣りて請い、御覧ののち、円楽寺本を用う。	仁和寺文書
1196	建久 7	10 月	岳崎法眼、東大寺世親講のために、世親菩薩像を描く。	東大寺統要録
1196	建久 7	12 月 10 日	康慶・運慶・定覚・快慶、東大寺大仏殿四天王像を造立。（〔東大寺統要録〕は建久 6 年とし、〔東大寺造立供養記〕は、建久 8 年とする。）	鈔本東大寺要録
1196	建久 7	12 月 19 日	●阿弥陀如来像を造立。[滋賀・来迎寺]	像内墨書銘（修理銘）
1196	建久 7		●宋人伊行末、石造大仏殿脇侍、四天王像、中門獅子〔奈良・東大寺南大門〕を造立。	東大寺造立供養記
1196	建久 7		運慶、元興寺像を模して、神護寺中門の二天・八夜叉像を造立。（覚禅鈔・東宝記は建久 9 年のこととする。）	神護寺略記
1196	建久 7		彩色三寸千体釈迦如来像造立。	讀仏乗抄
1197	建久 8	2 月 29 日	東大寺鎮守八幡宮、上棟。（10 月 20 日舞楽殿上棟）	東大寺八幡大菩薩験記
1197	建久 8	3 月 2 日	藤原基通、長者以後初めて平等院に渡御し、諸堂を巡見す。経蔵を開き、宝物御覧。	猪熊関白記◆ 12
1197	建久 8	3 月 24 日	本元興寺塔の柱礎から、仏舍利・金銀器物を発掘する。	水本文書
1197	建久 8	4 月 24 日	東大寺戒壇堂造営始める。（同年 8 月 28 日、造営終わる。）	東大寺造立供養記
1197	建久 8	4 月 30 日	藤原基通参内、唐招提寺の舍利を内裏に渡し奉る。	猪隈関白記
1197	建久 8	4 月	●豊前五郎為広、五大力菩薩図像を図写す。[和歌山・普賢院]	裏書
1197	建久 8	5 月 28 日	金剛峰寺不動堂を供養。●この年、運慶、八大童子像のうち、二童子を造立するか。[和歌山・金剛峰寺]	帝王編年記・高野春秋卷第七（建久九年）
1197	建久 8	6 月 18 日	●勧進聖人印蔵、仏餉鉢を鑄造する。[和歌山・金剛峰寺]	外底針書銘
1197	建久 8	閏 6 月	●東大寺大湯屋の鉄湯船を造る。[奈良・東大寺]	銘
1197	建久 8	8 月 17 日	東大寺、八幡宮の神体として勝光明院画像を奏請、男山八幡宮、神護寺も競望、神護寺に納める。	八幡験記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1197	建久 8	8 月 19 日	仁和寺北院御経蔵より愛染明王像（円堂様）を出す。	三僧記類聚仁和寺本第三冊◆ 20
1197	建久 8	10 月	●快慶、釈迦如来像造立か。[滋賀・円福院]	脚部裏墨書銘
1197	建久 8	11 月 22 日	●重源、鉄宝塔を建立し、中に舍利納入の水晶五輪塔を安置。[山口・阿弥陀寺]	基壇部陽鑄銘
1197	建久 8		仏師運慶・湛慶・康運・康勝・運助・康弁・運賀、東寺堂塔仏像を修理、新造す。	東宝記（関連資料；三僧記類聚仁和寺本第三冊）◆ 21
1197	建久 8		源頼朝、八万四千塔を供養す。	進美寺文書
1197	建久 8		百人結衆、元興寺極楽房にて善根式を修す。阿弥陀如来二十五菩薩を図し、八名経・阿弥陀経・法華経を書き供養す。	讃仏乗抄
1197	建久 8		●この頃、東寺蓮華門建立。[京都]	東宝記

(ii) 後鳥羽院政期 (1198 年 2 月から 1221 年末まで)

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1198	建久 9	2 月 2 日	●渡辺浄土堂の迎講で用いる鉦鼓を造る。[奈良・東大寺]	銘
1198	建久 9	3 月 8 日	●醍醐寺、重源施入 (建久 6 年 11 月 7 日) の宋版一切経を供養し、上醍醐経蔵 (昭和 14 年焼失) に納める。[京都・醍醐寺]	醍醐寺座主次第
1198	建久 9	4 月 22 日	●鉄湯釜を铸造す。[和歌山・熊野本宮大社]	銘
1198	建久 9	5 月	木工寮、最勝寺金堂上噴の工程を勘注。	徴古雑抄
1198	建久 9	8 月 15 日	興福寺に院宣を下し、春日社一切経を奉行せしむ。	三箇御願料所等指事
1198	建久 9	9 月 28 日	●宗慶、阿弥陀三尊像を小仏師定助、藤原国義とともに造立す。[埼玉・保寧寺]	阿弥陀如来像内墨書銘
1198	建久 9	10 月 29 日	院尊没す。(七十九歳)	自暦御記
1198	建久 9	11 月 7 日	笠置寺木瓦葺十三重塔造立。皆金色一尺六寸釈迦如来像一軀・彩色一際手半四天王像を造立。母屋柱には、大迦葉以下六体、扉に梵釈以下八体、右障子靈鷲山以下六禪、上層四天王の各十二体を図す。	讃仏乗抄
1198	建久 9	12 月 19 日	●重源、敏満寺に金銅五輪塔一基を施入す。[滋賀・胡宮神社]	銘
1191 ~ 1198	建久年間		●建久年間、弥勒菩薩立像造立。[奈良・東大寺中性院]	像内納入経
1198	建久年間		●竹経帙 [東博 (法隆寺献納)]	宝永修理銘
1199	正治 1	2 月 2 日	石清水八幡宮釈迦堂・西三昧堂・大塔・小塔・報恩寺鐘楼など焼失。	百鍊抄・明月記・吾妻鏡 2/15・石清水八幡宮記録・猪隈関白記
1199	正治 1	5 月 29 日	高山寺に両界曼荼羅・唐本白衣像など二十二幅、高野縁起二巻などあり。	仏像目録 (高山寺文書)
1199	正治 1	6 月	●東大寺南大門上棟。	東大寺要録・東大寺別当次第
1199	正治 1	8 月 4 日	昇子内親王、日吉社にて御経供養。十禅師拝殿にて鏡一面 (十社御正体を鑄付)・御仏一鋪 (十二社御正体を御筆にて図画) を懸け、御筆地藏陀羅尼經を供養。	明月記◆ 22
1199	正治 1	8 月 8 日	●重源、信阿弥陀仏 (弁曉) をして東大寺法華堂を修理せしむ。法華堂礼堂 [奈良・東大寺] (文永 1 年修造)	棟札墨書銘
1199	正治 1	8 月	●深賢、不動明王像を写す。[京都・醍醐寺]	旧裏書
1199	正治 1	9 月 26 日	幕府にて、南都にて造立の不動尊一体を供養。	吾妻鏡◆ 26
1199	正治 1	9 月 29 日	雲慶・絵仏師和泉、瀧山寺の日光・月光・十二神将を造始。	瀧山寺縁起
1199	正治 1	10 月 6 日	●この頃、釈迦如来立像造立。[京都・峰定寺]	納入結縁文書
1199	正治 1	12 月 24 日	藤原経房、吉田新堂 (浄蓮華院) を造立し供養。堂壁西面・柱に八大菩薩・四天王、西面に千手観音・婆蘇仙・功德天女・地藏菩薩・泰山王侍者・不動明王兢伽羅制多伽を描き、奉籠物を入れた金色周半丈六阿弥陀如来像 (光中八寸十一光仏・伎楽廿五菩薩) を安置し、諸經典を書写。大仏師・頭仏師一人・小仏師十五人に録を給う。	明月記・広橋家記録
1199	正治 1		明円歿。	門葉記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1200	正治 2	1 月 12 日	この頃、藤原信実朝臣、水無瀬殿の四季の四巻の詞書・絵を描く。	高野日記
1200	正治 2	1 月 13 日	源頼朝一周忌に鎌倉法華堂にて仏事を修し、絵像釈迦三尊一鋪・阿字一鋪（御台所の除髪を以て縫う）・金字法華経六部・摺写五部大乘経を供養。また、願成就院北隣に仏閣を定め阿弥陀三尊・不動・地藏形像を安置。	吾妻鏡
1200	正治 2	閏 2 月 27 日	●禅覚、蓮華台蔵世界図像を書く。[個人蔵]	奥書
1200	正治 2	春頃	●東大寺開山堂修復。[奈良]（建長 2 年 11/16 移建し供養）	東大寺別当次第・東大寺続要録・作善集
1200	正治 2	4 月 12 日	守覚法親王、仁和寺鳴瀧房にて三尺皆金色阿弥陀如法仏を開眼供養。（翌年 6/4 重ねて供養）	旧仏重供養記
1200	正治 2	6 月 5 日	醍醐寺三宝院焼く。	座主次第
1200	正治 2	7 月 15 日	北条政子、寿福寺にて京都で新図した十六羅漢像を開眼供養。	吾妻鏡◆ 26
1200	正治 2	8 月 17 日	仏師法眼院実、重服の明円弟子にかわり後鳥羽院発願の修明門院御産祈料の皆金色三尺薬師如来七体を造立。この日御衣木加持。（8/19 大炊門殿にて修法）	門葉記
1200	正治 2	8 月	重源の請により、播磨浄土堂を御祈願所とする。	東大寺文書（院庁御下文案）
1200	正治 2	10 月 11 日	藤原定能、衣笠岡に小堂（半丈六、仁和寺堂）を新造し供養。「莊嚴優美」	明月記・玉葉
1200	正治 2	10 月 13 日	源通親第にて御影供歌合せを行う。後鳥羽院臨幸。	明月記
1200	正治 2	10 月 17 日	殷富門院の安井御所蓮華光院供養。（10/11 御仏開眼供養）	百鍊抄・猪隈関白記・玉葉・明月記・仁和寺御伝
1200	正治 2	10 月 22 日	東大寺尊勝院造畢。	東大寺続要録
1200	正治 2	10 月 23 日	大安寺の銅鐘改鑄、重源結縁。	春華秋月抄・作善集
1200	正治 2	10 月 28 日	仏師院実、七仏薬師造進の賞として法印に叙せらる。（8/17 造始）	明月記 11/1
1200	正治 2	11 月 11 日	●延果、高野山孔雀明王院を建立し供養。後鳥羽院の祈願所とする。これ以前、快慶作孔雀明王像〔和歌山・金剛峯寺〕	帝王編年記・明月記 10/5・高野春秋・像内朱漆銘
1200	正治 2	12 月 6 日	藤原定家、日吉社夏堂に仏経を渡し、装鏡・御正体を供養。	明月記
1200	正治 2	12 月 27 日	院賢（院尚の子）、法性寺にて周三尺阿弥陀如来を造始。九条兼実、御衣木加持に参ず。	玉葉
1201	建仁 1	1 月 13 日	●瀧山寺惣持禅院を供養。（正治 1 年造始）伝運慶・湛慶作聖観音・梵天・帝釈天立像本尊にあたるカ。[愛知・瀧山寺]	瀧山寺縁起（関連資料；正治 1 年 9/29）
1201	建仁 1	4 月 1 日	守覚法親王、この日より 12 月 21 日にかけて旧仏重供養を修す。6 月 4 日供養の一尺六寸不動像は仏師院尚作、鳴瀧持仏堂にて供養先了。	旧仏重供養事
1201	建仁 1	8 月 14 日	●深賢、定智様善女竜王図像〔京都・醍醐寺〕を写す。	端書
1201	建仁 1	8 月	●地藏菩薩坐像〔滋賀・福明寺〕造始。	像内墨書銘
1201	建仁 1	8 月	成慶、七日間の逆修を行い、各日釈迦如来・薬師如来・弥勒菩薩・十一面観自在菩薩・地藏菩薩・不動明王三尊・阿弥陀三尊来迎像各一鋪を図絵し、諸経を書写・摺写し供養。	讃仏乗抄

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1201	建仁 1	9 月 20 日	四天王寺塔修理供養。後鳥羽院御幸。	猪隈関白記・百鍊抄・作善集
1201	建仁 1	9 月 21 日	●重源、渡部別所にて迎講を行う。後鳥羽院御。これ以前菩薩面 25 面 [兵庫・浄土寺]	百鍊抄・作善集
1201	建仁 1	10 月 28 日	●快慶作阿弥陀如来坐像 (伊豆山常行堂旧蔵) [広島・耕三寺 / 静岡・伊豆山浜生活協同組合] を京都から運ぶ。(建永 1 年 3/22 常行堂上棟)	阿弥陀如来像内朱漆銘・走湯山上下諸堂目安
1201	建仁 1	11 月初	俊賀仏師、善財善知識唐本 (善知識曼荼羅) 図写。	高山寺明恵上人行状 (漢文行状)
1201	建仁 1	11 月 3 日	貞慶、南都僧追善のため、観音六臂像を描き、大乘経二軸を書写し供養。	讃仏乗抄
1201	建仁 1	11 月 5 日	六角堂焼亡。	猪隈関白記ほか
1201	建仁 1	11 月 13 日	故源頼朝の月忌にあたり、法華堂にて京都において漸々写功を終える法華経六部を供養。	吾妻鏡◆ 26
1201	建仁 1	12 月 24 日	守覚、殷富門院御堂にて中尊等身皆金色阿弥陀像を開眼供養。御眼広大のため縮小し重ねて開眼す。	旧仏重供養事
1201	建仁 1	12 月 27 日	●快慶ら作僧形八幡神坐像開眼。[奈良・東大寺勧進所八幡殿]	像内墨書銘
1201	建仁 1	12 月	●定慶ら作帝釈天立像 (興福寺旧蔵、興福寺蔵梵天像と一具) [東京・根津美術館]	像内墨書銘
1202	建仁 2	2 月 30 日	藤原定家、御堂にて行う一日経書写 (卒都婆) に一品を奉る。	明月記
1202	建仁 2	3 月 10 日	●定慶ら作梵天立像 (根津美術館蔵帝釈天と一具) [奈良・興福寺]	像内墨書銘
1202	建仁 2	3 月 14 日	鎌倉永福寺多宝塔供養。	吾妻鏡
1202	建仁 2	3 月 19 日	宜秋門院、御堂にて各人書写した百万本卒塔婆供養。定家、観経一卷を奉る。	明月記
1202	建仁 2	4 月 8 日	●石造釈迦三尊像 [京都・善福寺]	中尊台座下方陰刻銘
1202	建仁 2	4 月 14 日	恵快後家尼、恵快の七七忌にあたり三尺地藏菩薩像一体を造立し、法華経開結阿弥陀般若心経を摺写し供養。	讃仏乗抄
1202	建仁 2	4 月 29 日	定家、銅細工を喚び鑄仏を語る。	明月記 (関連資料; 同年 9/1)
1202	建仁 2	6 月 17 日	法成寺東塔修理、九輪を上げる。	猪隈関白記
1202	建仁 2	6 月 28 日	近日家ごとに摺仏を供養。この日、定家の家にて供養。	明月記
1202	建仁 2	7 月 11 日	蔵法院歿。これ以前、雲林院の堂舎一字 (皆金色卅丈六阿弥陀如来・観世音菩薩・不動明王像各一体安置) を修覆し、後白河院の菩提に資す。	道性願文
1202	建仁 2	7 月 13 日	尼御前 (藤原基通母) の 5 月 23 日より修する懺法結願。普賢像一鋪・墨字法華経一部を供養。	猪隈関白記
1202	建仁 2	7 月 20 日	寂蓮寂す。生前、藤原光長の描く新豊折臂翁一卷・地獄図一卷の詞書きを書く。また阿字義中之図を描く。	明月記・古面備考・好古小録
1202	建仁 2	8 月 1 日	道法法親王、仁和寺本尊大孔雀明王・経・壇具などを相承。	御起請文 (孔雀経并御本尊事)
1202	建仁 2	8 月 11 日	近衛家実、真円に絵像仏五鋪 (聖観音・不空罽索・如意輪・五大尊・愛染王) を送り供養せしむ。	猪隈関白記
1202	建仁 2	8 月 16 日	道性、故蔵法印の五七日忌にあたり、釈迦三尊像一鋪を図絵し、素紙五部大乘経を模写。	
1202	建仁 2	8 月 20 日	●薬王菩薩立像 (興福寺西金堂旧蔵) [奈良・興福寺中金堂]	納入銘札墨書銘・納入願文
1202	建仁 2	8 月 29 日	俊弁、故蔵法印の、生前供養していた三尺皆金色薬師如来像一体を重ねて供養。	俊弁願文
1202	建仁 2	8 月	貞慶、唐招提寺東室を修理。源頼朝、材木を寄せ、舍利殿・宝蔵などを再興せしむ。	招提千歳伝記・七大寺巡礼記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1202	建仁 2	9 月 1 日	藤原定家、日吉社拝殿にて銀小仏・二年所宮の自筆経を供養。	明月記（関連資料；同年 4/29 ㊞）
1202	建仁 2	9 月 6 日	●葉上菩薩立像〔奈良・興福寺中金堂〕	納入品
1202	建仁 2	9 月 20 日	●寛慶作阿弥陀如来および両脇侍坐像〔愛知・無量光院〕	阿弥陀如来・右脇侍像内・墨書銘
1202	建仁 2	10 月 19 日	後鳥羽院御所京極殿の造営成り、渡御。仏師勝賀、10 月 11 日より修する安鎮法曼荼羅（三昧和尚図様）・幡十六流（命により八方天立像を乗物像に改変）を描く。	百鍊抄・伏見宮御記録・阿婆縛抄・門葉記・隈関白記
1202	建仁 2	10 月 26 日	藤原基通、北殿にて故忠通筆金字法華経に外題を仮書し、仏師法眼運慶作の一尺六寸白檀普賢像一体とともに供養。（翌年 1/27 厨子納入供養）	猪隈関白記◆ 23
1202	建仁 2	閏 10 月 8 日	後鳥羽院、近衛家実のもとへ御願寺建立につき諮問。	猪隈関白記◆ 24
1202	建仁 2	10 月	●珍海筆騎獅文殊菩薩図像〔アメリカ・プリンストン大〕	押紙
1202	建仁 2	10 月	重源、伊賀国に新大仏寺創建。（作善集；本尊皆金色弥陀三尊来迎立蔵并観音勢至各丈六） ●快慶作阿弥陀三尊（現、如来像頭部）〔三重・新大仏寺〕本尊カ。	伊水温故・作善集・寺蔵文書・頭部内墨書名・新大仏寺由来由記
1202	建仁 2	11 月 6 日	仏師勝賀、弟子良賀・小仏師三人を具して慈円房に参じ、11 月 8 日より京極殿にて修する。後鳥羽院の熾盛光法の本尊懸曼荼羅（平等房本）・敷曼荼羅（唐院本）を図写。	門葉記
1202	建仁 2	11 月 24 日	摂津国忍頂寺供養。	御室相承記
1202	建仁 2		随願寺十三重塔婆建立を奉昌。	解脱上人文章
1202	建仁 2		栄西、建仁寺を創建。	帝王編年記
1203	建仁 3	1 月 27 日	藤原基通、前年 10 月 26 日供養の白檀普賢菩薩を蒔絵厨子（隆親入道、十羅刹・四天王・二菩薩を書く）に奉入し、墨字妙法花経一部とともに供養。	猪隈関白記◆ 23
1203	建仁 3	2 月 10 日	●石造宝塔〔岡山・王子権現社〕	塔身刻銘
1203	建仁 3	3 月 4 日	大和高市郡菩提寺三重塔建立。	大和志料
1203	建仁 3	4 月 9 日	明恵、紀州保田庄にて、薩摩法橋俊賀に春日・住吉両明神の御形像を描かしむ。（4/19 開眼供養）	春日大明神御託宣記
1203	建仁 3	5 月 4 日	●快慶作不動明王坐像（御眼巧匠円阿弥陀仏）〔京都・醍醐寺三寶院〕	像内墨書銘
1203	建仁 3	5 月 17 日	沙門某、先師追善供養のため、四面堂一字を建立し、皆金色釈迦如来像一体を造立し、法華五部経を摺写し供養。	讃仏乗抄
1203	建仁 3	5 月 27 日	後鳥羽院、法勝寺にて八万四千基小塔供養。五寸多宝塔十余万基のうち近衛家実千基、藤原定家百基を造進。	猪隈関白記 2/28・明月記・帝王編年記・建仁三年具注曆裏書ほか
1203	建仁 3	7 月 24 日	殷富門院、一品経を供養。	明月記
1203	建仁 3	8 月 24 日	藤原良経、摂政以後始めて宇治入御。阿弥陀堂に入り礼仏し、経蔵にて仏経など開く。	明月記◆ 12
1203	建仁 3	8 月 29 日	源頼家不例により、鶴岡宝前にて八万四千基泥塔供養。	吾妻鏡・鶴岡八幡宮寺僧次第

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1203	建仁 3	9 月 9 日	後鳥羽院、藤原定家に御願寺御障子名所のことを仰せらる。	明月記◆24
1203	建仁 3	9 月 15 日	●重源、板彫五輪塔を造る。[三重・新大仏寺]	裏面陰刻銘
1203	建仁 3	10 月 3 日	●大仏師運慶・快慶・定覚・湛慶ら作金剛力士立像（7/24 造始）[奈良・東大寺南大門] 開眼供養。	阿形像持物金剛杵墨書銘・ 吽形像納入経巻奥書・東大 寺別当次第・東大寺要録
1203	建仁 3	10 月 8 日	●快慶作文殊菩薩騎獅および侍者立像（承久 2 年 4/12 ころ完成カ）[奈良・文殊院]	文殊菩薩像内墨書銘・納入 経巻奥書
1203	建仁 3	10 月 17 日	沙門某の同志ら、逆修を行い、堂宇を建立し、皆金色等身釈迦如来像一体を造立し、法華五部経を摺写して供養。	讃仏乗抄
1203	建仁 3	11 月 5 日	日吉八王子社三宮宝殿・七社神輿焼失。	西園寺家記録・明月記ほか
1203	建仁 3	11 月 23 日	後鳥羽院、藤原俊成九十賀に四季屏風を作らしむ。九条良経、色紙形を書く。	後京極摂政刷記・明月記・ 伏見宮御記録ほか
1203	建仁 3	11 月 30 日	東大寺供養（いわゆる東大寺総供養）。運慶を法印に、快慶・覚円（定覚譲）・絵仏師勢順を法橋に叙す。 ●快慶の「アン（梵字）阿弥陀仏」銘遺品これ以前の作。 天皇座に山水屏風を立つ。	百鍊抄・猪隈関白記・明月 記・東大寺統要録・東大寺 別当次第ほか
1203	建仁 3	12 月 24 日	院御所御仏開眼供養。	明月記
1203	建仁 3		●快慶作阿弥陀如来立像 [奈良・東大寺俊乗堂] に仏舍利など奉籠。（建仁 2 年造始、承元 2 年 9/1 細金印始）	東大寺諸集・左足柄針書 銘・右足柄陰刻銘
1203	建仁 3		●阿弥陀如来立像 [滋賀・西勝寺]	納入銘札墨書銘・納入経巻 奥書
1203	建仁 3		●この頃、重源、南無阿弥陀仏作善集を撰す。	同書
1203	建仁年間		禅林寺沙門ら、亡小児の五七忌にあたり、迎接阿弥陀三尊像一鋪を図絵し、五尺五輪塔一基を起立し、紺紙金字法華五部経を書写し、卒塔婆五千本書写し供養。	讃仏乗抄
1204	元久 1	2 月 15 日	九条兼実、故忠通のために墓所にて一万本卒塔婆供養。また日来経営する如法経を十種供養。	明月記
1204	元久 1	2 月 16 日	道法法親王、院御所京極殿にて仁王経法を修し、木像千手観音を供養。	仁和寺御伝ほか
1204	元久 1	2 月 25 日	四天王寺金堂修理供養、後鳥羽院御幸。	吾妻鏡 3/1・明月記 2/23 ・帝王編年記
1204	元久 1	2 月 27 日	藤原隆信歿。「似絵名人」。生前、神護寺阿弥陀堂文覚真影一鋪を描く。	明月記・神護寺最略記・ 神護寺規模殊勝之条々・ 尊卑分脈ほか
1204	元久 1	3 月 19 日	藤原定家、日吉社夏堂にて新写法華経（真文八軸）を供養し八講を修す。（3/4 書写始、3/15 書訖）	明月記
1204	元久 1	3 月 27 日	石清水馬場末塔（駿河三昧堂）修理供養。	石清水八幡宮記録

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1204	元久 1	4 月 5 日	東大寺御塔事始。	百鍊抄
1204	元久 1	4 月	東寺僧綱、仏菩薩の修理を奏す。	東宝記
1204	元久 1	4 月	成賢、この月より法隆寺金堂を修理。	法隆寺別当記
1204	元久 1	4 月	大安寺七重宝塔修理のため勸進。	春華秋月抄草
1204	元久 1	5 月 27 日	院光（院尚三男）、法橋に叙せられる。（院尚讓、東寺食堂四天王像修理功）	仏師系図（『東寺諸堂縁起抄』所収）
1204	元久 1	6 月 1 日	源実朝、一日のうちに愛染明王像三十三体を造立し供養。	吾妻鏡
1204	元久 1	6 月 16 日	藤原重子の病を祈祷し、鳥羽殿にて一日仏（不動）を造立し開眼供養。	明月記
1204	元久 1	7 月 12 日	後鳥羽院、宇治離宮に御幸。12 日より 15 日にかけて、南北経蔵・西御倉の宝物など種々の珍物を御覧。	明月記◆ 12
1204	元久 1	8 月 8 日	後鳥羽院御所五辻殿成り、渡御。宅間勝賀、7 月 29 日より修する安鎮法本尊曼荼羅・八方天（坐像乗獣）を描く。	明月記・門葉記
1204	元久 1	8 月 8 日	藤原定家、後鳥羽院より御願寺作事を承る。	明月記◆ 24
1204	元久 1	8 月 29 日	鶴岡八幡宮若宮にて八万四千基塔供養。	鶴岡社務記録
1204	元久 1	10 月 5 日	後鳥羽院の御願により石清水一切経会を始めて修す。	榊葉集
1204	元久 1	10 月 15 日	笠置寺礼堂供養。	吾妻鏡 11/7
1204	元久 1	10 月 15 日	藤原兼子、中山堂（安楽心院）を供養。	百鍊抄・明月記・仁和寺御伝・御室相承記
1204	元久 1	11 月 26 日	源実朝、京都にて日来画工に仰せて図せしむ将門合戦絵二十巻、幕府に到来、自愛す。	吾妻鏡◆ 26
1204	元久 1	11 月 30 日	藤原俊成歿。翌日より正日（翌年 1/18）まで、遺言により仏経を供養。定家この間法華経開結を書写。	明月記◆ 27
1204	元久 1	12 月 9 日	藤原定家、先妣十三遠忌料の法華経書写始。（翌年 1/11 書終）	明月記
1204	元久 1	12 月 11 日	殷富門院、逆修を行いこの日結願。仏像・仏画・自筆経などを供養。	百鍊抄・伏見宮御記録
1204	元久 1	12 月 18 日	北条政子、南都にて図せしむ七観音絵像を供養。	吾妻鏡◆ 26
1204	元久 1	12 月 30 日	伊円（章玄讓、八万四千基塔供養功）・院康（千体地藏内百体造進功）・定円（寛円讓、千体地藏造進功）ら法眼に叙せらる。	明月記
1205	元久 2	1 月 11 日	藤原定家、先妣十三年遠忌料の法華経書写終わり（12/9 開始）、仏師に地藏木像を造立せしめ、千手観音を図せしむ。（1/30 御仏を奉渡、2/9 開眼供養）	明月記
1205	元久 2	2 月 9 日	藤原定家、1 月 11 日造始の地藏木像・千手画像を自筆法華経とともに開眼供養。	明月記
1205	元久 2	3 月 16 日	最勝金剛院において興福寺御塔仏を造始。	明月記
1205	元久 2	3 月 19 日	行願寺一切経会。	百鍊抄
1205	元久 2	5 月 20 日	これ以前、仏師法印院実、六条宮（後鳥羽院妃重子）御産祈のため、宇美宮の槐を以て三尺八分薬師像を造る。	石清水八幡仏菩薩目録
1205	元久 2	5 月 22 日	日吉社夏堂に先年供養の御正体を安置。	明月記
1205	元久 2	6 月 16 日	大懺法院上棟。	門葉記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1205	元久 2	閏 7 月 26 日	北面の人々、蓮華王院にて絵を見る。	明月記
1205	元久 2	8 月 13 日	水無瀬殿修理成り、後鳥羽院移御。	明月記・百鍊抄・伏見宮御記録
1205	元久 2	8 月	宅間勝賀、九条兼実の命により善導真影を図絵。	知恩院藏法然上人行状絵図
1205	元久 2	10 月 2 日	延暦寺炎上、法花堂・常行堂・講堂・四王院・延命院・鐘楼・王仏院・新造院・文殊楼・五大堂・宝蔵一字など焼失。講堂本尊・十二神将・前唐院聖教宝物を取り出す。3 日中堂本尊を元のごとく奉居し、十二神将を仏師に修復せしめ安置。	百鍊抄・明月記・吾妻鏡 10/13・華頂要略・門葉記
1205	元久 2	10 月 8 日	この日より 10 日まで、仏師観門、比叡山根本中堂諸仏修理供養。	四帖秘決
1205	元久 2	10 月 27 日	水無瀬殿御堂供養。「仏は同身のあまたあり、千体地藏を居う。」	明月記・源家長日記
1205	元久 2	12 月 2 日	後鳥羽院御所賀陽院成り、移御。仏師勝賀、11 月 22 日より修する安鎮法八方天（乗獸）を皆書垂いたため、御所にて書改めさせられる。	百鍊抄・明月記・伏見宮御記録・阿婆縛抄・門葉記
1205	元久 2	12 月	明恵、春日・住吉両大明神影像安置のため宝殿建立を發願。	高山寺明恵上人行状（漢文行状）（報恩院本）別記
1206	建永 1	2 月 22 日	院にて四天供養。中央に金泥法華經を安置。	三長記
1206	建永 1	3 月 22 日	伊豆山（走湯山）下常行堂上棟。本尊を京都より奉入。	走湯山上下諸堂目安
1206	建永 1	3 月 7 日	藤原良経歿。生前、馬の絵を描く。また諸絵巻の詞書きを書く。	尊卑文脈・駿牛絵詞ほか
1206	建永 1	4 月 8 日	東大寺塔仏の造始日時を 16 日に定む。	三長記・猪隈関白記
1206	建永 1	4 月 11 日	藤原定家、故藤原良経の五七日にあたり、笠置寺弥勒仏前にて自筆法華經・弥勒上生經を供養。	三長記・猪隈関白記
1206	建永 1	4 月 16 日	宜秋門院、故藤原良経のために、極楽曼陀羅一鋪・御經六部・御筆阿弥陀經を、姫君、一尺六寸地藏一体・御經八部・御筆金泥神力品を供養。	三長記
1206	建永 1	4 月 17 日	●真言七祖図像写畢 [個人蔵]	奥書
1206	建永 1	4 月 19 日	故藤原良経のために一品經供養。	三長記
1206	建永 1	4 月 22 日	藤原良輔、故藤原良経の冥福を祈り、一尺六寸皆金色釈迦如来像一体を造立し、法華五部經一部を書写し、同經七部を摺写し、自筆勸發品と共に供養。	願文集
1206	建永 1	4 月 25 日	故藤原良経の正日にあたり、中納言中将殿、銀弥陀像を、北政所、金泥両界曼荼羅を、供養。また御墓所にて石卒塔婆を供養。	三長記
1206	建永 1	4 月	絵師定順、御本により車図六通を写す。	九条家車図・丹鶴叢書
1206	建永 1	5 月 8 日	道法法親王、楊柳觀音を供養。	御室相承記
1206	建永 1	5 月 29 日	院増、東寺食堂千手觀音修理功により、院明、熊野六月会の仏像造立賞として、法橋に叙せらる。	三僧記類聚・仏師系図（東寺諸堂縁起抄）◆ 28
1206	建永 1	6 月 5 日	●重源寂す。この頃、俊乗上人像 [奈良・東大寺]	明月記・元亨釈書・浄土寺開祖伝ほか

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1206	建永 1	6 月 10 日	後鳥羽院、七条院病治癒のため、日吉七社御体を金銅を以て打顯し供養。	三長記
1206	建永 1	6 月 17 日	故藤原良経の百日忌にあたり、墓所にて卒塔婆供養。	明月記
1206	建永 1	7 月 3 日	新御願寺（大熾法院）御仏始。（承元 2 年 10/24 供養）	三長記
1206	建永 1	7 月 15 日	慈円、吉水大成就院に熾盛光堂を造営し、後鳥羽院御祈のため熾盛光法を修す。	門葉記・阿婆縛抄
1206	建永 1	7 月 23 日	後鳥羽院、聖覚に金泥小字大般若経を供養せしめ、顯忠に千日講を行わしむ。	明月記
1206	建永 1	7 月 24 日	延暦寺法華堂・常行堂・四王院・文殊楼・実相院など上棟。（前年 10/2 焼亡）	三長記 7/22・華頂要略ほか
1206	建永 1	8 月 25 日	藤原基房、持仏堂に、栖霞寺像を摸した釈迦（舍利納入）・新造皆金色等身薬師・古仏に新飾を加えた阿弥陀（各一体）を安置。	三長記
1206	建永 1	9 月 15 日	重源の百ヵ日に、播磨浄土寺にて聖衆来迎の儀式を始む。菩薩・天人の装束など新作。	浄土寺開祖伝
1206	建永 1	10 月 3 日	●鑄師万阿弥陀仏、銅造阿弥陀如来立像を鑄る。〔滋賀・善水寺〕	像背陰刻銘
1206	建永 1	10 月 3 日	●鑄師平国依、銅造阿弥陀如来立像を鑄る。〔個人蔵〕	像背陰刻銘
1206	建永 1	11 月	明恵、院宣により、高山寺を建て華嚴興隆の勝地となす。（貞応 2 年 4/8、運慶建立の地藏十輪院より、運慶作周丈六盧遮那如来、円慶（改運覚）作持国天・湛慶作増長天・康運作広目天・康海（改康勝）作多聞天を渡す）	高山寺明恵上人行状（漢文行状）（報恩院本）別記・同（上山本）・高山寺縁起
1206	建永 1		●これ以前、仏眼仏母像〔京都・高山寺〕	高弁賛
1206	建永以前		法印院実、石清水八幡宮の千手観音像を作る。	石清水八幡宮仏菩薩目録
1207	承元 1	1 月 24 日	御堂供養を 3 月 15 日と定むとも、殿上人三十余人の点入する新御堂の華蔓の絵様、未だ出来ず。（1/28, 3/7 華蔓催促）	明月記◆ 24
1207	承元 1	2 月 27 日	賀陽院御読経所にて釈迦・四天王画像を供養。	明月記
1207	承元 1	4 月 3 日	藤原定家、後鳥羽院より、一昨日藤原雅経の献ずる絵（歌有）につき仰せをうく。	明月記
1207	承元 1	4 月 5 日	九条兼実薨歿。生前、法性寺報恩院を草建。また、中陰のうち一品経を作り、明年忌日までに千部供養。	桃華花薬葉・東福寺文書・明月記
1207	承元 1	4 月 5 日	京都火災。六角堂焼亡。	仲資王記・明月記・康富記・皇代暦
1207	承元 1	4 月 29 日	●十二神将立像のうち波夷羅大将の彩色了る。（衆阿弥□□）〔奈良・興福寺東金堂〕	波夷羅大将足裏墨書銘・珊底羅足ほぞ墨書銘
1207	承元 1	5 月 19 日	藤原兼子、御宝算を祈り、賀陽院御読経所にて五輪百塔を供養。のち世間百塔中に安置。	明月記
1207	承元 1	7 月 3 日	安芸国厳島神社焼失。安芸国を寄せて営造せしむ。	芸藩通史・厳島図絵
1207	承元 1	7 月 28 日	後鳥羽院御所白河殿小路殿成り、移御。	猪隈関白記・明月記・伏見宮御記録・百鍊抄
1207	承元 1	7 月	●弁豪、諸寺縁起を書写。（9 月光胤、校正。）〔京都・醍醐寺〕	奥書
1207	承元 1	7 月	●石造童子形立像〔京都・神谷神社〕	像側陰刻銘
1207	承元 1	8 月 16 日	●遮那院御領絵図〔京都・天竜寺〕	裏書

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1207	承元 1	8 月 26 日	多武峯聖霊殿修理成り、本殿に還御。	猪隈関白記
1207	承元 1	11 月 15 日	●法眼院賢、最勝四天王院の舞楽面（散手）を新日吉本を模して作る。[奈良・東大寺]	面裏朱漆銘◆ 24
1207	承元 1	11 月 18 日	仲資、7 月 28 日に薨じた上皇皇女の御銀器を以て釈迦三尊を鑄ることを鑄師に仰す。	仲資王記
1207	承元 1	11 月 29 日	新御堂最勝四天王院御所供養。尊智・兼康・康俊・光時ら名所絵障子を描き、基房門額を書く。（1/18 鎮壇、11/19 御仏安置、11/27 御移徙）	百鍊抄・仲資王記・明月記 ◆ 24
1207	承元 1	12 月 28 日	仲資、故皇女（7/28 薨）の月忌にあたり、一日経書写供養。	仲資王記
1207	承元 1		播磨十輪寺開山堂創建。大師筆宝瓶御影を納む。	播磨鑑
1208	承元 2	2 月 3 日	多武峯堂舎僧坊・五大堂焼失。大織冠御影の本御影は土仏中に蔵すも焼失、表御影は中寺に隠す。	猪隈関白記（関連資料；同年 2/27, 3/2）
1208	承元 2	3 月 23 日	院寛、七仏薬師如来像を修復するか。	日本美術史大系
1208	承元 2	3 月 28 日	最勝四天王院薬師堂供養。（3/25 御仏安置）	百鍊抄・猪隈関白記・明月記・仁和寺御伝・御室相承記ほか◆ 24
1208	承元 2	4 月 1 日	法性寺殿にて十講開始。五日五部大乘経を供養。（故九条兼実御筆を料紙とし、五人公卿各々一部を経営）去年よりの千部経とともに 5 日結願。	明月記
1208	承元 2	4 月 8 日	多武峯御影帰座。	猪隈関白記
1208	承元 2	4 月 13 日	後鳥羽院、蹴鞠宴を催す。これを絵巻に描く。	承元御鞠記
1208	承元 2	4 月 19 日	延暦寺講堂事始。	天台座主記・山門堂舎記
1208	承元 2	4 月 27 日	後鳥羽院、賀陽院殿にて守護国界経法を修せしむ。本尊成身会曼荼羅を新図。（閏 4/4 結願）	猪隈関白記・明月記・百鍊抄・仁和寺御伝
1208	承元 2	4 月 28 日	快慶、石清水八幡宮に僧形八幡神画像（神護寺像模本）を寄進。	同画像裏書（昭和 22 年焼失）
1208	承元 2	閏 4 月 15 日	京都大火。六条殿長講堂など焼失。	明月記・猪隈関白記・吾妻鏡閏 4/17
1208	承元 2	5 月 6 日	道法法親王、南院にて楊柳観音を供養。	御室相承記
1208	承元 2	5 月 8 日	後鳥羽院、賀陽院殿にて慈円に法華法を修せしむ。古仏・古経を用う。（5/13 結願）	門葉記・華頂要略・明月記 5/13・愚管抄
1208	承元 2	5 月 15 日	法勝寺に落雷、九重塔焼失。堂々の仏を取り出す。	猪隈関白記・百鍊抄・明月記・愚管抄
1208	承元 2	6 月 25 日	藤原定家ら、最勝四天王院障子を見に参ず。寺務鈎を隠し開かれず。	明月記◆ 24
1208	承元 2	6 月 28 日	近衛家実、多武峯大織冠本御影の灰を、等身（表）御影中に納む。	猪隈関白記（関連資料；同年閏 4/13, 4/19, 閏 4/27, 6/27）
1208	承元 2	7 月 19 日	後鳥羽院、東白河新御所に渡御。	明月記・猪隈関白記
1208	承元 2	9 月	●快慶作阿弥陀如来立像細金印始。（建仁 2 年造始、承元 3 年舍利など奉籠）[奈良・東大寺俊乗堂]	左足ほぞ針書銘・右足ほぞ陰刻銘

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1208	承元 2	10 月 24 日	吉水大懺法院を供養。後鳥羽院御幸。図絵仏像を開眼し、模写経巻を開題。経師・仏師への毎月布施などを定む。	百鍊抄・猪隈関白記・明月記・華頂要略・門葉記
1208	承元 2	11 月 15 日	藤原基通、三尺釈迦像并十大弟子を造立し、五部大乘経を供養。	猪隈関白記
1208	承元 2	12 月 12 日	幕府、鶴岡に始めて神宮寺を建畢し、本尊薬師像を安置。(12/17 開眼供養)	吾妻鏡
1208	承元 2	12 月 12 日	道法法親王、仁和寺大聖院にて五部大乘経供養。「毎事過差」	御室相承記・明月記
1208	承元 2	12 月 17 日	北円堂造仏始。仏師法印運慶、御衣木加持に参ず。御仏九体(中尊半丈六弥勒坐像、脇士二体六尺法苑林・大妙相坐像、羅漢二体六尺世親・玄奘立像、四天各一体六尺立像)。	猪隈関白記 12/15・承元四年具注曆裏書
1208	承元 2		良賀・源慶、勅許により、当麻寺僧ら発願の当麻寺新曼荼羅を図す。(建保 5 年 6/23 成る)	本朝画史・当麻曼荼羅疏
1209	承元 3	1 月 8 日	後鳥羽院、吉水大懺法院にて大懺盛光法を修せしむ。本尊種字金銅奉居ののち初度の勤行。	門葉記
1209	承元 3	2 月 16 日	●安覚良祐、一筆一切経[福岡・興正寺]を書写。(文治元年 2/19 起筆、この日卒業)	華嚴経奥書
1209	承元 3	3 月 7 日	雅円発願の大野寺石仏供養。笠置石像を規模とす。後鳥羽院御幸。	百鍊抄・興福寺別当次第・興福寺略年代記
1209	承元 3	4 月 9 日	京都火災。行願寺・誓願寺焼失。	百鍊抄ほか
1209	承元 3	6 月 29 日	●釈迦如来乗雲像[東京・根津美術館]	色紙形上端墨書銘
1209	承元 3	8 月 3 日	後鳥羽院御所押小路殿成り、渡御。(8/10 仁王講・法華講を始行。仏師勝賀に仁王講本尊五大力像、最勝講本尊釈迦三尊・弁財天を描かしむ)	百鍊抄・猪隈関白記・玉薬・伏見宮御記録・阿婆縛抄
1209	承元 3	10 月 13 日	北条政子、故源頼朝の月忌にあたり、法華堂にて妙典を書写し、仏像を図絵す。「布施など皆金銀錦繡にあらざるなし。」	吾妻鏡
1209	承元 3	11 月 5 日	幕府、相模国大庭御厨大日堂本尊を修造。	吾妻鏡
1209	承元 3	11 月 10 日	道法法親王、光明寿院を造立し供養。(10/22 移御)	御室相承記・仁和寺諸院家記
1209	承元 3	12 月 17 日	下醍醐清瀧宮遷宮。一尺五寸五分月輪面に両所本地を各一面に鑄顕。(10/4 斧始、10/29 上棟、12/16 造営終了)	醍醐寺新要録
1209	承元 3	12 月 20 日	御鳥羽院御所賀陽院成り、移渡。	百鍊抄・猪隈関白記・伏見宮御記録
1210	承元 4	2 月 6 日	藤原道家、金泥心経を書写。毎月一卷書写恒例とし、この日、去月分をふくめ二巻書写。	玉薬
1210	承元 4	3 月 2 日	六条殿長講堂供養。後鳥羽院御幸。幕府、導師公胤に装束を遣る。	百鍊抄・玉薬・承元四年具注曆裏書・吾妻鏡 2/29, 3/13
1210	承元 4	4 月 25 日	後鳥羽院、最勝四天王院にて百僧御読経を修せしむ。	猪隈関白記・仁和寺日記◆ 24
1210	承元 4	5 月 25 日	幕府、奥州平泉保地頭に伽藍興隆を仰す。	吾妻鏡(関連資料; 建保 1 年 4/4)
1210	承元 4	7 月 8 日	後鳥羽院、吉水懺盛光堂にて懺盛光法・法華法の両本尊を開眼供養。快慶、等身釈迦像を奉渡。懺盛光本尊は八尺金銅種字。 ●快慶法眼位の初見。東大寺公慶堂地藏菩薩立像など法橋位銘遺品、建仁 3 年 11 月 30 日よりこれ以前に造る。	門葉記・華頂要略

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1210	承元 4	7 月 16 日	法勝寺九重塔上棟。	百鍊抄・明月記・仁和寺日次記ほか
1210	承元 4	8 月 28 日	●実慶、大日如来坐像を作る。[静岡・修禅寺]	像内墨書銘・関連資料； 吾妻鏡元久 1 年 10/19, 同年 7/8
1210	承元 4	9 月 6 日	仲基、藤原道家に白檀愛染明王像一体（故忠実本尊カ）を与う。	玉蘂
1210	承元 4	9 月 19 日	笠置寺にて、貞慶を導師とし、瑜伽論を供養し埋納。後鳥羽院臨幸。	承元四年具注暦ほか
1210	承元 4	9 月 20 日	瓶原山莊堂供養、貞慶導師。後鳥羽院御祈願所と定む。	承元四年具注暦
1210	承元 4	10 月 15 日	源実朝、日来尋ねていた聖徳太子十七条憲法・法隆寺重宝などの記を御覧。	吾妻鏡◆ 26
1210	承元 4	11 月 11 日	興福寺三蔵院焼失。	承元四年具注暦裏書
1210	承元 4	11 月 20 日	●和泉国一宮天光大明神（風神社）の宝前に鐘を奉ず。[京都宇治市・称名寺]	陽鑄銘
1210	承元 4	11 月 22 日	源実朝、持仏堂にて日来御願の聖徳太子御影（南無仏）を供養。	吾妻鏡◆ 26
1210	承元 4	11 月 23 日	源実朝、京都より召す奥州十二年合戦絵を御覧。仲業、其詞を読む。	吾妻鏡◆ 26
1210	承元 4	11 月 26 日	●興福寺北円堂〔奈良〕の宝形を居え、上棟に擬す。	承元四年具注暦裏書
1210	承元 4	11 月	●鑄師多治比則高、高野清浄金剛院の鐘〔和歌山・金剛三昧院〕を鑄る。	陽鑄銘
1210	承元 4	12 月 11 日	貞慶・快慶作白檀釈迦如来像を觀心に付嘱。	明本抄紙背文書
1210	承元 4		●この年以前、東大寺鐘楼（建永 1 年 9/18 以降）[奈良]	入唐縁起
1211	建暦 1	3 月 28 日	●快慶作阿弥陀如来立像（承元 4 年 12 月造始、承元 5 年 1/29 開眼供養）[岡山・東寿院]	左足ほぞ墨書銘・納入文書・東寿院木札墨書銘
1211	建暦 1	4 月 12 日	故定海の忌日にあたり、画工に命じて大聖明王の形像を図せしめ、醍醐寺三宝院にて理趣三昧供養法・八講を修す。	醍醐寺新要録
1211	建暦 1	4 月 23 日	後鳥羽院、最勝四天王院にて一日一切経書写供養を行う。書手一万三千二百十五人中、法隆寺の筆師六十三人。	百鍊抄・猪隈閑白記・願文集・法隆寺別当次第・門葉記など◆ 24
1211	建暦 1	4 月 23 日	俊苒、宋より帰り建仁寺に入る。舍利・釈迦三尊三幅・碑文・十六羅漢二本三十二幅・水墨羅漢十八幅・南山靈芝真影各一幅・聖教・儒道書・法帖・雑書などを請来。（前年 3/3 博多着）	泉涌寺不可棄法師伝・元亨釈書
1211	建暦 1	5 月 4 日	石山寺觀音像（丈六塑像）崩壊裂。	石山寺年代記録
1211	建暦 1	5 月 10 日	源実朝、藤原泰衡の家宝遺物を諸家より徴して御覧。	吾妻鏡
1211	建暦 1	7 月 11 日	比叡山総持院焼亡。	明月記・仲資王記・華頂要略・一代要記
1211	建暦 1	7 月 23 日	比叡山学徒と衆徒の争に対し、悪魔降伏のため一万体の慈恵大師供養。大僧都聖覚、導師を務む。	華頂要略
1211	建暦 1	8 月 13 日	藤原道家、春日御本地前で心経読誦。	玉蘂◆ 11

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1211	建暦 1	10 月 1 日	藤原道家、五十五善知識像一鋪を写し取るべく明恵に語る。	玉藥
1211	建暦 1	10 月 2 日	延暦寺根本中堂を修理。	華頂要略
1211	建暦 1	10 月 19 日	道法法親王、仁和寺御影堂を建立し供養。大師影は形像左右に梵字跡あり、高野御影堂の真影を写す。 (4/10 上棟、6/23 鎮壇)	仁和寺御伝・東寺長者補任 ・御室相承記・本要記
1211	建暦 1	11 月	●源守永、毘沙門天立像〔滋賀・金剛輪寺〕造立。	足柄墨書銘
1211	建暦 1	11 月	●講師五郎□、不動明王立像〔滋賀・金剛輪寺〕造立。	足柄墨書銘
1211	建暦 1	12 月 10 日	源実朝、和漢名将を尋ね、仲章注進。さらに質問あり。	吾妻鏡◆ 26
1211	建暦 1	12 月 19 日	故春華門院（11/7 崩御）のため、旧院にて結縁経供養。	明月記
1211	建暦 1	12 月 26 日	故春華門院のため、宜秋門院にて一日経供養。	明月記
1211	建暦 1		比叡山文殊楼に、仏師法印寛円作文殊師子を安置。	叡岳要記
1211	建暦 1		●舞楽面 10 面〔愛知・真清田神社〕	銘
1212	建暦 2	1 月 16 日	道法法親王、高野参詣の帰途醍醐寺に詣で、將軍三郎（武衡）合戦絵を御覧。	仁和寺御伝・醍醐寺新要録
1212	建暦 2	2 月 5 日	●この頃、運慶ら作弥勒仏坐像、無著・世親菩薩立像（承元 2 年 12/17 造始）〔奈良・興福寺北円堂〕	弥勒仏納入願文奥書・台座 墨書銘
1212	建暦 2	2 月 18 日	藤原道家、春華門院百日忌の一卷経供養に参会。	玉藥
1212	建暦 2	2 月 25 日	行願寺供養。（承元 3 年 4/9 焼失）	百鍊抄・玉藥・業資王記・ 仁和寺日次記
1212	建暦 2	2 月 27 日	奈良法師、蓮華王院宝蔵を破開し銀薬師像一体ほかを盗む。	皇帝紀抄・百鍊抄・吾妻鏡
1212	建暦 2	3 月 7 日	内裏にて大学寮の孔子像を写す。	皇帝紀抄・百鍊抄
1212	建暦 2	4 月 18 日	源実朝、大慈寺を建立。この日上棟。	吾妻鏡ほか◆ 20
1212	建暦 2	4 月 24 日	藤原定家、仏師を召して九寸愛染明王像を造始。この日御衣木加持。	明月記
1212	建暦 2	4 月 24 日	法勝寺九重塔の四天王像御衣木加持。	御室相承記・仁和寺御伝
1212	建暦 2	5 月 25 日	延暦寺講堂成る。本尊大日如来を修復して安置。（承元 2 年 4/19 事始）	慈鎮和尚伝・華頂要略・玉 藥 5/11
1212	建暦 2	6 月 20 日	八条院の周忌にあたり、蓮華心院の八条院墳墓上に多宝塔を建立し供養。塔内に三尺皆金色大日絵像一鋪を安置。	明月記・三僧記類聚◆ 29
1212	建暦 2	6 月 22 日	源実朝、持仏堂にて聖徳太子聖霊会を行う。	吾妻鏡◆ 26
1212	建暦 2	6 月 24 日	和田義盛、自第にて源実朝に和漢將軍影十二鋪を献ず。	吾妻鏡◆ 26
1212	建暦 2	6 月 26 日	八条院の一周忌にあたり、八条殿において一切経供養。	明月記・三僧記類聚◆ 30
1212	建暦 2	7 月 5 日	八条院の一周忌にあたり、四条旧院にて結縁経供養。	明月記
1212	建暦 2	7 月 27 日	御乳母一条殿、蓮華心院にて春華門院の月忌にあたり、仏事を修す。大日如来像・六部一日経を供養。 「張児ヲ仏ニ造成」	明月記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1212	建暦2	8月6日	●持国天・多聞天立像造始。[滋賀・金剛輪寺]	持国天・多聞天足柄墨書銘
1212	建暦2	8月24日	藤原定家発願の新造愛染王を開眼供養。「美麗に造り奉る」。(4/24 造始、8/17 仏師より奉渡)	明月記
1212	建暦2	10月11日	源実朝、大慈寺にて善信の献じた山水絵図(京都より召し下す)を御覧。	吾妻鏡◆26
1212	建暦2	10月30日	久絶していた嵯峨清涼寺一切経会を修す。	仁和寺日次記
1212	建暦2	10月	慈円、比叡山東塔南谷に新青蓮院を建立。(11/8 移渡)	門葉記・華頂要略
1212	建暦2	11月8日	鳥羽御堂供養。	明月記
1212	建暦2	11月8日	源実朝、絵合を行う。数巻のうち小野小町一期盛衰事・吾朝四大師伝の両部を自愛。	吾妻鏡◆26
1212	建暦2	12月10日	法勝寺南大門金剛力士御衣木加持。仏師法印院賢。	仁和寺日次記・御室相承記・仁和寺御伝・三僧記類聚◆31
1212	建暦2	12月24日	●阿弥陀如来立像造立。[滋賀・玉桂寺]	納入願文奥書
1212	建暦2		●吉祥天を浄瑠璃寺本堂に奉渡。吉祥天像・厨子[京都・浄瑠璃寺]、同厨子扉・背面板絵[東京芸術大学]	浄瑠璃寺流記事
1213	建保1	1月12日	幕府女房、双紙合会を行い、源実朝判ず。	吾妻鏡◆26
1213	建保1	1月26日	藤原定家、一品経供養に、女房分の安樂行品を送る。	明月記
1213	建保1	3月23日	和田義盛、延暦寺八部院を造始。居高一尺五寸妙見菩薩像一体・立高一尺五寸梵天帝釈四天王像各一体を安置。	山門堂舎記
1213	建保1	3月28日	藤原長定、源実朝に古今以下三代集中の女房の詠歌に図を付した画卷二十巻を献ず。	吾妻鏡◆26
1213	建保1	3月30日	源実朝、去年朝光の献じた吾朝大師伝絵を大慈寺行勇に見せ、銘字の誤謬を訂正せしむ。	吾妻鏡◆26
1213	建保1	4月17日	源実朝、御所にて八万四千基塔婆を供養。	吾妻鏡◆26
1213	建保1	4月26日	法勝寺九重塔供養。絵師有家・兼康・良賀・尊智らに勸賞あり、院範(院実譲)・湛慶(運慶譲)法印に、宣円(定円譲)法眼に叙せらる。(4/24 心柱に紺紙金字真言一卷を籠む)	明月記・仁和寺日次記・百鍊抄・吾妻鏡・三僧記類聚ほか◆32
1213	建保1	5月4日	●宗実、十天形像を写了。[京都・醍醐寺]	奥書
1213	建保1	5月17日	●宗実筆四種護摩本尊・眷属図像[京都・醍醐寺]	奥書
1213	建保1	6月21日	延暦寺総持院の宝塔・灌頂堂・門楼など上棟。	華頂要略
1213	建保1	8月6日	幕府御所の障子絵画図の風情、御意に叶わず、事書など京都に送る。	吾妻鏡◆26
1213	建保1	8月20日	幕府御所成り、源実朝移徙。御車京都より遅刻のため御輿を用う。(8/3 上棟)	吾妻鏡◆26
1213	建保1	9月6日	藤原定家、七条院少将を召し、新御堂供養の華蔓を調進せしむ。	明月記
1213	建保1	9月16日	後鳥羽院、蓮華王院に御幸し、宝蔵御仏などを御覧。	百鍊抄
1213	建保1	閏9月13日	道法法親王、結縁経供養。	明月記
1213	建保1	10月11日	●観音菩薩立像[滋賀・観音寺]	像背墨書銘
1213	建保1	10月15日	京都火災。白河泉殿・悲田院・京極寺・六角堂など焼亡。	明月記・仲資王記ほか

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1213	建保 1	12 月 15 日	●良円、嵯峨釈迦を摸して釈迦如来立像を造る。[京都・平等寺]	足柄墨書銘
1213	建保 1	12 月 29 日	源実朝、自筆の円覚経を供養し翌日三浦海底に沈む。	吾妻鏡
1214	建保 2	2 月 3 日	●覚真、故貞慶の周忌に相伝の舍利を供養し五重塔に安置。海住山寺五重塔 [奈良]	覚真仏舎利安置状 (海住山寺文書)
1214	建保 2	2 月 14 日	七条女院新御堂歡喜寿院供養。	百鍊抄・仁和寺日次記・御室相承記・仁和寺御伝ほか
1214	建保 2	4 月 2 日	後鳥羽院、写経始め、21 日に至る。	後鳥羽院宸記
1214	建保 2	4 月 8 日	後鳥羽院、熊野三御山宝殿并御正体などを図絵せしむ。御正体は半出鑄造し懸ける。18 日に拝礼。	後鳥羽院宸記
1214	建保 2	4 月 15 日	延暦寺衆徒、園城寺に放火。金堂已下一宇も残さず焼失。	後鳥羽院宸記・華頂要略・仁和寺日次記・吾妻鏡 4/23
1214	建保 2	4 月 21 日	幕府、大慈寺総門に安置するため金剛力士像を造立。	吾妻鏡
1214	建保 2	4 月 29 日	●阿弥陀如来立像 [北海道・天融寺]	納入文書
1214	建保 2	5 月 7 日	幕府、園城寺唐院并堂舎僧坊などを造営せしむ。	吾妻鏡
1214	建保 2	5 月 8 日	後鳥羽院、高倉天皇十三回忌にあたり大成就院にて正懺悔を行い、29 日如法経十種供養を行い、墓所に奉納す。	門葉記・百鍊抄
1214	建保 2	6 月 26 日	四天王寺所司、宝蔵より聖徳太子御持経小字法華経を発見。	四天王寺解・天王寺誌
1214	建保 2	7 月 27 日	幕府、大慈寺を建立し供養。導師に京都の高僧を招請せず関東止住の僧侶を用う。(建暦 2 年 4/18 上棟)	吾妻鏡◆ 20
1214	建保 2	9 月 13 日	東北院念仏に参会の人々、職人歌合を行う。	曼殊院本東北院職人歌合絵巻席
1214	建保 2	10 月 2 日	禁裏仙洞にて始めて人丸影供歌合を行う。	明月記・順徳院御集・拾遺愚草・郁芳三品集
1214	建保 2	12 月 13 日	後鳥羽院御所大炊御門殿成り、院・修明門院移御。(12/4 より修する安鎮法の八方天形像は八獣に座す)	伏見宮御記録・仁和寺日次記・百鍊抄・阿婆縛抄ほか
1214	建保 2		藤原定家、月次花鳥絵に書くため、和歌二十四首を詠む。	拾遺愚草・明月記
1214	建保 2		石清水八幡宮別当宗清、仏師勝光に宇美宮の槐を以て小薬師を造らせ、薬師堂にて開眼供養。	石清水八幡宮仏菩薩目録
1215	建保 3	2 月 8 日	絵師良賀法印・源慶法眼、当麻寺住侶の願により、大和当麻寺の曼荼羅を 5 日間で模す。順徳天皇、清書すべく仰す。	当麻曼荼羅疏
1215	建保 3	2 月 19 日	園城寺造営事始。復興後、石清水八幡宮より箱崎宮旧蔵の唐本一切経を施入。	仁和寺日次記・石清水八幡宮記録
1215	建保 3	4 月 26 日	●法橋康弁作龍灯鬼および天灯鬼 [奈良・興福寺]	龍灯鬼納入書付 (『享保式丁酉日次記』所収)
1215	建保 3	4 月 27 日	●薬師如来立像造立 [滋賀・源昌寺]	像内墨書銘

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1215	建保 3	5 月 24 日	後鳥羽院、賀陽院殿にて逆修を始む。初七日院実作三尺皆金色釈迦立像・二七日湛慶作一尺五寸皆金色阿弥陀立像・三七日湛慶作一尺五寸弥勒像・四七日院賢作一尺五寸彩色地藏菩薩像・五七日快慶作一尺五寸皆金色弥勒菩薩像・六七日一尺五寸皆金色阿弥陀如来像、七七日周三尺皆金色薬師如来像を造立し、七日ごとに色紙法華五部経を摸写し、毎日相替て仏師俊賀筆阿弥陀如来図・納殿仏師筆弥勒菩薩図各一鋪を開眼し、素紙法華経を摸写して供養す。	伏見宮御記録・願文集
1215	建保 3	6 月 6 日	神泉苑にて請雨経法を修す。仏師行賀法印、仮屋にて紙形により本尊曼荼羅を図し、開眼供養。	百鍊抄・建保三年六月六日神泉御修法日記
1215	建保 3	11 月 3 日	延暦寺東塔西谷弥勒堂下瑠璃坊など焼失。	華頂要略
1215	建保 3	11 月 10 日	興福寺四恩院十三重塔供養。本尊は五社垂跡（釈・薬・地・観・文）。	大乘院寺社雑事記・大乘院日記目録・興福寺濫觴記
1215	建保 3	11 月 25 日	延暦寺文殊楼焼失。	建保三年記・華頂要略・叡岳要記
1215	建保 3	12 月 16 日	北条義時、伊豆国願成就院南に新御堂を供養。本仏阿弥陀三尊并四天王像を新造。	吾妻鏡
1215	建保 3	12 月 22 日	京都火災。因幡堂・六角堂・四条京極釈迦堂・五条高倉薬師堂など焼失。	仁和寺日記記
1215	建保 3		走湯山講堂・常行堂供養。（建久 8 年 11/20 下諸堂炎上、建永 1 年 3/22 常行堂上棟）	走湯山上下諸堂目安
1215	建保 3		八幡絵師西遊房寛舜、この年焼亡の黄不動を図絵す。	石清水八幡宮仏菩薩目録
1216	建保 4	1 月 25 日	東大寺国分門造営事始。	仁和寺日記記
1216	建保 4	1 月 28 日	源実朝、持仏堂に本尊雲慶作釈迦像を安置し供養。（1/17 京都より奉渡し開眼供養）	吾妻鏡◆ 26
1216	建保 4	2 月 5 日	群盗、東寺宝蔵の仏舍利以下靈宝道具を盗む。（2/29 捕らえられ 3/9 宝蔵に返納）	仁和寺日記記・東寺長者補任・東宝記ほか
1216	建保 4	2 月 5 日	後鳥羽院、水無瀬殿にて金泥宸筆瑜伽論百卷を供養。	仁和寺日記記ほか
1216	建保 4	2 月 16 日	東寺宝蔵に灌頂院敷曼荼羅二鋪・西院曼荼羅二鋪・古曼荼羅四鋪・五大尊五鋪・十二天絵像十二鋪・金銅聖天像一体・金銅灌仏像一体・七祖御影七鋪・七祖新御影七鋪・十二天屏風四帖（本・新）などあり。	東寺百合文書
1216	建保 4	2 月	走湯山中堂法華堂供養。	走湯山上下諸堂目安
1216	建保 4	3 月 18 日	嵯峨楊柳観音堂（千光堂）供養。	仁和寺日記記ほか
1216	建保 4	4 月 8 日	源実朝、寿福寺に御参し十六羅漢影像に供貢を備う。	吾妻鏡◆ 26
1216	建保 4	4 月 27 日	吉水熾盛光堂上棟。（3/23 焼失、7/1 築壇、8/21 本尊金銀を以て元のごとく鑄造）	門葉記・華頂要略
1216	建保 4	5 月 10 日	源実朝、御所持仏堂に七仏薬師像を安置し供養。（2/21 造始）	吾妻鏡・阿婆縛抄ほか
1216	建保 4	5 月 28 日	後鳥羽院、七条院の菩提のため八万四千基泥塔を建立し、造塔延命功德経百卷を書写し供養す。	願文集
1216	建保 4	6 月 16 日	金銅舍利塔（扉内に普賢・文殊・梵天・帝釈天・四天王を描き、中に小塔を納む）を仁和寺大聖院に移す。	三僧記類聚
1216	建保 4	7 月 21 日	日野薬師堂供養。（前年回祿）	仁和寺日記記
1216	建保 4	7 月	●観音菩薩立像 [滋賀・洞寿院]	像内墨書銘

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1216	建保 4	8 月 10 日	孝賢法師、醍醐寺観心院にて興然阿闍梨の宇治宝蔵本八幡大菩薩御影を写す。	八幡宇佐宮御託宣記◆ 12
1216	建保 4	8 月 28 日	大風により、神祇官東院・真言院金堂已下洛中、京外熊野新宮拝殿・延暦寺金堂など多く倒る。	仁和寺日記百鍊抄
1216	建保 4	11 月 3 日	吉水熾盛光堂にて熾盛光法を修す。木像仏師快慶、曼荼羅諸尊（半出三十六獸形像）を造り、造仏賞を弟子に譲り法橋とす。	門葉記・華頂要略・阿婆縛抄
1216	建保 4	11 月 23 日	●阿弥陀如来立像（尾添白山神社旧蔵）〔石川・尾添区〕	台座墨書銘
1216	建保 4	11 月 24 日	源実朝、渡唐のための唐船修造を陳和卿に仰す。	吾妻鏡
1216	建保 4	12 月 8 日	院宣により、石清水八幡宮若宮御正体を河内国交野に勧請。	石清水八幡宮記録
1217	建保 5	2 月 3 日	●金銅板曼荼羅〔栃木・佐貫観音堂〕	裏面陰刻銘
1217	建保 5	3 月 4 日	中宮御産祈のため、一条殿にて七仏薬師法を修す。院賢法印・院定法印ら、新仏本尊（三尺金色立像・施無畏与願七仏同）を奉居。	百鍊抄・門葉記
1217	建保 5	3 月 13 日	後鳥羽院、正賢をして聖観世音の像を供養せしむ。	仁和寺日記
1217	建保 5	3 月 13 日	故藤原信清のため、嵯峨上野新造堂（本尊丈六阿弥陀像）を供養。	仁和寺日記
1217	建保 5	3 月 24 日	●阿弥陀如来立像〔個人蔵〕	納入文書朱書銘
1217	建保 5	4 月 4 日	●四天王立像造始。〔奈良・円城寺〕	持国天台座墨書銘
1217	建保 5	4 月 17 日	陳和卿、唐船を造畢、由比浦に浮かぶ。	吾妻鏡
1217	建保 5	6 月 23 日	源尊（源慶子）、絵師良賀法印・源慶法眼の模写本により大和当麻寺の新曼陀羅（建保曼荼羅）を書写し了る。（3/19 書始）	当麻曼荼羅疏・本朝画史
1217	建保 5	6 月 25 日	高野山経智坊内に千体地藏尊を新造し、開眼供養。また、丈六堂を創建。	高野春秋
1217	建保 5	7 月 13 日	延暦寺四王院・文殊楼造営日時を勧進。	皇帝紀抄
1213	建保 5	7 月 15 日	●これまでに覚禅鈔成る。（寿永 2 年閏 10/5 より）	勸修寺本（尊皇王法）奥書
1217	建保 5	7 月 29 日	春日社東塔供養。	仁和寺日記・大乘院日記 目録・興福寺別当次第
1217	建保 5	7 月	●秦末時、薬師仏に鉄鐘を施入。〔京都・広隆寺〕	陽鑄銘
1217	建保 5	8 月 6 日	●院能作増長天立像（四天王立像のうち）〔京都・寂照院〕	増長天像内墨書銘
1217	建保 5	8 月 17 日	この日および 9 月 3 日、延暦寺楞嚴三昧院、大風のため破る。	興福寺略年代記・私山記
1218	建保 6	2 月 23 日	●鉄造薬師如来坐像〔栃木・北犬飼薬師堂〕	像背陽鑄銘
1218	建保 6	4 月 15 日	後鳥羽院、醍醐寺三宝院にて普賢延命法を修す。深賢筆の新図金泥絵像（四天王像を加う）を開眼供養。	普賢延命修法記・醍醐寺新 要録
1218	建保 6	6 月 8 日	後鳥羽院、金銅薬師半出正体十二体を鑄、一体を神護寺に送り、金堂に奉懸。	神護寺規模殊勝之条々
1218	建保 6	6 月 9 日	●慈恵大師坐像〔兵庫・現光寺〕	像内墨書銘
1218	建保 6	7 月 13 日	延暦寺総持院供養。	仁和寺日記・百鍊抄・華 頂要略・一代要記

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1218	建保 6	7 月 19 日	●銅造山王十社懸仏〔奈良国立博物館〕	裏面針書銘
1218	建保 6	8 月 13 日	順徳天皇、中殿御会（清涼殿御歌合）を催す。信実、中殿御会図を描く。	百鍊抄・摸本中殿御会図ほか
1218	建保 6	10 月 1 日	中宮御産祈のため、一条殿にて七仏薬師法を修す。御仏は古仏（前年 3/4 造立）に小修理を加う。	門葉記ほか
1218	建保 6	11 月 10 日	嵯峨清涼寺釈迦堂・棲霞寺阿弥陀堂鐘楼・三昧堂・一切経蔵・絵像十六羅漢など累代宝物焼失。釈迦堂本尊は取出す。	仁和寺日記・吾妻鏡・興福寺略年代記
1218	建保 6	12 月 2 日	北条義時、千僧大倉薬師堂に雲慶作の薬師如来像を安置し供養。（7/9 造始）	吾妻鏡◆ 26
1218	建保 6	12 月 6 日	西大寺塔千僧供養。	法隆寺別当次第
1218	建保 6	12 月 13 日	東大寺東塔仏像御衣木加持。大仏師四人（湛慶法印・院賢・覚成・院寛）	東大寺続要録・民経記寛喜 3 年 1 月紙背文書
1218	建保 6	12 月 15 日	大仏師法眼快慶、嵯峨清涼寺釈迦堂本尊を修造。	台座底面墨書銘
1218	建保 6	12 月 29 日	承円、後鳥羽院の催遣により日吉十禅師宮にて金泥五部大乘経を供養。「法会莊嚴尽美窮妙」	華頂要略
1218	建保 6		運慶建立の地藏十輪院炎上。運慶法印、金堂中尊（自作周丈六盧舍那）・脇侍（十一面・弥勒）・円慶（運覚改）作持国・湛慶作増長・康運（定慶改）作広目・康海（康勝改）作多聞天を高山寺に渡す。	高山寺縁起・山城名勝志
1218	建保 6		興福寺菩提山本堂建立。（本尊丈六阿弥陀并小仏薬師如来）	大乘院日記目録
1218	建保 6		●寿賢作十一面観音坐像〔京都・満願寺〕	像内墨書銘
1219	建保 7 年		●宮頭勝本伽師宗実、伝運慶作抜頭面を奉納。〔神奈川・瀬戸神社〕	面裏銘
1219	建保年間		善法寺検校祐清、八角堂（本尊丈六阿弥陀）を建立。	石清水八幡宮末社記
1219	承久 1	1 月 27 日	源実朝歿。これ以前、延暦寺講堂を造営（桧皮葺九間堂一字・檐下四隅有莊嚴丹青篋・安置胎藏大毘盧舍那木像一体）せしむ。また紺紙金泥十八羅漢を描く。	山門堂舎記・扶桑名画伝
1219	承久 1	2 月 26 日	法隆寺舍利堂を造立。（法眼尊智、承久 4 年 3/11 に勝曼経講讀御影を描く）	古今一葉集・法隆寺別当次第ほか
1219	承久 1	閏 2 月 15 日	長谷寺焼亡。霊仏灰燼となるも頂上仏損ぜず。	百鍊抄・法隆寺別当次第
1219	承久 1	閏 2 月 16 日	後鳥羽院不予により、水無瀬殿にて大熾盛光法を修す。尊智大輔法眼、本尊を写す。	門葉記
1219	承久 1	3 月 18 日	行願寺塔供養。	百鍊抄ほか
1219	承久 1	3 月 29 日	宇治橋供養。	百鍊抄・宇治代制禁官符
1219	承久 1	3 月 29 日	●法隆寺東院舍利殿および絵殿〔奈良〕	棟木墨書銘
1219	承久 1	4 月 2 日	京都大火。尊勝寺西塔、最勝寺、円勝寺塔三基・鐘楼、法成寺南大門・東塔、祇陀林寺、河崎観音堂四壁などの堂舎焼失。	仁和寺日記・百鍊抄
1219	承久 1	4 月 7 日	大和国当麻寺西塔を修理。7 月、舍利・水晶五輪宝塔一基を奉納。	当麻寺文書
1219	承久 1	4 月 13 日	●阿弥陀如来立像〔京都・光蘭院〕	納入品
1219	承久 1	7 月 5 日	後鳥羽院、慈円をして賀陽院にて五壇法を修せしむ。夢想により新図した本尊を開眼供養。金剛夜叉は異常の形像。	門葉記ほか

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1219	承久 1	7 月 13 日	後鳥羽院、源頼茂を討つ。頼茂の放った火により大内殿舎諸門已下、仁寿殿観音像などの宝物焼失。	仁和寺日記・百鍊抄・吾妻鏡ほか
1219	承久 1	7 月 19 日	最勝四天王院を毀して白川より五辻へ渡す。	百鍊抄・門葉記◆24
1219	承久 1	7 月 19 日	嵯峨清涼寺釈迦堂上棟。	百鍊抄・清涼寺縁起
1219	承久 1	9 月 6 日	伊豆国走湯山中堂・講堂など焼失。	吾妻鏡・走湯山上下諸堂目安
1219	承久 1	9 月 22 日	鎌倉中大火。永福寺惣門以下焼亡。	吾妻鏡
1219	承久 1	4 月 17 日? 10 月 28 日	快慶・行快ら、長谷寺十一面観音像を造始。	建保度長谷寺再建記録
1219	承久 1	10 月	●俊苧筆泉涌寺勧進疏〔京都・泉涌寺〕	年紀
1219	承久 1	10 月 10 日	快慶作釈迦如来を高山寺に本堂に安置。(11/1 開眼)	高山寺文書
1219	承久 1	10 月 28 日	快慶・行快ら作長谷寺十一面観音像開眼供養。(4/17 造始)	建保年度長谷寺再建記録
1219	承久 1	11 月 27 日	京都火災。延勝寺塔・金堂、成勝寺、最勝寺塔三基・金堂、証菩提院など焼亡。	百鍊抄・皇帝紀抄
1219	承久 1	11 月 29 日	後鳥羽院、日吉社に御幸し宸筆八講を行う。神前宸筆八講の始。	伏見宮御記録・門葉記・百鍊抄ほか
1219	承久 1	12 月 11 日	東大寺国分門供養。(12/1 京都にて八天像を造る)	仁和寺日記・民経記寛喜 3 年 1 月紙背文書
1219	承久 1	12 月 12 日	後鳥羽院、東大寺戒壇院にて宸筆薬師経供養。	仁和寺日記
1219	承久 1	12 月 20 日	醍醐寺阿弥陀院(宣陽門院御願)を建立し供養。	醍醐寺新要録ほか
1219	承久 1	12 月 27 日	北条政子、故源実朝の追福のため、勝長寿院の傍に五仏堂を造り、仏師運慶法印作の五大尊像を安置し供養。	吾妻鏡◆26
1219	承久 1		●北野天神縁起絵〔京都・北野天満宮〕	詞書
1220	承久 2	1 月 12 日	商客源三次郎、松尾に一切経蔵・三重塔を建立し供養。	仁和寺日記
1220	承久 2	2 月 12 日	道尊、高野山新堂建立供養。	東寺長者補任
1220	承久 2	2 月 19 日	醍醐寺上御影堂修理。	醍醐寺新要録
1220	承久 2	3 月 10 日	春日社西塔五重のうち、近衛家実が三重を造畢、九条道家が残り二重を造畢。	大乘院日記目録
1220	承久 2	3 月 25 日	殿上所充。画所別当は藤原定親・家光。	玉薬 3/24
1220	承久 2	3 月 26 日	清水寺本堂・塔・釈迦堂など焼失。観音堂は余焰を免がる。	百鍊抄・吾妻鏡 4/3
1220	承久 2	4 月 9 日	これより先、興福寺僧忠慶、薬師寺別院を焼く。この日追補。	玉薬・所充文
1220	承久 2	4 月 12 日	●深賢、一字金輪曼荼羅図を伝収。〔和歌山・遍照光院〕	軸付押紙銘
1220	承久 2	4 月 13 日	祇園社焼亡。宝殿より御体十三体・内陣半出御鏡一面・外陣御鏡十面・大般若経一部、薬師堂より本尊・不動・毘沙門各一体、南大門より二天を取り出す。	玉薬 4/15・仁和寺日記・ 百鍊抄・吾妻鏡 5/7
1220	承久 2	4 月 19 日	吉水坊(熾盛光堂)焼亡。本尊以下悉く取り出す。	玉薬・仁和寺日記・門葉 記・華頂要略
1220	承久 2	6 月 24 日	日吉十禅師宝前にて千体地藏供養。	華頂要略

西暦	年 号	月 日	事 項	典 拠
1220	承久 2	8 月 9 日	延暦寺宝幢院釈迦堂の本尊顛倒、仏手破損。	華頂要略・山門堂舎記
1220	承久 2	8 月 26 日	●快慶、十大弟子立像〔京都・大報恩寺〕うち目鍵蓮像（十大弟子立像制作は建保 4 年 12/17～承久 1 年 8/13 頃 ※毛利久『仏師快慶論』）	阿南陀納入品・目鍵連足柄および優婆離像内墨書銘
1220	承久 2	11 月 4 日	院女房美濃局、広隆寺南大門西堂供養。	仁和寺日次記
1220	承久 2	12 月 26 日	祇園社遷宮。（4/13 焼亡、7/1 上棟）	百鍊抄・玉薬・祇園社記・華頂要略
1221	承久 3	1 月 22 日	禁中にて七仏薬師法を修す。仏師院寛法眼、蓮華王院宝蔵より渡す古仏を修復。	七仏薬師御修法記
1221	承久 3	1 月 26 日	藤原道家、行願寺・広隆寺などに参詣。太師堂にて出家法師、太師御伝（後壁図）を説く。	玉薬
1221	承久 3	4 月 18 日	宝莊厳院内堂舎焼亡。	百鍊抄
1221	承久 3	5 月 15 日	●善円作十一面観音立像〔奈良国立博物館〕	像内墨書銘
1221	承久 3	5 月 28 日	清水寺僧侶、勝軍地藏・勝敵毘沙門を造立し供養。	承久三年四年日次記
1221	承久 3	6 月 16 日	武士入洛。平等院経蔵宝蔵内の宝物・法成寺宝蔵の御物を追捕す。	百鍊抄◆ 12
1221	承久 3	7 月 8 日	●後鳥羽院、鳥羽殿にて出家。藤原信実をして、落飾に先立ち御影を摸せしむ。後鳥羽天皇像これにあたる。〔大阪・水無瀬神宮〕	吾妻鏡ほか
1221	承久 3	7 月	●道助法親王、高野山光台院建立。快慶作阿弥陀如来および両脇侍立像この頃。〔和歌山・光台院〕	高野春秋・足柄墨書銘・光林寺阿弥陀銘
1221	承久 3	8 月	●河内国狭山庄内勝□寺鐘〔和歌山・弘法寺〕	陽鑄銘
1221	承久 3	9 月	●能尊作地藏菩薩立像〔京都・清涼寺〕	納入品
1221	承久 3	10 月 23 日	北条泰時、醍醐曼陀羅寺を建立し供養。	吾妻鏡
1221	承久 3	閏 10 月 1 日	蓮華蔵院塔焼く。	承久日次記
1221	承久 3	12 月 11 日	北条泰時室御産祈のため、産所にて薬師如来一体を供養。	吾妻鏡
1221	承久 3		●快慶作阿弥陀如来立像〔奈良・光林寺〕	足ほぞ墨書銘
1221	承久 3		●蔵慶作不動明王立像〔個人蔵〕	像内墨書銘

(iii) 參考資料

◆ 1 仁安三年（一一六八）五月二十一日 知足院にて、丈六阿弥陀仏開眼供養。

『兵範記』 仁安二年（一一六七）六月十九日
今日、八条堂丈六仏奉渡知足院了

『兵範記』 仁安三年（一一六八）五月十日

（略）今朝入知足院、奉押丈六阿弥陀仏薄、件仏像供養以後已歷廿八年、於八条殿被纏烙煤、如元造立御堂之間古弊、更發心願、課業匠加修理、以金廿兩薄今所押重也

『兵範記』 仁安三年（一一六八）五月十四日

丈六御仏押薄如日来、午後御身三重押畢出京

*『兵範記』 仁安三年（一一六八）五月二十一日

早旦向知足院、丈六仏押薄畢、奉開眼也、其後瑩拭奉入眉間玉畢（籠銀壺）、晚頭帰畢

『兵範記』 仁安四年（一一六九）二月三日

知足院能舜院東丈六堂供養也、件堂舎、去康治年中、先考八条北洞院西大路東北建立一間四面堂舎、安置丈六阿弥陀像、彼時東寺長者法務寛信率十口讚衆、被供養了、其後令經廿八年、雨露相浸、破壞已盛、去年秋渡立此地、直如新造營仏像、又押薄開眼造營之次企、所願之趣、具見願文（略）、弟子信範、專合十羽之掌、啓白兩足之尊、四萬歲之真文、以報恩德為最、十八章之古典、以抽孝行為先、伏惟、亡考入道羽州前史、廉潔稟性、忠信銘心、所仕者五代之朝廷、松柏爭貞、所祈者九品之宝台、美藥開意、然間早下崇仁坊之名区、開堂舎跡、方慕極樂界之浄土、安弥陀尊、是以康治元年之曆、季夏下旬之天、偏致清浄之懇誠、屢遂供養之儀式、締構既旧、廿八廻之居諸宝輦、渴仰云深、順次生果位無疑矣、茲之比聊有所思、移洪基於知足院之側、營道場于心界之中、建立檜皮葺一間四面堂舎一字、如元奉安置皆金色一丈六尺阿弥陀如来像一体、光中彫刻化仏飛天十三体、後壁図絵極樂世界伎樂菩薩并依怙莊嚴之變相、奉模写素紙妙法蓮花經十部、無量・觀音・普賢・阿弥陀・般若心經等各十卷（略）、雖知父祖積善之余慶、誠是仏天加護之明德也、然則不違先閭之蓄懷、各成一族之宿願、却老者現世之望也、得仙方於紫府之間、往生者当來之因也、証仏果於金刹之裏、乃至有頂無間六趣四生、籍斯菩提、共到覺岸、敬白、

仁安四年二月三日、

弟子正四位下行権右中弁平朝臣信範敬白

◆ 2 嘉応二年（一一七〇）十一月二十六日 皇嘉門院、九条堂を供養。

『玉葉』 嘉応二年（一一七〇）十一月四日

晴、参女院御方、今日奉渡御仏於所、自今日可奉押薄也、仏師法橋院慶奉相具之、此御仏相好、故殿御時能々有沙汰、度々被奉直、西院仏弥（引）懸云々

『玉葉』 嘉応二年（一一七〇）十一月二十四日

今日、被奉安置御仏於御堂、仍参女院御方、然而依為神事（今日、大原野祭也）、参別屋、不奉見御仏、仏師院慶給祿（被物一重、判官代盛光取之、不賜御馬也）小仏師等給祿布等（略）

*『玉葉』嘉祿二年（一一七〇）十一月二十六日

此日、女院御持仏堂供養也、導師法印公舜、讀衆十口（此中僧綱一口、導師以下皆法服也）、奉行新藤中納言忠親卿、（本奉行源中納言雅賴卿、而依初齋院事、奉行辭退、仍被改仰件卿也、則被補院司了）、中宮大進光長等也（略）

◆3 安元元年（一一七五）七月 仁和寺大聖院にて、丈六孔雀明王像を圖繪。

『三僧記類聚』（仁和寺本第四冊）九、祈雨事

聖範闡梨記云、承安五年（安元元年）七月日、近日、早雲頻興、陰雨不灑、仍自去比、於大聖院、有種々ノ御読経、又於喜多院、有孔雀経御読経、兼又去十一日、於本寺、囑請百口僧侶、三ヶ日之間、有孔雀経御読経（毎日一部）、加之、圖繪丈六孔雀明王、初日、於本寺奉供養之、

◆4 安元二年（一一七六）七月十日 蓮華王院東の法華三昧堂に、建春門院を葬る。

『吉記』承安四年（一一七四）二月二十九日

已刻参院、奏法華堂差図〈仰、可有沙汰〉、并仏師事〈仰、遂可被定〉（略）

『吉記』承安四年（一一七四）三月五日

招宗家、付女房申院云、法華堂差図于今遅々、尤以不便、造国司令怠申、尤有其謂歟、可延引者非其限、来月八日可居礎者、今明可有沙汰歟、宗家依候侍所、如此令申也、且為行事之故也、帰来云、申旨可然、明日御覽件地、可有沙汰之由、有院宣者（略）

『吉記』承安四年（一一七四）八月十日

（略）仏師院尊来、付法花堂御経支度、可奏覽之由奏了

『吉記』承安四年（一一七四）八月十三日

已刻参院、奏三ヶ条事、

一、法花堂御仏支度、院号進上事、先申女院、仰云、可令見西光、飾并光付仏所、可有其沙汰（略）、

『吉記』承安四年（一一七四）八月二十二日

（略）三ヶ条申女院御方、（御逆修料御仏経明日可始之由下知事、法花堂御仏院号支度事、檜物 庄押取金勝寺領間事也）

『吉記』承安四年（一一七四）九月三日

参院、奏覽法華堂御仏座光等絵様、昨日院尊所持来也、仰云、光可付鏡、不可為飛天、此外事不能旁記而已、申斜退出、（略）、召宗家、仰法華堂御仏勘定事、又仰右事（略）

『吉記』承安四年（一一七四）九月十五日

早参院、今夜一定入精進屋之由為申入両方也、又奏雜事等（略）、又法花堂御仏并造宮間事等、申両院了、物詣之間有不審之故也（略）

*『玉葉』安元二年（一一七六）七月十日

此日、前建春門院御葬礼也、每事省略、仍先無被定雜事云々、御喪家中陰奉行四人云云（前大相国忠雅、別當時忠（已上公卿院司）、權右中弁親宗（四位別当）、木工頭親雅（五位判官代）、蓮花王院東造法華三昧堂（今

日中造畢、其下堀土、案石辛櫃、奉籠其中、是待賢門院例云々、件所、年來奉為法皇御終焉、被建立同堂、本儀奉納女院於件所、追可被造法皇御料云々、而前大僧正、及仁和寺宮相共申云、此事不可然、為奉院有禁忌、只新可被造女院御料云々、因之、忽有此儀之間、甚以物忽云々、今夜、御葬礼、追可尋記之、

◆5 安元二(一一七六)年九月十三日 九条兼実、仏師院慶に、仏師定朝および覺助作の阿弥陀三尊・不動明王(験仏)を修造させる。

*『玉葉』安元二年(一一七六)九月十三日

今日、奉供養阿弥陀三尊及不動明王等、導師仏嚴聖人、件仏、皆古仏也、依破損、奉加修飾、今日、所奉讚歎供養也、其意趣偏臨終正念、往生極樂也、其功德上分、奉資先考、先妣、及一切衆生也、不動尊、相兼二世願望、件仏、験仏云々、覺助所造也、於阿弥陀三尊者、定朝所造也、故殿殊令秘藏給云々(略)

『玉葉』安元二年(一一七六)九月二十日

召仏師院慶、奉直先日修造仏、不法事等、尚以兩三日可沙汰云々(略)

『玉葉』安元二年(一一七六)九月二十二日

未刻、仏嚴上人來、今日、院慶參入、奉押薄於仏、又申定朝仏故実等、

『玉葉』安元二年(一一七六)九月二十七日

自院以邦綱卿被申女院云、故法性寺禪閣(藤原忠通)被集定朝仏云々、早悉可令奉渡給云々、在余許之仏同以可被進云々、當時為修理取破、仍終其功、可進之由令申了(略)

『玉葉』安元二年(一一七六)九月二十九日

仏師院慶參入、奉修造仏如日来、今日開眼之(略)

『玉葉』安元二年(一一七六)十月一日

院慶參入、奉修造仏、如日来(略)

『玉葉』安元二年(一一七六)十月二日

今日奉修造仏了、御身薄猶可奉押、使院慶見女院御堂仏、申云、円勢造歟、非上品云々、不動者、院覺作也、於普賢者似定朝造、尤神妙云(後略)

◆6 治承元年(一一七七)十二月十七日 蓮華王院五重塔塔供養。(『山槐記』ほか同日条は省略)

『吉記』承安四年(一一七四)二月十七日

院(後白河)仰云、蓮花王院御塔御仏被始八体了、而御覽法金剛院御塔之处、中尊一体脇土四体也、頗宜之様御覽之、已雖被始了、閑有造立、别有供養如何、可仰合公顕者、予(藤原経房)申云、五重塔有心柱被安置八体也、三重塔無心柱、安置五体歟、法金剛院三重御塔歟、此条雖不及異議、不及執奏、

『玉葉』治承元年(一一七七)十二月十七日

太上法皇(後白河)、蓮華王院内、立五重之塔婆、設一日之齋会、当千手堂異立之、依永保三年法勝寺九重塔供養例、所被行也卯刻、送呪願僧前於院庁(仰忠成法橋、令調進之)(略)、

後聞事等

一賞事

從三位藤原実宗（上西門院）、同長方（院）、從四位上同実教（院）、從五位上同隆清（隆秀讓）、中宮御給、追可被申請云々、行事弁賞、追可申請云々、余案之、今度御塔供養、偏為院家沙汰、日時、僧名、於陣不被定、然者何被定弁上卿哉、隆季、経房共院司奉行也、勤賞之時、皆可「在」院御給之中也、永保、九重塔、為公家御願、被宣下上卿、弁等了、今度之儀、不可似彼例耳（略）、法眼寛敏（上座静賢讓）、法橋成覚（別当覚讃讓）、康慶（仏師）、頼全（絵仏師頼源讓）、已上、上卿同人、被宣下右少弁光雅云々（略）

『覺禪鈔（勸修寺本）』卷第一 兩部大日

私云、法勝寺九重塔坐四面大日云々、

又蓮華王院塔、大日四体四方被奉居（金界二体、台界二体也）

『三僧記類聚』（仁和寺本第六冊）

蓮華王院御塔御仏座位相論事

静遍僧都語云依為法花堂供僧被問三井行乘、真田、東寺勝賢（已上三人）、各申旨有相違、四面兩界大日各二体、仍有相論

行乘様

胎大日東

北日大胎

心柱

金大日南

東方タラ仏ヲハ居東方
西万タラ翻之

胎大日西

真田様

北日大金

胎大日東

胎大日南

東方タラ仏ヲハ居西、行者向東、西万タラ翻之、南北ニハ北ハ陰台ニ形ル也、仍以台大日居南方ニ、行者ハ向北、金居北、准之

勝賢様

金大日東

北日大胎

胎大日西

金大日南

東西如真田、南北ハ南方ハ正面也、仍居金大日於其前ハ修行法云々

勝賢ノ定ニ被用了、其時真田僧正不請云、乳母子ナラ爪ハ真言師ハ不叶云々

◆7 治承二年（一一七八）十月二十七日 中宮御産御祈のため、仏師法眼明円、小仏師五人、等身彩色六観音を造立。

『山槐記』治承二年十月二十七日

（略）

内大臣被奉造立等身六観音像〈彩色〉、先是上寝殿南庇御簾、撤昼御座、先敷筵六枚〈南北行〉、其上置御衣木六支、仏師法眼明円〈衣上着淨衣、其上着紫甲袈裟〉、令小仏師等令昇置之、法印覚成〈鈍色装束平袈裟〉参上加持了、明円図形像、下斧三度、小仏師五人参上彫刻之、明円彫刻十一面像、各退、次法印退下、次撤御衣木、於常光院〈御所内東壇上〉奉造立、申剋造了、奉渡寢殿、法印〈宿装束、甲袈裟〉参上、被奉供養、予取被物、権亮維盛朝臣取裏物、件御仏自今夜七箇日被奉供也、正観音法印任覚〈東寺〉、千手大僧正禎喜〈同〉、馬頭法印全玄〈山〉、十一面法印覚成〈東寺〉、准胝権少僧都良弘〈東寺〉、如意輪実海〈同〉、件布施供養同内大臣沙汰也、御本尊各被奉渡彼壇所等先、又大夫被奉供養五大尊〈中尊等身、外三尺、去廿日被奉始之〉、権少僧都良弘爲導師、右兵衛督取被物、右少将時家朝臣取裏物、今日院被奉始等身不動大威徳各一体、明円同奉之、明日可有御供養云々、法印覚成又加持御衣木（略）

◆8 寿永元年（一一八二）四月十六日 九条兼実、如法経を書写供養し、最勝金剛院山に埋納。

『玉葉』寿永元年（一一八二）四月八日

此日、奉迎如法経料紙、爲僧都沙汰、円実聖人相具所来也、申刻許、渡給此道場、僧衆等出堂中相待之、先庭上立案、其上奉居料紙〈納興〉、所相具之聖人等頌伽陀了、入堂中聖人頌之〈不誦同伽陀〉、其後開堂障子、下臈二人出奉昇入之安机上〈用日来前机也〉、又閉戸、経円阿闍梨披輿奉取出料紙、奉入銅筒、奉居宝座〈本普賢座也、即奉居写前也、在蓮花座也〉、此間合利〈釈迦〉奉居了、聖人等退帰了、此僧衆等行道数匝、合利不止〈釈迦、法華経、弥勒〉、後唄之後各着座、凡自伽陀之間散花也、先是、釣紙天蓋〈削付羅網、花鬘等、又削播懸白角〉

『玉葉』寿永元年（一一八二）四月十一日

爲法性寺座主沙汰、自横川被送根本水上、聖人五六人相具之、奉受取之儀、同迎料紙、

『玉葉』寿永元年（一一八二）四月十三日

今日、如法経読滿三七日、仍入夜有結願事、導師智詮阿闍梨、今日早旦、送卒都婆於山上顯真之許、件卒都婆寸法、一丈二尺、弘一尺二寸也〈件卒都婆、余自筆書之、梵字、法性寺座主被書也〉

『玉葉』寿永元年（一一八二）四月十四日

自今晚、奉書始如法経、懺法之後有啓白〈僧都等被勤之〉、後御筆立也、子細在別次第、

*『玉葉』寿永元年（一一八二）四月十六日

此日、如法経終写功、奉埋最勝金剛院山〈故女院御墓所近辺也〉、先奉書終之後、余書願文并名帳奉入筒了、入筒之後、書手各付封、其後補關分〈経円阿闍利勤之〉、次十種供養〈日来道場、依無便宜奉渡御経於御堂〉、導師智詮阿闍梨也、十種阿方儲之、其外供養八燈、其後奉渡法性寺、聖人四人之外、有仮聖人等、御経奉出之後、余、大將、僧都同車向法性寺、自他道参会也、自御所門内步行、與傍奉埋之後、以石〈兼運置之〉、築垣、其上立石五輪塔〈法性寺座主被書梵字也〉、其後於御墓所説阿弥陀経了、帰参御堂之後帰宅、今日十種供養、有小捧物、道場荒涼之人不可入、仍只自後戸辺送宿所也、余帰宅之後、又以別捧物、送僧都之許、日来、此行

之間、殊被入力之故也

◆9 寿永元年（一一八二）六月十六日 九条兼実、栢木一尺三寸十一面觀音像を供養。

『玉葉』寿永元年（一一八二）六月一日

今日、仏巖聖人來語云、去比、或僧夢想云、旧堂三人々集会、議定世間事、其中、疾疫事、來六月（今月也）中臈可病、七月上臈可病、一人不可殘、但三尺十一面觀音像、造立供養人、可免此難云々、雖見此夢暫不拔露之間、更又夢云、先日之夢者、為流布世間、所告示也、而無音之条、甚奇怪、然者、汝可与此病云々者、仍驚披露、院中以下每家有此營、但事体皆龜荒也、頗致謹慎、能有沙汰、抑、夢、雖見三尺之由、義軌并經之所說、一尺三寸也、夢はかくも見ユル事也、猶就經說、一尺三寸、可被造立云云

『玉葉』寿永元年（一一八二）六月四日

此日、奉始一尺三寸十一面像、智詮阿闍梨加持御衣木、此仏、如法可奉造、仍仏師授五戒、以栢木可奉造、不可加膠、又不可押薄并綵色、是依近日之夢、所奉造也、殊以有存旨、如法可造立、即於智詮壇所、每日受戒、滿呪遍、來十三日可奉造出也、勸進家中男女、給其料物、是又為先化他也、即以結緣衆名帳、可奉籠尊像之中也

*『玉葉』寿永元年（一一八二）六月十六日

入夜、奉供養一尺三寸十一面觀音像（以栢木造之、其中奉種字真言等、又座中籠結願衆緣名）并同經一卷（書写）、千手陀羅尼一千反、以智詮為導師、件仏造立之間、如法造之不加膠、每日仏師受戒、仏造立之間、僧等滿神呪、即於智詮壇所造之

◆10 寿永元年（一一八二）十一月十八日 九条兼実、故皇嘉門院周忌のため、墓所に小堂を供養し、半丈六仏を安置す。

『玉葉』養和元年（一一八一）十二月四日

寅刻遂以崩御（皇嘉門院）御心神安穩、手取五色旗、心係九品望、安然而令人減給了、聖人及余祇候左右唱念仏

『玉葉』養和元年（一一八一）十二月五日

（略）

仍今夜可有葬礼也、且是三ヶ日之内、可有此儀之由、同有御遺言之故也、山候所事、僧都奉行遣人（經光法師）、此兩三日致沙汰（余催遣人夫）、先日以吉日、堀始其穴、仍不及日次之沙汰、今度御惱之時、兼日有沙汰也、今日差遣豊前守能業（御乳母子也）、為行事、籠僧等遣請了、又可籠候御忌之輩定仰了、又素服之人并役人等定仰了（有御遺言也）、及已終御体冷給了、仍奉直御座、其儀、先改御衣（中略）、新御小袖之上、置日来令懸給御袈裟并菩提子念誦、其上奉引覆新合御衣（奉引隱御首也）、件事等女房二人（洞院殿、別当殿）役之、次撤御座傍御疊（他女房人役之）、乍御筵（素御座、着縁之御筵也、若御座疊之時、切放南御筵許例也、今御座御筵、仍無其儀也）、副南西障子、北首奉置之（僧都并初役女房二人役之、次御座東方立唐紙屏風一帖、御枕上方副西、立燈台拳燭（北面）、其東居不断香火蛇焚香、三尺阿弥陀仏奉渡御持仏堂、五色旗撤之納之、屏風与北障子之間、立三尺几帳、此間余已下、役女房等、殆及叫喚、大將失泣、見者弥添悲哀、此後女房（撰近習人）、兩三人相替祇候屏風之外、又念仏僧一人、相替候南障子外、唱光明真言、及阿弥陀名号等、（略）

初日御仏事

戊刻着烏帽直衣、相具右大將（亮闇布衣也）、参御堂御所（略）、先始行初日仏事（講師忠玄、堂童子二人、衣

冠、給布施之後（其法注奥）、帰参御在所、先是七ヶ寺御誦經、殿上人為使

御入棺事

帰参之後、持参御棺（先是、御在所南障子外昇居、侍六人役之）、役人五人昇之、居御傍板敷（南北妻）、次基輔之外四人、暫退出（此間着藁履）、次尊忠僧都、基輔朝臣并女房四人（洞院殿、別当殿、宰相殿、内侍、已上皆尼也）各以紙縫為脇帶結之参、先撤屏風几帳等、開御棺柩蓋、其上被出雜物等、並置之（以北為上僧都役之、）

先真言筒、次御護、（年来令持給云々、依御遺言入之也）

次野草衣、（年来被儲置、大原聖人本覺房、書梵字、唐綾单也）

次三衣、次香、次土砂、（已上裹紙）

次針糸、（押帖紙、女房必入之云々）、次靶衣（单生衣、四幅也）

此中御護、真言、三衣等、素置御所棚上、此時取具置之也、若同兼可入棺歟、可尋之、

次膝（六丈一切、故殿并北政所例、或四丈二切云々）

次入香於御棺底、（皆人之）、次入土砂、（少分残之、為散御墓所也）

已上僧都役之

次役人六人参上、乍御筵奉昇入御棺（役人等、不当袖於御棺也）、次僧都取野草（单）衣、奉覆之、奉押含左右御頸引覆御首也、次自御下方、漸奉引拔合御衣（元奉覆御衣也）、御小袖、袈裟、念誦等如本、次其裾方、同能奉押含、次入真言、次入御護（已上入御枕上方）、次入三衣（元裹紙、撤之置御傍并御体上等也）、次掩御棺蓋、次打釘（上下兩所打之、基輔役之、只一打打之、故実也）次掩靶衣、次女房退入、次召季長、基輔、相共以布（六丈）、膝御棺（基輔為役人、一身依難勤仕、召季長扶之也）、膝了、御跡方結之、凡上下方共有布余、為結付車梓立也、次召他役人等（先是放御在所北障子、重永役之、昇御棺（以跡方為先也）、自寢殿北面（内也）、奉渡御車寄方、余并大將等同参（略）

渡御御墓所事

奉乘御車畢、余及大將同車（出自東門、用南庇上車、八葉古車也）、参会最勝金剛院御所（共人七八人許、騎馬在車後、筑前守貞俊、在此中）、奉侍之、依為尋常御幸之儀、路間不步行先例也、（略）

御葬礼事

立定御車之後、於御車後（穴南頭也）、有導師呪願事（導師左、下臈勤之、伊覺、呪願右、上臈勤之、忠玄）事訖、各給布施一裏（殿上人取之）、次僧徒頗退、立御車西南方（他念仏僧帰遣了、依見証也）、此間消近辺松明等、次放御車トコ、仍役人五人（其外加持等）、奉居穴際、解膝布切中、懸御棺上下、又儲他布（四丈）、懸中、役人五人、侍一人、取布端々（他侍等又扶持之）、漸奉沈穴底（北首）畢、次余取鍬入土（三度）、次大將同前、此後役人等次第如此（雖不可必然、只各勤仕之）、其後侍等埋之、寄人夫、早速為終也、漸及終頭、且立廻釘拔、其上立石卒塔婆（自御平生昔、被造儲御手令書銘給也）、此間例時僧等且退帰、其後余及大將帰宅、依俗説、用他道経山中、出自西面八足門也、於欲乘車之所洗足、是又例也（大將同以小桶小杓、共人令洗之等如形也）、於路次河辺、僕從進草人形、意氣了返給了（大將同之）、直参御堂（路間共人乘馬也）、僧都乘頼輔入道車云々、於御堂始每日仏事、先仏経供養（導師忠玄律師、著甲袈裟（無堂童子也）、次例時調声（同前）、同前事了、自今夜、宿候此御堂御所、大將同之、旧臣女房一両（洞院殿、別当殿）、同以伺候、為聴聞也、以新御所北对、并東僧房等、為籠僧宿所、又女房一両、祇候彼御所東对、自今夜、於彼御所御終焉之所、始修阿弥陀護摩（公豪阿闍梨）、

僧名（六口、是御遺言也）、

律師忠玄

阿闍梨伊覺、公豪

行家、觀明

長宗、忠玄、觀明之外、御遺言也、元被人覺智家寬等、而覺智為僧正、家寬入滅、仍今度御惱之時、申事之由之処、覺智分可示其人、今一兩口可計入云云、此兩人依非外人所入也、此中無能說人、尤遺憾、且是能說なれば、若僧綱なればとて、不思議之人不可入之由有御遺言之上、又可然之輩、多人高倉院御忌、并邦綱卿忌等之間、有憚不請、其外又殊無能說之間歟、為之如何、

初日御仏事

大日一鋪、二幅、法華經一部、摺写、

布施〈導師、被物一重、布施一裏（絹裏也、布三段）、今夜依卒爾、只給長絹一疋也〉

題名僧〈布施一裏、布二段〉

供米〈導師五斗、題明僧三斗〉

每日分

阿弥陀像一鋪〈被写七体、每七日可懸改、是御遺言也〉

法華經一卷〈是又御遺言也、雖有全少之難、為不違御誠、守其御訓而已〉

布施〈導師二段、余僧二段〉

七ヶ寺御誦經

珍皇寺、極樂寺、法性寺、最勝金剛院、

淨光明院、東寺、西寺

使二人〈国行、長俊、依不足兼行也、殿上人也〉

分素服事

御出以前分之、然而今日依日次不宜、各不着之、余并大將分安置宿所、人々皆給之置宅云云

『玉葉』養和二年（一一八二）一月十二日

此日、旧臣女房等、奉供養結緣經、講師澄憲僧都、籠僧之中、無甚說法之輩、而於今之一品經者、聊有可能演旨趣之事、故院（皇嘉門院）御平生之昔、有此御願、即近臣女房等手自書之、其中藥王品ハ自筆所令書給也、然間、其功未及半、自然涉年月、其願遂黙止、今遇此崩御、恨之尤切、不知手足所惜、爰近臣之陪妾仕女等、開彼旧經等、拭紅淚嗚咽、往年之結衆、或有終命之者、或有遁世之類、當時祇候之輩、各補其闕、又添莊嚴、此中余女房、自筆書写般若心經、為答芳恩也、普賢菩薩并十羅刹女（一鋪半）、女房等手自所奉図也、依有如此等之子細、殊所請能說也、式部少輔草願文（昨日持参其草、依意趣不詳、再三令改直、猶雖不快、慙以清書）、右中弁光雅清書之、今日、女房入聴聞

『玉葉』養和二年（一一八二）一月十七日

此日、大將修仏事、以弁曉律師為講師、說法優美也、副供養一日經、件經、書始写之法、過普通之儀、嘔禪侶卅口、今晚、先行水之後、始懺法（依為声明師、以行家、為調声、卅口之外也）、六根段之礼拝、如法法經之儀、其後、同時摺墨令書懺法、以後賜小施物、未刻、終写功、曉鐘以前、余向其道場（以女院新御所為其所、即崩御之所也）、筆立以後帰来、於廿八品之題名者、先仰書手令闕其行、余及大將令書之、為結縁也、皆終写功、調卷之後、於御堂御所令書也（跡門十四品、大將書之、本門十四品余書之）

『玉葉』養和二年（一一八二）一月二十四日

例講、々師觀明、懺法之次被行之、其後、女房宰相局仏經供養、導師長宗、此日、御正日也、兩界曼荼羅墨字梵字（實嚴阿闍梨書之）、導師全玄、讚衆十口（籠僧六口、殘四口、導師相具之）、奉行兼光朝臣、無願文、依大治例也、已刻、堂莊嚴、未刻、公卿僧徒參集、執蓋役人同以參入（略）今日、曼荼羅供之外、無七々日之仏供養、長寬故殿御例也、

『玉葉』養和二年（一一八二）二月十三日

依為彼岸初日、於御堂、自今日七ヶ日、可奉滿宝篋印陀羅尼（留候僧三口也）、故院、平日被図写二鋪真像（一鋪如意輪、一鋪不動）、而今日、奉供養中不動像并宝篋印陀羅尼經一卷（余自筆書之）、導師公豪、於如意輪者、來十八日、以覺智僧正為導師、可遂供養也、余今日參御堂

『玉葉』養和二年（一一八二）二月十八日

午刻參御堂、今日供養百種於舍利之次、有仏經供養事、仏者如意輪繪像、御平生之時、雖被図写、未遂供養、今日、依為吉曜遂之、經者蛤貝書之、聖靈、平日殊令好貝覆之戲給、仍為翻彼罪所写真実之妙文也、且先例多存故也、以覺智僧正為導師、以留候僧三口、為請僧、事起率爾、不及兼日之沙汰、又有飲食、衣服、臥具、醫藥之四種之供養、事了、分賜僧等、講演之或、如普通舍利講、先総礼、伝供之後、説法式等也、此次、女房三位局、有仏經供養事、導師同人、

『玉葉』養和二年（一一八二）七月十四日

此日、奉為故女院、奉供養画像釈迦如来像一鋪并反故色紙（故女院御手跡也）、妙法蓮華經一部（在具經等）、件經任去正月申陰内例、請卅口禪侶、終一日之書写、先弘曉行法華懺法、一如去正月儀、午刻終写功、未刻遂供養（忠玄律師、請僧皆籠僧也）、件經内外題、大將相共書之、跡門余書之、本門大將書之、外題惣余書之、大將入夜帰南家了、今夜故女院御盆供、如例年被送法性寺、依大治例也、但無院司使、只付寺家了、余拜盆供送兩堂如例、故女院御料過期年行之例也

『玉葉』養和二年（一一八二）九月二十六日条

仏師明円參上、申御法事御仏事之間事、

『玉葉』養和二年（一一八二）十一月十八日

此日、故女院周闕御法事也、依大治四条宮例、修曼荼羅供、中陰雖為七僧法事、周闕如此、又奉供養御墓所小堂、仍卯刻、着烏帽直衣伴大將（布施）、參御墓所（八葉車、前驅二人、共人兩三人）、導師大原聖人（号本淨房）、件人依為御善知識、殊所請也、請僧三口（留候僧三人也）、件塔中、素奉安石卒塔婆、其外無別仏、又奉副供養法華經一部、説法供養法楽了、引布施、其後、直參御堂、奉居御仏（半丈六、依無所、便宜撤座、奉居華宝於本仏壇上、本仏前也）、仏師明円給祿（被物一重）、次導師之承仕等參上、飾曼荼羅供壇、此間、山法印僧都、二位中将等參上、其後、女房等為聽聞參入、（略）

『玉葉』養和二年（一一八二）十一月二十八日

寅刻懺法了（同月二十六日より懺法開始）、書始之条、大將已下旧臣之男女倍從等廿余人、手自書之、書手皆三日潔斎、読懺法（各於家読之也）、申刻書了、酉刻、導師參上（澄憲僧都）、即事始、説法優美、衆人拭淚、於澄憲可謂得日、誠珍重也、此中釈云、一切女人ハ三世諸仏真実之母也、一切男子ハ、非諸仏実之父、故何者、仏出世之「時」、必仮宿胎内、縦為權化胎生之条無論、於父者無陰陽和合之儀、身体髪膚不受其父、仍無父子之道理之故也、依之言之、女者勝男者歟云々、此事、尤可珍事有興之言、

◆11 元暦元年（一一八四）五月十七日 九条兼実、春日御社絵像を拝し奉る。

『玉葉』元暦元年（一一八四）五月十六日

今日神斎、依明日奉拜図絵御社也、

*『玉葉』元暦元年（一一八四）五月十七日

自奈良僧正許、被奉図絵春日御社一鋪、余早旦沐浴解除之後、着束帶（帶剣如常）、取幣帛（小幣六本指之、依為屋内小指也）、於御社宝前、兩段再拜如常、其後乍著束帶候宝前、奉転読心經一千卷、其後取幣帛一本、社別奉拜（四所、若宮、率川等也）之後退下解脫、随分之苦行也、即始自今日七ヶ日之間、一族相并可奉読一万卷也、余每日入堂（其装束浄衣也）、今日、大將同参詣（衣冠不奉幣）

『玉葉』元暦元年（一一八四）五月二十四日

今日、余沐浴解除（日来、毎日不沐浴、不解除）、着衣冠、参宝前、取幣奉拜、即奉返送之、相副鏡一面、為神宝、造金銀獅子形、（略）

◆12 文治三（一一八七）年八月二十一日 藤原兼実、長者以後始めて平等院渡御し、経藏を開き宝物檢知。建久八年（一一九七）三月二日、藤原基通、長者以後始めて渡御、建仁三年（一一〇三）八月二十四日、藤原良経、摂政以後始めて渡御。

*『玉葉』文治三年（一一八七）八月二十一日

（略）此日長者以後始可参平等院、先例多雖当日帰洛、明日依可参天王寺、所一宿也、（略）次参経藏中門内、他人不入、（略）開封、家司宗頼朝臣着衣冠勤仕之、（略）先見御起請文、土御門右大臣筆、白色紙、（折界有印）、奥在御判、（本願御判也）、次見目錄四卷、（一切経目錄二局有銘上下、宝物目錄二局、無銘）、（略）先奉出仏舍利、（略）鑑真和尚五十粒、弘法大師九粒、慈覺大師三粒、智証大師六粒也、（略）次奉礼弘法大師御本尊愛染王、此外被納件厨子、木像御仏等、皆奉礼之、（略）次余施入道風筆金光明經四卷、（加帙簀也）、其上以檀紙二枚卷之、件檀紙聊注付施入之由了、是先例也、故殿保元度、被納道風香炉峯本、入道関白仁安、又被納手本一局、各有施入状也、模件兩度書様所書也、件経臨期召取之、（宗頼朝臣持参之）、
文治三年八月廿一日、初参平等院、開経藏之次、施入小野道風筆金光明經一部四卷了

撰政、（在御判）、

件経加納被入如此経之経等之手箱、件手箱在西中厨子也、（札云、御堂御筆、然而他筆経等多入之）、其後見琵琶并琴等、要枢之物等少々見了、依日景傾、皆悉如本奉納每物、余付封、次出経藏、帰宿所、于時日没以後也（略）

『玉葉』建久四年（一一九三）十月二十七日

已刻参経藏、終日礼仏像等、

『玉葉』建久五年（一一九四）八月二日

自今夜中宮御祈、始修愛染王法、権大僧都（東寺三長者）、印性為大阿闍梨、件僧六口、大盤所廊塗檀、以庁屋為僧宿所、僧房装束、自庁沙汰給之、去廿三日所始之愛染王（白檀）、今日造了、即以件仏為本尊、（六寸、居高三寸）、以平等院宝藏大師御本尊印相写之、余年来持仏即同印相也、彼手捧日輪也、中宮令逢時給、余候御傍、祈念御願成就之由、時了多於御所有御加持、其後余退出、

『玉葉』建久七年（一一九六）三月三日

已刻、参経蔵、(略) 法会如常 (略)

『玉葉』建久七年 (一一九六) 三月六日

早旦、参経蔵、女房車、昇放輪、入中門、寄経蔵、定能立屏風、正面南間、懸隔御簾、為女房居所、(女房、故内府上女房二人、三位殿宣旨)、被見宝物等之後、帰小川、(略)

*『猪隈関白記』建久八年 (一一九七) 三月二日

(略) 此日殿下〔藤原基通〕初渡御宇治、(略) 次諸堂巡見給、次令参経蔵給、今日依吉日被開之他、(略)

『猪隈関白記』建久八年 (一一九七) 閏六月十六日

天晴、曉更殿下渡御宇治、余候御共、辰時着御宇治、参御平等院、次令渡小河御所給、尼御前〔基通母〕令渡給、可令参経蔵給之故也、

午時許殿下奉具尼御前、令参御経蔵給、被開之也、次於折敷屋御覽宝蔵物、了還御小河、入夜乗船、

『猪隈関白記』建久九年 (一一九八) 六月二十四日

天晴、未明殿下渡御宇治、(略) 辰時着御宇治、参御平等院、則令渡小河給、(先々所也)、午時許殿下参御経蔵、被開之、家司左衛門権佐光親〔藤原〕開之、御覽了還御小河、(略)

『猪隈関白記』正治元年 (一一九九) 十月四日

天晴、時々時雨、鶏鳴殿下渡御宇治、(略) 辰時着御宇治、橋朽損、仍渡口用船、参御平等院、即令渡小川御所給、尼御前〔基通母〕・姫君〔家実姉〕同令渡給、為御覧経蔵也、余同候此所、余女房等来、今日被開経蔵也、午時許殿下奉具尼御前・姫君、参御経蔵、家司〔平〕親輔衣冠開之、(略)

*『明月記』建仁三年 (一二〇三) 八月二十四日

(略) 殿下〔良経〕出御此御所〔女院御所〕、初入御宇治也、(略) 入御阿弥陀堂、(只礼仏許也)、次渡橋に入御□□堂、次入御経蔵廻廊門、(被開門戸)、(略) 有家朝臣〔院司、衣冠〕、長兼朝臣僧等、(供僧三人、蔵司)、自左右進寄開戸退下、開三間戸、次殿下公達人御、次第被開仏経等、此間予長兼在廻廊辺、少時召参進、仰云、もたせたりつる物〔裏檀紙〕、可進由可仰御共侍、予帰出仰大膳敦尚、(有官別当也)、裏檀紙巻物ヲ入御硯蓋持来、予取之持参、是被納加物也、(脱查於壇下昇)、暫居戸外、少々拝大師像、又退下 (略)

『明月記』元久元年 (一二〇四) 七月十二日

(略) 参院御所、(略) 退出之後参経蔵、殿下以前御、有家朝臣衣冠、為開御経蔵也、今日経南北経蔵、御覧西御倉宝物、而鑑在経蔵、(廻廊内)、先可開之由寺家申之、仍院司忽衣冠向也、有種々珍物、日暮還御、(略)

『明月記』元久元年 (一二〇四) 七月十三日

参院、今日御狩出御之間、列居之後、参宝蔵、又見種々珍物、

『明月記』元久元年 (一二〇四) 七月十五日

参院、今日宝蔵御覧也、午終許御幸、(御輿)、公卿侍臣騎馬、(公卿小々輿先陣)、入御西大門、於経蔵廻廊戸下下御、自筵道昇御、公卿皆扈從、不可然云々、殿上人猶以入、(小々被出了)、(略)

〔参考〕

建保四年 (一二二六) 八月十日 孝賢法師、醍醐寺観心院にて、興然闍梨本を以て宇治宝蔵八幡大菩薩御影を写す。

*『八幡宇佐宮御託宣集』 小椋山社部 下

抑大菩薩御影像事、鳥羽院御灌頂之後、奉納宇治宝藏、奉写一本、伝于法場、已付一流、殊以秘藏為護佛法、依有勅許也、展転相承、孝賢法師、建保四年丙子八月十日、以興然闍梨之本、於醍醐觀心院、奉図御面許、御体以下御衣等、色々細々能記付之暗以被知歟、

承久三年（一一二二）六月十六日 武士入洛。平等院経藏の宝物・法成寺宝藏の御物を追捕す。

*『百鍊抄』

十六日。己巳。武士入洛。已著六波羅。京中追捕。以外狼藉也。凡雖靈社靈仏。不恐之不憚之。（略）平等院経藏宝藏内宝物。併武士追捕取。累代御物。撰錄宝物等。只在此御倉。一々被沙汰返。兼又法成寺同追捕宝藏御物等。一々可令沙汰返。又吉田社。氏三社之其一也。不可有狼藉之由。所被思召也。可差進守護人云々。

◆13 建久三（一一九二）年十一月二十五日 源頼朝、永福寺を建立し供養。京都より導師を招請。

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）一月二十一日
渡御于新造御堂地。（略）

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）六月十三日
幕下渡御新造御堂之地。畠山次郎。佐貫四郎大夫。城四郎。工藤小次郎。下河辺四郎等引梁棟。其力已如力士数十人可尽筋力事等。各一時成功。觀者驚目。幕下感給。（略）

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）八月二十四日
二階堂地始被掘池。地形本自水木相応所也。仰近国御家人。召各三人疋夫（云々）。（略）

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）八月二十七日
將軍家渡御二階堂。召阿波阿闍梨靜空弟子僧靜玄。堂前池立石事。被仰合（云々）。巖石数十果。自所々召寄之。積而成高岡（云々）。

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）九月十一日
靜玄立堂前池石。將軍家自昨日御逗留行政宅。為覽此事也。汀野埋石。金沼汀野筋鵜会石嶋等石。悉以今日立終之。（略）

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）十月二十五日
二階堂被立惣門（云々）。

*『吾妻鏡』建久三年（一一九二）十月二十九日
永福寺扉并仏後壁画図終功。修理小進季長画之。是被摸秀衡建立円隆寺。至于画図。一事已上如彼（云々）。

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）十一月二日
御堂供養来月可被遂行之。導師下向之間雜事以下為行政。盛時等奉行。（略）

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）十一月十三日
二階堂池奇石事。猶背御気色事等相交之間。召靜玄重被直之。（略）

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）十一月二十日
永福寺當作已終其功。雲軒月殿。絶妙無比類。誠是西土九品莊嚴。遷東関二階梵宇者歟。今日御台所有御参

〈云々〉。

*『吾妻鏡』建久三年（一一九二）十一月二十五日

（略）今日。永福寺供養也。有曼荼羅供。導師法務大僧正公顯〈云々〉。前因幡守広元為行事。導師請僧施物等同于勝長寿院供養之儀。（略）

◆14 建久四（一一九三）年十一月二十七日 源頼朝、永福寺薬師堂を建立し供養。京都より導師を招請。

『吾妻鏡』建久四年（一一九三）九月二十七日

来月御堂供養導師下向之間事。被仰遣宮内大輔重頼之許〈云々〉。

『吾妻鏡』建久四年（一一九三）九月三十日

依御堂供養事。為警固可参上之旨。被廻奉書於近国御家人等。梶原平三景時。右京進仲業等奉行之。

『吾妻鏡』建久四年（一一九三）十月三日

御堂供養導師下向之間海道駅家雑事送夫等事。被支配御家人等。今日付雑色等所被遣也。来廿日比可令出京〈云々〉。

『吾妻鏡』建久四年（一一九三）十一月八日

前僧正真円〈号亮〉。自京都参着。是永福寺傍建梵宇。被安置薬師如来像之間。為供養導師依被招請也。点「止」比企右衛門尉能員宅。被招入之〈云々〉。又願文到着。草式部大輔光範卿。清書按察使朝方卿〈云々〉。

*『吾妻鏡』建久四年（一一九三）十一月二十七日

永福寺薬師堂供養也。將軍家渡御寺内。於南門外整行列。（略）

◆15 建久五年（一一九四）八月十六日 九条兼実、故皇嘉門院の御所を移し、比叡山大乗院を建立す。それに先立ち、七月、法橋覚朝、一尺観音・勢至ほかの料物支度を、飾仏師橘吉弘、同御師支度を注文。（『玉葉』当日条は省略）

『門葉記』卷第三百三十一 寺院二 無動寺 大乗院

（略）

無動寺大乗院供養願文

弟子関白従一位藤原朝臣算兼実敬白、（略）建立桧皮葺、三間四面堂一于、仏後障子二間内、東則奉図薬師如来、日光菩薩、月光菩薩、十二神将、不動明王、大威徳明王等像、并慈覚大師、相応和尚等真影、西則奉図釈迦如来、十大弟子、普賢菩薩、文殊師利菩薩、多聞天王、持国天王、并伝教大師、慈恵僧正等真影、東方障子図絵九品往生三輩儀式、奉安置皆金色一尺六寸阿弥陀如来像一体、一尺観音勢至弥勒地藏四菩薩像各一体、其内於弥勒如来弥勒地藏等三尊者、早当先院（皇嘉門院）中陰之聖忌、敬設供養讃嘆之道儀、即以御遺髪奉篋此腹藏、於今観音勢至者、新所奉加造也、此外奉造立一尺帝釈天・火天・炎魔天・羅刹天・水天・風天・毘沙門天・伊舍奈天等像各一体、随其擁護之方、安此壇場之下、奉書写金字妙法花経一部八卷、無量義観普賢阿弥陀転女成仏般若心等経各一卷、奉摸写墨字妙法蓮花経二十部百六十卷、無量義観普賢阿弥陀転女成仏般若心等経各二十卷、方今仲秋八月吉曜良辰、莊嚴尽美、供養翻誡、（略）

建久五年八月十六日

弟子関白從一位藤原朝臣兼実敬白

(略)

大乘院供養事〈略儀大概〉

一、日時事

八月十六日

(略)

一、堂莊嚴事

御仏〈自殿下可被渡〉

(略)

仏後御仏、御聴聞所障子絵、〈未定〉

(略)

右以前条々大略如此歟

建久五年七月六日

注進

一尺観音勢至料物支度事

合

真漆^{定一升}一升六合〈体別五合〉

塗料〈一体別八合〉

沙金^{定一兩二歩}三兩〈体別三分〉

押箔料〈一体別一兩二分〉

能米四石〈仏師以下道々者食料、一体別二石〉

准絹三千疋〈同单功料、一体別千五百匹〉

以上除座光之金具并飾等定

右注進如件、

建久五年七月 日 法橋寛朝上

注進

一尺観音勢至御飾支度事

合

上品定

栗玉二千果〈体別千果〉 代二千匹〈一果別一匹〉

中玉二百果〈体別百果〉 代四十匹〈二匹別五果〉

小玉八百果〈体別四百果〉 代八十匹〈二匹別十果〉

吹交小露四十果〈体別二十果〉 代四十匹〈一果別一匹〉

糸金大百筋 代二百匹〈一筋別二匹〉

中百筋 代百匹〈一匹別一筋〉

小百筋 代五十匹〈二匹別二筋〉

以上一体別百五十筋

銅薄一枚〈体別半枚〉

代三十四

天冠二枚〈体別一枚〉
頸節二枚〈体別一枚〉
輪節二枚〈体別一枚〉
珠寶六枚〈体別三枚〉
代六十匹〈枚別三十匹〉
代四十匹〈枚別二十匹〉
代六十匹〈枚別三十匹〉
代六十匹〈枚別十匹〉

火打

中之小 小之小

以上三百枚〈体別百五十枚〉代百五十匹〈一匹別〉

单功三百匹

食料二石

都合参仟二百六十匹〈定二千匹〉

建久五年七月 日

飾仏師橘吉弘

注進

観音勢至二体座光堀物支度事

合

座二脚

熟銅六斤〈各三斤〉
定三斤、各一斤八両

減金八両〈各四両〉
定四両、各二両

庄手六百匹〈各三百匹〉
定四百匹、各二百匹

单功千二百匹〈各六百匹〉
定八百匹、各四百匹

食料米六石〈各三石〉
定四石、各二石

良折銀二両〈各一両〉
定一両、各二分

光二体

熟銅六斤〈各三斤〉
定三斤、一仟八両

減金十二両〈各六両〉
定六両、各三支

庄手六百匹〈各三百匹〉
定四百匹、各二百匹

单功千二百匹〈各六百匹〉
定八百匹、各四百匹

食料米六石〈各三石〉
定四石、各二石

中尊茄子二口

熟銅一斤八両
定一斤

減金一両二分
定一両

庄料百匹〈定〉

单功二百匹〈定〉

食料一石五斗
定一石

以上熟銅十三斤八両、減金二十一両二分〈定十一両〉、庄手千三百匹、单功二千六百匹、
手单功定、食料十三石王斗、良金銀二両、
定七斤、定九石、定一両

右注進如件

建久五年七月十九日

散位源重包

注進

一尺八方天像八体御支度事

合

真漆 定二升四合、体別三合
四升八合〔監料、一体別六合〕

砂金 定二兩
二兩二分〔細薄料、一体別一分、二分帝釈色料〕

能米 定拾貳石
拾陸石〔仏師并道々者食料、一体別二石〕

准絹 定玖仟陸佰匹、体別仟二百匹
万貳仟匹〔同单功料、一体別千五百匹〕

准絹 定千二百匹
仟陸百匹〔八体光并持物料、金銅、一体別二百匹〕

砂金 定一兩
一兩二分〔同減金料〕

彩色料准絹六千四百匹〔一体別八百匹、貴舟〔黃丹力〕直并单功料〕

食料 定八石、体別一石
乃米十二石〔一体別一石五斗〕

飭料 定
准絹八百匹〔一体別百匹〕

食料 定一石六斗、体別二斗
乃米二石四斗、〔一体別三斗〕

右注進如件

建久五年七月二十七日

法橋覺朝上

〔略〕

◆ 16 建久五年（一一九四）九月二十二日 興福寺供養、金堂本尊眉間の銀仏關連資料。〔『玉葉』
当日条・建久興福寺供養次第省略〕

『玉葉』養和元年（一一八一）一月二十二日

申刻、中御門大納言来、無殊事、伝聞山階寺両金堂驗仏、奉取出了〔十一面云々〕於金堂中尊眉間仏者、未出来給云々、若遂失了給者、誠我氏之減盡也

『玉葉』養和元年（一一八一）一月二十六日

〔略〕

一仏像、堂舎、皆悉「帰」灰燼、其中、西金堂十一面観音、高名驗仏也、而件仏一軀、不慮奉取出了〔堂衆、其実名不覚、以袈裟、奉裏抱出、當時奉安件僧「房」、可奉安置何処哉、先々雖有此災、寺中未必悉焼失、仍奉移他堂、是定例也、至于今度者、弘地煙滅、寺中堂舎一字不殘、龍華院、禪定院等、雖免余煙、已寺外也、為之如何、又件仏濫觴、如古老伝者、弘仁年中、有寿広和尚〔実名不覚〕、奉求出、奉安置中金堂之處、御鉢太重、而敢不動揺給、欲奉居西金堂、奉抱出之處、更無煩奉移了、即輒難奉動、若可及御占歟、如何、此外、東金堂釈迦三尊、同奉出了〔當時、右所不分明〕、又金堂中尊、眉間銀御仏〔大織冠、被不御髪之御仏是也〕不知在否之處、舞人光近、翌日參上、奉求灰中、即奉見付之、件二尊安置之所、又如何〔略〕

『玉葉』養和元年（一一八一）一月二十九日
（略）

寺家注文

金堂釈迦眉間奉籠銀釈迦小像事、

旧記云、康平三年（庚子）五月四日夜、興福寺金堂焼失、翌日求出釈迦眉間銀仏、容顔自存、敢無損云々、而今度火事之後、正月一日、御寺御監光近、臨壇上、奉求件像之處、丈六烏瑟、雖成灰燼、其形猶如存、自彼中、求出銀像、仏鉢沸而無形、當時安置春日宝藏、奉渡何処、常樂会、仏生会等、可勤行哉、

『玉葉』建久三年（一一九二）一月十七日

（略）今日、予先参法成寺仏所、奉礼仏、少々仰可奉改直事等（略）

『玉葉』建久三年（一一九二）一月二十日

（略）予参法成寺、大將相伴、又奉礼仏、猶不快、重仰子細了（略）

『玉葉』建久三年（一一九二）一月二十五日

（略）参法成寺仏所、入夜帰参、申子細、相好未奉直云々、申可直之由仰之（略）

『玉葉』建久五年（一一九四）二月二十八日

座主被来、親経朝臣申条々事、其中興福寺御仏寸法相違事、召具院尊已下、可参之由仰之（略）

『玉葉』建久五年（一一九四）二月二十九日

（略）親経朝臣召具院尊已下参入、有申旨等、可問明円并寺家之由仰之、

『玉葉』建久五年（一一九四）七月二十三日

此日於法成寺、奉始興福寺金堂中尊（仏師法眼明円、印性僧都、加持御衣木）、行事官左中弁親経朝臣已下、向寺門始之、於金堂前広庇始之（略）

『玉葉』建久五年（一一九四）八月二十二日

参法成寺、奉礼新造仏、可改直事粗仰了（略）

『玉葉』建久五年（一一九四）九月十五日

参法成寺、奉礼興福寺金堂御仏、相毫頗宜歟、明後日可奉南都云々、（略）中尊為大像之間、陸地不可叶、以船可奉渡脇士座光等、奉乘案可用陸地之由評定了、仰含行事并親経及侍所事等了、又御面薄其重猶少、依今十重可奉押、又座光同可押薄、仍其数薄、二万枚計同奉相具於南都、可奉押之故也、自御堂参内、入夜退出、此日奉渡焼銀相具、家司長房奉安置法成寺了、暫奉安金堂内陣云々

『玉葉』建久五年（一一九四）九月十六日

行事官行事侍等参法成寺、終日可奉渡御仏之間事、致其沙汰、人夫猶不足、入道中納言八百人沙汰進之上、召諸国并御願寺等及僧宮達等、領状二千余人云々、手宛定千六百人余乘太多、而各所進不如員数之間、殆不足云々、国々多以不進、可譴責之由召仰了、

『玉葉』建久五年（一一九四）九月十七日

（略）今日告文銀像事殊載之、春日告文同之（略）

『玉葉』建久五年（一一九四）九月二十日

參法成寺、於金堂仏前、奉鑄銀小像、如図只一度に奉鑄成了、悦恐不少、座主修行法祈念、皆有作法等云々、予帰宅、金造之間也、其間、座主猶在堂、未刻開眼、其時又參堂、座主為導師、被物一重、布施一裹、(被物季經卿取之)、舍利一粒奉籠銀像之中、即安置黑漆小帳、同車帰宅、奉安淨所、

『華頂要略』門主伝第三 建久五年(一一九四)九月二十日

興福寺本尊頭中銀仏於法成寺奉鑄之、依長者之請啓白治鑄之間加持念誦。仏像成就、即日開眼(今日長者同有參堂)

『門葉記』卷第二百二十八 門主行狀一 慈鎮和尚 建久五年(一一九四)九月二十日

興福寺本尊頭中銀仏於法成寺奉鑄之。依長者之請、啓白。治鑄之間、加持念誦。仏像成訖、即日開眼。(今日長者同有參堂)

『玉葉』建久五年(一一九四)九月二十一日

(略) 參御寺(略) 予向金堂為捧出銀仏奉納眉見之間也、件事更無煩、可奉納眉見之底、其上可入玉之定、仰定了、此事尤為悦不少也、(略) 今日前大僧正被來、今日余自京着佐保殿、即招別當僧正、授銀像、為遣仏所也、余路之間安車中、降自車之時奉入懷中、予構淨机奉安其上、召覺憲所授也、奉渡仏所之間、及殊威儀之時、無便宜、又差別如家司、頗事聊尔也、依召寺家別當為使召渡、是近案也、(略)

*『愚昧記』建久五年(一一九四)九月二十二日

今日興福寺供養也

(略) 未被仰勤賞之前、頭弁來座下曰、院尊(講堂仏師)、明円(金堂仏師)、各依為極位之者、以弟子拳申法橋、而明円弟子十九才、院尊弟子十六七許云々、各壯年者也、被聽綱位如何、予問曰、人々相議可申歟、頭弁曰不然云々、予讓右府、而依固辭、予申曰、永承已後三个度仏師皆以勤賞、今度不可默止、任申請被叙何事候乎、此後猶示右府曰、此条如何、答曰、賞疑依重許容、何事有哉、宗頼朝臣婦參仰勤賞之後、經壇上東行了、其後又來示、永承長者已下纏頭舞人、康和長者一人脱衣賜光末、是長此道之上、齡余八旬之故、殊有抽賞歟、兩度例如此、而近代纏頭無其儀之上、被載新制了、何様可候哉、若猶任康和例一身可賜哉、予示曰、至永承者、不叶近例、今度被用康和例、雖須隨彼議、光末殊有抽賞之故歟、今度強不可然歟、右府曰、只此定也云々、予今日長者參上之後、自西門追可參入由雖相存、南門会合枉可相率之由、内々以使者有命、仍慙所隨彼命也、太政大臣、右大臣以下參佐保殿列車至、太政大臣者昨日被春日之時同扈從云々、昨今兩日中納言以下騎馬前駢、是長元、永承、寛治等例歟、但昨日有不參人云々

勤賞

權律師信憲(別當、權僧正賞讓)

法橋乘信(權別當法印範玄賞讓)

成朝(金堂弥勒浄土仏師賞)

幸円(絵仏師)

院俊(講堂仏師院尊賞讓)

宣円(金堂仏師明円賞讓)

正四位下橋以政(次官)

正五位下藤宣房(御仏行事)

藤宗方(幡行事)

藤季保(同賞)

從五位上平宗信(廻廊造營賞)

從五位下中原明基(行事、檢非違使如元)

舞人狛則近

大工時行

已上各賜二階

仏師法眼康慶

長官藤原親經朝臣、判官中原盛言

御仏行事高階資泰朝臣

金堂造国司源季長朝臣、同通具等追可申請(略)

◆17 建久五年(一一九四)十二月二十六日 永福寺内新造薬師堂建立供養・京都より導師を招請。

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)七月十四日

永福寺郭内。被建立一字伽藍。今日上棟。將軍家監臨給。工等預祿。大工。馬三疋。一疋置鞍。野釵一。小工各馬一疋。白布十端也。行政。仲業奉行之。

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)九月十一日

永福寺内新造御堂宿直人事。今日被結番之(云々)。(略)

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)十月十三日

永福寺内新造堂事。今年中依可被遂供養。為導師可被請申東大寺別当僧正之由(云々)。仍右京進季時為其使節上洛(云々)。

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)十一月七日

永福寺内新造御堂被立扉。仍將軍家監臨給。工等預別祿(云々)。

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)十一月二十日

御堂供養間導師以下施物等。自京都到着。前掃部頭親能為奉行所調進也。

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)十二月十三日

右京小進季時自京都下着。御堂供養導師已可有下向之由(云々)。

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)十二月十五日

御堂供養導師近日可令下着之由。先使到来之間。為其迎可被遣御家人等。(略)

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)十二月十九日

東大寺別当前僧正(勝賢)。下着。被招入于八田右衛門尉知家宅(云々)。

*『吾妻鏡』建久五年(一一九四)十二月二十六日

永福寺内新造薬師堂供養。導師前權僧正勝賢(云々)。將軍家御出。(略)

◆18 建久六年(一一九五)六月六日 仁和寺相応院禪覺僧都、院經藏の八幡御影を請う。

『三僧記類聚』(仁和寺本第二冊) 八幡御影事

建久六年六月六日、予(禪覺)為御室御使参于院、申云八幡檢校参状云、弘法大師御真筆八幡大菩薩御影在于勝光明院宝藏歟、被奉移安于当社外殿云々(具旨有别)、自殿下為宗頼朝臣奉行、件事被奉尊之法眼御房申給云々、寬覺闍利(皆明寺)、登高雄之次求得件御影、進鳥羽院写タル本ハ進高野御室被安置于北院御經藏云々而宗頼朝臣御教書状ニ寬覺進之由被任云々、法眼御房高明也

同八日、予為御使向御經藏奉請出件御影○見之処、三幅赤地錦縁、御躰ハ老比丘形、着衲衣、赤蓮華有赤以光

上有日輪、左手持水精含珠、右手持六輪錫杖、右方上有色紙形（其銘可書之）

- ◆19 建久六年（一一九五）八月十二日 中宮御產御祈のため、中門廊にて丈六仏ほか五牀の御衣木加持、翌日造立し法成寺にて供養。

*『三長記』建久六年（一一九五）八月十二日

（略）早可始御仏之由有仰、即被始、御仏五体、不動、（丈六、秀長朝臣沙汰）、延命、（等身、亮沙汰）、仏眼、（三尺、大夫殿御沙汰）、六字、（等身、長房沙汰）、不空羼索、（等身、御所沙汰）、各於中門廊始之、（於庭上始之、先例也、甚雨之間、円堂上敷小筵、備加持具）、大法阿闍梨（実慶、覚成、勝賢僧正等也）、等加持御衣木、於車宿引幔、即仏師等彫刻也、（略）

『三長記』建久六年（一一九五）八月十三日

（略）入夜參法成寺、今日所被始之仏像等有供養、印性僧都為導師、行法了給布施、（取物裏物各三）、丈六像、人夫不足之間安置有煩、（略）

- ◆20 建久八年（一一九七）八月十九日 仁和寺北院の愛染明王像を取り出す。

『三僧記類聚』（仁和寺本第三冊）愛染明王事

建久八年八月十九日、北院御経藏仏像依仰被出之間、奉拜愛染王像二鋪一補（円堂様）、獅子頂安五古鈎、但其五日不屈如是以前三古也、持赤色蓮座、蓮色同、白瓶口吐宝珠等、日輪有突座下在蓮唐草地

- ◆21 建久八年（一一九七） 仏師運慶、湛慶、康運、康勝、運助、康弁、運賀、東寺堂塔仏像を修理、新造す。（『東宝記』第一 仏宝上条は省略）

『三僧記類聚』（仁和寺本第三冊）東寺中門二天事

或人（頭位）語云、一手持刀一手押腰、二天共同像也、何天ト云事、難弁曰、修理之時、見彼像中一体二二天種子等ヲ籠タリ、是則通用之二天像二体ヲ以テ、四天ヲ含スル心ナリ云々、高雄上人修造被寺之間、聞及此事、上可尋実否云々

- ◆22 正治元年（一一九九）八月四日 昇子内親王、日吉社にて御経供養。十禪師拜殿にて鏡一面（十社御正体を鑄付）・御仏一鋪（十二社御正体を御筆にて画絵）を懸け、御筆地藏陀羅尼経を供養。

『明月記』正治元年（一一九九）八月四日

曉鐘之程出京参日吉、（懷中御願文、并女院御書等、夜前給之、）於大津辺天漸曙、著宿所、申参由女房了、且以忠弘進入御書、以孝奉行此間事、未参云々、已時参上、（浄衣、）良久先御宮廻、（予取繼御幣、此事甚難入興、偏是准女院御幸儀也、先是女房少々乗輿、入御聴聞所、）社司著衣冠申祝、於大宮宝前被行御神樂、（俗称人長神樂、有和琴等、）給各禄、（ヤヲトメ疋絹、正人等布、）次正神事以下不被待、御神樂訖、且御宮廻、自伏礼入御御聴聞所、（以十禪寺（師）拜殿為道場、其巽角一間懸御簾机帳等、副屏風為其所、）以前僧等着座、御導師猷範律師在南座、請僧二口在北座、（仰座主請之云（云））鏡一面之内、（十社御正体、被鑄付、）御仏一鋪、（十二社御正体、御筆画絵、）経或摸写、或書写之内、地藏陀羅尼経御筆云云、画像并御鏡懸、（仮、）仏台二脚奉並立、其前香花以下事如例、南縁敷畳、予、公茂、隆実、（依無人僅被催出二人、共無官五位也、）著

此座、予仰可免願由、導師昇礼盤說法、大衆聽聞、不知其數、良久事了、予以下取布施、導師被物二重、單衣重一領、布施一裹、色々布二裹、(各)二度取之、次請僧紙裹各一、(両手不取之)次寄御輿還御、于時申終也、入夜私奉幣、還入宿所、(略)

◆23 建仁二年(一一〇二)十月二十六日 藤原基通、故忠通自筆金字法華經・運慶作一尺六寸白檀普賢像供養。翌年一月二十七日蒔絵厨子に納入し供養。

*『猪隈関白記』建仁二年(一一〇二)十月二十六日

此日殿下(基通)有御經并御仏供養事、御經法性寺殿(藤原忠通)御自筆金字妙法蓮華經一部、大治三年(一一二八)正月廿四日令書始給歟、以御反古為紙云々、件御經未調卷軸、仍無外題、殿下須令書給、而不可書給之由有仰、又無可書之人、仍■■■■梵字、又仮書外題被押付儀歟之間○(兼有沙汰、且)何樣可有哉由、被申合松殿之處、兩様之外不思得之由被申、遂殿下仮書外題於紺紙被押付也、御仏白檀一尺六寸普賢像一体、(仏師法眼運慶奉造之、件白檀(京極大殿(藤原師美)御時之白檀也)、於北殿御持仏堂有此事、堂莊嚴如恒、(略)

*『猪隈関白記』建仁三年(一一〇三)一月二十七日

殿下(基通)去冬所供養之白檀普賢可被奉入蒔絵厨子、之中十羅刹・四天王・二菩薩被書之、(隆親入道書之)、今日被供養、前權僧正倫向為導師、請僧三口、黑字妙法蓮華經一部同供養也、(略)

◆24 承元元(一一〇七)年十一月二十八日 後鳥羽院、最勝四天王院を建立、この日渡御。最勝四天王院關係資料。

*『猪隈関白記』建仁二年(一一〇二)閏十月八日

左小弁長兼(藤原)来云、院(後鳥羽)仰云、可被建立御願寺也、其所白河、旧御願寺惟多、不○(被)修理旧、今被建立新之条、何樣可有哉、鳥羽有洪水之難、仁和寺(又)木辻之辺■■(如何)、又御願寺様、法金剛院・觀自在院■■此兩所(之間被摸)如何、可計申者、余申云、白河・鳥羽之間猶可宜歟、仁和寺・木辻可隨地形之在様候歟、御願寺様可在御意者、

『明月記』建仁三年(一一〇三)八月二十四日

(略)又依召參、可被新造院御所之地可御覽、其路間事可仰兼時、出仰之、申云、御車難通、御輿如何、又參申此由、御輿無可召人歟、□□予申云、御輿候者不可憚歟、仰云、何事在哉、還出尋之、能季朝臣具輿云々、仍申其由、仰云、早可相儲、昏黑出御、(略)但入夜雨降、稠人狼藉無輿、私乘輿退帰了、(略)

*『明月記』建仁三年(一一〇三)九月九日

今日依有召先參殿下、被仰御願寺御障子名所事等、(略)

*『明月記』元久元年(一一〇四)八月八日

(略)承御願寺造作事、不造御堂造出小御所、可預勸賞哉云々、(略)

『門葉記』卷第二百二十八 門主行狀一 慈鎮和尚

同(元久二(一一〇五)年四月二十三日、白河房敷地依被進仙洞御願寺事始被行之、

『明月記』承元元年(一一〇七)一月二十四日

『明月記』 承元元年（一二〇七）五月十一日
依召參上、御障子名所猶可沙汰、清範承之、（此等事偏被仰一身、如何、若陰陽歟、）（略）

『明月記』 承元元年（一二〇七）五月十四日

御堂障子召付画工可令画之由、夜前有仰事、至愚之性本自不見洛外、又無繪骨、旁不当其仁之由雖恐申、有思食樣被仰下由、頭弁仰之、仍今日為沙汰其事、終日伺候、御神泉之後、於和歌所招藤少將秀能等、相共示合、少將依見東国、且依仰相副之、四人絵師今日三人參入、又仰云、以尊智、（大輔）、兼康、（内舍人）、可令書晴方、以康俊、（信能房）、光時、（八幡男）、可令書襲方、晴襲難計之由、重以掌侍申入、只可相計由被仰、粗見障子所々、今日分充四人了、三人受取、先書取繪樣可進覽由、示合之退出、大輔房尊智、十二間、春日野、吉野山、三輪山、龍田山、泊瀬山、（已上相双）、若浦、吹上浦、（已上双）、富士山、淨見関、（已上双）、大井河、宇治、（已上双）、相坂関、宗内兼康、十二間、付脇障子三間、難波、住吉、葦屋、布引瀧、生田杜、（已上双）、泉河、小塩山、腋障子一間、已上双、末松山、塩竈浦、腋障子一、已上双、阪麻浦、（腋障子一）、明石浦、志賀麻市、（已上双）、信濃房康俊、十一間、腋障子一、生野、海橋立、野中清水、高砂、（已上双）、武藏野、白河関、（腋障子一、已上双）、志賀浦、鳴海浦、浜名橋、宇津山、佐良之奈里、（已上双）、光時、（八幡平三）、十一間、（腋障子三間）、阿武隈河、宮城野、安積沼、（腋障子）、已上三間双、鈴鹿山、二見浦、大淀、（已上双）、交野、水無瀬、（腋障子一）、鳥羽、伏見、（腋障子一）、松浦山、如野筋雲水依可書連、各付之其双分給了、（略）

『明月記』 承元元年（一二〇七）五月十六日

（略）兼康来云、名所事以伝々說難書出、明石すま非幾路、罷向各見其所書進繪樣、若有遲々者恐乎、予云、此事雖片時可急事也、但云當時、云後代、尤可恐紕繆、揚鞭向其所、且為後代之談歟、何事在乎、（略）

『明月記』 承元元年（一二〇七）五月二十日

已時許參院、（東帶、）以康俊法師繪樣付頭弁奉覽之、承仰召仰、（略）

『明月記』 承元元年（一二〇七）五月二十一日

參和歌所、終日日臈、秉燭退出、仰云、名所にいなばの山可入、可出他所、与清範示合、いく野ヲ止了、絵相双間書連事、（如山野のすちをとおす也、）不可然由、今日仰改了、（かきにくき也、）

『明月記』 承元元年（一二〇七）五月二十二日

束帶參院、光時參入、仰含絵目六了、（略）

『明月記』 承元元年（一二〇七）五月二十四日

（略）兼康持參繪樣、付弁内侍進入、返給無別仰、出御了退出、

『明月記』 承元元年（一二〇七）五月二十五日

尊智持来繪樣、午時持參付頭弁、仰云、昨日のにまさりたり、（略）

『明月記』 承元元年（一二〇七）六月二日

（略）於和歌所召尊智令書大井河繪樣、（略）

『明月記』 承元元年（一二〇七）六月四日

（略）光時持来繪樣、以使送清範、兼康又持来一枚、同付之了、

『明月記』承元元年（一二〇七）六月五日

清範返送絵様、御所無隙難申入、可付頭弁者、仍送頭弁、（略）

『明月記』承元元年（一二〇七）六月七日

（略）御障子歌十日以前可進由、今日有重催、今夜仰云、大井河以光時可令書者、此間書行幸儀也、大略以承保記委示合了、総勘代々野行幸旧記斟酌而已、

『明月記』承元元年（一二〇七）六月八日

心神悩偃臥、和歌沈思、（涯分所当只此一事歟、）光時来、委旨示含之、定体房来、示合病事、健御前被来見、申御障子歌、老後庭訓闕、而奉喪先公、無示合人、

『明月記』承元元年（一二〇七）六月九日

（略）御堂供養出車、一品宮、公氏、実嗣、実氏、実時、通時、新女院（本儀三両、）頼平、忠頼、家嗣、今加二両、通方、実親、公雅、（為用意余分、）院御方三両切、物見親定、（辞退有責、）隆仲、家行已上可新調云々、先御幸、（未明、）别当先参御幸、又可参行幸由被仰、（○以下闕文アリ）他人被指分、於衛府者皆行幸、七条院御幸、新女院御幸、一品宮行啓、行幸、東宮行啓、而御後不可有殿上人之由被仰右大将、行幸之上可供春宮由被仰、不可然由被申、此將軍総痛騎馬、供奉不輟、来廿九日習礼御幸也、

『明月記』承元元年（一二〇七）六月十日

小男令参、有家朝臣持参御障子歌之由示之、（略）入夜持参御障子歌、良久還御之後、付清範進入、御覽訖返給、清範仰云、殊勝歟、雖不及委仰、有尋常沙汰者為面目、即退出、依所旁也、（略）

『明月記』承元元年（一二〇七）六月十一日

大藏卿示送云、昨日持参歌、左近不見之間空退出、今朝所進也、

『明月記』承元元年（一二〇七）六月十二日

今日御幸新御堂云々、後聞、御堂供養延引、来十一月云々、每事遅々之故也、（略）

『明月記』承元元年（一二〇七）六月二十一日

参院、進覽光時絵障子一間、返下退出、（略）

『明月記』承元元年（一二〇七）六月二十二日

（略）仲国朝臣今日遣召絵師、参会御堂可会合之由、昨今相示、仍参向御堂、仲国清範来会、重仰合退蓬戸、（略）

『明月記』承元元年（一二〇七）七月二十日

参八条院、（御腰御惱今日宜御、）大納言殿、（障子詩題已給了、各可賦廿首由被定由被仰、）宰相中将殿、（久見参、）左大将殿、（自去五日御足不令踏立給、被渡御邪氣、調女房、）宜秋門院、基定少将語云、春日行啓、（八月十七日、）舞人、四位実嗣、実親、五位家季、（左門、）仲隆、（兵衛、）家嗣、（少将、）光実、（右門、）基保、（侍従、）基定、（少将、）御点云々、

『猪隈関白記』承元元年（一二〇七）七月二十三日

（略）右小弁頭俊（藤原）来云、来廿八日白河新御所御渡也、可参御幸之由有仰者、申承由了、五辻殿を被壞渡云々、（略）

『猪隈関白記』承元元年（一二〇七）七月二十四日

（略）此日有白河新御所御渡定事云々、

『猪隈関白記』承元元年（一二〇七）七月二十八日（『明月記』同日条は省略）

（略）今日上皇白河新御所御渡也、此御所五辻殿被壞渡也、入夜余着直衣・冠等参院、（略）先有御反閑事、修明門院〔藤原重子〕候御車給、公卿列居庭中、余寄御車、御隨身〔褐衣〕、発前音如常、出御東門、余供奉御後如常、入御自白河新御所西門、有反閑、黄牛・水火等如恒、宮内少輔宗信〔平〕・成長〔藤原〕等取、寄御車於寢殿南階、余寄之、則有五菓并吉書事云々、此間余退出、不着殿上、於殿上三献、可置紙云々、無御前儀、略儀也、

今日公卿大臣直衣、大納言以下衣冠、殿上人束帶之由被仰下云々、公卿中宮大夫公房〔藤原〕卿已下十余人・殿上人廿余人供奉、

『猪隈関白記』承元元年（一二〇七）八月三日

午時許参院〔後鳥羽〕、白河新御所也、参御前、可見廻之由有仰、仍見廻、有泉、〔申時許退出〕、参内、則退出、

『明月記』承元元年（一二〇七）九月二十四日

依指召相扶所勞、申時許参和歌所、宮内又参、御障子歌大略御点了、廿六所已被定其歌、其外廿所未被定、御点又大略訖、以清範下給、且可定申者、所存小々申之、又於御所評定已及深更、亥終許持来和歌三卷、〔皆悉也〕、猶可定申之由被仰、仍被見相議、雖已被定所、御製殊宜所々可被改由申之、又被入歌頗有子細所事同申之、愚詠已六七首、五六已被入定事、上古前達必不逢如此事、沈淪愚老于今存念、只以之施眉目歟、晴南面〔東〕、第一間春日野、於此事為最初、愚詠有恐、可然人尤可宜由申了、依及深更明朝可申由、左近相示、仍共退出、

『明月記』承元元年（一二〇七）十月二十四日

（略）入夜参院、名謁退下、秀能語云、御障子歌皆被替了、兼日沙汰無性体、如反掌、万事如此、

*承元元年（一二〇七）十一月五日 法眼印賢、最勝四天王院の舞樂面を新日吉本を模して作る。
舞樂面（散手）銘（奈良・東大寺藏）

〔最勝四天王院、以新日吉本模之、仏師法眼院賢、承元元年十一月十五日〕

『猪隈関白記』承元二年（一二〇八）二月九日

（略）今日最勝四天王院修二月也、余不参、依神事也、（略）

『明月記』承元二年（一二〇七）十一月十九日

（略）今日頭中将早参、雖催人人、頭弁今朝新御堂奉安御仏之間事奉行、遅々及日入参云々、（略）

『明月記』承元二年（一二〇七）十一月二十七日

今夜御堂御所御移徒、（略）

『百鍊抄』承元二年（一二〇八）三月二十五日

（略）今日。最勝四天王院薬師堂奉居御仏。

*『猪隈関白記』承元二年（一二〇八）三月二十八日（『明月記』同日条は省略）

(略) 今日最勝四天王院中藥師堂供養也、

*『明月記』承元二年(一二〇八)六月二十五日

宗宣、以經、清範等相共參最勝四天王院、為見障子也、但寺務取隱闔鈎不開、空歸、如蠻夷之地、

『猪隈関白記』承元四年(一二二〇)四月二十一日

(略) 別当光親(藤原)来云、来廿五日於最勝四天王院可被行百僧御読經、可參之由有院仰者、申承由了、

『猪隈関日記』承元四年(一二二〇)四月二十四日

今夕院御幸於最勝四天王院云々、依明日百僧御読經也

*『猪隈関白記』承元四年(一二二〇)四月二十五日

此日上皇於最勝四天王院以百口僧被転読三部經、(仁王經・法華經・最勝王經等也)、是此間天魔出見御祈也、百口之内御導師前僧正公胤也、仁王經百部、(顯宗僧三十三口、人別読三部、□一部導師読之、法華經三十三部、(密宗僧三十三口、人別読一部)、最勝王經三十三部、(顯宗僧三十三口、人別読一部)、早旦着束帶(不帶釵)、參最勝四天王院、先是僧皆參、并上達部少々參入、去夕有御幸也(略)

『猪隈関白記』建曆元年(一二二一)三月二十四日

(略) 自院為新藤中納言光親奉書被仰云、来月廿三十一日一切經供養九「凡カ」僧法服一具可調献者、申承由了、

『猪隈関白記』建曆元年(一二二一)三月二十七日

(略) 臨夕參院、依召參御前、前太政大臣(藤原賴実) 祇候、来月廿三十一日書写供養一切經事有沙汰、暫後退出、(略)

*『百練抄』建曆元年(一二二一)四月二十三日

上皇於最勝四天王院、一日被書写供養一切經、仍昨日御幸此御所、

*『門葉記』卷第二百二十八 門主行狀一 慈鎮和尚

同月(建曆元年四月)廿三日、為院御願、於最勝四天王院有一日頓写一切經供養事、和尚奉行之、即為此御祈、囑百口僧侶、毎日懺法一時經段法華經一部、同音讀之、(七箇日)

(裏書) 頓写一切經事、書手一万三千二百十五口、供養導師興福寺別当前大和尚雅縁、読師法印範円、呪願前僧正公胤、

和尚記云、一切經御願等、如御願果遂之後、重申身仮欲趣遠所、但更無勅許、歸入西山云々、

*『法隆寺別当次第』範円法印

建曆元年辛未四月廿三日、一院一日書写一切經在之、当寺筆師六十三人、人別粮米三斗、寺沙汰、

*『二代要記』二十 順德天王

建曆元年四月廿三日、以一万五千人僧侶、一日一切經書写供養導師前大僧正雅縁、

*『興福寺略年代記』

建曆元年四月廿三日、上皇一日一切經書写、於最勝四天王院供養、導師雅縁、惣一万五千僧也、興福寺四千僧、

『仁和寺御日次記』健保六年（一二一八）十二月二十二日

今日前大僧正慈円、於最勝四天王院、奉授灌頂於無品道覚法親王

*『百練抄』承久元年（一二一九）七月十九日

壬子、最勝四天王院、自白川被渡御五辻殿事始也、

『門葉記』卷第二百二十八 門主行狀一 慈鎮和尚

同（承久二（一二二〇）年）十月四日、最勝四天王院被壞之

『門葉記』卷第二百二十八 門主行狀一 慈鎮和尚

貞応元年（一二二二）四月二十六日、最勝四天王院跡敷地如元被返付之

『明月記』天福元年（一二三三）八月十八日

河崎（感応寺）被渡最勝四天王院之後、今日遂供養、（聖覚云々）駈催近辺、昨日奉送被物一重、御願寺之為体可悲歟、柱絵扉絵等皆如本渡之云々、念誦之間、午時許少輔入道來臨、（不経程）未時与心房授戒給、其後猶出見辻祭、（号御霊云々）一条東行、今出川北行、入禪相門、又參入持明院殿云々、懸風流用錦繡金銅、歸來後与心房婦給、（略）

◆25 健保二年（一二一四）七月二十七日 源実朝、大慈寺を建立し供養。導師に京都の高僧を招請せず関東止住の僧侶を用う。

『吾妻鏡』建暦二年（一二二二）四月十八日

為將軍家御願。大倉郷下一勝地。令經始一寺給。今日午剋立柱上棟也。是為被報君恩父德（云々）。

『吾妻鏡』建暦二年（一二二二）十月十一日

為覽新造堂舎（大慈寺）。將軍家渡御大倉。相州已下人々多以扈從。今日始及山水奇石等沙汰。此所有河有山。水木共得其便。地形之勝絶。恐可謂仙室歟。善信献山水絵図。態自京都召下（云々）。殊所預御感也。此間善信於御前申云。去建久九年十二月之比。夢想云。善信為先君御共。赴大倉山辺。爰有一翁云。此地。清和御宇。文屋康秀相摸搦所住也。可建精舎。我欲為鎮守（云々）。夢覺之後。上啓此由。于時幕下 將軍御病中也。忽催御信心。若及御平癒者。可有堂舎造営之由。被仰之處。翌年正月薨御。不被果之条。愚意潜為恨。而当御代依自然御願。有此草創。併靈夢之所感応也。境内之繁榮也（云々）。僧云。上又先年依有夢想之告。今所企之也。是何非合体之儀乎。古今事書者。文屋康秀為參河搦欲下向。出立于縣見哉之由。誘引小野小町（云々）。彼兩人。共逢于仁明之朝。可当清和御宇否哉（云々）。善信云。夢中事。誠以難備美証。但見古除書。康秀者。元慶三年任縫殿助歟。然者。仕清和朝之条無異儀歟。相模搦事・未勘之（云々）。將軍家頗以有御感。仰範高。被記御問答之趣也。可被作当寺緣起。以此夢記。可為事初之旨。内々被仰（云々）。

『吾妻鏡』健保二年（一二二四）四月十八日

於御所。大倉新御堂供養事。被經評議。（略）供養導師可被召請京都高僧之由。有御氣色。而広元朝臣。行村。善信等。勝長寿院已下供養（日）。被請三井寺醍醐碩德之時。往還之間。多以万民之煩（也）。（頗）非作善本意。於今度者。被用関東止住僧侶之条。可為一德政之由。頗以申之云々。

『吾妻鏡』健保二年（一二二四）四月二十一日

被造立金剛力士像。是為被安置于大倉新御堂惣門也。（略）

『吾妻鏡』建保二年（一二二四）七月一日

以民部大夫行光為御使。可為大慈寺供養導師之由。被仰葉上僧正〔采西〕（云々）。

*『吾妻鏡』建保二年（一二二四）七月二十七日

今日。大倉大慈寺（号新御堂）。供養也。（略）

◆26 鎌倉における京都・奈良よりの仏師・文物・事業などの受容

*『吾妻鏡』正治元年（一一九九）九月二十六日

於幕府。被供養不動尊一休。導師葉上房律師采西。布施被物五重。裘物五。馬一疋也。是於南都。日来被造立。為掃部頭親能沙汰。去比奉召下之（云々）。

『吾妻鏡』正治二年（一二〇〇）七月六日

尼御台所於京都被圖十六羅漢像。佐々木左衛門尉定綱調進之。今日到来。御拝見之後。令奉送葉上房之寺給（云々）。

*『吾妻鏡』正治二年（一二〇〇）七月十五日

於金剛寿福寺。新圖十六羅漢像。被遂開眼供養。導師当寺長老葉上房律師采西也。尼御台所為聽聞。有参堂（云々）。

*『吾妻鏡』建仁元年（一二〇一）十一月十三日

（略）今日迎故將軍家御月忌。於法華堂。供養法花經六部。是於京都。漸々所終写功也。導師題学房。請僧六口。導師布施。帖絹三疋。請僧口別白布一端也。被収公所帶職等。依微力之不覃。捧少財。志之所之。聖靈可令照鑒給之趣。載諷誦文。（和字）。唱導説上之間。令察彼懷旧。聽衆皆不禁悲淚（云々）。尼御台所為御結縁密々参給。

*『吾妻鏡』元久元年（一二〇四）十一月二十六日

將軍家日来仰画工於京都被圖將門合戦絵。今日到来。掃部頭入道所調進也。二十ヶ卷。納蒔絵櫃。殊御自愛（云々）。

*『吾妻鏡』元久元年（一二〇四）十二月十八日

為尼御台所御願被図絵七観音像。去比自南都到着。今日於彼御方被遂供養。導師金剛寿福寺方丈葉上坊。願文仲章朝臣草之。將軍家為御結縁渡御（云々）。

*『吾妻鏡』承元四年（一二一〇）十月十五日

聖德太子十七箇条憲法。并守屋逆臣跡収公田員数在所。及所被納置于天王寺。法隆寺之重宝等記。將軍家日来有御尋。広元朝臣相尋之。今日進覧（云々）。

*『吾妻鏡』承元四年（一二一〇）十一月二十二日

於御持仏堂。被供養聖德太子御影。（南無仏）。真智房法橋隆宣為導師。此事日来御願（云々）。

*『吾妻鏡』承元四年（一二一〇）十一月二十三日

奥州十二年合戦絵。自京都被召下之。今日御覧。仲業依仰説申其詞（云々）。

*『吾妻鏡』建暦元年（一二二一）十二月十日

和漢之間。有武將名譽之分。就有御尋。仲章朝臣注出之令獻覽。今日善信。広元等於御前讀申。又被尋仰御不審。再三御問答之後。頗及御感（云々）。

*『吾妻鏡』建曆二年（一二二二）六月二十二日
於御持仏堂。被行聖德太子聖靈會。莊嚴房以下請僧七人（云々）。

*『吾妻鏡』建曆二年（一二二二）六月二十四日
將軍家入御和田左衛門尉義盛家。御儲甚丁寧。以和漢將軍影十二鋪。為御引出物（云々）。

*『吾妻鏡』建曆二年（一二二二）十月十一日
為覽新造堂舎。將軍家渡御大倉。（略）善信獻山水繪図。態自京都召下（云々）。殊所預御感也。（略）

*『吾妻鏡』建仁二年（一二二二）十一月八日
於御所有繪合之儀。以男女老若。相分左右。被決其勝負。此事。自八月上旬。有沙汰之間。面々結構尤甚。或自京都尋之。或態令図風情。広元朝臣獻覽繪者。図小野小町一期盛衰事。朝光分繪者。吾朝四大師伝也。数卷之中。此兩部頻及御自愛。仍老方勝訖（云々）。

『吾妻鏡』建曆二年（一二二二）十一月十四日
去八日絵合事。負方獻所課。又召進遊女等。是皆摸兒童之形。評文水干付紅葉菊花等着之。各鄂律尽曲。此上堪芸若小之類及延年（云々）。

*『吾妻鏡』建保元年（一二二三）一月十二日
幕府女房等有双紙合会。將軍家令判之給云々。

*『吾妻鏡』建保元年（一二二三）三月二十八日
長定朝臣獻絵二十ヶ卷。（納蒔絵櫃）。古今以下三代集中。撰女房作者。取其詠歌。并事書之意図之。將軍家甚御入興（云々）。

*『吾妻鏡』建保元年（一二二三）三月三十日
將軍家御參寿福寺。有御聽聞御法談等。又去年朝光所進吾朝大師伝絵有御隨身。令覽行勇律師給。觀彼求法入宋之処々。就其銘字誤等被直進之（云々）。

*『吾妻鏡』建保元年（一二二三）四月十七日
於御所被供養八万四千基塔婆。莊嚴房為導師（云々）。（略）

『吾妻鏡』建保元年（一二二三）八月三日
天晴風靜。今日申剋。御所上棟也。（略）

*『吾妻鏡』建保元年（一二二三）八月六日
新造御所御障子画図風情事。先々絵不相叶御意。彼仰含職者。又有御尋旨等。仍今日被遣其事書等於佐々木太郎左衛門尉広綱之許。御使紀伊刑部次郎上洛（云々）。

*『吾妻鏡』建保元年（一二二三）八月二十日
將軍家新御所移徒之御車。自京都遲到之間。被用御輿。（略）

『吾妻鏡』建保四年（一二二六）一月十七日

將軍家御持仏堂御本尊。〈釈迦像。雲慶「奉」造之〉。自京都被奉渡。有開眼供養事。為信濃守行光奉行。有其沙汰。

*『吾妻鏡』建保四年（一二二六）一月二十八日

始安置御本尊於御持仏堂。即有供養之儀。導師莊嚴房律師行勇。請僧七口。〈鶴岡供僧「等」也〉。（略）

*『吾妻鏡』建保四年（一二二六）四月八日

將軍家御參拜福寺。被備供貢於十六羅漢影像（云々）。

『吾妻鏡』建保六年（一二二八）七月九日

未明。右京兆渡御大倉郷。於南山際。卜便之地。建立一堂。可被安置藥師像（云々）。是昨將軍御出鶴岳之時被參會。及晚還御亭。令休息給。御夢中。藥師十二神將內戌神來于御枕上曰。今年神拜無事。明年拜賀之日。莫令供奉給者。御夢覺之後。尤為奇異。且不得其意（云々）。而自御壯年之当初。專持二六誓願給之處。今靈夢之所告。不可不信仰之間。不及日次沙汰。可被建立梵宇之由被仰。爰相州李部等不甘心此事給。各被諫申云。今年依御神拜事。雲客以下參向。其間。云御家人。云土民等。多以費產財。愁歎未休之處。亦被相續當作。難協撫民之儀歟（云々）。右京兆。是一身安全宿願也。更不可仮百姓之煩。矧當八日戌尅。有医王善逝属戌神之舌。何默止所思立乎之由被仰。仍召匠等。被下指図也。

*『吾妻鏡』建保六年（一二二八）十二月二日

右京兆依靈夢所令草創給之大倉新御堂被安置藥師如來像。〈雲慶奉造之〉。今日被遂供養。導師莊嚴房行勇。咒願円如房阿闍梨遍囉。堂達頓覺房良喜（若宮僧也）。（略）

*『吾妻鏡』承久元年（一二一九）十二月二十七日

為二品所願。為故右府追福。於勝長壽院之傍。草創一伽藍。安置五大尊。〈仏師運慶法印〉。号五仏堂。今日彼忌日。有供養之儀。明禪法印為導師云々。

◆ 27 元久元年（一二〇四）十一月三十日 藤原俊成歿。翌日より正日（翌年一月十八日）まで、遺言により仏經を供養。

*『明月記』元久元年（一二〇四）十一月三十日

天晴、遅明欲參之間、遮有使、周章馳參、念仏音高聞、已令終給云々、（略）

『明月記』元久元年（一二〇四）十二月一日

（略）御遺言仏毎七日令書置給、但入棺日可供養普賢由仰置、又以法花經一部卅九日可講讀由有之、〈毎日仏不可有〉、仍四十九体阿弥陀今度不奉画云々、只以此普賢乍四十九日同仏經可供養由三品命給、大文字經（遺命也）、俄可沙汰由、雖示成美朝臣、今日難出来由申之、文義尋出新經、〈人為持經調之、未供養〉、乍悦奉請普賢、裏紙以御手跡、入棺夜可供養、令書給、以此仏經毎日可奉讀、道場可用所無之、本堂頗嚴重之上、去比敷直板敷、頗修理之後、此事憚歟由被議、〈主人成憚、他人難自由〉、其外無可然所、仍當時御寝所弘間三間也、以御坐間為護摩所、以御前二間為道場由成議、仮立隔障子、此二間撤置炭櫃等掃之、立仏台礼盤等、〈仏東面、礼盤西面〉、懸幡花幔等、〈頗叶主人心〉、此間及日入、先是両入共身固、訖、御入棺事終無人、（略）

『明月記』元久元年（一二〇四）十二月六日

午時參本所、九条女房被来、今日初七日、依御遺言供養阿弥陀迎接法華、〈一部〉、健御前沙汰也、布施一重一

裏、〈五段〉、請僧一裹、〈三段〉、僧前料講師、〈五〉、清僧、〈三〉、誦經人三位、下官、六角、健、愛寿、女別當、〈今日送之〉、例時訖婦宿九条、竈僧等相議、此仏經^ヲ七日ツツ供養、自今日奉讀阿弥陀、

【明月記】元久元年（一二〇四）十二月九日
今日始奉書法華經、

【明月記】元久元年（一二〇四）十二月十二日
昨日写經、

【明月記】元久元年（一二〇四）十二月十三日
參本所、仁和寺閤王御前仏供養、〈地藏、此仏皆御遺言、令注置其日々給〉、被物一裹物等大略如初七日、六角殿、健、龍、三位会合、六角被供養經一卷、誦經女別當送之、三位、六角、下官、仏事之人五人也、例時訖婦九条、（略）

【明月記】元久元年（一二〇四）十二月二十日
已時參本所、〈兩女房〉、今日民部大輔女房修之、虚空藏供養、法名導師誦經六角、女別當、愛寿六也、布施被物裏物相具水干袴一、請僧裏物同水干袴、自今日奉讀虚空藏、

【明月記】元久元年（一二〇四）十二月二十二日
今夕奉書終一乘八軸、（略）

【明月記】元久元年（一二〇四）十二月二十四日
今日奉書無量義經、

【明月記】元久元年（一二〇四）十二月二十六日
奉書終普賢經（略）

【明月記】元久元年（一二〇四）十二月二十七日
朝婦九条、已刻參本所、龍寿御前不動供養、每事同初七日例、四人之外愛寿御前來会、誦經如先々、西六角女別當明年料誦送之、未時婦九条、今日仏平生令図給、裏紙沒後可奉供養之由書給、

【明月記】元久元年（一二〇四）十二月三十日
終日写經、如形菓子等送籠僧許、文義來、正月四日五日仏經布施等持來、即返遣了、皆是輕微也、人定誹謗歟、聖靈更不好過差給、近代之人、語導師借布施請客人、令取聞此事、殊彈指給、仍隨力所堪。隨彼御命也、

【明月記】元久二年（一二〇五）一月一日
（略）終日奉書法花經第一卷（略）

【明月記】元久二年（一二〇五）一月二日
（略）今日奉書第一卷了、始二卷、

【明月記】元久二年（一二〇五）一月三日
（略）終日写經、終二卷、

【明月記】元久二年（一二〇五）一月四日
早旦行九条、少時仏經布施等持來、即送本所、此間參、〈健御前同被乘〉、三位已前御座、〈龍寿、愛寿同車〉、

即始仏事、信濃為導師、大日如来雖顯宗之道理、當時如形說經僧也、籠僧依不便故不請他僧、大日画像、《御遺言五七日》、自筆法花、《開結心阿、此他無他經》、說法訖置布施、被物三、《綾同白依人不見》、一裹絹、一懸子綿、一色々布、白布等三結、請僧二口、被物一、布施白布一結、色革一懸子、檀紙一積、《五十帖》、只隨有也、以籠僧可為導師由□遺誡、誦經人數大略如例、《三位、下官、六角、民部、女別當、被來人三（五カ）人》、以定時長邦令取布施、《不請他人》、例時訖、先歸入九条（略）

『明月記』元久二年（一二〇五）一月十三日

午時許參本所、人々被來會、三位六角、安井、健、龍、愛五人、三位被修法事、不經幾程導師《海惠僧都》、來臨、即催僧令著座、仏、《阿弥陀菩薩》、經、《自筆一部》、摺、《一部》、宝篋說法供養法訖令取布施、清実、《肥前》、基兼、《藏人大夫》、康実、《七条院藏人》、定時、長邦等數反取之、導師、《被物五、裹物絹綿各一懸子、次有捧物、銀盃置扇、又雄一枝紺絹、灌仏布施、舟裏、瓶子色革二懸子》、布二結、紙一積、從僧撤之、導師退出、請僧《被物一、布施袈裟一、色革皮子、布一結、紙一積》、今日請僧墨染之上著甲袈裟、講師、《鈍色甲袈裟》、次六角被還、《安井同車》、次下官退出、健、龍、今日事成実當之、無為事了殊感悅、酉時帰冷泉、（略）

『明月記』元久二年（一二〇五）一月十四日

（略）今日猶寫經、《年來奉書金光明經、奉書終宝篋印転女成仏》、（略）

『明月記』元久二年（一二〇五）一月十八日

辰時許行向左女牛、相具龍愛二人、行九条、健御前相共參本所、安井被來、三位被坐、男女引率參御墓所、歸入之間六角被渡、《拾遺被具》、今日御正日被沙汰也、陸奥關梨供養法、忠兼父子泰実等取布施、仏釈迦三尊、經《法花開結心阿》、以御手跡反故色紙被摺、布施講師被物、三衣一、檀紙一積、請僧被物一衣一檀紙也、次居替仏供等始、例時錫杖訖置布施、三位被儲裹物、予儲小袖一領布一結、已各帰、無風雨之煩、無為遂之、悲中之慶也、送申女房三人帰家、于時申刻、雪殊甚、

◆28 建永二年（一二〇七）七月 東寺食堂千手御身内舍利事。

『三僧記類聚』（東京大学史料編纂所写本）

真惠僧都語云、元久元年（一二〇四）修理之時（略）、仏師等奉見□□之間、上ニ物ノ落ル音ノスルヲ、何ソト求サスル間、慶申ヨリ求事小箱有間ノ珠ノ脱テ落タル跡ニアリケルヲ、仏師引出云々、澆水器ノ蓋上ナル葛花ノ球様ナル金箱ナリ、但蓋歟、身歟、一方ハ失了、一方許ニ舍利一粒入之、仍奉納宝藏ノ修理以後為安置仏身也

◆29 建曆二年（一二一二）六月二十日 八条院周忌御忌日御法事。（『明月記』同日条は省略）

『三僧記類聚』（東京大学史料編纂所写本）

建曆二年六月廿日、甲午、雨降、蓮花心院ノ内八条院御墳墓上ヘニ、新ニ立宝塔一基、被供養之、裳層四面構借庇《檜皮葺》、塔ノ中安大日像一依《三尺皆金色ノ像、五七日供養了》

◆30 建曆二（一二二二）年六月二十六日 八条院御忌日一切経供養事。（『明月記』同日条は省略）

『三僧記類聚』（東京大学史料編纂所写本）

同（建曆二年六月）廿六日、庚子、天晴、今日於八条旧院、有一切供養事、奉安等身皆金色弥勒仏ノ像（左手覆膝上、右手施無畏）

◆31 建曆二年（一二二二）十二月十日 法勝寺南大門金剛力士御衣木加持事。（『仁和寺日記』ほかは省略）

『三僧記類聚』（仁和寺本第七冊）

建曆二年十二月十日壬午於法勝寺同寺南大門金剛力士御衣木加持事、被行之御室御參勤、去七日加持之、有無有其沙汰、予申云、不必可然歟、但依先例靜遍僧都申云、可有之、但先例未聞云々

入道兵部卿云、仏師法院院賢云、金剛力士御衣木加持不常事也、私進考、胎藏三家次第云、不可越相向二守護、是金剛力士云々

◆32 建曆三年（一二二三）四月二十四日 法勝寺九重塔心柱に真言一卷を籠め奉る。

『三僧記類聚』（仁和寺本第六冊）

九重塔被籠真言事

建曆三年四月廿四日 法勝寺九重塔心柱可被奉籠真言一卷、自御室付按察中納言光親卿被奉院了、明日可被奉籠、此外金泥法花経一部被籠云々、仏舍利任永保例可奉籠、或否有評議云々、○雷雖無此事故真言一卷紺紙金字書之云々、書進料紙高七寸五分、

金剛界五仏真言、（□□□□如常）、胎藏界五仏真言、（皆加以□句）、

宝篋印タラニ、尊勝タラニ、并場曼荼羅記尼、（加陀心呪、心中心呪）、無垢浄光荼羅尼、隨求小呪、最勝王経如意宝珠真言、（付四方□名）、以檀紙二枚裏之、折押納時絵小函結緒上付空封加御□書遣之、